

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和26年6月7日日本国政府特許庁特許第1580号・昭和26年5月31日日本国政府特許庁特許第1580号・昭和26年6月1日発行（毎月1回）

裏窓

6月号



THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和26年6月7日日本国政府特許庁特許第1580号・昭和26年5月31日日本国政府特許庁特許第1580号・昭和26年6月1日発行（毎月1回）

裏窓

定価 300 円

IBM 1807

裏窓の
合本用ファイルをお
申し込みください!

○本誌の新装判を簡単に手に入れ、秘蔵用ファイルです。
○堅牢優美な高級仕立てで、これさえあれば、お揃いのクナナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。
○御希望の方は、頒価130円に送料20円を添えて、スグお申し込み下さい。
○なお御注文の際は「裏窓用ファイル」と御指定ください。
○裏窓の1年間(12冊)直接購読者にはファイル1個を無料で差し上げます。
東京都中野区松が丘2丁目21番
株式会社 あまとりあ社 営業部

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載
上演、上映、放送することはお断りします。
★お買い上げの本誌に、落丁・誤丁等がありま
した際は、お買いになった書店でおとり替え
下さるか、または、本社宛にお送り下されば
すぐおとり替え致します。
★直接購読を御希望の方は、6ヵ月分(1,800
円)は、3ヵ月分(900円)を本誌営業部宛に
お払い込み下さいますと、送料は本社の方で
負担します。店頭販売前に直接お送りします。
★外国からの直接御購読は、送料を1冊につ
き20円御負担下さい。

裏窓・六月号

(第九卷·第六号)

定價 300 円・送料 18 円

印刷……昭和39年 5月25日
発行……昭和39年 6月 1日
集 兼 人 } …… 飯 田 豊 一
行 所 …… 向上印刷株式会社
…………… 伸光印刷株式会社
…………… 株式会社あまとりあ社
東京都中野区松が丘 2丁目21番
3151
(振替東京・55408) 電話 (386) 3152
(あまとりあ社宛) 3153

昭和十一年 二〇〇年		昭和十一年 二〇〇年	
松林語、ひびきすいて	結・秋吉	松林語、津波のくちまき	結・東
・毛茸の文舟	結・曾根部	・吉林の女主人ムア・ハル	中川利子
江別美夫英米新聞	江別 美夫	・蛇と蜂	結・山田照弘
・ラビエ・舞台名場面集	金井 行雄	・北原信は英米新聞	北原 信
・たわひれのふたり	藤沢 修	・ラビエ・S.M.式美術雑誌	毛 卓二
・美と醜のあいだ	金井 行雄	・朝風	毛 卓二
・ある青年の体験	・グリーン社・提供	・夢	毛 卓二
・紅の忍術	五所 章	・女ひとりへのや	猪島 恭徳
・女賊謎の印章	東島おる	・かわいいくちる	毛 卓二
・怪しい休養の夜	市川 菊夫	・お決めの愛	花巻早太郎
・遊戯アリムノン	阿部 賀	・山小屋の暴風雨	柳井たか子
・東國又同部の風景	小田部 賢	・戦後の女性復興	横川 秋司
・アララビ王の金巻紋	松平 昌司	・鈴のはな声	廣田 宏
・現代年記	多賀 満	・白濁美の女	青柳真次郎
・江戸の怪談	河西 恒一	・日本新劇史	五和 邦雄
・はしとそとの遊辺	(8)・かびや・かすじこ	・はしとそとの遊辺	(7)・かびや・かすじこ
・海外S.M.新聞二編	美濃村 晃	・編纂人日記を解説する	志保 辰
・休むなりM編	(3)・水尾 完	・アロの掌	八巻 金
・語り	村山 蒼	・休むなりM編	(2)・水尾 完
・おろかな民のものごたり	馬場 龍二	・女賊上巻	森山 太郎
・風雲球戯街道	(5)・鈴宮 基樹	・遊戯アリムノン	阿部 賀
		・戦後のすむ家	・桂川久治
		・風雲球戯街道	(2)・鈴宮 基樹

37年8月号ぜんぶ
売り切れました

37年 七月二二〇〇円

絵巻物・最初の女主人………絵・山田 明弘

★37年 (六月)

★37年 (五月)

★37年 (四月)

○海外名Mワイ特選集……………ウアン・ロッド

○37年 (三月)

○37年 (二月)

○37年 (一月)

○中川彩子・妹美演劇集……………中川 彩子

○37年 (十一月)

○36年 (十二月)

○36年 (十一月)

★クララ・時代劇のムード……………猿島 昌也

○36年 (十月)

○36年 (九月)

○36年 (八月)

石枝り場の女……………毛 卓三

○36年 (七月)

○36年 (六月)

○36年 (五月)

………沢のはとり……………毛 卓三

○36年 (四月)

○36年 (三月)

○36年 (二月)

ワイ時代劇、島抜け伝六……………海老沢七郎

○36年 (一月)

○36年 (十二月)

○36年 (十一月)

歌本成道年譜……………島本 春雄

○36年 (十月)

○36年 (九月)

○36年 (八月)

島には島を……………九十九十郎

○36年 (七月)

○36年 (六月)

○36年 (五月)

旅先民とその妻……………竹谷 十三

○36年 (四月)

○36年 (三月)

○36年 (二月)

………白雲……………英之

○36年 (一月)

○36年 (十二月)

○36年 (十一月)

………はもととの助(男)……………カシや・かずひこ

○36年 (十月)

○36年 (九月)

○36年 (八月)

………地獄で泣け……………万里小路 虎

○36年 (七月)

○36年 (六月)

○36年 (五月)

武町雄祐……………桂川 扶司

○36年 (四月)

○36年 (三月)

○36年 (二月)

奇跡縁切り機……………小田嶋 真

○36年 (一月)

○36年 (十二月)

○36年 (十一月)

………絵本かきえうた……………喜多 玲子

○36年 (十月)

○36年 (九月)

○36年 (八月)

新銀アトムソン(前)……………阿部 賢二郎

○36年 (七月)

○36年 (六月)

○36年 (五月)

………文芸春秋大賞……………寺崎 聖吉

○36年 (四月)

○36年 (三月)

○36年 (二月)

現代ソビエト文化時評……………森下 高茂

○36年 (一月)

○36年 (十二月)

○36年 (十一月)

………商業温泉のおもいで……………影 夕さき

○36年 (十月)

○36年 (九月)

○36年 (八月)

………蘇芳タウン……………細草部・細

○36年 (七月)

○36年 (六月)

○36年 (五月)

………東京銀座街道(2)……………鈴宮 英樹

○36年 (四月)

○36年 (三月)

○36年 (二月)

★印は 百回印刷百五十回……………他は百十回

新刊発売中！



A5判・純アート・200余
頁・写真500余枚収録 ￥600 ー90

東京都中野区松が丘2の21 株式会社 久保書店 振替・東京10756番



スクリーン・エロティシズム② 美濃村晃・著

★スクリーンに躍る
★女体美の決定的瞬
★間をここに収録、
★想い出のエロティッ
★クシーンふたたび！

〈内容のご紹介〉
 ……抱擁・キスシーン
 ……ベッドシーン
 ……入浴シーン
 ……ヌード
 ……チラリズム・マゾヒズム
 ……ショー場面
 ……肉体美
 ……捕われた女たち
 ……怪談
 ……受難シーン
 ……女・女・女
 ……スクリーン・おぼろがき

裏窓叢書 ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵
400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵
400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵
400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵
400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵
400円 送料80円

捕えられた美女群の危難につぐ危難！ 凄絶のクライマックスが連続する 息もつかせぬ迫力編！

特選娯楽新書判！

お手頃な値段で たのしい読みものが
いっぱい！ あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区松が丘二丁目二一番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八・あまとりあ社宛



紳士淑女のおへそのうらを
ふんわりくすぐるあまとりあ社の

価200円 送料40円

目次の一部

坊さん歓迎の色情町（高田）
色を好む英雄の血統（名古屋）
あやつり上手な風流娘（岐阜）
魅力に富んだ厚い唇（松江）
男殺しのやぶにらみ（新潟）
粹を集めた温泉美人（別府）
三度でまるハダカに（天草）

南部三郎・著

女国・道しるべ

総まくり・女の旅

価250円 送料50円

目次の一部

奥儀紅肌彫り
悦楽の夜泣き人形
女体の秘密に憑かれた男
妖艶寝乱れ化粧粧
熊娘を抱いた男
海女と海坊主の戯れ

西村亮太郎・著

価200円 送料40円

目次の一部

情事を楽しむBGの性典
頭で性を処理する女子学生
性に強い現代娘
ペッティング愛用の女たち
新婚の生理の喜びと悲しみ
スリルと情痴の異常体験

横井吉雄・著

もてあそばれた女たち

セクシー・レポート

江戸・名人かたぎ

色ごのみ秘芸伝

裏窓・六月号・目次

表紙	モデル・津木百合
目次	カメラ・吉田久
とびら	カット・中川彩子
	カット・落合竜二

三度目の正直……三鬼俊 (82)

体当たりマゾヒズム論・②④……水尾究 (144)

指名された女……九十九十郎 (188)

奢れる女神への祈り・④……森本愛造 (170)

現代マゾヒズム文化時評……森下高茂 (44)

パノラマ島秘譚・②……北園透一朗 (30)

戦後の妖美な眺め……間野嶺 (76)

裏窓既刊号・よみものご紹介 (58)

曲切り念者……かびや・かずひこ (94)

小品傑作展……沖涉二 (90)

赤い月の夜……赤木恵介 (154)

女すりお蝶……五所 章 (154)

暗黒街の掟……東島かおる (154)

腐れ土蔵……義川 源 (154)

読者投稿特集
★★★★★★

裏窓文芸評論……安東泉 (50)

読者評論・無責任なブーム……重森東 (88)

腹切り残酷史譚・①……夏川浩一郎 (70)

わたしの文芸評論……エダ・キリコ

裏窓タウン

濡れ花……松山省一

パノラマ島への注文……柴山貞利

ゴルドンの記憶・⑮……阿麻哲郎

読者コーナー・編集後記

●グラビア・オフセットページ●

絵物語

コンドルの楽園……

文・祖父江新

絵・落合竜二

犬の絵……吉田久

スクリーン・クライマックス集

アメリカ新着フォト集……フェニクス

密室の砂丘……吉田久

藤沢修・フォト作品集

猪島昌也・傑作フォト集

(184) (136) (178) (42) (202) (212)

(9)

(15)

(111)

(218)

(223)

(103)

(215)





祖父江 新・文

落合竜二・絵

① 脱出行

女首領テレサ一味の銀行破りは手引きをした男の失敗から、一味のかくれ家を追跡隊に襲撃され、数人の手下を失ってしまった。町の保安官のひとり娘クローデットを人質にとつての応戦も、硬骨保安官の前には効き目がなかったからである。

しかし、その老保安官が銃弾に倒れたとき、追跡隊の銃撃は止んだ。

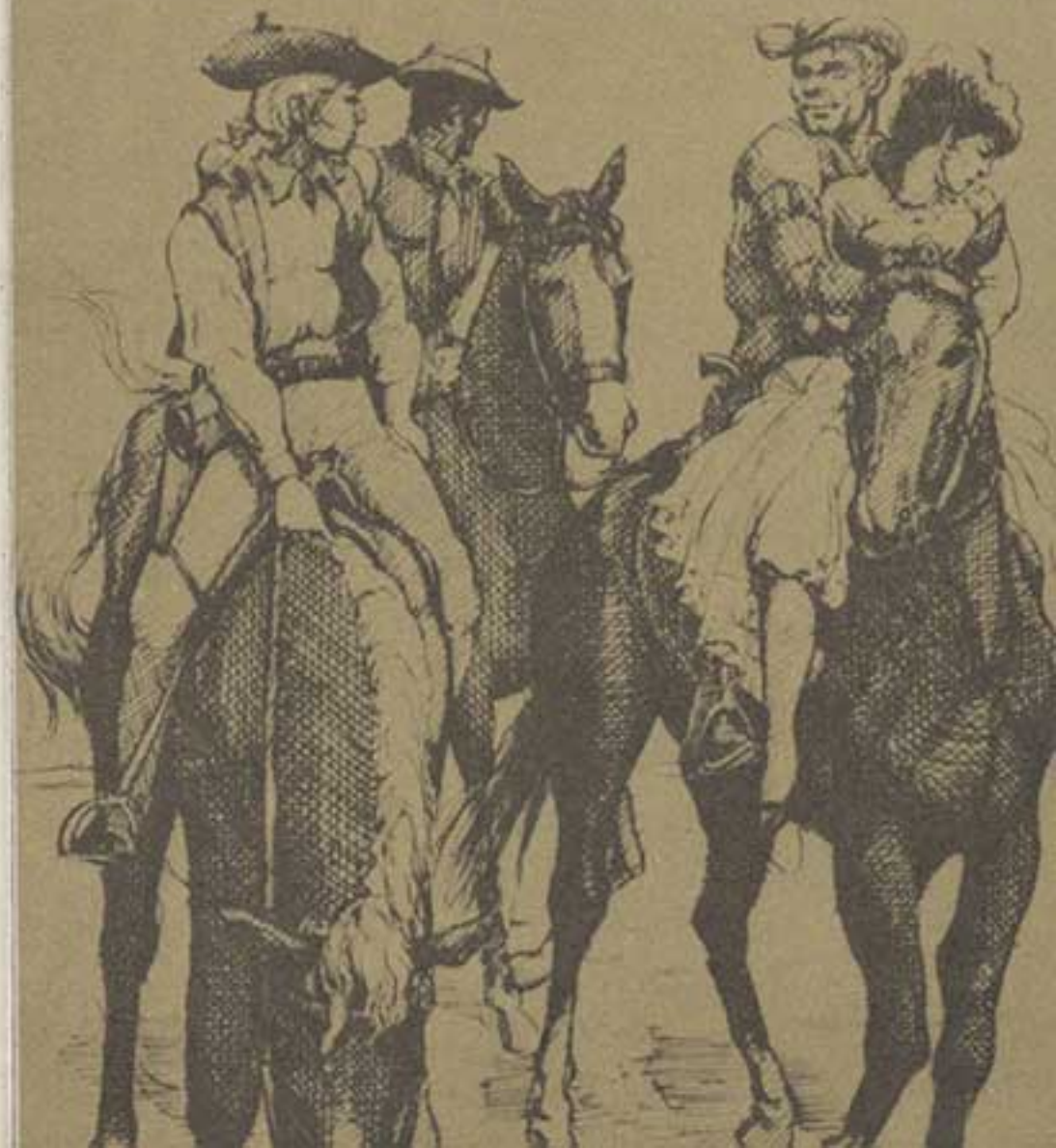
テレサたちが人質のクローデットを楯に、ようやく追手の包囲を脱出したときは、一味の中で一番狡猾な中年男のビルと、新参のチャックとの三人になっていた。一味は逃走路を最初の予定と変え、土地感のあるビルを頼りに、コンドルの楽園と呼ばれる沙漠を縦断してメキシコに逃がれる途をとった。銀行から奪った十萬ドルを中

一行の目の前に、気の遠くなるような沙漠がまぶしく広がっていた。水筒の水と、乏しい食糧に気を配って、人質を帰そうという二人の男に、テレサは冷たい笑みをクローデットに向けて言った。

「三日も歩き続ければ、どうせ馬は駄目になるわ。そしたら、重い荷物をそいつに背負わせれば、少しは役にたつだろうよ」

クローデットの父のために、さんざんな目に合わされたことと、いま一つ、美しいクローデットを見る二人の男の目にいやしいものを感じとって、テレサは残忍な報復を考えたのだった。

脱出のカギを握っているビルは次第に横柄にふるまいだした。その夜、ビルはテレサやチャックと離れて横になり、傍にクローデットを抱き寄せた。クローデットもすべてを運命とあきらめたのか、縛られた身を自らビルに寄せていくのだった。



② 背後の銃口

傍に横になっているチャックがしきりに寝返りするのが、テレサの自尊心を傷つけた。チャックはクローデットのことを気にしているのが、テレサによくわかるのである。チャックが寝静まるのを見とどけて、テレサはそっと立ちあがった。

テレサの耳に、クローデットとビルの話し声が聞こえてくる。

クローデットが縛られてさえないなかったら、二人は恋人どうしのようになつてしまふか見えた。

(見かけはネンネで、とんだ女狐め、どうするかみておいで)

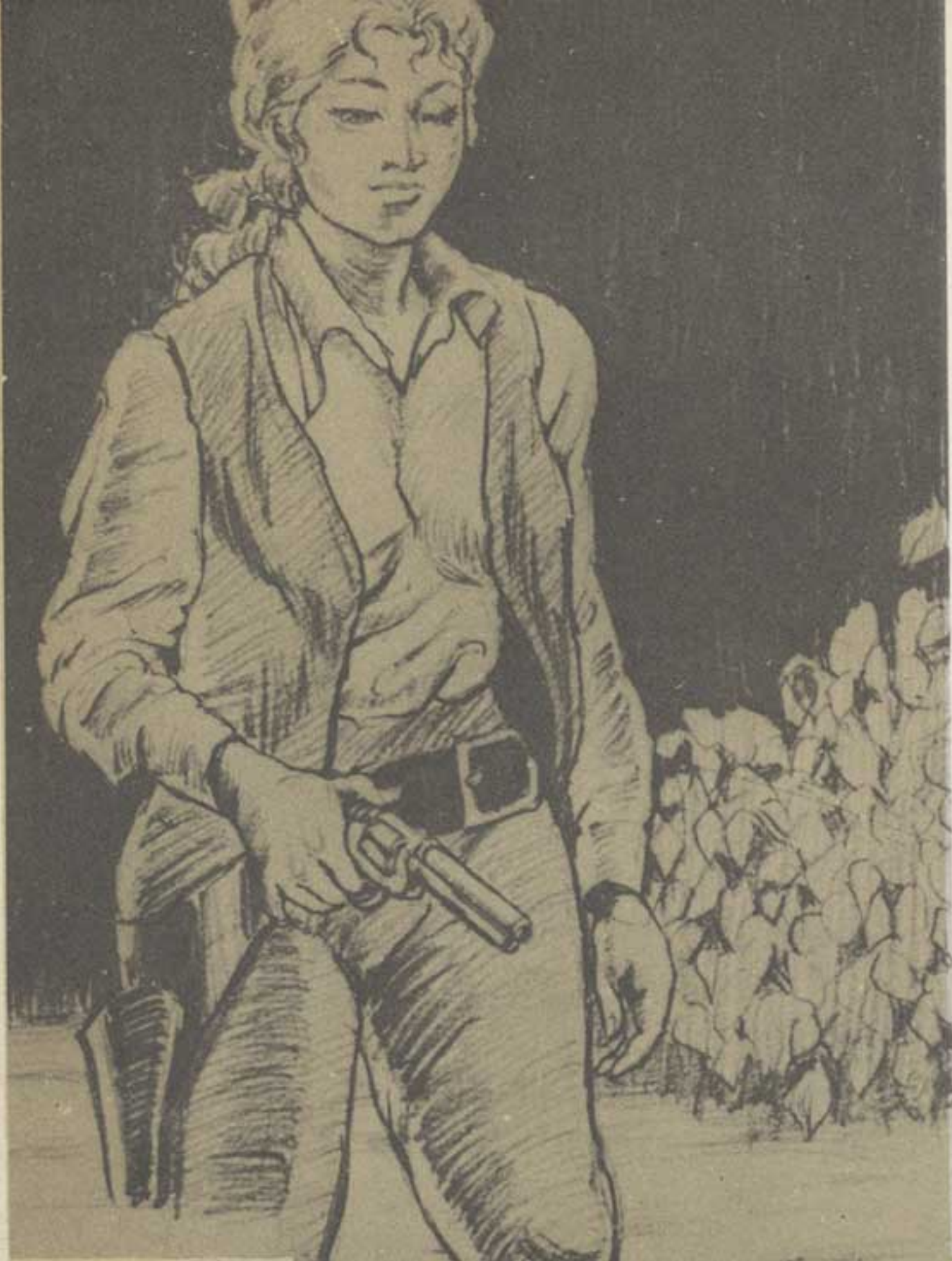
テレサは、暗闇の中で歯噛みをした。

「ね、あなた本当に沙漠を抜ける

道を知ってるの？」

「ああ、あさつての昼頃にや、アパッチの楯つていう岩が見える。その楯の方向に向かって真つすぐいきやあ国境の川に出らあな」

二十万ドルの分け前は一人でも少ない方がいい。それを聞いてしまえばビルに用はない。テレサは例の冷たい笑みを浮かべると、構えた銃の引き金を引いた。



③ 逆 転

「ふっふっふっふ」

男の笑い声にふり向いたテレサの目に、銃を構えているチャックの姿がうつった。

「このへんでもう姐御づらは止めてもらおうぜ。クロードットと金は俺がもらっていく。

さあ銃を貸しな」

「チャック、ちくしょう！」

形勢は一瞬のうちに二転してしまったのである。テレサは白くなるほど唇を噛んだ。

「その女を連れて行くのよ。馬の代りに荷物を持たせたら、少しは役に立つでしょうよ」

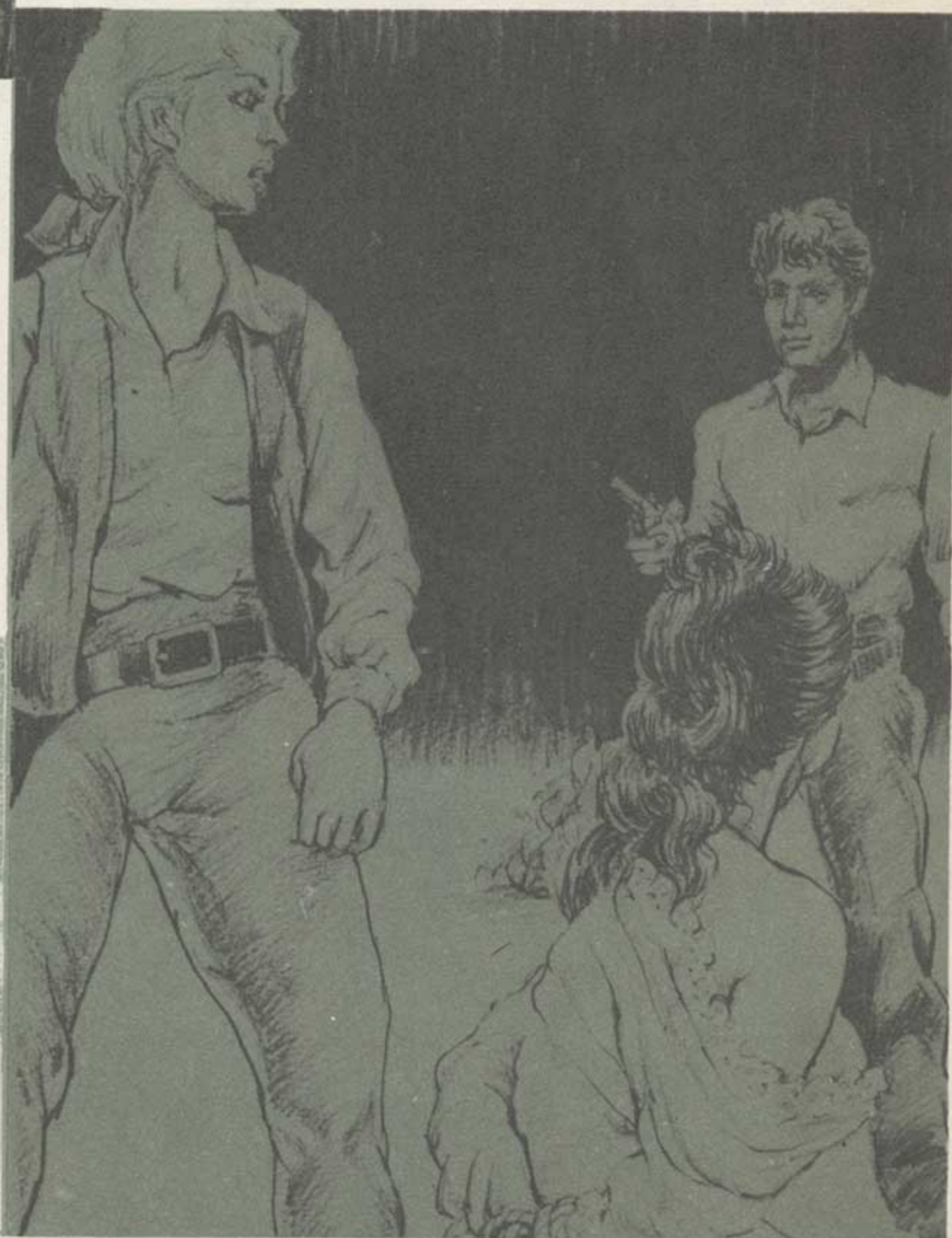
縄を解かれたクロードットが、今度は逆にテレサに向かって言い捨てた。

「ちくしょう」テレサがクロードットに飛びかかっていった。——闇の中に、チャックの高笑いがいつまでも続いた。



④ 熱砂の行進

馬がまず倒れた。灼熱の砂を踏みしめて、奇妙な行進が続けられた。テレサに対するクロードットの復讐は苛酷を極めた。テレサは疲れたからだを縦横に緊縛されたうえ、重い荷を背負わされ、クロードットに縄尻をとって引き立て





られて歩いた。

その夕暮、目指すアパッチの楯にたどりついた。

もう、水も残り少ない。乏しい食事を終えた後、テレサの目の前で、チャックは追いつめられた獣のように激しくクロードットを抱き寄せた。

しかし、霞のように疲れ果てたテレサは、きびしい縄目に結えられたからだを伏せたまま、顔さえ上げようとしなかった。



⑤ 狂った銃声

次第に霞みかける目に、山が見えた。だが近づくにつれて、それは国境にある緑の山と異なり、不毛の岩山であったことに、チャックはふと死の不安に襲われた。

渴きと疲労で、遂にテレサが倒れた。

「水、み、ずー」

熱砂に身を横たえて、彼女はわずかに頭をあげる。

「フン、だらしのない。自分でお飲み」

一つきりになった水筒を、クロードットは栓もとらぬまま砂の上にほうり投げた。

ジリ、ジリ、とテレサが這い寄る。やっと口に栓をくわえようとしたとき、銃弾が水筒を貫き、水は、瞬時に砂の上に消えた。

⑥ 死の羽音

「クローデット！ 気が狂ったか！」

チャックが悲痛な叫び声を上げた。

「ハッハ、アハハハ……」

事実、クローデットは狂っているかのようだった。ひとしきりの狂笑がやむと、彼女は怒りと憎悪に燃えた目をチャックに向けた。

「死ぬがいい、みんな死ぬがいい。パパだけじゃない、あんなたちは私のピートまで殺してしまったのよ。私の心は、もう、ピートと一しょに死んでいたわ。ビルの言ったことはうそよ。私がビルをそそのかして、わざとでたらめの道をあんなたちに聞かせたのよ。ビルもまさか殺されるとは思わなかったでしょうよ。アハハハ……、死ぬんだ。みんな死ぬんだよ！」

「そうか」

チャックは半ば死人のような顔を上げて言った。空に、禿鷹が舞っているのが目にうつった。

「ピートか。奴が俺たちの手引きをしたことを言っとう。そして、おめえの親爺を殺したのも、奴だったってこともな。どっちみち、そんなことはもうどうでもいいことだな」

クローデットがガックリ膝をつき、あとは死の沈黙がつづく。

三人の頭上で、きしるような禿鷹の羽音が、次第に近く聞こえてくるようだ。



犬の絵

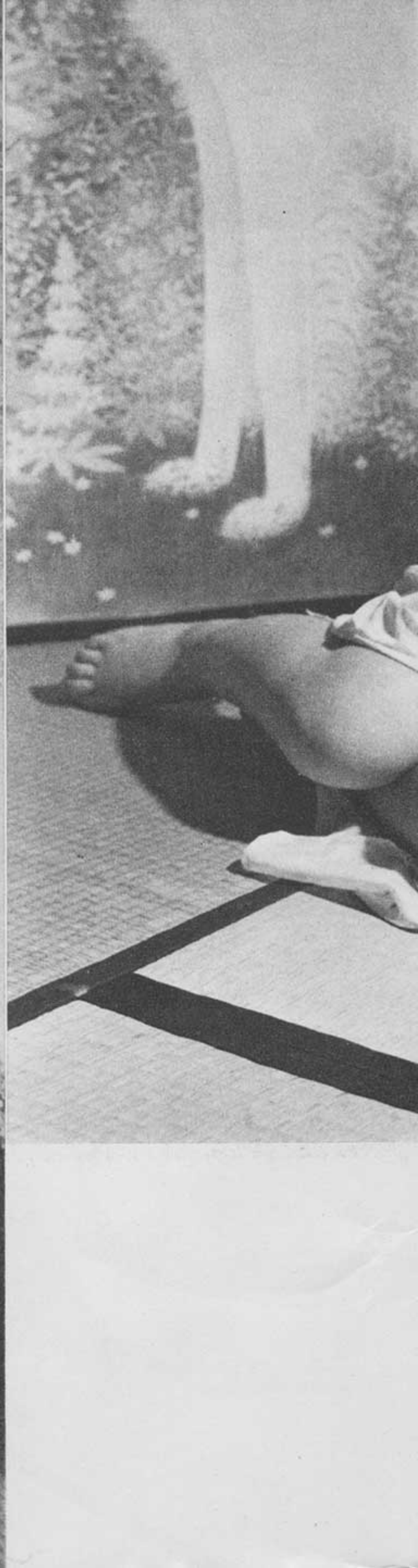


モデル……小笠原純子
カメラ……吉田久















裏窓



6 月 号

第 9 卷 · 第 6 号

まずおのれを疑え



ライシャワー大使刺傷事件を報じた大見出しの夕刊を片手に、若いサラリーマン氏がふたり、電車の中で話していた。

「全くお話にならん。ばかなことをするもんだね」

「気違いだよ、きつと——」

「右翼かもしれんな」

「そうだとっても、ばかだよ」

「左翼には、そんなことするやつだけは、絶対に居ないからな」

「まあね」

相づちの歯切れはあまりよろしくない。

「やっぱり変質者か」

「そうだろう。どうせ変質者か何かでなければ、そんなことやらないだろ」

答え方が急に力を帯びて、断定的な口調に変わった。

「新聞にも犯人は十九歳の変質少年と書いてあるけど、やっぱりそうかな」

「やっぱりそうかなって、変質者に決まってるよ」

「でもそうは書いてあっても、よほど気をつけないとごまかされるからな。当局じゃ、弁明に困るようなこの種の事件が起きると、ろくに調べもしないで、すぐに犯人は変質者なりと、きめつけたがるくせがあるからね」

「そりゃそうだけど、今度の場合はやっぱり変質者だろ」

「そうかな」

半信半疑にうなずいた。

戦前は、すべてこういう事件の犯人や、背後関係は、左翼か朝鮮人かに相場は決まっていた。いや、そうでなくても事前にそう決められてしまう傾向にあった。それが戦後、左

翼に代わって右翼が登場した。背後関係は右翼では、という、定石みたいな推論が自動的に当てはめられるような風潮を産んだ。ところがここに、変質者という第三の人種が登場した。相手がまっとうでない精神異常者なので、相手にするのがむずかしい。むずかしいけれど、それだけ一面では便利な点もあった。弁明や解釈に苦しむ突発事件、異常事件は、これをすべて、変質者の犯行ときめつけられ、あいまいな点はいまいきなまま、世間は納得してくれる。納得してくれるだけの前宣伝も日ごろからよく行き届いているので、この点大変楽である。

×

精神分裂病を主体とする、正状としてもはつきりした精神病患者——いわゆる医学的臨床的に顕著な、チマタでいう「気違い」はこ

の場合対象外とする。でなくて、常人と変わらぬごく軽度の精神病患者、または、そしてこれがこの場合においての特にきわだった主役——第三の人種、変質者、性格異常者のテーマに問題をしばってみよう。

車中での、サラリーマン氏の言い草ではないけれど、このところ変質者は、確かに社会ニュースの主役のひとりとして、新しい脚光を浴びるに至った。

犯人は付近の変質者、ということに相場は決まってしまったようである。その活動範囲も次第に広がり、小は電車の中で婦人のシリをなでるといふ痴漢、公衆便所の壁にメンメと性的鬱悶のタケを書き散らす気の小さいのから、大は婦女暴行殺害という兇悪犯罪者まで、そしてついに、ライシャワー大使刺傷の十九歳少年をまで加え、あらゆる犯罪に、あらゆるタイプの犯行に、変質者は顔を出すようになった。

変質者対策というのが盛んに論議されるようになった。事件のあとには、必ず例のごとく例のとおり、例の顔ぶれの評論家や教育家や、お役人や、そして、この場合い場違いな文化人が顔を出し、ああでもない、こうでもない、結論のない堂々めぐりの例によっての意見を開陳する。結論を出したとしても、

それはモン切り型に終わる。だいたい次の三つの要約される。

- ① 政治の貧困
- ② 道德教育の不徹底
- ③ マスコミの悪影響

例のごとく例のごとしで、今回のライシャワー事件にも各新聞いっせいに例のとおり顔ぶれで、意見や対談や座談会を扱った。

ちょうど今手もとに「朝日新聞」の三月二十五日号がある。出席者は一橋大学教授、植松正。社会評論家、大浜英子。厚生省児童局長、黒木利克。慶応大学教授、林謙。——このずらり並んだ肩書のソツのなさ「朝日」らしい氏育ちのいいお上品な並べ方でもある。もっともこの中で、林謙といえば、探偵作家木々高太郎としてむしろ高名、なにほどこたのもしく感じられぬでもないが、なにさま最近のように、CMタレントして健全家庭の茶の間に営業微笑で進出、乳製品会社のサンドイッチマンになり果てた昨今では、往年の気概はもはやなし。そこを「朝日」にまた見こまれたのであろうが。

×

座談会のテーマは「異常者の犯罪」どう防ぐ」と見出しで示してある。この見出しを見ながら不思議に思った。

当局の発表では、たしか犯人は、以前にも一度精神病院に入院したことのある精神分裂病患者とあった。精神病と異常者は同じなんだろうか、という疑問であった。

精神病とし、異常者とし、変質者とする、ことばのアヤでどうにでもなるこの三つは、その実質が、全く同じものであるののかないのか、という疑問であった。

マスコミの扱い方からすれば、この三つは、まるで同じものとして扱われている。明確な区別はつけられてないようである。そのため、世間ではミソもいっしょに、気違いも変態もいっしょにし、世の中には、常人とほとんど見わけのつかない変態男が、あなたの前にも後にも、隣にもうようよしているということ、センセンキョウキョウとするに至った。

今回のライシャワー事件の犯人は、左翼でも右翼でもなく、最初から精神分裂病傾向の患者であることがわかった。

それは病歴からもはっきりした。文字通り気違いに刃物、気違いのやったことである。ところが、車中ではサラリーマン氏は、変質者の仕わざだろうと話しあっていた。

気違いと変質者、この二つの語意の明確な違いが、ここでは全くあいまいにされてしま

っているのである。そしてさらに変質者と異常者とは同義語になり、異常者と変態とがさ

らに同義語として通用し、変態とは、女を縛った写真を見て喜んだり、『いかがわしい雑誌』をひそかに愛読して楽しむ連中がそうであるから、というぐあいには、解釈が広がって『いかがわしい雑誌』の読者とライシャワー事件の犯人とは、何か相関関係はないのか、

といったうすつべらな見間違いが、まじめに考えられたりすることにもなりかねないのである。

笑うにも笑えないナンセンスというほかはない。

だが、これを笑い話といってすましてはいられないのだ。

何となれば、先にも触れたとおり、事件があれば必ず「異常者問題」というのがテーマに上がり、そこでは氏素姓育ちのいい先生方が、温室咲きの花よろしく、毒にも薬にもならないモン切り型の口上を述べ、ミソもクソもいっしょに、つまりアブも気違いといっしょにされてナベの中で煮立てられてしまうからである。

知名士や、有力マスコミ、そして政府機関によるこういう十把一からげの粗雑な便法主義は、もうこのあたりで猛省されるべきでは

ないか。

そもそもこういう誤りの出発は、レッキとした精神分裂病患者を、変質者、異常者、アブノーマルと全く同義語に扱ってしまう無知頑迷さから始まる。

先にも触れたように、朝日新聞の庭談会のタイトルは『「異常者の犯罪」どう防ぐ』というのであった。第一、しょっぱなから、精神病患者である犯人を、「異常者」である、と決めつけてかかったこのタイトルに問題がある。が、それはさておいて、ともかく内容を見てみよう。第一に、林麟が発言している。

「私はこの少年は精神病患者ではないかと思う。いわゆる変質者だ。少年は別にライシャワー大使にうらみをもっているわけでもなく大使にとっては迷惑千万な話で、まことに気の毒なことだった」

タイトルでは「異常者」と表現し、内容では林麟の、精神病患者、いわゆる変質者という決めつけを前提に座談は始められた。

いろいろな言い方や表現をこちゃまぜにし、そういうことで犯人に対する印象や概念をすっかりアイマイモコとさせた上で、座談を進めた。ひどい話だ。故意かあやまりか、

はた偶然か、これは一種の問題のスリカエなのである。

すりかえの最終的意図は何であるか、それは最大の圧力でありうる世論を背景に、アブノーマル一般の思考法まで、法的に規制しようとするもくろみを含むものである。

一八九五年、有名なアルフレッド・ダグラスとの男色事件で告訴された天才オスカー・ワイルドに、男色そのものが犯罪であるとして、徴役二年の判決を下した当時の英国の裁判所の無知、野蛮な精神を呼びもどし、そして、歴史の歯車を一気に逆転させようというところみすらその中には感じとられるのである。

ライシャワー事件は単なる精神分裂病患者の犯行である。これははっきりしている。

変質者や異常者問題とは明らかに違う。ところが新聞はその問題をすりかえ、変質者や異常者ということからすぐに連想されるアブノーマル、変態（すぐに連想するように、長年地道に、為政者や一部の有力マスコミは宣伝し続けてきた）問題に焦点が向きやすいようなムードづくりを行なって、結果的には本来自由な人間の、旺盛な批判精神という自由

の牙を抜き取る作業にピッチを加えるのである。

気違いと異常者はどう違うか、異常者とアブは、またどう違うか、まずこれを明きらかにする必要があるのである。何事もアイマイモコなることがいけないのだ。

精神病を広く広義に解釈すれば、主として産まれたときからの精神薄弱から、身体の外内部の諸条件で起こる老人性痴呆やアルコール中毒、モヒ中毒までを含め、範囲はひどく広い。

ここではそれをせまい意味で解釈する。もしこれを無制限に広く解釈すると、多かれ少なかれ、人間だれひとりとして、なんらかの精神病でない人はひとりもないからである。

心理学の立場からは、普通の人間の気質というものは、精神病や精神神経症よりその程度が軽い症状にある、という見方が一般である。だから函数の性質を明きらかにするため、極限を用いるように、普通正常人の心理を明きらかにするためには、精神病患者の心理を利用する。

こういう考えと方法が、伝統的にフランス心理学において用いたとある。

解釈を広げると、こうしてすべて正常人まで非常に軽い症状にある患者として、精神病

の中にはいつてしまうので、やむなく解釈をせざるを得ないにたわけである。

せばめるとどうなるか、俗に気違いといわれるもの、そのまず代表がライシャワー事件犯人がそうであるという「精神分裂病」である。ほかに「躁鬱病」「テンカン」の二つを加えての三つが、いわゆる気違いの代表となるが、中でも分裂病こそ、その代表中の代表ということになるわけである。

×

気違いとは、文字通り精神構造のバランスが完全にくずれ、そのバランス上の操作ができ得ない患者である。

社会対策と医学的見地から手厚く保護療養とせらるべき人々である。

今回のライシャワー事件も、こうした患者のひとりの犯行であった。

林麟の言うとおりライシャワー大使にとっては迷惑千万な話で、まことにお気の毒なことであった。

しかし彼がその後が続いての発言「医学的には十五、六歳でおとなの肉体的発達をとげる。少年法を十六歳ぐらいいまでにして、それ以上の年のものは厳罰で臨むべき」という意見には、にわかには納得し得ない。あまりにも単純で安易な彼の論理の運び方が納得でき

ないのである。ここでもまた、平然と問題のすりかえが行なわれているのだ。つまり、これは「最近における青少年の不良化防止」という問題へのすりかえである。

新聞の読者は、座談会のタイトルや内容から、事件を「異常者問題」「青少年問題」として受け取るように仕組まれてしまっているのである。

こうした取り上げ方から導き出されることは、道德教育の徹底と厳罰主義と、その一環としての野蛮な「焚書」運動への逆行しかない。こういう逆行のお先棒かつぎを提唱するということは、おそろしく危険なことだ。

なるほど、彼は探偵作家であるばかりではなく、「脳」の専門家だ。「頭の良くなる本」が売れて満悦のようだが、専門家は専門家バカといわれるような、他の分野においては、ひどく半ばな、極端な小児病的視野のせまさを露呈することがある。脳の専門といっても、それはすべて構造、組成上の分野でしかない。彼のいう頭の良さとは、単に記憶力をいかに増進させるか、ということではない。脳髓の働きというものはそんなことすべて尽くせるものではなからう。第一、意識とは何か、心とは何か、これら皆、脳の及ぼすマカフシギの作用の一つとしても、そうい

う理論上の分析的な説明とは別に、意識そのもの、心そのものの世界を説明することは、全く別種の仕事にまたなくてはならないだろう。

ライシャワー事件については、早稲田大学心理学助教授の相場均が、三月二十八日付の朝日新聞夕刊に、『衝動の病理』追求を』という一文で、その本質を冷静に指摘した。

「重要なことは、テロ行為、特に暗殺のようなことは、政治的な背後関係は第二の問題であり、それを行なう人間の『衝動の病理』なのである。彼が、どんな思想的背景をもっていようと、それはただ衝動の病理の背景を形成しているにすぎない。たとえ何かの党に属して、その党の思想にもとづいてテロを行なったとしても、それは、彼の行動の合理化、つまり理由づけに過ぎない。——被害者がライシャワー大使だったり、ケネディ大統領だったりすると、重大な政治的な問題になるが、本質的には、通り魔が、若い女性を刺殺したりするのと全く同じなのである——こうしたことを解決するには焦点を精神衛生の問題に移すことだ。直ちに精神医学者や心理学者によって、その動機の実行なうことである」

つまり、他はともかくとして、特にライシ

ャワー事件のごときは、これは刑事上の問題というより、精神病という社会病に対しての医学上の問題として扱うべきだ、ということである。座談会で大浜英子が言うように「家庭が暖かく」という教育問題などとも焦点の角度が違うのだ。

変質者というのは俗にいう気違いとは明らかに違う。これは林巖流に言っている、頭のいい人間である。

つまり記憶力がすぐれている。数字に強い秀才タイプだ。しかし、いわゆる秀才バカというヤツで、他の分野での情感的世界とのバランスがとれていない。冷たくて利己的にすぎた異常に権力欲が強い。

こういう男は性的生活においては未熟である。そういう未熟さを自認することを極度に恥ずかしがり、それは内攻しいびつにゆがんだものとなる。ところが虚栄心が強いので、自己のゆがみはひた隠しにしておいて、他人のゆがみには厳しい態度をとって許そうとしない。

いわゆる偽善者のタイプが変質者である。

この偽善者は、もともと小心なので、内部のゆがみはゆがみのまま、じつとそのままだに隠し持っていることが多い。

発散の場所は名誉欲や権力欲の場であるの

で、世間には秀才でりっぱに通用する。異常者というのも、その範ちゆうにはいる。彼は日常的には何事の犯罪も犯さない。大抵は権力の側に立って、道徳教育の鼓吹などに務めたりする程度のものだが、いったんカンキウウの場合は戦争による大量殺りくなど、あえて辞さない異常をそのシンに持っている。こんな不気味なスリラー劇の主人公はほかにはあまりいない。精神病患者と異常者とは、明らかに違うのである。ここに精神病院があって、そこに異常者が居るとすれば、それは患者の中にはなく、かえって病院の院長とか、医者の中に居たりする。これがスリラーというものだ。異常者とは、スリラーの主人公なのだ。

「異常者の犯罪どう防ぐ」という新聞座談会のタイトルの打ち出し方が、いかに核心を倒錯させ、問題をあらぬ方へゆがめてしまうか寒心に耐えないのもここにある。

国立衛生研究所の検定では、東大新入生のうち、二十五人にひとりの割合で精神異常が見られたという。

この数字と東大生という最高エリートとの関係のあり方に注意は払わなければならないか。

アブノーマルは人を正常にする。これは説ではない、真理だ。

アブ派は、自己を含めて人間はそれぞれ多かれ少なかれ、軽度の精神病者であることを冷静に見きわめている。かといって、本格化した患者のように、意識の統制がバラバラになってしまうことはない。サジズムやマゾヒズムの各派に傾向は分かれていても、お互いの領域は尊重し合い、平和共存である。

彼は異常者のように、無理な仮面はかぶらない。自己の傾向をよく熟知しきっている。自己の傾向に、いつわらずに忠実であるためいわゆる「悪書」が好きである。「悪映画」に「悪芝居」が好きだ。

だが、権力的な異常者が心配するように、そういう出版物や映画に影響されたり、教育されたりするようなバカは、アブ派にはない。そんなことが心配なら、NHKテレビの「赤穂浪士」を見て、そのためにだれかが徒党を組んで、集団殺人をするんじゃないか、と心配するようなものだ。

アブノーマルは、いつてみればおとなになるということではないか。おとなとは、全体にわたって、自分なりの知恵で、バランスをとる人ということでもある。

アブノーマルを薄気味の悪い二重人格的な「異常者」の構念と語意を重ね合わせ、広く世間をまどわせる罪は大きい。こういう罪造りの犯人が、大体いって真の意味での「異常者」である。ライシャワー事件の犯人は、その罪造りの渦中にティよく巻き込まれて、ソ上にのぼせられた鯉のようなものでもあった。

中世の昔、ヨーロッパでは、精神分裂病者はあわれにも、悪魔の申し子として、火刑に処せられたというが、現在でもその名ごりは全くなくなったわけではない。

現に「異常者」という、正体不明のアイマイモコとした衣裳に衣替えさせられて、一種の火刑的マッサツが行なわれているからだ。重ねていう。彼は医学上という精神障害の患者なのだ。こういう患者はなおほかに、もっと沢山世間には居るのである。こういう患者に対して、為政者はなすべき何の抱負も施策もない。

社会の平和な生活を守るという意味を一步進めて、社会はその患者自体の人権を守ることに、そのことを目的として採らるべき施策のもとでの保護療養の方途を講ずべきだ。そのことと、ライシャワーという国際的に重要な知名士を傷つけたことからくる事の重大さは、いちおう別のことである。

知名士の座談会でなおハナモチのならないことは、たとえば今回のように「異常者の犯罪」どう防ぐ」というタイトルがついたとする。「異常者」とは、はっきりした精神分裂病患者より、はるかに見分けが常人とつきがたいのだ。林麟がその発言の中でそれを認めている。だとすると、もしかしたら、発言者自身が、あるいは「異常者」であるかも知からないのだ。その一部分の中に、「異常者」が見分けは専門家ですら容易につけられない。

それなのに、出席の知名士は、自分たちは完全に無罪潔白で関係がないばかりか、いつのまにか申し合わせて検事席の高壇の上にはい上った形で「世の中の人たちは」とやり出す、この神経は困ったものだ。推理小説を書くルールの一つとして、警察官や探偵が真犯人だとするのは、卑怯なやり方でフェアでないとする。だから、まず探偵は白であることは一つの申し合わせ事項としてある。しかし実際上の世界には、この種のルールはない。「異常者」を本当に裁くつもりでいる人たちがよ。「異常者発見」のためには、だれであろうとまず疑え、である。決してそのために、自分自身を圏外において考えるべきではないのだ。

ろうそくの火を消す美香

北園透一朗
中川彩子・絵

1

美香をのせた移動椅子は、醜い女奴隷シコの手を押されて、ゆるやかにうごきだした。

この移動椅子の動力は、もっとも素朴にして単純な、人間の腕力であった。

かなり精密な構造と能力をもつ機械のくせに、モーターもエンジンもとつけてない。

ただの手押し車なのである。この車を押すことも、つまりは女奴隷の苦役のひとつであった。

シコは従順に——苦役どころか、やや得意げに、車の後部にあるハンドルへ手をかけて運転するのだ。

美香をのせた、というよりも、美香をくくりつけ、全身をはめこんだ車、といったほうが、むろん正しい。

二十歳の清純な処女の、あらゆる意志は拒絶されていた。頑丈な手枷をはめられたまま両腕は背後へまわされ、車椅子の裏側に固定されていた。両足首にも鋼鉄製の重い足枷が据えつけられている。

しかも、スリッパとパンティだけの、いわば半裸の美香であった。

「ごめんなさい、おゆるしてください。私は散歩なんかしたくありません。それより、早くここから出してください。お家へ帰らせてください！」

美香は訴えた。風に吹かれる可憐な花びらのように、美香のくちびるがふるえた。「ウフフフ。かわいい。まったく、かわいいよ、美香は」

移動椅子の緩慢な進行に歩調を合わせながら、Qはまぶたをほそめて、美香を見おろした。

Qには、ころよい予感があった。

この処女の馴致は、ずいぶん困難をともしうだろう、という予感である。

世話をやかせるにちがいない。てこずらしにちがいない。

しかし、むろんそれは、Qの望むところなのだ。美しい処女の世話をやくことが、Qの



趣味である。

Qの嗜好にすぐ調和し、羞恥を忘れて屈伏するような女だったら、Qには興味がない。

そんな下賤な女に、用はない。

美香は、貴族趣味の実業家、高宮慶一郎のひとり娘である。下品な卑しい強制に対しては、しぶとい反抗をみせるにちがいない。

それは可憐で美しく、けなげで魅力的な抵抗にちがいないのだ。

このパノラマ島における、これからの生活に、美香の心と肉体は、どんな反応をしめすだろうか。

それを空想するたびに、Qの胸は希望にふくれ、美香の白い横顔を見おろしていると、ふくらみすぎたゴム風船のように、ぱちんとはじけてしまいそうな期待が充満する。

シコは両腕を突っぱらせ、足腰に力をこめて移動椅子を押す。

上質の軽金属でできている車椅子は、それ自体では軽いものであった。しかし、いまは重い枷具をつけた美香がのっている。

四個の車は、すこしのきしみもなく快適に回転するのだが、小柄で非力なシコにとっては、やはり重労働であった。だが、Qの命令を拒否することは、絶対にできない。

こうして「鱧の海」のまんなか浮かぶ巨

大な「夢の城」城内の、深夜の散歩は開始された。

この夜、パノラマ島遊園地に設備されている五館のホテルに宿泊している約三千人の客は、もちろん、それぞれのベッドで、平和なねむりについていた。「夢の城」の内部で、奇妙な散歩が開始されたとは、それこそ夢にも知らないのである。

2

十一世紀イギリスのベディンガム城をそっくり模してつくられたこの「夢の城」の構造は、地上四階、地下二階である。

地下二階の外観は、むろん「鱧の海」の水のなかに没している。

美香がめざめたのは、四階の一隅にある、真紅の小部屋であった。その小部屋の前の廊下から、移動椅子は出発した。

「いま、なん時だ？」

Qは、シコにいった。

シコの左手首には、大きな腕時計がはまっている。

「はい。午前一時三十分でございます」

美香をはこぶ力を休めずに、シコはこたえた。

「わかってるな。まず、三階からだ」

「はい」

移動椅子は、水の上をすべる船のように、廊下を三十メートルほどすすんだ。

進行方向の右側に、ちいさな昇降機の下アがあった。定員は五名ほどの昇降機である。

ボックスのなかへ三人がはいり、シコの手が昇降装置のボタンをおしたとき、美香が、消えいるようなほそい声をだした。

「水……あの、お水をください」

このことばを耳にすると、Qのくちびるが熟したいちじくのようにほころびた。その要求を待っていたのである。真夜中の散歩は、美香にただ城内の見物をさせるだけの目的ではない。

「のどが、かわいたのです、とても。すみません、お水をすこし、ください」

これだけいうのにも、美香は頬をうす赤くそめた。

現在の美香にとって、Qもシコも、敵である。その敵に、たとえ一杯の水といえども乞い求めることは、美香の心にとって、やはり屈辱があった。

「よし」

Qは、シコに目で合図した。

「はい」

昇降機が、三階についた。ふたりの男女と

移動椅子に固定されたひとりの処女は、廊下に出た。

シコは、移動椅子の腰部の下に手をのぼした。ちょうど美香のおしりのしたにあたるそこは、ちいさなボックスになっていて、液体のはいったコップが、五個ほど並んでいた。コップには、硬質ビニールのキャップがかぶせられている。

シコは、そのキャップをとって、美香の顔の前へコップをさしだした。

「どうぞ、お水よ。お口をあけなさい」

美香は、やや憤然としたまなざしで、シコを仰いだ。

「私、自分でみますわ。この椅子から立たせてください」

「だめよ。あなたは、いまは赤ちゃんと同じよ。おのみなさい」

シコは、黄色い声をあげて叱った。

「のみたくなければ、のまなくてもいい。そのかわり、今後二十四時間、一滴の水ものませない」

Qがいった。

美香は、くちびるを噛んで沈黙した。

だが、その渴きを意識し、口にだしたとたんに、飢渴は速度を増してきたようである。目の前のコップには、透明な水がゆれてい

る。美香は、くちびるをひらいた。一秒を経過するたびに、のどはひからびていく。

「のませてください」

美香は目をとじ、かすれたような声をあげた。

ひらいた美香の口へ、シコはコップの液体をそそぎこんだ。シコの手つきは熟練していた。一滴もこぼさずに、コップ一杯の液体を美香にのませてしまった。

美香も、よほど渴いていたのであろう。のどを鳴らすようにしてのみほした。

のみ終わると、大きな呼吸をひとつして、「ありがとうございます」といった。

といった。こんなところに、美香の育ちのよさが、ふいに現われるようである。

胃のなかで液体で満たされたために、これまでの緊張もうすれ、心も落ちついたのか、

美香の表情に軽い安らぎが浮かんだ。

移動椅子は、ふたたび、にぶい進行をはじめた。

「三階の中央部は、このとおり吹き抜けになっている。二階の大広間まで見おろせるようになっていて、三階には、この吹き抜けにめしした廊下の外側に八つばかりの部屋があるのだ。その、八室あるなかで、ひと部屋が、まず、今夜の美香を待っているのだよ。ウフ

フフフ」

Qが説明した。

美香を待っている一室……？

もちろん、美香に、Qのことばの意味はわからない。ただ漠然とした不吉な予感が、美香の心身をおののかせた。

美香の肉体が不安をおぼえだしたのは、それからわずか数分後のことであった。

下腹に、鈍痛がうごめきはじめていたのだ。

いや、鈍痛というほどのものではなく、重苦しい感じといったほうが正確である。

その不快な重圧感は、刻々と不安を増していった。

当然の生理といえば、それにちがいない。この数時間、美香は一滴の排泄すらしてい

なかった。生きている人間である以上、ときがくれば、その欲求をもよおすことに、なん

の不思議もない。

重圧感は、まぎれもなく、心理的なものであった。いまの美香は、そのしぜんな欲求を

自分の意志で、自由に処理できない拘束のもとにあるのだ。

「あ、あ……」

おもわず美香は、かすかな、しかし感情のこもった吐息をもらした。

Qの敏感な鼓膜が、すかさずそれをとらえ

た。

——ウフフフ。効いてきたな。

つい数分前、シコがのませたコップの液体のなかには、強力な速進剤が混入されていたのだ。

薬は、期待どおりの効果をあらわしはじめた。

「あ、あ、あ……」

ききとれぬほどの吐息とともに、くびれた腹部が、微妙な呼吸にあえいでふくれ、またへこんだ。

美香は、おそろしかった。その要求を、口にだすのがおそろしい。

ついさっき水を望んだとき、彼らはなんとこたえたか。こんどの要求にも、きつと同じ返答があたえられるにちがいない。

屈辱の極である。これ以上、自分の心を虐めることはできない。

しかし、美香の心とは関係なく、体内の圧迫感、じわじわと、確実な速度をもって増してくる。

その非情な膨脹感は、美香のせつない決意とは、まったく逆に作用していくのだ。

——ああ、お救いください、神さま！
移動椅子に縛りつけられたまま、美香は祈った。

その祈りも自尊心も無視して、まるで自分の肉体ではないように、腰がくねった。

くちびるが半びらきになり、顎がななめ上にあがった。白いのが、まないたの上ののせられた魚の腹のように、ひくひくとうごいた。

そんな自分の表情を恥じたり、反省したりする余裕は、もうなかった。全細胞がくるおしい悲鳴をあげていた。

「おねがいです……」

舌がもつれた。羞恥やためらいのためにもつれたのではない。舌の神経と膀胱の神経がこのとき直結しているためだった。

「なにかね？」

さりげない顔で、Qがこたえた。美香の願いの内容を、Qはむろん承知していた。それなのに、なにかね、ときくのである。

「あの……」

ことばが、口のなかで消えた。

「なんだね。また水でもみたいのかね。はつきり言わないと、わからない」

吹き抜きから二階を見おろしながら、Qはいった。

「あの……お化粧室へ行きたいのです」
こらえにこらえていたことばが、美香のくちびるの外にでた。

「なんだって？ もうすこし、大きな声でいいなさい」

Qは、わざと声をたかくした。

「……」

美香は息をのんだ。屈辱に、髪の毛がふるえた。スリップの片方の紐が、まるい肩からすべり落ちた。

「それでは、三階の各部屋を案内してあげよう」

そしらぬ顔で、Qがいった。

「あの……」美香は、おもわず哀願に似た声をあげた。

「おトイレに行かせてください」

美香の顔面が紅潮した。首すじから、胸のあたりまで赤くなった。

「そうか。そんなことか。早くいえないのに」

Qは微笑をみせた。

そして、シコに命じた。

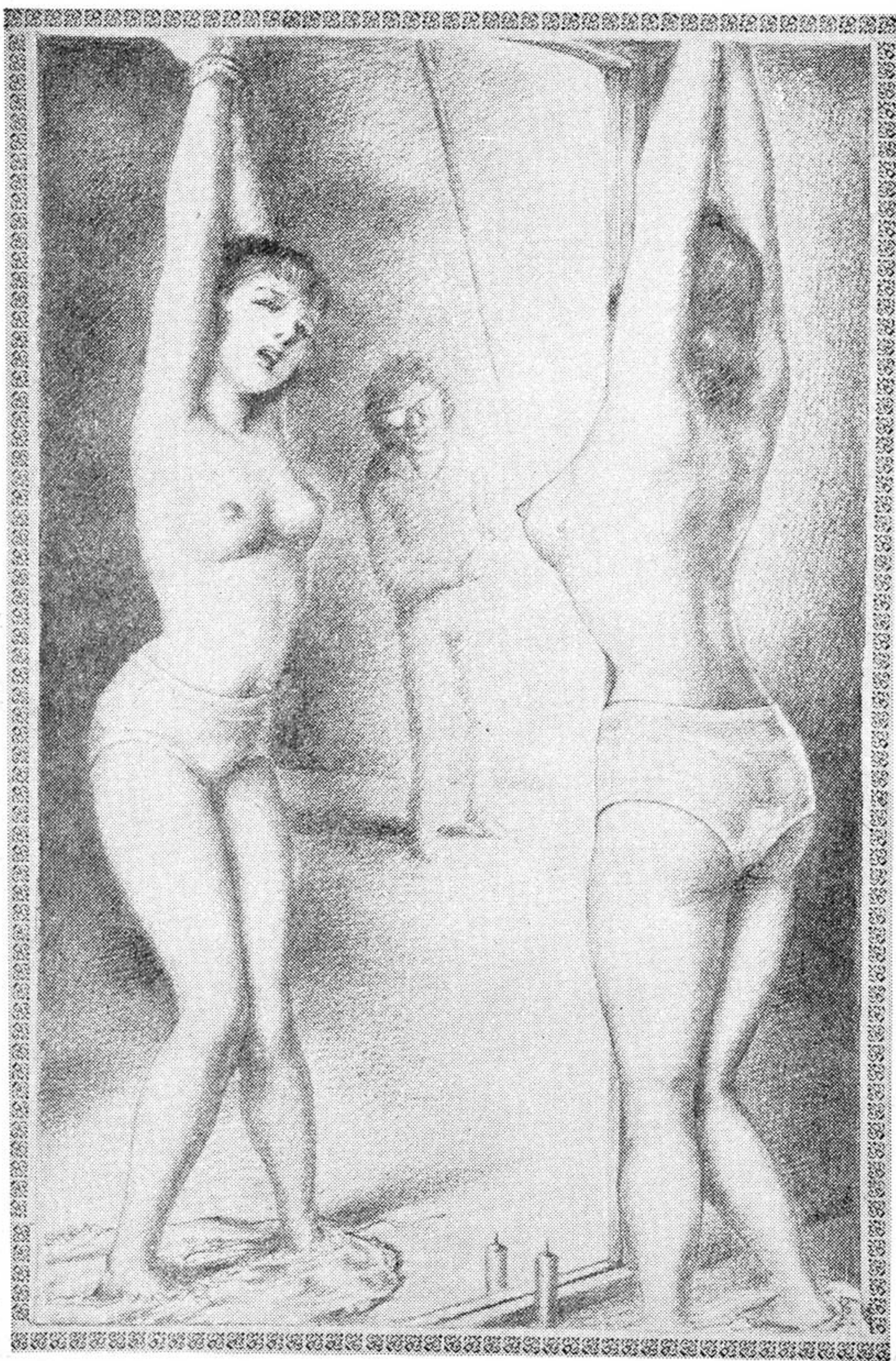
「それでは、このお嬢さんを、れいの部屋へご案内するんだ」

「はい」

シコの近眼鏡が、ぶきみな反射で光った。

3

その部屋のドアには△録音室▽と書いたカ



ードがさしこまれていた。

美香の欲求を受け入れるには、そぐわない部屋の名称であった。

移動椅子ごと、美香は室内に運びこまれ、ドアがしめられた。

そして、その車椅子の固定から、ようやく美香は解放された。

「さあ、お立ちなさい。くるしかったでしょう」

そういうと、シコは自分の紫色のジャンパールのポケットから、鍵をとりだし、美香の手枷と、足枷の錠をはずした。

この寸時、美香の手足は、完全に自由をとりもどした。手首と足首の周囲には、枷具に締めつけられた赤いあとが、ぐるりとしみついていていた。

白くなめらかな肌に、それは痛ましい模様だった。

美香は、本能的に室内をみわたした。

だが、美香の内部の圧迫感を解放するドアは、この部屋のどこにも見あたらない。▲化粧室▽という文字を、美香は血ばしった目で見がした。

それらしいドアは、どこにもないのだ。

さして広い室内ではなかった。

壁の一面に、ゆかから天井までとどくよう

な、大きな鏡が貼りついていていたのが、ちらッと美香の視界にはいった。

「どこですか、どこにあるのですか？」

齒から空気がもれるような声で、美香はきいた。

臀部を無意識のうちにうしろへ突きだし、全身を浮かせるような格好になっていた。こうしないと、下半身に力はいってしまいうのだ。

「まだだよ」

Qが、つぶやくような返事をした。

そして、再度、視線をシコに送った。

シコはうなずき、天井を仰いだ。

この部屋の天井には、頑丈な鉄鉤が打ちこまれていて、その鉤には一本の長い縄がひっかけられてあった。

縄じりの片方は壁にあるハンドルにつながれ、片方は天井の鉤から垂直に、ゆかまでたれさがっていた。

シコは、美香の片腕をつかむと、たれさがっている縄じりの前までつれていった。

そして、美香の両手首を前でひとつにする、その縄で縛りつけた。手枷のあとがまだうすれもしない手首に、また縄目がくいこんだ。

「あッ、なにをするんですノ」

美香は、愕然としてみもだえ、しりごみした。だが、抵抗の力は弱かった。力をいれると、内部の筋肉の緊張がゆるむのだ。

シコは、美香の手首をかたく縛ると、壁のハンドルにとめてあるもう片方の縄じりのそばへ寄っていった。

ハンドルをまわすと、縄はきりきりと巻かれた。

天井の鉤にひっかけられている縄は、Qの意志どおりに、美香の両手首を、まっすぐ上に吊っていった。

「あれッ」

美香のからだは、垂直に、一本の白い物体となつてのびあがった。

「顔をあげて、そのまま正面をみてごらん」

Qがいった。

美香は目をあげ、正面の壁をみた。

そこには、両手首を縄でひとつにくくりつけられて、頭上にたかだかと吊られたひとりの女の、哀れな姿がうごめいていた。

「あッ」

壁の大鏡にうつっているのは、まぎれもなく、自分のみじめな全身であった。

Qが、片手にハサミを持って、美香の背後に接近した。

ぱちん、ぱちんとハサミを鳴らして、肩に

かかっているスリッパの二本の紐を切った。

美香は、声をあげた。両手を吊っている縄が、頭上でゆれた。

上絹の白いスリッパは、ひとかたまりの布きれとなつて、美香の足もとにすべり落ち、一瞬、美香にめまいが襲った。

鏡のなかの全身が、驚愕と羞恥にのけぞりくねった。美香のまぶたのうらに、閃光がはしった。

「おめめをあげなさい」

シコがいった。つづけて、Qもいった。

「目をあけて、鏡のなかの自分をよくみるんだよ」

Qの手には、ほそい金属製のムチがにぎられていた。

ムチは長さ八十センチほどで、にぎる部分のふとさは一センチ、さきへいくほど細くなつて、先端は一ミリほどである。弾力性があり、釣り竿のように、よくしなう。

Qは、そのムチのさきで、美香のしりを、軽くたたいた。

「ふうッ」

と、美香はうめいた。

どんなに軽いムチでも、いまの美香には衝撃である。こぼれそうになる。いちどこぼれはじめたら、あとは、とめどなくほとばしる

にちがいない。

「ほらほら、鏡のなかの女の子は、ほんとうにきれいなからだをしているねえ。どんな一流のファッションモデルだって、あんなにプロポーションの美しいからだは持っていない。裸になることを職業としている女の肌なんてちっとも魅力なんかありませんからねえ。

でも、あんなにきれいなからだをしている女の子が、そんな見苦しい顔をしては、だめだねえ。もっと胸をそらし、背骨を突っぱり、腰をしゃんとのばして、自分の美しさを堂々と誇らなければいけない。プライドをもたなければいけない。上品な肉体は、どんなにせつない状態におかれても、上品なポーズをくずしてはいけないのだ。そのヘッぴり腰はなんだ。醜い。せつかくのからだは泣くよ。ほらほら、もっと顔をあげて、鏡のなかの自分を、よくごらん。そして、もっと、きどったポーズをつくるのだ。高宮家のお嬢さまらしく……」

「おねがいです。はやく行かせて……」

極度の緊張に美香の舌はしびれた。

Qの耳には、ただ、アワワワとだけしかひびかない。

しかし、Qには、美香がなんと言ったかちやんとわかっている。

いまの美香が発することばは、たったひとつしかないのだ。

かたちよいふたつのふくらみの赤い頂点がかたくとがり、自制力の危急を告げていた。「だめだめ。その腰のふりかたはなんだね。それは卑しい商売の女がする腰つきだよ。美香のパパやママは、そんなみだらな踊りを、ひとり娘に教えたのかね。その顔はなんだ。だらしく口をあげて、まるで牝犬じゃないか。歯のあいだから、舌がみえているよ。ひとさまの前で、そんな不作法な顔をして、それで高宮慶一郎社長の、お嬢さまといえるのかね」

Qは、ことばでなぶりつづける。こうして危機寸前までの時間をかせいでいるのだ。

「は、はやく行かせて！」

うめきが高くなり、顔が白くなった。

つめたい汗が、額からにじみでている。

「そこで、するのだ」

冷酷な声が、美香の背後から発せられた。

冷酷なのは、声音ではなく、ことばの内容であった。

「い、いやです……」

歯をくいしばってこたえた。

「鏡のいちばん下を見てごらん。そこに、なにが置いてある？」

Qは質問した。

美香はこたえない。そんな所に目をやる余裕なんかない。視線を集中させる努力も、いまの美香には、つらいのだ。

「鏡の下ゆかに、なにがならんでいるか、こたえない」

かさねてききながら、金属製の細いムチで美香のしりを突いた。その先端は、針のようにとがっている。

「ああッ」

ねじるように、胴がくねった。こんな危急の場合にも、皮膚には人間の神経がかよっているのだ。

「質問にこたえなければ、このムチで、美香のおしりをたたくよ。お前は、おしりをたたかれながら、立ったままの格好ですませなければならぬのだ。それでも、よいのかね、ウフフ」

うすいナイロンに、まるまると包まれた肉づきが、ムチに突かれてへこんだ。耐えている筋肉が一瞬ゆるみ、はッとして、またひきしめる。

美香は、つらい努力をして、視線を鏡の前にむけた。いまは、命令に服従するより、しかたがない。

鏡の前のゆかには、五本のうろそくが一行

にならんでいた。

長さ二十センチ、ふとさ三センチほどの西洋うろそくが、横にならんで立てられているのだ。なんのおまじないか？

そして、その五本のうろそくには、色がついていた。

赤。青。黄。緑。黒。毒々しい色をしみこませた五本のうろそく。

「うろそくが……五本……あります」

美香は、きれぎれに、こたえた。

「よし。美香は、そのうろそくから、目をはなしてはいけない。シコ、火をつけろ」

Qは、ふたりの女に命令した。

「はい」

シコは、ジャンパーのポケットから、ライターを取りだし、五本のうろそくに、つぎつぎと点火した。

風のない、しずかな室内である。

うろそくの炎は、まっすぐに無心にのぼった。色は五種類だが、もえあがる炎は、同じ一色であった。

「美香——」Qがいった。「お前は、これから消火器になるのだ。お前は、あの、うろそくの火を消すのだ」

美香の脳細胞に、そのことばの意味は、遠くかすかにひびいた。

どこか、ちがう次元からきこえてくる、自分とはまったく関係のない物音のようであった。

「いいか、よくきくのだ。お前の若々しい消火液で、あの五つの炎を消すのだ。もし、一本でも残したら、お前を、もっともつと恥ずかしい地獄のなかに突き落としてやる。そのかわり、うまく五本とも消せたら……」

Qはここで、にやりと笑い、やさしい声でいった。

「この『夢の城』から、美香を解放してあげるよ。ヘリコプターにのせて空をとび、美香のお家にいちばん近い郊外の野原におろしてあげよう」

4

美香は蒼白になって、くちびるをふるわせていた。

Qのことばの意味が、ようやくわかったのだ。陶器のように白く硬直した頬が、やがてかすかなけいれんをみせた。

美香は、頬をしたにうごかして、うなずいたのだ。心臓が凍るおもいであった。

Qの命令にしたがったら、このいまわしい古城から解放してくれる。

これはもとより、美香にとって絶対による



こばしい条件であった。

しかし、Qの命令を承知するもしないも、美香の忍耐の限界は、あと数秒後にせまっていたのだ。

服従してもしなくても、両手を頭上に吊られ、棒のように立たされたままのこのすがたで、最後の瞬間は、確実にやってくるのだ。

美香は、どうにも逃げられないところまで追いつめられたのだ。

立ったままで、そんな屈辱にぬれるくらいなら、死んだほうが、ましだ。

せめて腰をおろし、坐って、したい。

しかも、うまく火を消せたら、家へ帰してくれると、Qは約束したではないか。

「縄を、といて……。消します……。だけど、立ったままでは……。いやです」

きれぎれの声で、哀願した。

「吊った縄は、といてやるよ。腰をおろさせてもやる。だが、自由にはさせない。こんどは、うしろ手に縛る。そうしないと、どうしても、手が邪魔になるのだ」

Qがいった。

手が邪魔になるとは、どういう意味か。

シコが、壁のハンドルに手をかけて、逆まわしにして縄をゆるめた。

美香は、へたへたとゆかにうずくまった。

シコは美香のそばにかけ寄り、手首の縄を敏速に解きはなつと、こんどは同じ縄で、美香の両腕を、うしろ手に縛りあげた。シコの額にも、汗がひかっていた。

「ああッ、もう、かんにんしてッ」

美香は、泣き声をあげた。

目が、いっぱいのおわれみをこめて、シコをふりあおいだ。しかし、実力で阻止する意志は、もうなかった。

縛らないで、縛らないで、とあえぐからだに、シコの縄はのしかかっていった。抵抗するすべての気力を放棄したまま、美香はうしろ手に縛りあげられた。素肌に、じかに縄がかけられたのだ。

「ここよ。この場所へかがむのよ」

シコが、縄じりをとって言った。

音もなく、炎をあげて燃える五本のろうそくの、およそ五十センチ前に、美香を立たせた。

「うまくやるのよ」

シコは、親切ぶって、美香の耳にささやいた。そして、放射をはばむナイロンの白いうすい幕を、女らしい器用な手つきでおろしてやった。

たまりかねたような勢いで、美香は左右のひざを折った。

このとき、一片の羞恥もプライドも美香にはなかった。意識は混濁し、すべての神経は一点に集中されてくるいわめいた。

「テーブルコーダーの準備はいいな」

身構えるような格好で、Qがいった。

「はい」

シコがこえた。

Qは、注意ぶかく鏡にうつる美香の表情をみつめながら、

「よし、スイッチをいれろ」

と、はずんだ声で命じた。

美香の内部から、音がほとばしった。

同時に、ハーツという声が、のどから発せられた。くるしい忍耐が解放されたのだ。

ぎりぎりまでこらえた限界が、いちどきに破れた、はげしい音であった。

文字どおり、セキが切られたのだ。

すさまじいしぶきが上がり、破壊の勢いすらあった。

乳房にナイフを突きたてられても、このほとばしりは阻止できないだろう。

「火を消すのよ、しっかりノ」

シコが、かなり声をあげた。運動会の子どもを声援する母親のような格好をした。

美香の意識の一隅にも、もちろん、そのことはあった。五本の火を消したら、家へ帰し

てくると、Qは言ったのだ。

美香は、歯をくいしばって、ねらった。恥ずかしいゲームだった。しかし、勝たねばならない。

一本の火は、はげしい勢いに、たたき消された。

二本目の炎にも、熱い消火液は、猛烈な音で襲いかかった。

三本目の炎にも、しぶきがとどいた。

そして、四本目にねらいを定めたとき、美香は「ひいッ」と息をのんで、表情をこわばらせた。

鏡にうつる自分の姿態をみて、愕然としたのだ。それは、美香の自尊心を根底からくつがえし、羞恥と屈辱だけをよぶポーズであった。

うしろ手に縛られ、かがみ、赤い顔でうなり声をあげている自分。鏡に正面から対決している自分。

自分の両腕をうしろ手に縛ったQの意図がいま、ようやくわかったのだ。

手が邪魔になるといったQ。

だから、うしろ手に縛ると言ったQ。

ああ、こんな計略があるのだったら、立っ
たままのほうが、まだ、ましだったノ

大半を放射したあと、ようやく、正常な意

識が、美香によみがえった。

二本の炎を残したまま、音はしだいに弱まり、やがて途絶えた。

美香は立ちあがり、鏡に背をむけると、また、うずくまった。

忘れていた羞恥が、改めて急激に全身を包んだのだ。背中をまるめ、肩をふるわせて泣きだした。

声はひくい、が、がっくりと首を折り、痛切な泣きかただった。髪の毛が、黒い波のようにゆれた。

うしろ手に縛られている十本の指までがふるえ、泣きじゃくっていた。

「二本も残したね、これでは、お家へ帰してあげることは、とてもできない」

Qが、ひややかにいった。いかにも満足するような笑顔だった。

「お家へ帰すどころか、約束を破った罰に、美香は、お仕置きを受けねばならないのだ。」

シコ、もういい。テーブルコーダーをとめなさい」

「テーブルコーダー？」

美香は、ほうせんと、ききかえした。

その美香の耳に、Qは、ぼそそとささやいた。

「そうだよ、美香。この部屋のドアに録音

室」と書いてあっただろう。だからここは、

録音する部屋さ。いま、美香は、ものすごい音をだしたね。それが、そっくり、テープに吸いとられているんだ。そうだ、お仕置きの手はじめに、まず、その音をきかせてあげようかね。自分が発した音だから、そんなに恥ずかしいこともないだろう。ウフフフ」

「ゆるして、そんなこと、かんにんしてノ」泣きながら、美香はいった。

Qは目をほそめ、美香の顔をのぞきこみながら、あとをつづけた。

「しかし、ほんとうに、ものすごい音だったよ。ほら、ごらん。鏡の前が、あんなにぬれている。美香は、ろうそくを消すのに夢中だったから、音までは耳にはいらなかっただろう。だから、テープで改めてきかせてやろうというのだ。だけど、高宮家のお嬢さんが、あんなに、にぎやかな音をさせてよいものかねえ。お金持ちのひとり娘なんてものは、なにをするにも、もっと上品にやるのかと思っていたが。ウフフフ。この鏡は、じつは、マジックミラーでね、つまり、鏡のむこう側から、こっちの部屋はぜんぶ見とおしなのだ。鏡のむこうからカメラで撮影する装置も完備しているんだが、それはまだ、これからさきのおたのしみだ。ウフフフ……」

「パノラマ島」 への注文



柴山 貞利

たように、あの絵の弓子は、容貌肉体ともに下品で、清純な処女、というイメージは破壊されていたようだ。

②美香はうつくしい牝である。

このヒロインは、あくまでも正常な「令嬢」であること。一人前の「女性」であること。したがって、以前の弓子に加えたような赤児化には反対。常識と分別をそなえた「令嬢」だからこそ、羞恥もある。一人前の女性を赤ん坊扱いにしても、それほど羞恥や屈辱をあたえるとは思えない。すくなくとも、第三者である読者にはピンとこない。

の時間をあたえ、清潔を保たせること。自分の排泄物なんかにまみれさせないこと。ただし、排泄を責めの心理的道具に使うことには賛成。

⑤バイ・プレイヤーの重要性。
男性がQひとりであることには大賛成。Qすなわち読者なのであるから。助手の女性が冷酷残忍なことはおもしろい。同性によって屈辱をあたえられ、その羞恥と悲しみにうめく美香。シコという醜女のほかは、A子からG子までの女がいるという設定は巧妙で、今後がたのしめる。八人の同性の注視のなかで羞恥にまみれる美香のいたいたしさ。

⑥美香を裸体にしないこと。

私は、ずばり申しあげる。インテリゲンチャーのなかで、裸体よりも下着姿の女性を好む者のほうが、断然多いことを――。

ただし、その下着にも、とくべつなくふうが必要である。美香のパンティは、ホック式かボタン式を採用するべきである。いま流行

「パノラマ島秘譚」第一回からして、ただただ、すばらしいの一語に尽きます。構想の雄大さ、S的情景設定の巧妙さに、感服いたしました。

その序章において、今後のさまざまな発展が期待でき、心を躍らせました。

「裏窓」三十九年五月号に至ってようやく日本にも本格的なサド小説が誕生したという感慨です。

ここで「パノラマ島秘譚」の今後の展開に対する私の希望を、のべさせて頂きます。

①美香の今後の心理的設定。

――美香は、けっしてQの責め

に対して、馴れてはいけない。最後には屈服してしまうにしても、そのプロセスにおいては、あくまでも反抗し、羞恥し、泣きさけぶこと。この意味で、美香が貴族的な富豪のひとり娘であり、過去にはかなり高慢な気位のたかい環境にいたという設定は、S的情感を誘う。

前回の弓子嬢は、単なる中流家庭に育ったBGであり、そんな平凡な娘が、いつまでも抵抗しているというのは、不自然で興味もうすかった。（もつとも、これには鬼頭暁氏のさし絵にも責任があった。前にどなたかが指摘されていた。

美香の肌に、傷をつけないでもらいたい。また、肉体的疲労が限界を越えないように注意して頂きたい。責めと休息とを交互にあたえること。（そうしないと不自然になるから）。

④美香はいつも清潔に。

つねに入浴やマッサージや美容

している「局部なしパンティ」な
んか、非常におもしろいと思う。

⑦美香への無言強制。

声をうばわれるということは、やはりS的情绪がある。最後の抵抗の意志までうばわれる感じ。各種のマスク、さるぐつわを、有効に使用されたし。口のきけない美香に加える屈辱的なポーズ。

⑧今後どういう進展をするかわかりませんが、こんなストーリーもぜひぜひ、加えてください。

④ 厳重な監視の目をくぐって

美香は「夢の城」から脱走する。パノラマ島のなかをあちこち逃げまわる。しかし、やがて捕まる。

⑤ 逃走した罰により、美香は

いっそうひどい羞恥をうける。つめたい金属製の道具がよい。それと、合理的にできた特殊な仕掛けの道具もおもしろい。(ピストン操作を背中につけた金属馬メーシをあたえてもらいたい。⑩さし絵について。

であることを自覚し、はじめての体験にもだえすにはいられない。その恥ずかしさは、相当なものであるにちがいない。

⑥

あまりの屈辱に耐えかね、美香はまた逃走する。パノラマ島のどこかに潜伏するが、やはり捕まって縛りあげられる。そのお仕置きとして、こんどはパノラマ島に遊びにきている全観光客の前に、恥ずかしい姿をさらされる。観光客たちは、これもサービスの余興のひとつだと思っている……

⑨美香にはもっと心理描写を。

この前の「弓子」は、あまりにも心理描写がおろそかであった。だから、どうしても可憐なヒロインの具体的なイメージがわかず、いくら苛酷な場面でも、なんとなく味気なかった。こんどこそ、私たち読者に、生きた「美香」のイメージをあたえてもらいたい。

中川彩子氏の絵は、第一回目に
関するかぎり、可もなく不可もない。注文したいことは、できるだけデリケートな線で描いて頂きたい、ということ。第一回目の第一枚目の「夢の城」のやわらかいタッチで押し通してもらいたい。一番はじめに断り書きがしてあるとおり、おとぎばなしなのだから、やわらかい夢幻的な、しかもあるていど現実性をも持たせた(勝手な注文だが)美香を描いてもらいたい。

なお、五月号の目次の絵、中川彩子氏の絵は、色といい構図といい、迫力といい、申し分ない。これまで日本において公刊されたこの種の絵のうち、まさに、ベストテンにはいるべき傑作であろう。この絵一枚で、三百円の値打ちはある。あとのグラフィアや小説は、おまけみたいなものだ。

⑪竜頭蛇尾にならぬように。

「アラビアの城」の最大の欠点は長編としての構成が、全然なっていないということである。その場

の場の思いつきだけで、ダラダラと書かれ(それはそれで一種のおもしろみはあったのだが)構成上の緩急がないために、小説としては、愚にひとしかった。

「パノラマ島」の場合は、どうやら第一回から、構成的な意欲がみえるようだが、竜頭蛇尾にならぬようにおねがいしたい。

——以上、とりとめもなく書きつらねましたが、ご参考の一助ともなれば、さいわいです。

自分では小説なんかとても書けないから、かえってこうして勝手なことが書けるのだと思います。

⑧のところで私がのべたような

ストーリーを読者から募り、作者が味つけして発表するという方法はいかがでしょうか。また、北園透一朗氏がひとりだけでたのしんでおられる「アラビアの城」「パノラマ島秘譚」の私家版といううなもの、あると思います。

私たち「パノラマ島」ファンのために、そういう私家版を拝見させて頂けないでしょうか。

現代マゾヒズム文化時評

②7

『青いサファイア』

これは梶山季之の推理小説であり、去る一月二八日にテレビドラマとして放送された。

テレビでは嵯峨三智子が出演していたが、そのなかで病的な媚態で「あたしをムチで打ってほしい」というセリフがあった。

しかし空々しさをまぬがれないセリフ。トリックの一つとしてムチ跡を作ろうというのだから止むをえまいが、どう見てもいやらしさが先に立った。つまり倒錯の世界とはほど遠いもので、本物のそれは断片も見当たらなかったものである。

原作の中にこういうくだりがある。

『清村は、なんともムチを上げ下げした。』

いったいムチを上げ下げするということはど

ういうことなのか。ムチが示すかぞえきれない魅惑と恐ろしい力、それにまつわって湧然と類推されてくる活力の世界、それらは上げ下げによってもたらされるものではない。

「縛る」のと「くくる」のと「結ぶ」のが、それぞれ用具、力、背景、人物についてさえまったく異った映像をもたらすように、ムチに関する言葉使いも、それだけでちがった雰囲気を作り上げる。

この作品もSMブームに便乗したようなうたがいがもたれる。しかし真にサド・マゾヒストたちに興味をいだかせるたぐいのものではないのである。

西ドイツ誌

『ノイエ・イルストリエルテ』

この雑誌、一九六三年十二月一日号に二つ



森下高茂

の興味深い写真が出ている。そのうちの一つは、再び登場したクリスチン・キーラーである。こんどは前説を彼女自身がのべるだけであとは別の女優が演じてみせるイギリス映画での登場である。

この一代の傾城は見れば見るほど味わいの顔付きをしている。おそらくプロフウモ氏が、そして多くの無為怠惰なイギリス貴族たちがほれなおし、身の安全をはかるためにぎせいとして献ずるに相ふさわしいと考えるに足りる女性である。

怒りの女神たちも、おそらくはこの女性をうけいれるに、やぶさかではないであろう。前身のはっきりしない、適当に白痴で適当に冷酷で、無表情で、しかも適当に大げさに感情を露呈し、また環境の変化に順応して適切に傲慢たりうる魔性と呼ぶには余りにも可憐



■ 写真 A

これはソホー地区で流布されているであろう特殊娼婦の遊び方に暗示を受けた表現である。他には語るべきところ

な女性はいまや獄中にある。彼女が九カ月の刑期をおえて出所するとき出迎える男たちが、どのように彼女を囲繞するであろうか。イギリスと私たちの日本では置かれている社会的状況からして容易に判断することはむずかしいことである。しかし私は、これに最大の興味をつないでいる。一九六四年の出来事の一つでもある。ともあれこの映画では、真実の物語りは描かれていない。そこにあるものは日本の映画会社が「西口彰」の事件を映画化しようとしたときに示された不けつな商業主義だけである。

はな。この映画で彼女は、じつに安い評価を受けたのであり、その点、かつての「ローゼンマリー・ニートリビット」の方が、はるかに真実に近い評価を映画によってなされたと言つてよいであろう。

西ドイツ映画『三文オペラ』

一九三〇年代ごろ、日本のインテリたちがドイツ映画から受けた影響は、おどろくべきものがあつた。それは同時にフランス映画についても言うことができた。

いまやかつての欧州第一の映画会社ウーファ社は、テレビ映画それもコマースナルと短編記録映画しか製作しない小会社になつていく。トニー・ザイラーのみを売物とするドイツ・オーストリア映画は、日一日と力をうしない、ついには虚脱の中にきえ去るのではな

いかと思われていた。そこへ、忽然とあらわれたのが『三文オペラ』である。これはベルトルド・ブレヒトの原作によって、当時の古典派音楽をパロディ化したながら、クルト・ヴァイルがジャズ化といふのはいわゆるフォックス・トロットのこ





■ 写真 C

特の音楽劇作品である。

パロディというのは、皮肉ったり、ヤユシながら有名な作品に別個の衣しように着けてみせることであって、たんに準拠した変奏、編曲、というものとは異っている。「キス・オブ・ファイア」は原曲「エル・チョクロ」(ミロンガ)の改作であってもパロディではない。

ヴァイルの作品では従来正統派オペラが慣用していたもっとも劇的で感傷的である歌と伴奏の形式とが傑作で、いちばんばかげた部分にあらわれる。

そして、ゆるやかで荘厳な短調の悲劇的な音楽が皮肉にも笑いをさそうことを証明している。もちろんヴァイルが生きた時代の特長である。

斬新な不調和がずい所にあらわれる。「カノーネンリイト」(大砲の歌)や「七首メッキイ」などでさえ、異様な非古典的非ロマン派的な不協和な旋律をふくんでいる。それは同時代のゲオルク・グロッスの絵に表現されたあの非正統的な味である。

物語りは実につまらない、架空の世界の話である。そこに資本家と政治とのなれ合いと腐敗とを皮肉ろうとした意図は十分にわかるが、ブレヒトの皮肉はヴァイルの皮肉におよ



■ 写真 D

ばない。

そこで、この映画『三文オペラ』をどうして倒錯的な面から鑑賞することができるか、ということは一見実に薄弱な理由によってである。しかしこの映画の中でむれをなしている娼婦たち、その中の姐御であるヒルデガルド・クネフの扮する売春婦が毒々しい荒れた肌のメーキャップで登場する。そして歌うときは歌手がいるのではなく、一九二〇年を中心として、ほう大な流量の退廃が全ヨーロッパをつつみ、人びとがそこに病いをではなく生気を見出しつつあった時代を感じることであろう。

この現代ヨーロッパのデカダンスを一身にせおった異様な女優、ヒルデガルドが歌うときに、まさに「退廃」が歌うのをきくのである。ドイツ人好みのセピアと黒と赤とを強調した色調も美しい。そしてこの映画に出てくる乞食と泥棒の世界は、実に、私たちの実世界なのだ、共作者ブレヒトとヴァイルは言うのだが、彼女の展開する世界はそれ以上の世界である。

そこにはわずかながらサドのいう自由がほこって語られる。ただれきった泥濘の中から新しい生の哲学がうまれ出てくることを予測させる。このクネフの中に、じっとみている

とドウルシネアが微笑していることを発見するのである。

実に十人以上の準主役の中で、このクネフを中心とする娼婦たちと七首メッキイの二人の妻とは、神性をおびてえがかれる。それは対照の構成のみごとさでえがきだされ、私たちはその中に今日まで息吹きつづけているヨーロッパの異様な内部世界を見る。そして重大なことは、この世界こそが私たちに満足と希望とを約束する倒錯の肥料でもあるということである。

オーナ・チャプリン

西ドイツ誌「フンテ・イルストリエルテ」一九六三年十一月六日号に写真Cが掲載されている。オーナの夫チャーリーについては事あるたびにジャーナリズムが騒ぐが、オーナについてはそれほどでもない。

地味な性質によるかもしれないし、また稀有の美ほうに恵まれていないからであるかもしれない。しかしこの老人と若い娘の結婚がすでに数人の子宝に恵まれたという事実をもっておしはかると、肉体的にもうまくいっているとしか考えられない。

チャーリー、この寄席芸人に出発して名を

得るところ早く、その高名を今日に至るまで好評と非難との中で保ちつづけている稀代の實用主義哲学の宣伝者が、その性的世界において倒錯的であるとの証拠はまったくない。しかし、もし彼が直実の叡智に恵みをうけているならば、その皮肉なペシミズムはより強い反映をマゾヒズムに沿って示しているとも解釈される。

詩作が強い精神の集中と論理の飛躍的な要約によってなされているかぎり、そして詩が他のすべての論理的芸術よりも、より強いつばさをもって神に近づこうとするなら、詩は詩人の糞である。その糞は、いつまでも詩のうまれ出たミリュウ（心理的環境）の残滓をとどめているものである。

ここに掲げたスナップ写真Cは、オーナの奇妙なポーズを写している。長くつをはき試している図であるが、この一片の写真からもし私たちが、チャーリーのごとき夢見る心と信念とを持っているならば、別の世界の光景が十分にいやらしく、十分に想像の対象たりうる世界がうかがい知られるであろうと思う。

また同誌に『悪魔』という表題での犯罪記事がある。これはかなり長い間連載されている犯罪記事で、ドイツ人好みの非常にくわしいデータがついているのが、その特長であるう。

写真Dは、

「私は十八才のころから女になりたかった」と告白するヘルムウト・ヴィンネルである。ドイツには同性愛を犯罪者扱いする風習があるのだが、これは「神のせつ理にもとる」というカトリックや新教の宗教的な掟の概念と密接につながっているものである。

したがって日本におけるような興味本位に見ながら矯風会的な意地悪さで批判するという悪習は見られない。男でありながら男を愛するのは、まさしく悪魔の所業であって天これを許さず、とする強い信念をもって排斥するのである。

これは同誌がめずらしく取り上げた女化願望者の写真である。



人形劇団の人形芝居

——中原弓彦著「虚栄の市」——



安 東 泉

1

中原弓彦の「虚栄の市」という小説が、今
広く読書子の話題になって、結構売れている
らしい。読むに手ごころな河出のベーパーバツ
クスである。題材がまたかっような文壇ジャ
ーナリズムの裏話ときては、つい手ごころな興
味もわいて、おれもいっちょよう読んでみよう
か、ということ——河出商法図に当たり、企
画陣一同ニンマリというわけ。

いつの時代にも、裏話というやつはゼニに
なる。表通りより裏通りをのぞいてみたいの
がやはり人情、歌謡曲「銀座の雀」ではない
けれど、「おれは文壇ジャーナリズムのスズ
メだよ、裏の裏まで知ってるよ」と歌ってみ
たところ、人情のおもむくところ、どっと客
がついた。物見高いは読書子とごさい、その

道のツウになりたし、裏の真相を知りたし、
知った上で内心ホクソ笑みながら、そのおゲ
レツな好奇心はそしらぬテイ、いっばし上品
に知識人を装ってはいたしで、ともかく「虚
栄の市」は大繁盛——

週刊文春で『文春えんま張——を切る』
と始めたところ、これが図に当たった。——
を切る、と威勢はよいが、これも裏話のツウ
人たちの、ツウツウカアカアの裏話一口集、
やっぱり客寄せにはこの手が一番か。

裏話の中でも、他人のこきおろしほどおも
しろいものはない。みんな言いたくてうずう
ずしている。ところがソレ、お互い紳士、と
いうことであってみれば、そうそうむきだし
にアラレもなきはしたなさは、つつしまねば
ならない。「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」
と、宮沢賢治ばりにさとりますました表情をつ

くろっているうち、ノイローゼになる。

こういうとき、他人のこきおろしは実効の
ある解毒剤、といってそのはね返りでヤケド
はしたくなし、共犯者になってはすこぶる迷
惑——アリバイだけはつくっておきたい。一
番安全なのがのぞき見である。火の粉のかか
らぬところで、人のけんかを見ることほどま
た面白いものはなからう。

他人のこきおろしにけんか、さあごらん下
さい、観客席は絶対安全です、と保証付き、
都人士のノイローゼ解消に「虚栄の市」は富
山の売薬、トンプクほどの効果はあった。

×

「裏話」「裏話」といっても、これは柳の下
のドジョウをねらうテイよろしく、一般読書
子の浮動票を一手にかっさらわんが眼目の、
あまた出版諸雑誌は、特に週刊誌なる戦後ジ

ヤーナリズム世界が産んだ特異な鬼子を中心にして、取りかえ引つかえむ返し「裏話」
「裏話」「これが真相だ」と、ヤミクモに特
集合戦、こうもまあ、あきもせずというほ
どに真相のあばき立て合い、そしてそれが結
構、やっぱり手固いところメシのタネになる。

ところが柳の下のドジョウということ、
あんまり知恵のない「裏話」では、そこはそ
れ、まがりなりにもめいめい一家言を持つ、
相応にウヌボレの強い読書子は、ナンダ、こ
んな安っぽいもの、ということであきらめて
しまう。

一口にスノビズムというが、人間ほとんど
がタネを明かせば、みんな俗物に決まってい
る。特にインテリを自任する手合いの俗物主
義は、楽屋裏たるや見られたザマではない。

右に左に前に後に、俗物が俗物と押し合い
へし合い、アン畜生がコン畜生がと女以上の
シットやサイ疑心で、目クソ鼻クソを笑うの
こっけいと、生存競走の名のもとに、ひそか
にダレかの失敗、失脚を乞い願うさもしさは
ポーカーフェイスの奥深く——口の先では民
主主義に基づく共存共栄となえながら、内
心はさてもやっさの人の顔色をうかがってば
かりの火の車、ということ、この実態の
「裏話」を深くえぐり出しうるとしたら、こ

れは鮮度の上で、はるかに生きのいい「裏話」
となり得よう。

とかく目立ちがちな女の虚栄心にひき比べ
男子たるものの虚栄心は、実は実態たるやも
っと無残——知的虚栄心と地位身分カセギ
高、モテ方の虚栄心と、雑多に入りまじり、
ポーカーフェイスの奥に潜航する。

中原弓彦はここをねらった。「裏話」の白
眉として、ねらった意図は一応的を射た。

だれでも自分の身なりは気になる。他人か
ら見た自分の顔かたち、様子が気になる。そ
つと道すがら、さりげない流し目で商店のウ
インドウに映る自分の容姿を、一瞬の間に盗
み見する。この技巧が習い性となり、絶えず
他人の視線にセンセンキョウキョウ。

《虚栄の市》は、いわばこの鏡がわりのシ
ョーウィンドー、知識人読書子の「裏話的ポ
ートレート」を、さあごらん下さいとご披露
に及んだという次第であった。

2

《虚栄の市》は、いちおう長編小説と銘打
つてはあるが、果たしてこれが小説であろう
か。読み始め安っぽさを感じ、中ほど思わず
吹き出し、終わりの部分軽い失望で終幕する
この本の後に、残るのは荒らい砂粒の舌ざわ

りである。

小説としてなら構成の運び方の点で失格で
ある。天野と有賀が没落するのはいいとして
も、この没落の過程は何としても粗雑すぎて
余韻が響かない。有賀が植木編集長を女で買
収して、それをタネに、有賀が植木をおどす
くだりなどつまらない。こんなこたあ、書か
なきゃよかった。円谷監督ではないけれど、
せっかく特撮技術で、おもしろいこと文化人
ジャーナリストの裏面の顔を、思い入れよろ
しく漫画の早とりでうまいこととったのに、
つまらないこと書くもんだから終わりの切れ
が悪くなる。「週刊新潮」の《黒い報告書》
あたりに書き尽くされてあるような手を使っ
て無理に小説としての体裁を整えようとする
こたはない。こういう味付けは、まだ《黒い
報告書》のほうが歯切れもよく余韻もある。

特撮なら特撮でもいい、精巧なトリック撮
影のおもしろさを最後までタンノウさせてく
れば——せっかくのトリックが、後半にお
いてぶちこわしになった。喜劇なのか風刺な
のか一般ドラマなのか？ 著者の欲気がわざ
わいしたのであろう。

しかし、もしこれを、『第四章・第九芸術
の夜』を中心に、その場面以外に気を散らさ
れずに、ストーリーなぞどっちでもよいつも

りで欲気抜きに書いたとしたら、すばらしい喜劇ができ上がっていたであろう。こういうことの才能はありそうである。

作中人物はともかくとして、ご本人自身のペダンチックなのはよろしくありません。作中人物が、にせ物の知識をひけらかし合うペダントリーにあさましさを笑うのはいいが、著者自身、ありったけの博知多才をひけらかそうという、ペダンチックな背伸びが、歴然にすぎるのが何といってもマイナスだ。

《虚栄の市》は或る種の読物か、戯画的ルポか、いずれかに数えられるべきではなからうか。

×

ストーリーのあらましは、だいたい次ぎのように展開される。

《餓狼の街》という性的残酷小説で一躍ジャーナリズムの花形になった有賀俊介を、その葉山の別荘に、天野健が訪ねるところから幕は開く。天野は詩人志望だが、現在は友人の情で、週刊誌のラジオ・テレビ欄、ゴシップ欄に記事を書いて、かろうじて生計を立てている男である。彼が有賀を葉山の別荘に訪ねたのは、人気作家としての有賀の別荘生活について記事を書くためであった。

ストーリーはここから始まるわけだが、この前に十四ページほど、有賀俊介についての

説明がくつついている。軽薄でいや味な部分である。何でこんなゴタクを並べ立てなきやならなかったか、判断に苦しむ。いっそないほうがましであった。

有賀俊介の処女作で、かつマスコミへの登場作ともなった《餓狼の街》は大毎新聞社の「週刊サンデー別冊」に発表されて反響を呼ぶ。その成功の材料は異常性欲であったとする。それはよい、しかしがまんにならない記述は次ぎの点にある。原文からそれを拾ってみよう。

「サディズム、マゾヒズム、近親相姦といった初步的倒錯は言うに及ばず」(傍点に注意)以下続けて「フェティシズム、畸型愛好症、動物嗜好症、排泄物愛好症、切腹愛好症、浣腸愛好症等の患者が百鬼夜行する彼の小説は常人にとってはショックもいところだったし、マスコミの話題の種に好適だったのである」とある。

これは全く、生な、著者自身の意見である。生な意見を、こんな形で祭礼の夜店じゃあるまいし、ザラザラザラッと、ありったけ並べたててみせるのが、小説を書くとうとするほどの人にとってどうか。小説としては、まさしく初步的段階において失敗だ。

また書き立てたいなら、書き立てたいなり

に、もう少し上つかじりの聞き覚えでなく、實際を勉強してからにお願いしたい。

サディズム、マゾヒズム、近親相姦を初步的倒錯と言い切った著者の暴勇にはホトホト頭が下がる。以下フェティシズム、畸型愛好症、動物嗜好症、排泄物愛好症、切腹愛好症、浣腸愛好症と続けて、これを患者と言っているのはまたいかに。初步よりこのほうが程度の高い異常性欲のつもりでいるのだろう。

サディズム、マゾヒズムが、何で倒錯の初步であり得よう。出発点であると同時に到達点がサドでありマゾとなる。これは二大支柱である。ゆるぎない双柱だ。以下は、多かれ少なかれ、すべてSとMから派生して出てくるものではないか。仏教という輪廻ではないが、SやMを中心に回り回っているものだ。これこそサジズムや、マゾヒズムに対する、初步的認識でなくてはならない。

ところが、サジズムやマゾヒズムは、名称だけはあまりに売れすぎた。オドリオドルなら、サジズム、マゾヒズムとばかり、だれでもいちおう口にする。小説、映画、演劇、至るところSとMの疑似態ははんらんして、評論家も、とにかく「これは若干のマゾヒズム過度のサジズムが見られ——」云々と書けば大体見当はずれのないような、SとMの平

俗化の時代ではある。

▲虚栄の市Ⅴの著者は、このアワ粒のような時代の風潮をウ呑みにした。そうしてSとMがあんまり有名にすぎるんで、いわゆる、「巨人、大鵬、卵焼き」のごとく、これは初步的倒錯で、云々と、ちよつとばかりツウであるらしいところを気負ってみせたわけであるのだろうか、実は、こういう著者自身の安易さをこそ、シンラツな風刺の筆に乗せ、大いにからかってやるべきではなかったのか。これが▲虚栄の市Ⅴという作品の作者にとつては、まず第一の、重要な義務ではなかったか。

第一、小説において、こんな安っぽい生な意見はよろしくない。

3

有賀俊介は、マスコミへの登場以前は、新宿の裏通りの薄暗い家具店で、配達のアルバイトをやっていた貧しい田舎出の学生にすぎなかった。

有賀俊介が働いていた店の隣には、店内を少女趣味に飾った喫茶店があり、昼間は女子学習院の少女たちのたまり場、夜は近くに住むコールガールたちの連絡場所になっていた。「そのどちらの女性にも無縁であること

が、彼を絶望的にした。惨めな環境の中で、空想だけがとめどなく広がってゆく。が現実の女たちは常に眼に見えぬガラスの向う側で、飛び跳ねているのだ」

有賀俊介の出発点と、作者中原弓彦自身との出発点とが、それこそ初步的に生な形で重なった。これじゃ話にならない。

ともあれ有賀俊介は、この一年に数冊の長編を出し、現在は週刊誌連載四本、月刊誌連載二本を持っている、売れっ子だ。

天野は、大学で有賀の二年後輩だ。図々しいこと無類の男である。田舎者特有の羞恥心の欠除が成功への近道であることを、身でも立って立証する男であった。一例があげてある。「ある喫茶店で“先輩”(彼は誰でも先輩と呼ぶ癖があった)に仕事をまわしてくれと頼んでいるところへ、その先輩の内職の顧客が現われた。これはレコード会社の人間で、先輩はここから出るポピュラー・ソングの歌詞の邦訳を沢山手がけていたのである。このことを小耳にはさんだ天野は“先輩”の眼の前で堂々と売り込みを始めたものである。

——僕は英文科出身ですから英語ができましたし、詩人だから日本語の美しさにも敏感です。ひとつ僕に訳詞をやらせていただだけませんか。きつと素晴らしい歌詞ができると思

ます——」

エピソードはどれもおもしろい。おもわず周囲を見回してみたいくなる。どこにでもいる或る種のタイプを寸描して、筆力の冴えはこのところいちおう鋭い。

×

似た者夫婦というが、有賀と天野はどちらも共通してよく似ている。ドロくさくてセンスがなく、図々しい。▲虚栄の市Ⅴでの二大登場人物だ。

「天野は来意を告げた。

——デビューして一年でほんと別荘を買っているのは、あんまりないと思うんです。五百五十万円ぼんと——

——七百万円だよ、きみ。五百五十万は公称さ。税務所がうるさいからね——

——この金額、書いちゃまずいですか？

——そうねえ——

有賀の心の中では、できるだけ高い金額を誇示したいという虚栄心と、税務所や同業者からの風当たりを顧慮して、できるだけ少い金額に止めておきたいという計算が争っていた。が最後に勝ちを占めたのは、やはり虚栄心の方だった。

——七百万と書いてもいいけどねえ——
実際の買い値は六百万以下なのである」

有賀と天野の最初の出会いの場面である。

「——あの、実は——天野は遂に口を切った。お忘れかも知れませんが、先生のところに、ビートニック風のハードボイルド小説を送ってあるんです。《殺す風》って題なんですけど——読んでいただけたかと思って——

——《殺す——風》？——」

寸暇の暇もないこの二十四歳の流行作家は盛名を慕って送りつけてくる原稿が沢山なので、そう簡単には思い出してくれない、いやそういう思い入れよろしくといったテイで、あれこれ聞きただしたり何かしたあげく、やっと思ひ出すという寸法。

「——どうですか？——」

——あまり感心しなかったな——

有賀は重々しく言った。

——アメリカの通俗ハードボイルドの猿真似じゃないか。お手本をうまくなぞっただけだ。ちっとも、君自身のものが入っていない——俺の場合、ハードボイルドとか残酷とかいうのは、全部、外側の見せかけなんだ。内容的に言えば、俺の書くものは文学ですよ。わかる人はわかるだろうがね。まあ、君も、もう一度最初からやり直して見るんだな——」

天野は腹の中ではコン畜生と思う。しかし表面はさりげなく、かねがね考えていたところの「夜の会」というグループに、名前でも貸してくれと有賀に切り出す。「夜の会」というのは、テレビにミステリー番組のプロットを提供するマスコミ界のグループを企図した、天野の案にあるものであった。

「もし、この企画が成功すれば、俺の名前はマスコミの一隅に確実に記録されるわけだ。企画書にも、台本にも、そしてタイトルにも俺の名前が出るのだ。今みたいな無名のコラムニストじゃなくなるわけだ。今の俺は、要するに、健康保険と身分保証のない一介の社外ライターに過ぎないんだからな」

天野の腹の中の計算はこうであった。

×

映画批評家、泉真人も、また重要な登場人物のひとりである。

「泉の批評には、彼独自の視点というものはほとんど見当らず、むしろ、常識的の一語に尽きたが、文章はかなり達者だった。改行と句読点が多く、読者がつい引き込まれて読んでいくうちに、突飛な比喻やカタカナが笑いを炸裂させる。あの滅多に笑顔を見せぬ青年が、いったいどんな顔して書くのだろうか、と考えこませるような快文章——この常識性と軽さこそ、現代マスコミの求めているものである。泉が、たちまち、売れっ子になった

ことは、何の不思議もない。

注文次第で《日本映画の衰退》などという評論から《映画に見るハイティーンのセックス》《エリザベス・テイラー論》《シナトラ一家は鬼より怖い》といった雑文まで書き飛ばし、お座敷によって、ひとつ映画を褒めたり、けなしたりする器用さは、気骨あるジャーナリストたちの聲を聞いていた」

試写室の帰り、泉は知人の文芸評論家、由利才三に会う。

「由利才三は肩書は『文芸評論家』とか『アメリカ文学研究家』ということになっているが、実際に、何かまとまった評論などを書いていないというわけではない。その翻訳は誤りの多いことで有名だった。

由利才三の雑文、コラムの特色を一言にしていえば、それはまずフロイト、サルトル、シモン、ロブグリエ、ビュートル、サロート、エリオット、メイラー、サリンジャーといった片仮名の異邦人たちのコーラスで幕があきアメリカ人好みの精神分析用語や《キンゼイ報告》を引用しながら論をすすめる、論旨が矛盾撞着しているにもかかわらず、結論なしで意味ありげな、そして、肩すかしのような一行を残して、ふっと終ってしまうのが常であった。筆者がいったい何を言わんとしている

のか、読者には少しも理解できず、ただここに示されている教養が氷山の一角であり、海面下の部分に計り知れない、ということが、印象付けられるようになっていた。

なお由利を特徴付けているのは、その進歩的ポーズだった。ごく最近、生活の必要からアメリカの反共作家マッキー・スプリーンの『コミニストを鍋の中へ』を訳した時などは大騒ぎであった。会う人ごとに、ぼくはあの小説を訳したことを一生悔むでしょう、と断わって歩いたのだ」

さすがにこういう世界を実地に渡り歩いてきた男だけに、人物寸描の戯筆は冴えて、なかなか辛らつ、的を射ることも正確だ。

「由利は、黒の背広に黒シャツ、白ネクタイという、一九二〇年代のシカゴの殺し屋を、髭髯させる格好をしていた。ハードボイルド小説を訳しているうちに、こんな格好がしてみたくなり、面白がっているいろいろな人に見せびらかしているうちに、軽薄な週刊誌で『殺し屋スタイルの評論家あらわる』などと書いたので、ひっこみがつかなくなってしまったのだ。以来このスタイルで押し通して、時々人前でさつと内ポケットに手を入れ、ピストル型のライターを出すと、煙に火をつけ、眼にも止まらぬ早業でピストルを一回転させる

と、素早くポケットにおさめる」というのだが、笑ってはいけな。笑いながらも思わず或る作られた剣豪作家のスタイルなぞ、フツと連想したりする。

4

映画批評家の泉真人と喫茶店にはいった由利才三はこうぼやく。

「実はぼくは、作曲家になろうとして、失敗して、推理小説の翻訳屋に成り下がった、というわけです——」

「実のところ、この評論家は、その時と場所に依り、あたかもカメレオンの皮膚が変化するように、自分は、かつて作家たらしめて二十代後半で挫折したとか、英文学者たらしめて学閥の陰謀にまきこまれて挫折したとか、コミニストたらしめて党の指導部の裏切りにあつて挫折したとか、様々なことを吹く癖があつたのである。それでも二十代の頃は、ソラマタ始マッタなどと言われたこともあつたが、三十代に入ると、手が込んできて、いかにも弱々しい微笑を浮かべながら、ぼつり、ぼつり、と語って行くので、かなり迫真力が出てきた。自分はすべてに挫折した挙句仕方なく推理小説の翻訳をやっている、ということ綿々と訴えるのだった。誤訳を

指摘され叩かれる——と例によって、心の傷を押しかくした悲しげな微笑を浮かべて、呟くのだ。——好きでやっているわけじゃありませんので——その由利が泉に対しての会話で『挫折』の材料に音楽をえらんだのは、他の材料では足元を見られるおそれがあるが、音楽はそつのない泉にとっての泣き所であることを知っていたからだ。泉は映画評の中で音楽に関しては『かなりの効果をあげている』とか『パセティックな音楽の功績も特筆しなければならぬ』といった風に『紙数が尽きたため、止むを得ず、こう記すにとどめる』ように見せかけて、実に曖昧かつ無意味な一行を付け加えることでごまかしていたからである」

こういう手のこんだ皮肉な寸描は、ちょっと苦笑まじりに我が身のことにも思い当たるわい、と、思わずアゴをなでる諸先生方も少なくはないはずである。似顔絵としては、筆先のスミの付きは確かに悪くない。ニヤリとさせられなくもない。

『虚栄の市』のモチーフは、そしておもしろいところは、こういうマスコミ界の人間の、心の内側の「裏話」を、あえていえばこきおろしを、虚実織りませ臆面もなくさらけ出してみせたところにある。男とはド助ベエなり

の真理をなぞって、小島功が『仙人部落』で読者のかっさいを博したように、文化人とはミミッチイ虚栄心の固まりだ、という一面の真理をなぞって、中原弓彦が『虚栄の市』を書いた。「裏話」のこっけいさにある。洋服でも着物でも、裏を返すと縫い目があったりつぎが当たっていたり、舞台の大道具小道具舞台装置のもっともらしさも、これを返すとただの安っぽい板切れに釘の目サイの目、ツギハギ舞残なアワレッポサ。ということになる。

×

登場人物でおもしろいのは、「ミステリーダイジェスト」編集長の植木清と、そのアシスタントの加賀美寧のコンビ。

「植木は推理小説のことは何も知らず、シャーロック・ホームズさえ読んだことはなかったが、門前の小僧なんとやらで、聞きかじりの知識は豊富だったし、また、それらの断片的知識を効果的に用いる方法に長けていたのだ、最近の推理小説界のニュース、ゴシップ、推理クイズといった類いの物を書き散らしては金に代えていた」

「助手の加賀美寧も編集者としてのセンス・オリジナリティーは爪のアカほどもなく、よその気のきいた企画を盗むことで大いに仕

事をした」気分になるので、事実、そういう面ではなかなかエネルギーギッシュであった」

も一つ、加賀美寧は男色の趣味があつて、おしまいには植木編集長にも色目をつかつて言い寄ったりするので、編集長すっかりもてあましの図といったところが開陳される。

登場人物はその他にもまだサムライがそろっている。情報通の英文科教授蓮池昌作、新

人を拾い上げ、流行児に祭りあげた上で、それを今度は一気に切り捨て、失脚させることにこよない快感を感じるという「週刊サンデー」の江木編集長、かつては名映画批評家で、今は落目の米倉武夫、金持のドラ息子で「夜の会」のパトロン、さんさんおだてられて利用されっぱなしの一見フランス文学青年風の三木洋、K学院の助教授で自称モーム研究家、仕事にあぶれて売り込みに色目さかな熊井、挿絵の世界にダリ風の超現実主義を持ちこんだというので流行児になった清宮、強姦暴行その作品を地でゆくやくざみtainなスリラー作家沼田順次——

こういうサムライたちが「夜の会」を結成旗上げの一大花火として前衛芸術の立体ショー「第九芸術の夜」というのを開催する。何とも壯観であり『虚栄の市』の白眉である。その会場でだれかが言う。「ここに爆弾が一

発落ちたら、明日の日本文化は闇だね」

×

この多士済々の登場人物中で、女性はずかふたり、天野と結婚する米倉の娘たまきと有賀に終始まといっている中野優子——このふたりだけとはちょっと寂しい。そしてふたりともまるで影みtainな何の意味もない存在である。

意味がないといえ、みんな意味のない存在だ。人形劇団の芝居と思えばよい。哄笑と苦笑で、あとに残るものはない。その間、部分部分に中原弓彦の才気のほどを、なるほど、ふん、やられた、ということ、そんなことつきりでシリつぽみになる。とり所は「第九芸術の夜」の場面あたりであろうが——そして人物としては男色編集者の加賀美寧がひとりだけよく書けている。

「サンデー毎日」の書評に(S)の筆名でこの『虚栄の市』をとり上げた。ストーリーを丁寧で紹介したあと、「ともかく推理小説の現状を題材にして、マスコミの世界をあざとく戯画化した読み物としてたいへんおもしろい」と結論づけている。

「週刊朝日」には平野謙が書いている。「著者の才気カンパツの筆にとりどころ笑わせられながら、おもしろく通読した。その点で

は第四章の「第九芸術の夜」が圧巻である。

しかし、大藪春彦の盗作事件などをチラと思いうかべながら、著者の軽妙な多知多識ぶりに感服したにすぎない。果たしてこういう読者心理が、著者の最初からのねらいだったろうか」と結んでいる。

中原弓彦のねらいは、そうではなかったと思われる。本人も意気こんで著書の裏表紙に書きこんでいるように、人間、人間、人間を本格的に書こうとしたものに違いない。そうして見事な小説にしよう魂胆であつたらうと察せられる。にしては、ちょっとお門が違う気がする。というのは、ただそういう意味で書けているのは、加賀美寧ひとりだけであつた、というばかりでなく、またストーリーの結末が有賀と天野のあまりにも常道にすぎる経過をたどつての、これまたあまりに通俗的没落の筋立てがお粗末にすぎるといふのばかりではない。《虚栄の市》全巻にこめられている皮肉な笑いが、不連続線のようにマダラとなつて、よく容器内に十分溶けあつていないためである。そして一つ、中原弓彦の、人間を書こうという気負いすぎが、いや味なベダントリーとなり、その著作態度そのものが実は《虚栄の市》のモチーフそのものと密着してしまつたからである。天を仰いでツバを

吐く小心で野心家の一青年の姿が、ここにほうふつされる。

×

「週刊読売」の書評には日沼倫太郎というのが書いてある。「すべての人間を『虚栄に憑かれた人物』として割り切つて描いているが、人間は決して虚栄のみによって生きてはいない。おそらくこの作者に特有の志の低さ、ひいては人間観察の甘さがあるので、あえて深淵探究にゆかりのない精神の手によつてかかれた現代アチャラカ小説、と称するゆえんがある」

これこそとんでもないアチャラカ評論ではないか。虚栄のみによつて生きるものにあらず、は噴飯ものだ。当たり前のことじゃないか。《サザエさん》のみが家庭の主婦にあらず、と開き直るようなものだ。《サザエさん》は《サザエさん》でよし、《仙人部落》は《仙人部落》で、また一面の男性の心情をくすぐるのである。それとも、似顔絵があまり自分に似ているので、バカにするなといきりたつ政治家や有名人のこっけいさが、この評論の仕方ではないか。

ただ言いたいことは、前にも書いたようにもちろん部分的ではあるが、このごろ風潮として、やたらにサジズム、マゾヒズムの語を

濫用し、ありもしないサジストやマゾヒストが、所を得顔に出没することである。善玉、悪玉と割り切られた形の変質者としてである。これではサジスト、マゾヒストが浮かばれない。戯画なら戯画で結構、デッサンだけは確かなところを描いてもらいたい。西欧人が東洋人といえ、みんな細い目をつり上げた、中国人も日本人もゴミもアクタもいっしょにして、キツネみたいなご面相に描き上げる、あのデンでSやMを扱われたんじややりきれぬ。

中原弓彦が言うように、「私が興味を抱くのは、ただひたすら、人間、人間、人間」というのであれば、それはなおさらであらう。実は考えてみれば、このマカフシギなる「虚栄」なるもの、これとて根をたどれば、性的コンプレックスや性的優越感や、さまざまに通じるものがあり、さらにそれをたどれば、すべていちおうはより深い所でサジズムやマゾヒズムとつながつてくるのである。知らぬは亭主ばかりなり、お釈迦様でも気がつくめエ、と言いつばなしで知らぬが当たり前では困る。

裏窓・既刊号

よみものご紹介

おしんはいきなり後ろから帯をつかんで引き戻されて、あっ声を呑んだ。

「おい！ ずかるなあいけねえぜ。バクチに勝ち残ったやつ相手になる約束だったはずだが」

「畜生！」

おしんは振り放して逃げようと思ったが無駄だった。ずるずる、引きずられるように中間部屋に引きずり込まれた。

五六人の男がおしんの方を振り向いた。

金平はまだその中にいた。

「畜生！ うまく目が出そうなのに女に逃げられてたまるけえ！」

おしんの手首をつかんで、金平に睨まれた男がそう喚いた。

「どうするよ、この女」

おしんの帯をつかんでいる男が、ニヤリとして相談するように言った。

「その柱にふんじばつといて勝負をつけるんだ」

「そうだそうだ」

眼をねむたそうにこすって、ひとりが言っ

た。

こいつらは、もう眠り薬で、バクチの勝負なんかどうでもいいと思っていた。ただ眠いのを我慢していたのは、おしんの肉体が目的なのだ。それで女がずらかり損なつたと聞くと、刺激を欲しがった。

「金平、てめえこの女を柱にふん縛つとくの



に不届はあるめえな」

「あるもんか、俺あその女と知り合いでもなんでもねえ」

と、金平は言ったが、つと立った。

「さあ来い！ 俺が勝ち抜けて抱こうとしてるのに逃げるなんて、とんでもねえ女だ」

「金平、女をてめえがふん縛れ！」

おしんは、柱に突き飛ばされて、「何も柱にしばらくつけなくてもいいじゃないか。もう逃げやしないよ」

そういいながら、必死に金平の顔を見る。

金平はそれに知らん顔をした。

「おとなしくするんだ」

と、おしんの背中を柱に押しつけた。

おしんの帯をうしろからつかんでいた男は柱を背負わしておしんの両手首をぐいと廻した。

「金平、女の体から紐を一本抜いてくれ」

「よしきた」

「あれエ」

おしんは身をもんだが、金平の手は遠慮なくおしんのふところからつかみ出すように細紐を抜き取った。

「よこせ」と、それでつかんでいたおしんの手首をくくってしまう。そして、金平を見て薄ら笑いをした。

三十四年一月号 妖異裏窓忠臣蔵・特集

中林節三・文 石塚芳幸・絵

「肌絵図悲願」より

定価・百二十円 送料・十八円

宗兵衛は、しっかと猿ぐつわを嚙ませたお佐江をおえんの傍に引きずって来た。

「ふふふ。この娘は、はだかだぜ。この娘を、どんな目にあわせたら、おめえが清次の居所を吐くだろうなア……」

宗兵衛、にやりにやりとしながら、おえんの顔をうかがい、そしてお佐江の軀をながめて、その視線を今度は部屋の隅の方に移した。

おえん、宗兵衛の視線が差し示す場所を見て、思わず、ぞっと全身の毛穴を総毛立たせた。

おえんが、今まで見たこともないような、それは、おぞましい妙な形をした道具が、あるものは壁に立てかけられ、あるものは板敷の上に横に置かれ、また、あるものは、吊り下げられてあった。

組板に似たような厳丈な木作りの台。十字型をしたはりつけ台のようなもの、鎖の付けられた鉄輪、鋭いトゲのようなものが一面に植えられてある碁盤。それから……。

種々雑多な、奇妙な、不気味な形をした、どす黒い道具類が、いくつも並べ立てられてあるのだ。

それが、何に使われるものか、おえんには、すぐには判らなかった。が、それを見た瞬間

に、ぞっと、毛穴のそそけ立つ思いをしたのは、このような場におかれた女の、より以上敏感になった皮膚が、何かを感じていたのかも判らなかった。

お佐江も、猿ぐつわに声を消されながら、軀を悶えさせ、低く呻いた。



「どうだ、あれを見て、いい声で泣きたくなつて来たろう」

「ま、まっておくれッ！」

おえんが必死になって叫んだ。

「お佐江ちゃんだけは、助けてやって！ そのかわり、あたしを、あたしを、どうにでも好きなようにするがいい！」

「清次の居所は？」

「言う、言うから、お佐江ちゃんを帰してやつて！」

「ふん。今更、おめえの指図は受けねえよ、どうしようと、俺の勝手さ、ふふふふ、だがそれほど言うなら、おめえの方を先に、歌わせてやろうか。清次の居所は、どうせ、言いたくなるようにしてやる。しかし、まだそれより、もっと別な用事が、おめえにはあるのだぜ……ふふ」

「……………ああ！」

「そうして、黒髪を乱して、縛られたまんま身をくねらせている姿は、女がいいだけに、尚のこと、たまらねえ眺めだぜ。花清で、一枚、一枚、脱いでいった時のように、まっばだかになって貰おうか」

三十四年二月号 変幻俠盗義賊・特集

円城寺達・文 喜多玲子・絵

「肌責め稻荷」より

定価・百五十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

裏窓・既刊号

よみものご紹介

言語道断——とは、まさにこのようなことをいうのであろう。

新婚以来、世間並みの夫婦のような甘い語らいなどしたことがなく、和やかに睦み合うこともなかった。いつも、憎悪のこもった荒々しい情熱を一方的に押しつけられて来た。罪人のように縄を打たれることも再三あった。

愛されるのではなく、執拗に犯される、いまわしい夜がありはした。

だが、それらの仕打ちは龍介一人から加えられたものだ。諦めと耐久が可能であった。しかし、今日は違う。突然、本性を表わした静子が、自分の役割を心得きった態度で、非情に啓子を縛るのだ。これはもう、限度を超えた虐待であった。

(明日こそは、絶対この牢獄から飛び出してやろう)

と啓子は心に決めた。家庭裁判所に訴えて慰謝料の請求もするつもりだ。請求の理由はあり余るほどに揃っている。合法的な思い切った反撃を加えれば、龍介は下手には動けま

い。田舎の父や母に仇をすることもあるまいと思う。

「奥様。グズグズすることは許しません。どの縄目を選びますか」

静子が促した。女の悪徳をむき出しにしたような、底意地の悪い笑顔であった。

(この女も訴えてやる!)



「まあ、女奴隷のくせに、わたしを睨んだわ。ツケ上ると鞭を喰わせることになりますよ」

「……静さん。どうしても好きなようにしたらいいわ。どうせ、わたくしは抵抗できないし、選んだ通りにしてくれるわけでもないで

しょう」

「よし。これ以上は問答無用だ。静子、女縄に縛りなさい。ちょうど、その縄は五尋の物だ」

静子はうなずいて、手首からのびている縄を啓子の体に掛け始めた。

力まかせに手首を上へ吊り上げられて、啓子は痛さにうめいた。手首から先は、すでに感覚を失っていた。

両腕、首筋、胸、胴、と、縄は皮肉に喰い入り、息も詰るほどの厳しさだ。それをさらに極限まで締め上げられる。想像に絶する苦痛が身を責めた。

縛り終るまでに十分ほどの時間を要した。

「念入りに縛ったな。俺には、これほど巧くは縛れない。いや、実におみごとなものだ」

「お褒めにあずかりまして、恐縮でございます。これも女の一念ですわ」

「その一念は、まだまだこれからが見せ場だよ。この女に、いろいろと白状させなければならぬ」

三十四年三月号 凄艶毒婦妖婦・特集

鳴滝三郎・文 美濃村晃・絵

「泣き方を教えて」より

定価・百二十円 送料・十八円

祭壇の真下に掘りさげた地下室に、いま、半裸の女がおしこめられている。部屋の中央に立つ、五寸角の柱を背中にもうしろ抱きにした姿で縛られていた。

裸ろうそくの燃えるうす暗がりのなかに、背をまるめてかかっているのは、教祖の道玄である。そして、この受難の女は、巫女のお篠であった。

白衣の胸もとが大きく乱れて、二つの乳房が、むっくりとまるくさらけでている。その乳房の上と下に、荒縄がびしびしとかけまわされ、柔らかな肉に痛々しく喰いこんでいるのだ。

ああ……苦しい息を吐き、また吸う度に、つきだしたうす赤の乳首が、こまかいふるえをみせる。

「さア、いえ。なんのために、大黒屋に毒を盛った？　なぜ殺した？　あの年寄りはおれにとっても、お前にとっても、だいいじな客ではないか。これから先、当分のあいだ、いくらでもしほれる金ヅルだ。それを、なぜあんな馬鹿なマネをしたのだ！」

道玄は、手にもった割れ竹で、お篠の肩をピシリッと打った。

「う、ううむ……」

白くなめらかな肩に、赤紫の痕がはしる。

割れ竹の鞭をこらえて身をかめると、柱をうしろ抱きに縛られた腕が、その角にゴリゴリとこすれる。柱のうしろで一つに重ねてくくられた手首は、もぎれるかと思うばかりの痛さ。

「やい、お篠。お前はたしか、葛飾の水吞百



この金猫教の巫女に使っている十数人の女たちは、みなお篠と同じような哀れな境遇のもとに育った者ばかりであった。そして、道玄の手に救われ、または買いとられたばかりに巫女の仮面をかぶせられ、肉の地獄にあえいでいる女たちである。

「てめえらは、おれのおかげで、毎日やわらけえ着物を着て、白い米の飯を喰い、夜は絹の布団にくるまって寝ていられるんだ。しかも、毎晩ちがった男に可愛がられてな。そのおれのだいいじな金ヅルを殺してしまいやがるなんて、なんてえ馬鹿女だ！」

口惜しくてたまらない道玄、割れ竹の先をお篠の縄目のあいだに、ぎゅうとさしこむ。柔らかい肌をぐいぐいとこじりまわす。憎悪の折檻であった。

三十四年四月号 淫祠邪教・特集

矢桐重八・文 栗原 伸・絵

「女色金猫教」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

裏窓・既刊号

よみものご紹介

それは小さな窓だった。

嚴重な木格子がはめられていて、小猫か、鼠でもなければ、とてもその間からは出入りができそうもないほどの空気抜きである。

中をのぞき込んで、お龍は、あつ、と声を立てるところだった。

隠し部屋の中は、妙に熱っぽい匂いが立ちこめていて、それは、華麗な地獄図を見る思いだったのである。

「今夜ばかりは、慈悲がないのじゃ……ふッふッ。お美奈、どうじゃどこに秘図をかくしているのか、早く言った方が、これ以上辛い目を見なくても済むのだぞ……」

了庵である。

こいつは、あぐらを組んだ膝の前に、酒器を並べ立てて、グビリ、グビリとあおりながら、眼の前に引きすえたお美奈の全身を、なめ廻すような眼つきで見ているのだ。

お美奈、腰のもの一枚っきりの裸だ。

両の腕は、骨の鳴るほどに背中にねじ上げられ、その柔かい手首にも、むっちり盛り上がった胸のあたりに、情容赦もない呪縛の

麻縄がぎりぎり蛇のように巻きつき、喰い込んでいる。

「ふふふ。美しい女子の、こんな姿は、またたまらない風情じゃ……」

了庵は口元をだらしなく開いて、テラテラと酒焼けのした脂切った額を叩いた。

もう、時刻の問題だと思っている。いずれ



は口を割らせてやる。いや、そんなことよりも、どのみち、このとり散らかった着類の中に、水中軍船の秘図は縫い込んであるに違いないのだから、手に入っても同然だ。あとはこの娘を、どう料理するかだった。

「ヒ、ヒ、いい軀つきじゃのう、これ」

じりりッ、狒々おやじが膝をずらせて寄ってくる。

「あッ！」

お美奈、あとに退こうにも、了庵の手に、しっかりと縄尻がにぎられているのだ。

色とりどりの華やかな色彩が、隠し部屋のじつとりと汚れたような畳の上に散らばり、その、脱ぎ捨てられたお美奈の衣類の上を、裸の犠牲が、くくり猿のように身を二重に折って悶えるのだ。

必死に左右に首を振るお美奈。

ハラリ、と元どりが切れて、緑の黒髪が右に左に、円味を見せた両肩から、乳房のあたりへとたれる。

「う、ふふ。うふ」

そんな風情が、また、たまらなく了庵の心をこそぐるのだ。

ゆっくり時刻をかけて、捕えた小鼠をいたぶる猫のように了庵はお美奈を楽しんでいるのだった。

三十四年五月号 女性解放悲史・特集

高月大三・文 喜多玲子・絵

「巷説緋扱帯呪文」より

定価・百二十円 送料・十八円

あまりの恐ろしさに、軽い悲鳴をあげたお駒は、息詰る思いであった。

「お駒、なぜ眼をつむるのだ。よく見ておけ。明日からはお前のそのぬめ肌を、どのよう

に責めてくれようか……」
火傷で引きつった顔が、ひととき醜くゆがんだ。

柱の結び目を解くと、すばやく宙吊り女を小脇に抱えた。

座敷牢とにいつても、ここは拷問部屋と呼んだほうが当然かも知れない。

なぜならば、畳こそ敷いてはあるが、奉行所で見受ける、さす又、つく棒、袖がらみといった責め道具のほか、小砂利を敷いた土間さえあって気つけ用の水桶であるのだ。

仕切戸を開けると、宙吊り女をその水桶に頭から突っ込み、どさりと投げ出した。

「ふう」

息を吹き返した女は、目尻をつりあげ、怨みを含んだ、か細い声で、

「こ、殺してッ！ 鬼、けだもの、苦しい——」

女はのたうち回って、喚き叫んだ。

「うふふふ……吠えろ、喚け、そして泣け。

その苦しみようではまだたりぬのだ。この勘兵衛の顔をみよ。生きながらの火炙り、どの

ような苦痛かわかるまい。責め縛りの秘法を編み出すまではたと苦しみ」

「あつつつつツ」

動いてはならない。

そう思いながらも、下肢の痛さにこらえきれず動いた瞬間、胸に重なるように縛られて



いる首と両足、その太縄がじわじわと引き締まって、首はおのが乳房にふれ、両足はその股のつけねより、抜けるかと思うばかりの痛さに、思わず悶えたその型は、ちょうどえびが反対にくるつと、関節を動かすのにそっくりであった。

「おお、えび、海老責め。できた、できた

ぞ。うふふふ……」

笑を醜面に浮かべ、じろりと他の女たちを見た。

が、その縛しめられた女たちは、だれ一人として振り返って見ようとはしない。

いや、できないのだ。

猿轡はもちろんのこと、首枷から足枷に至るまで、さまざまな拷問道具で強いられる、この責苦の悶えから、いつの日に解き放たれるのか、それさえわからぬ萎え疲れた緊縛の身は、今の苦呻と闘うのが精一杯なのだ。（ああ恐ろしい。私もあのように責められるのか）

うしろ手に緊縛された縄尻を柱につなぎとめられたお駒は、そう思うだけで全身の血が一時に凍りつく思いであった。

三十四年六月号 伝奇秘宝録・特集

玉木重信・文 石塚芳幸・絵

「巷説人肌呪縛」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

裏窓・既刊号

よみものご紹介

由美子は顔をそ向け、力なく膝の上で両手を揃えた。

「前じゃねえ、後ろへ廻すんだ。映画でやったことがあるはずだ。神妙にしろ！ ってのをな」

由美子は冷い唇をかみ、口惜しそうに両手を後ろへ廻した。縄を打たれる場面を演じたことはある。だが本当に縛られたわけではなかった。

しかし、今は違う。

五郎は強い力で縄を掛けた。両手首を捻じ上げられ、嚴重にくくり合わされる。縄が首へ廻され、ギリギリと締め上げられた。

あさましい姿だと思う。

「君は、どんな仕草をしても美しい。どういうかつこうをしても綺麗だ……」

と俊作がいったことがあった。由美子はいま俊作にいつてやりたい。

（あなた。わたくし、こんなかつこうにされているのよ。これでもわたくしは美しいの？）

五郎はナイフを手にして、刃を開いた。

——由美子は、生まれたままの姿に近い型で縛られたまま、冷い床に正座をしている。肌着類は五郎のナイフに切り裂かれて、その周囲に散っていた。

五郎は由美子の正面に椅子を据え、鞭を手にして腰かけており、カメラは横から二人を捉えている。



黒覆面の五郎の威丈高な態度と、ひしがれた裸女の痛々しい肢体は、異様な対照をみせ、中世の魔女の審判を思わせる構図であった。

「これから俺の訊くことに、お前はできるだけ正確に答えるのだ。いいな」

「……………」

屈辱に耐えられず、由美子は深々とうなだれて——肩の辺りが小刻みに震えている。

「返事をしろ！」

鞭が飛んで、肩越しに背中肉を叩いた。

「あ、いいいます……おいつけに従いますから、これ以上、虐めないで下さい」

「よし。では、前歴と名前をいえ。亭主の名前もいうんだ」

「……わたくしは……高野俊作という者の妻で、由美子と申します。以前は、黒田由美子という名で、映画に出ていたこともあります……」

「うむ。次に、現在自分がどんな姿にされているのか、いってみろ」

「……………」

「いわない気が！」

「いいいます。……抵抗できない姿にされています」

「もっと具体的にいえ！」

「裸に……されて、手を、後ろにくくられています。正座を命じられて……」

三十四年七月号 恐怖異色感覚・特集

鳴滝三郎・文 フォト・ストーリー

「奥様お手をどうぞ」より

定価・百二十円 送料・十八円

「あッ！」

と、お千は激しいおどろきの声をあげた。

「何をおどろくのじゃ……当家の主人、久世頼母様じゃぞ……」

老婆がお千を睨みつけてどなった。

お千がおどろいたのも道理である。

石倉の奥の一段高い三疊ばかりの座敷牢の中、格子の間に首をつっこんで、凝然とお千の裸身を凝視している久世頼母は、丸く背骨が折れまがり、首が胴の中にめりこんでいた。顔は三十すぎだったが、背丈は童子ほどもない。両手足が妙に短かく歪んで、それはまさに猿といった片輪ものだった。

分厚な唇から、だらりとよだれを垂らし、ひゅうひゅう喉笛を鳴らしているのは、啞で口がきけぬからであった。

「頼母よ……今夜が満願の祈禱じゃ……そなたも、いよいよ、常人の姿にかえることができるぞ、母もこれで安心じゃ」

老婆は、久世頼母の母、みよの方だったのだ。

おどろいているお千へ、いきなり、夢幻斎は、荒縄かかけた。

お千の両腕が、ぐいと背中へねじあげられ、その縄尻を両足首へのぼして、足首も揃えて縛った。

「親方さん……痛い！」

「これは舞台と違うのだ、辛抱しろ」

夢幻斎は縛り終えると、縄尻をつかんで、ぐいと引いた。

「あれッ」

お千のよく膨らんだ乳房が、ぶるんと弾ん



で、どう、と土間の上にあおのけに倒れた。

夢幻斎は、琉球畳を土間一杯にひろげると左手に洋太刀を握りしめ、右手でお千を縛った縄尻をつかんだ。声高に呪文をとなえんとお千の裸身を、琉球畳の上で、ひきずりはじめた。

「ひいーッ」

お千の悲鳴が突ンざく。

琉球畳の荒目が、柔肌につきささり、すり切れ、やがて、お千の白い肌に血が滲みはじめた。

「悪魔退散、悪魔退散……」

頼母の母が、しわがれ声で一心となえる。白髪を振り乱し、両手を左右に振って、半狂乱だった。

が、やがて、夢幻斎からお千の縄尻を引つたくり、彼にとってかわって、ごろごろと、お千を引きずりはじめた。

お千の白い裸身が、芋虫のようにのたうち悲鳴はやがて絶叫にかわっていった。さながら、地獄図そのままの凄惨さに加えて、座敷牢の中から、怪奇な頼母の叫び声の不気味に響きわたった。

三十四年八月特大号 呪法幻術・特集

葉田光・文 古正英男・絵

「幻術からくり小町」より

定価・百五十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

裏窓・既刊号

よみものご紹介

「おとなしくしろ。いくらあばれても、もう駄目だ」

往生組の浪人どもにすれば、この仕事には馴れていた。

この荒れ寺へつれてきて、組み合わせの籤をひかせ、いぎとなるといくら死を覚悟していても、ためらう女がいる。なかには、このお絹のように、根かぎりの抵抗をみせる女もいる。

そのときには、こうして縄で縛りあげ、さらには、死よりもはげしい苦痛と屈辱を与えるのだ。すると、ほとんどの女は観念してしまふ。

「さあ、立て——」

縄尻を乱暴にひかれて、お絹はよろよろと立ちあがった。

「な、なにをするんです！　こんなに縛ったりなんかして！」

乱れ髪を唇に噛み、お絹はあえいだ。形よくふくらんだ無垢の生娘の乳房。そのまるみの上にも一筋の縄がむごたしくかかっている。

肉は縄を噛みこんで、形のよいまるみも二つにくびれ、うす赤い乳首はせつなげに上をむいたまま、小さな悲鳴をあげていた。

「なにをされるか、すぐわかるわい」

浪人は、お絹を縛った縄尻を、天井に向けて投げると、手際よく梁にとおした。

ペッペッと手に唾をして、それをぐいと引



つ張った。

「あれえッ！」

お絹の身体が縄にひかれて、床からじりじりッともちあがった。

吊り責めである。が、これは単なる吊り責めでないことは、あとでわかった。

浪人ども四、五人の手で、縄がぐいぐいと引かれ、お絹の身体は五寸、一尺、一尺五寸……と、床から離れていく。

「ひッひい——ッ」

お絹の咽喉から、するどい悲鳴がほとばしった。

縄が、肉をキリキリとしめつけるのだ。胸も腕も、手首にも、縄がずしりッと喰いこむ。すると——。

吊りあげたお絹の足の下に、一台の木馬がおかれたのである。木馬といっても、これは首も尾もなく、荒削りの材木を四ツ足に組みたて、背中の頂点を三角にとがらせただけの簡単なものであった。

「さあ、往生組の掟どおりになるか——」

浪十郎が、梁から吊り下ったお絹の顔をあおいでいった。浪十郎の目の高さに、緋縮緬におおわれた太腿のあたりが、ゆらゆらとゆれているのだ。苦しみへのけどるたびに、まっ白い肌がチラチラとこぼれるのであった。

三十四年九月号 大奥後宮秘史・特集

飯田豊吉・文 中島喜美・絵

「往生組始末記」より

定価・百二十円 送料・十八円

緑は、昭子のブラジャーを引きちぎった。

「そうかい。白状しない考えなの？ オイ、スペードの8！ この女のオッパイを鞭で打ってごらん！」

「合点！」

あの若い男が、いつの間に持っていたのか乗馬用の鞭を持って、昭子の横に立った。一見、やさしそうなこの男は、色白な顔に残忍な薄笑いを浮かべて、美しい昭子の乳房を見ていた。

「奥さん、気の毒だが痛いぜ。白状したらどうだね。且つくの居所さえいえないんだよ！ いやかね？」

「何をぐずぐずいってるとんだい早く打ちな」

「ヘイ……」

返事とともに、若い男は、鞭を斜にすると乳房から細い胴にかけて、ビシリ！ と振りおろした。

「アッ！」

昭子は、焼けつくような痛さに、思わず叫んだ。

「それ、もう一つ！」

「ア……」

昭子は、悲しい声でうめいた。白いふっくらと盛り上がった肉には、赤い線が浮き出してきた。

「どうだね。森謙一は、どこにいるのかい」
「……………」

昭子は、目を閉じて、答えなかった。

「強情な女だね。しかし、いくら、お前さんが強情を張っても、白状させずにはおかないんだからね」



緑の宣告は、事実だった。それから、二時間間にわたって、昭子の肉体に加えられた拷問は激しいものだった。気を失えば、頭から水をかけられ、気がつけば拷問は続けられた。この倉庫のような地下室には、中世期を思わせるような拷問具があった。
「お前が、いくら、亭主の居所をかくそうっ

たって、そうはさせないのだ。いえ！ どこに逃げたのだ！」

スペードの女王は、昭子の乱れた髪を掴むと、グイと顔を引き起した。

「知ってたって……知ってたっていうもんか」

昭子は、ボンヤリとかすんだ目で、緑の顔を仰いだ。

「もっと、締め上げてごらん！」

今や、全裸体にされた昭子は、床に坐らされ、後手に縛られ、あの美しい乳房には、太い綱を巻かれ、背中に二本の棒をX型に通され、これを男達が締めあげているのだ。腕の縄も、乳房の縄も、肉に喰い入っていた。

「ウッ……ウ……ウ……し……しらない……いうもんか……アッ……」

昭子はうめき続けた。

三十四年十月号 あぶ・すとおりの特集

竹谷十三・文 山田彬弘・絵

「女王の切り札」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

裏窓・既刊号

よみものご紹介

「演技賞をもらったからって、いい気になったりしたら承知しないわよ。由紀は永久にわたしの奴隷なんだから、それを忘れないために裸でいるといいわ。奴隷に着物は贅沢だからね」

という洋子の眸は、キラキラと異様に輝いていた。

由紀子は羞恥と屈辱に身悶えて心死に哀願を続けたが、洋子は冷酷だった。

「由紀はわたしにからだを見られるのが、そんなに羞ずかしいの？ だけどね、由紀が羞ずかしがるのは無駄にはならないことよ。由紀はお色気が足りないっていわれているんだから、羞ずかしがる気持を持つことはいいいことなんだわ。お色気と羞恥とは密接な関係があるものよ。お色気というのは羞じらいながら実は見てもらいたい気持でしょ。わたしは由紀にその気持を覚えさせたいと思うのよ。だから、裸で暮らし」

と、そんな理屈をつけたのである。

家にいる間、由紀子は裸身のままで炊事や掃除などの雑用をしなければならぬ。

それらのすべては電化されていて労力は少なくてすむのだったが、射るように追い回す洋子の視線を常に感じて、由紀子は身を切られるような辛さを覚えた。洋子が通常の服装でおもしろそうに眺めていることが、屈辱感を大きくした。

来客があると、由紀子は二階の一室に閉じ



込められ、洋子が応待をするのだが、どうしても由紀子自身が会わねばならぬ客もある。そういう時だけは服を着るのだが、客が帰った後は再び裸身に戻ることが強いられた。ある日——ついに堪えかねた由紀子が、泣き叫ぶほどに取り乱したことがあった。

「もうイヤ！ こんな生活は、もうイヤよ！ 刑務所でもどこへでも行くわ！ たとえ死刑になっても、まだその方がいいわ！ わたくしの罪をあばいてちょうだい！ すぐに告発して！」

身を投げ出し、こぶしで床を叩いて泣きわめいたのだが——結局は厳しい折檻を身に受けて屈伏させられただけだった。

後手に縛り上げられ、猿轡を嵌められ、長時間そのままに放置されたので、ついに精根尽きてしまったのである。

由紀子は締めめの心を持つようになった。それを洋子は「観念」という言葉で呼んだ。

「殺人犯が女優でいられるだけでもありがたいいことじゃないの。シタバタしないで、いい加減に観念おし！」

と、そんないい方であった。

華やかな女優生活の蔭にこんな秘密がかくされていることを、誰が想像し得たであろうか——。

三十四年十一特大号 倒錯小説・特集

鳴滝三郎・文 美濃村晃・絵

「鉄鎖の解ける時」より

定価・百五十円 送料・十八円

梅香は小鈴の腹部に馬乗りになった。

小鈴は、苦しうに、足をばたつかせている。そのたびに長襦袢の裾が大きくまくれて真赤な腰巻がからまった太ももが露出する。

「ひいーっ」

梅香は、残酷を愉しんでいるように、なおも力を加える。

「ああ、ひいーっ」

小鈴の蒼ざめた唇に、苦痛のうめきがもれたかと思うと、次第に意識が薄れてきたものと見え、手足の抵抗がなくなった。ついにぐったりとしてしまう。それを見届けた梅香が、手を放して、立っている染香を見上げてにっこりとした。

「ふふふ、他愛もないこと」

染香は小鈴を見て嘲笑した。

「ねえさん、どうする。もういちどこいつを梅の間へ引っ担いで行くんでしょ」

「もちろん。それも素っ裸にして縛り上げてこんどはもう逃げられないようにするのよ」

「こうさん、よろこぶでしょうねえ」

「あのひとつたら、ちよっと、変な方ですよ。こんな具合に縛って連れていったら、さっきの不手際は容易に挽回ね。かえっておんの字よ」

「こうさんって、ねえさんのおっしゃるよう

に、全くの好き者ですものね。あたしなんかしょっちゅう縛られたり、猿轡をかけられたりして、いじめられたもんよ」

「この小鈴ちゃんだって、今夜は彼の自由になって、征服されてしまうんだわ。この妓は、あたし達と違って、若いし、ずばぬけて



美しいでしょ。責めるにしてもずいぶんはりあいがあることよ」

「だから、もっといじめましょうよ」

・ 染香はそういうと、馴れた手つきで無抵抗の小鈴を横にさせたりして、手際よく長襦袢を剥いでしまう。そして、その場にうちすててある彼女のしごきをとると、真赤な腰巻一

枚の裸にぐるぐるとまきつけてしまった。

「ふふん、さまあみろってところね。梅香さん、その布で猿轡をして」

梅香は乱れ散らばった小鈴の着物の中から帯あげを手にとり、念入りに猿轡をすると、

「さあ一丁あがりー」

といって、ふたりして棚高く笑った。

「さあ、そろそろお大尽さまのところへ、生贄の美女を運びましょうか」

ふたりは小鈴を軽々と引っ担いだ。

その拍子に赤い腰巻がまくれて、雪のように白い太ももが、あらわにのぞかれる。

後手にしばったしごきが、まだじゅくしきらない小鈴の乳房の上下を幾重にも締めつけてなまめいている。

「カットはいずれも落合龍二」

三十四年十二月号 妖美小説・特集

久我風太郎・文 栗原伸・絵

「乱れ髪夜話」より

定価・百二十円 送料・十八円

裏窓・既刊号

よみものご紹介

腹切り残酷史譚

夏 川 浩 一 郎

鬼頭 暁・絵

はしがき

日本特産の切腹がもともと残酷極まるものであることは言うまでもないが、いろいろの文献を読んでみると、その残酷さは想像をはるかに越えるものである。筆者は多年、切腹に興味を抱いて種々の文献や資料を読みあさってきたので、その結果をまとめて「腹切り残酷史譚」と題して発表することにした。

内容を三章に分け、第一章では、腹切りというものを種々の角度から分析してみた。続いて第二章において、およそ一千年にわたる切腹の歴史を概観し、その変遷のあとをたど

ってみた。特に切腹というものの变化発展については、かなり独特の分析を試みたつもりである。第三章では、残酷な切腹の中でも特に残酷なもののみを集め、読者諸氏をして戦慄せしめんと試みたのであるが、果してその成果は如何に。

第一章 切腹とは何か

最近の日本映画にはいわゆる残酷ものになり多いが、その中の最優秀作は松竹京都の「切腹」だろう。重厚な作品として好評だったが、切腹の描写があまりにリアルで、あくどい点を指摘する批評も少なくなかった。そ

う言えば、たしかにあの切腹の場面は、従来のかぶき式腹切りの形を破ったショックキングなものだった。

石浜朗の若侍が伊井家の侍たちに取り込まれ、むりやりに腹を切らされる。しかも、その切腹は、もともと若侍自身の申出たものであるという設定は巧妙だ。そして腹切刀がまた良く切れるものでなく竹光（竹に銀紙を巻いたもの）だから無残な話である。

伊井家中の包囲の中で、若侍はいきなりもろ膚ぬいで竹光を取るや、三宝を地面に投げつけ、絶望的な叫び声をあげて切先を何度も腹に突立てようと試みる。このあたりから、気の弱い観衆は気分がわるくなってくる。若侍は刀の柄を地面に支えて身を切先の上に投げかけて、とうとう腹を突き破ってしまう。ビシャツと飛び散る黒々とした血、悲痛なうめき声。このあと若侍が竹光を引回して腹をかき切ろうと空しい努力をする場面が長々と続く。あふれ出る鮮血のおびただしさ、汗にぬれてもだえる裸の上半身、長々と続くうめき声、さながら、血の匂いまでしてくるような大胆な描写だ。顔をそむける観衆もあり、中には席を外して立去る女性もあった。しかし、切腹というものの実態として見れば、この描写は決して誇張とは思えないし、

本当に腹を一文字とか十文字にかき切る場面はもっともっと物すごいに違いない。

しからは実際の腹切りの有様はどんなのかと開き直られても、今どき腹を切る者は滅多にないし、あったとしてもその状況をゆっくり眺めるといふ機会もないので、残念ながら正確には答えられぬ。

太平洋戦争の末期における腹切りや市井の割腹自殺の実見談など、雑誌にいろいろ載っているが、大部分は創作らしく思われる。中には男と女が腹を切って腹わたを引き出し、両方のを結び合わせたなどという噴飯ものもある。しかし信用に足る種々の文献からその状況を伝えようとすれば、材料はいくらでもある。

切腹実見記の中で最も信用できそうなものは、幕末ごろ日本を訪れ、実際の切腹を見た外人の手記である。その一つ、明治元年二月九日、兵庫の永福寺で滝善三郎という武士の切腹に立会った英人ミットフォードの実見記を、その著「往時の日本——日本武士の悲壮なる切腹」から抜書してみよう。

「又もや一札終って、善三郎は上衣を帯もとまで脱ぎ下げ、腰の辺りまで膚を露わし仰向けに倒れることのないよう、形の如く注意深く両そでを膝の下に敷き入れた。こ

れは高貴な日本士人は必ずうつ伏して死ぬべきものとなっているからである。

彼は思い入れあつて前なる短刀をしかと取り上げ、嬉しげにさも愛着するばかりにこれを眺め、しばし最期の観念を集中するやに見えたが、やがて左の腹を深く刺し、ゆっくりと右に引回し、刃を一度回したの

ち少し切り上げた。この凄じくも傷ましい動作のうち、彼は顔の筋一つ動かさなかった。短刀を引き抜くとき初めて苦痛の表情が顔に現われたが、少しも声に出さなかった。

この時まで側にうずくまっていた善三郎の一挙一動を見守っていた介錯人が、突然立上



がつて刀を一振りしたかと思うと、剣先一閃、物凄いい音、倒れるひびき、一刀の下に首と体と所を異にした。場内は寂として死せるが如く、ただ僅かに我々の前にある死首から迸り出る血の凄まじい音のみ聞こえた。この首の主こそ今の今まで勇邁剛毅の丈夫であつたのに！ 惜しいことであつた。

まゆつば物の実見談より確かなのは、広い見聞と深い洞察力を持つ作家の手になる描写である。大衆文壇では、直木三十五氏や海音寺潮五郎氏（二本の榎）など数多くの作品があるが、純文学で珍らしい、三島由紀夫氏の好短編「憂国」に詳細な切腹描写があるので、引用させて載く。近衛中尉武山信二は昭和十一年二月二十八日、二・二六事件を憂慮し夫人とともに自刃する。（カナ使い原文のまま）

「中尉は一思ひに深く左脇腹へ刺そうと思つたのである。鋭い気合の音が、沈黙の部屋を貫ぬいた。

中尉は自分で力を加へたにもかかはらず人から太い鉄の棒で脇腹を痛打されたやうな感じがした。一瞬、頭がくらぐらし、何が起こったのかわからなかった。五六寸あらわした刃先は、すでにすっかり肉に埋まっ

て、拳が握っている紙がじかに腹に接していた。

意識が戻る。刃はたしかに腹膜を貫ぬいたと中尉は思った。呼吸が苦しく、胸がひどい動悸を打ち、自分の内部とは思えない遠い遠い深部で、地が裂けて熱い熔岩が流れ出したように、怖ろしい劇痛が湧き出して来るのがわかる。その劇痛が怖ろしい速度でたまち近くへ来る。中尉は思わず呻きかけたが、下唇を噛んでこらえた。

これが切腹というものかと中尉は思っていた。それは天が頭上に落ち、世界がぐらつくような滅茶々々な感覚で、切る前はあれほど鞏固に見えた自分の意志と勇気が、今は細い針金の一線のようになって、一途にそれに縋ってゆかねばならない不安に襲われた。拳がぬるぬるして来る。見ると白布も拳もすっかり血に塗れそぼっている。

痺もすでに真紅に染まっている。こんな烈しい苦痛の中でまだ見えるものが見え、在るものが在るのはふしぎである。（中略）

中尉は右手でそのまま引き廻さうとしたが、刃先は腸にからまり、ともすると刀は柔らかい弾力で押し出されて来て、両手で刃を腹の奥深く押さえつけながら、引廻してゆかねばならぬのを知った。引廻した。

思ったほど切れない。中尉は右手に全身の力をこめて引いた。三四寸切れた。

苦痛は腹の奥から徐々にひろがって、腹全体が鳴り響いているようになった。それは乱打される鐘のようで、自分のつく呼吸の一息一息、自分の打つ脉膊の一打ち毎に、苦痛が千の鐘を一度に鳴らすかのようになり、彼の存在を押しやるがした。中尉はもう呻きを抑えることができなくなった。しかし、ふと見ると、刃がすでに臍の下まで切り裂いているのを見て、満足と勇気をおぼえた。

血は次第に図に乗って、傷口から脈打つように迸った。前の畳は血しぶきに赤く濡れ、カーキいろのズボンの襷からは溜った血が畳に流れ落ちた。つひに麗子の白無垢の膝に、一滴の血が遠く小鳥のように飛んで届いた。

中尉がようやく右の脇腹まで引廻したとき、すでに刃はやや浅くなつて、膏と血に沁る刀身をあらわしていたが、突然嘔吐に襲われた中尉は、かすれた叫びをあげた。嘔吐が劇痛をさらに攪拌して、今まで固く締っていた腹が急に波打ち、その傷口が大きくひらけて、あたかも傷口がせい一ぱい吐瀉するように、腸が弾け出て来たのであ



る。腸は主の苦痛も知らぬげに、健康な、いやらしいほどいきいきとした姿で、喜々として沁り出て股間にあふれた。中尉はうつむいて肩で息をして、目を薄目にあき、口から涎の糸を垂らしていた。肩には肩章の金がかがやいていた。

血はそこかしこに散って、中尉は自分の

血溜りの中に膝までつかり、そこに片手をついて崩折れていた。生ぐさい匂ひが部屋にこもり、うつむきながら嘔吐をくりかへしている動きが、ありありと肩にあらわれた。腸に押し出されたかのように、刀身はすでに刃先まであらわれて、中尉の右手に握られていた。(中略)

彼はいきなり刃へ向って体を投げかけ、刃はその項をつらぬいて、おびただしい血の迸りと共に、電燈の下に、冷静な青々とした刃先をそば立てて静まった。”

この切腹は介錯がないのでかなり惨烈で、また描写としても実に生々しいものである。以上の二例でも分るように、腹切りは自殺の方法としては極めて不合理かつ不完全なものである。つまり腹を切っただけでは容易に死ねず、更に心臓やのどを突いて、致命傷を加えるか、介錯という首切り役に首を切り落としてもらう必要がある。こんな事なら初めから急所をねらった方が手っ取り早いし、苦痛も少なくてすむ。大体腹切りというものは一種の自己生体解剖であるから、その苦痛の程もさこそと思われる。

人間の腹部では、腹わたの後側つまり背骨の近くに大きな血管があるので、たとえ内臓の露出するくらい深く切ったとしても、それだけで済みやかに失血死することは不可能だと言うことだ。ある男が切腹して腸をつかみ出したが死ねないので、水に飛び込もうとして腸をぶら下げたまま走っているところを捕えられ、傷口をぬい合せただけで全治した例もある。もっとも昔なら、これだけ切れば手当のしようもないから、死ぬ目的は達せられ

ただろうが、息が絶えるまで長時間苦しまなければならぬ。介錯というのも、その苦しみを避ける必要から考案されたものである。

介錯もなく、自分で致命傷を与えることもしない場合は、どういう状態になるだろうか。かの寛政三奇人の一人、高山彦九郎の場合がその適例である。彼は寛政六年（一七九三）六月二十七日の未明に割腹したが、手当を加えた医師の届け書には次のように書いてある。

疵口およそ五寸程にて大小腸膀胱出で、殊に大小腸共に破れ、左右脈共に細微絶脈同前にて……

しかも彼は剛氣と言おうか、切腹後すわったままで、そばの者に尊皇の大義を説き続けたと言う。そして戌の刻（午後八時）に精根つきて倒れたがまだ死ねず、翌朝辰の刻（午前八時）に息が絶えた。割腹後息絶えるまで一昼夜以上も生きており、その間十数時間も端座してシャベリ続けたと言うから物すごいものだ。大腸小腸や膀胱まで飛び出したというから相当深く突立て力まかせにかき回したものであろうが、腸を破ったため内容物が溢れ出たのでは、その臭気は大へんなものだったろう。これではあまりに手ぎわが悪すぎる。この例では下腹部をかなり深く切っているに

もかわらず大血管を傷付けなかったもので、この惨状となったものである。

腹切りは武士と共に起り、実に盛んに行われたが、このように不合理不完全な自殺方法が何故に今日まで続いているのか、現代人には理解しがたい。

これについて、筆者の畏友、中康弘通氏の明快な解釈があるので、拝借させて頂く。氏はその著「切腹」の中で、佐藤忠信の切腹に関連して次の如く述べている。

「由来、自殺は最も安楽を願うためにみずから進んで死に就く手段である。従って、苦痛の少しでも少ない方法を選ぶべきである。しかるに切腹は、刀を運ぶ度に累次みずから苦痛を増大せしめる方法であるから長い時間を絶大な氣力と体力によって、自己加虐を支えねばならないのである。そこで自己加虐の大きさに比例する勇氣と体力とが、切腹者の、敗北その他の不名誉を償うものと目され始めたと言つてよい。従つて勇烈な武士は自害に当たつて壮烈な切腹を遂行すべきものという不文律が出来上がつていった過程は、心理的に容易に辿れるのである。」

次に自刃する場合なぜ腹を切るのかという疑問が生じて来るが、その意味はどうである

う。これについては新渡戸称造博士の「武士道」では次のように記している。

「切腹が我が国民の心に一点の不合理性をも感ぜしめないのは、之を以て靈魂と愛情との宿る処となす古き解剖学的信念に基くのである。（中略）この精神生理学説が一度び容認せらるるならば、切腹の論理は容易に構成せられる。「我はわが靈魂の座を開いて君にその状態を見せよう。汚れてゐるか清いか、君自ら之を見よ」

大言海「はらきり」の項にも「腹を切るは我が真心は此の如しと、切つて人に見する意なり。自殺の方法に種々あれど、腹切は最も勇氣あるものとして、自殺の名誉とするものなり」とあるが、切腹の意味を簡潔に述べたものと言える。

更に進んで、切腹の意味をフロイド流の性心理学的に分析するならば、多数の觀衆の前で、もろ膚脱いで下腹部まで裸になり、腹深くかき切つて腹わたまで引き出すというのは一種の露出症的行為であり、われと我が腹部に与え得る限りの残虐の刃を加え苦もんするというのはマゾヒズムの法悦境である。一方で切腹者の苦しみを眺めて「お見事」と賞讃する觀衆の方には、はなはだしいサジズムが見られる、というふうな解釈も成り立つたろ

う。

次に切腹の方法を疵口の形状から分類すると、一文字腹、十文字腹、貫き腹の三つに大別される。

一文字腹は通常へその下を左から右へ一文字にかき切るものであり、一文字腹の変化として二文字腹、三文字腹、スタレ腹というようなものもある。また変った例では長刀をもって左脇腹から右脇腹まで突通し、刀に両手をかけて前に押して腹を割いたという例もある。

十文字腹は普通一文字に切ってから刀を引き抜いて、水落に突立て、縦に切り下げて下腹部までかき切る、つまりへその辺を中心に赤十字の記章のように切るのを正十文字腹と言ひ、戦国の頃はもっぱらこの方法が用いられた。この変形としては鉤十文字と言つてL形に切るもの、またU形に切るものもある。

貫き腹は、やや長めの刀を腹に突刺し背中まで貫く方法であり、切腹としては特殊なものである。

切腹によく似たものに刺し違えというものがある。これは二人の者が互に刀で相手の腹、胸、のど等を、一二の三で刺し合う方法で、自刃の一形態である。これは父子、兄弟あるいは特に親しい友人の間で合意的に行な

うものであり、両者の間に何等かの愛情が存在するのが特色である。古くから切腹とともに行なわれたもので一種の共同切腹とも言ふべきものである。古い記録では源三位頼政が平等院で自刃したとき、頼政の養子、六条蔵人仲家とその子蔵人太郎の父子が太刀でお互の腹を突き違えて果てたことが源平盛衰記に見える。白虎隊の自刃もその中の何人かは刺し違えであつたと言う。

切腹の本質から言うと、疵の形状などよりは、むしろ刀を突き立てて切る場合の深さが重要である。すなわち、人間の腹部は皮膚の下に脂肪層があり、その下に筋肉があり、更に大網膜というものがあって内臓を覆っている。それらを合わせた厚さは普通五六センチあるので、突き立てる深さが、それ以下か以上かで切腹の様相が変ってくる。

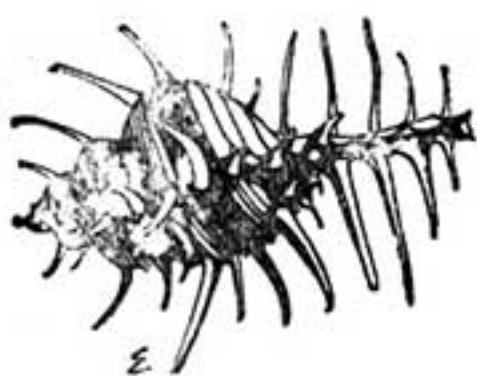
深さ三四センチ程度以下では内臓が露出せず苦痛も比較的少ない。しかしこれだけでは出血量も少なく、放置しても死ぬことは殆んどない。

深さ七八センチ程度では腹壁が完全に切断されるので、切口が開いて腹わたが露出し、かなりの苦痛をとめない、放置すれば死に至るかも知れぬが、大血管を切断しないので、時間が長くかかりその間苦しみ続けなければ

ならぬ。

深さ十センチ以上の場合には、内臓を傷付けうまくいけば大血管も切断するので出血も多く、これだけで速かに死に至る。しかし腹わたを傷付けた苦痛は甚しいと言うから、よほど体力、氣力が充実していないと不可能だろう。貫き腹の場合は、見た目はさほど惨烈ではないが、内臓血管を傷付ける可能性が大きいから、大抵の場合には速かに死ぬると思われる。浅沼委員長が刺されたときも腹部の刺傷だけで殆んど即死であつたと言う。

腹切りは日本の特産物であるが、切腹が発明されてから今日まで、腹を切つてあの世に行った日本人の数はどの位であろうか。筆者の大ざっぱな推定では二三十万人以上であろうと思われる。しからば、こんなに盛んであつた腹切りというものは、いつごろから起りどのような変遷したか。次回にそのあらましを述べて見よう。



戦後の妖魅な眺め

——上野・神田界限——

間 野 嶺
山田 彬弘・絵

上野の山を中心として、このあたり一帯には、街娼の群れが百鬼夜行よろしくにひしめいていた。戦後まもなくの昭和二十二年ころのことと憶えている。

この界限の街娼の誘客場所は、ひじょうに分散的で——そのころのわたしの探訪メモを繰ってみると、次ぎのようになっている。

一、上野駅正面横手の旧RTOのあたり一帯から、国電乗車口前の地下鉄入口辺の薄暗がり。このへんが最も多く、五、六十名。
二、山下京成電鉄入口辺から、交番下あたりまでの歩道に、二、三十人。

三、上野東照宮下の不忍池寄りの歩道、小暗闇一帯。十五、六人。

四、山下日活館前のロータリーと、日活館

から南へ向って角の装身具店までの路傍、および装身具店から公園入り口に向う歩道に、それぞれ三、四人。

五、そこから都電の軌道を越えて、向い側の歩道ぎわに数名。および仲町角の時計店から広小路に至る歩道に、チラホラと十数人。そのまま南へ都電軌道を越えた風月堂前付近に、七、八人。

六、広小路交差点から上野駅に向う右側の歩道、聚楽前あたりまでに、十五、六人。
といったように、広範囲に散兵線を布いていた。

春であった。ある夜、わたしは、花園町通りの歩道を東照宮下のほうへむかって、風来坊のなんの用とてなく、ブラブラと流してい



た。

道路の左側、都電のレール沿いには、ムシ
ロがけの浮浪者の小屋が、ズラリとつづいて、
いて、昼でもあまりきもちのよくない通りで
あった。

と、その路傍に一人の少女が、チョロチョ
ロと遊んでいるふうにみえたが、いきなり、
わたしにむかって、「おじさん……」と声を
かけた。

「ねえ、あそばない？」

にッと笑顔でみあげた。

夜目にも白いその顔は、まだ十二、三歳の
幼なさ。とりわけ美しいとか可愛らしいとか
いうのではなく、そこらにみかけるこのとし
ごろの少女特有の顔立ちだが、男——とくに
ペドフィリーの男の、青ざめた心をよみがえ
らせるにじゅうぶんな魅力を具えているよう
に思われた。

「あそぶって……あんたがかい？」

とわたしはきいた。

「そうよ」

と少女はすました顔で答え、「アオカンで
三コよ」とつけくわえた。

わたしが少女の小さなたなごころに、百円
札(?)を三枚のせると、彼女は不忍池——
といっても水の濁れはてた荒蕪の跡だったが

——のほとりの木立ちのなかに、わたしをつ
れていった。

すぐわきを都電が走っている。その窓の灯
が、チカチカと木立ちに射しこんできて、少
女の顔を明るく照らしだした。

わたしはゆくりなくも、十三、四歳の少年
のころ、このとしごろの少女とこのような愛
の場をもったことを、憶いだした。

わたしは人形のように佇っている少女のほ
ほに、軽くキスをおすと、あつけにとられて
いる彼女をあとに、「バイバイ……」とその
場を立ち去った。

ネコと幼児のいる点景

ふたたびわたしのメモ帳によると、「二十
四年(二十五年ころ)」とある。上野広小路の
松坂屋デパートの周辺に、女事務員・女店員
・女子学生などが、アルバイトに土曜日の夜
だけ現われて、売色するといううわさ、「土
曜夫人」とよばれて騒がれたことがあった。

鑑戸(よろいど)をおろした店の表側に
は、比較的身装りのととのった者や、古顔ら
しい者などが、人と待ち合わせでもするよう
なふうで佇ち、店の横手や裏側のうすくらが
りには、新顔らしいのや、マスクに自信のな

さそうな女が、点々と佇っていた。

変りだねは、わたしの実験のかぎりでは、
後者のほうに多かった。S子もその一人にか
ぞえられる。

S子はいつも、松坂屋の真裏の店員出入り
口の前に、いつも幼ない子を背負って、佇っ
ていた。

二十五、六歳にもなっていたのだろうか、
脂粉のけのみじんもない、精力的な顔貌。身
装りもじみな洋装——といっても和装にたい
する洋装というだけで、黒っぽいスエーター
にズボンといった格好だった。

このようなS子をはじめ見たとき、彼女
がじつに生き生きと新鮮に、わたしの心を捉
えた。

わたしはおもわず、彼女の前にたちどまっ
てしまった。が、彼女はわざとのように、わ
たしから目をそらし、冷然と黙っている。

わたしはようやく、いくぶん冷静をとりも
どし、ものかき稼業のどんらんなカメラ・ア
イで、S子をながめた。

なかまの意表にでるような子連れの格好の
みでなく、彼女のせんたいに、なにか常凡の
春婦にはみられないものをもっていること
が、窺われた。

ほんものだとなんかわたしは思った。

計算ずくでこんなさまをしているのではない——彼女自身はいくぶん計算にいられたのかもしれないが——、これは生地のままものと読んだのである。

わたしはS子にちかづき、「あそび」の交渉をした。

山下辺の街娼はいうまでもなく、この松坂屋周辺のセミ・プロの女も、客との交情場所は、だいたいショートの場合は上野駅近辺の旅館とか貸席ですませ、「泊り」は山谷のドヤと定っていたが、S子がわたしを伴ったところは、池袋のしもたや風の家の二階の一室であった。

S子は背に負っていた子をおろすと、へやの隅のほうにのべてある小さな夜具ふとんのうえに、よこたわらせた。二、三歳の女の児である。よく眠っていた。

「子を貸し屋」から借りたのではなく、自分の腹をいためた子だとわたしは感じた。わたしとS子は、その子のかたわらで衾をおなじくした。わたしの胸にぐっと燃えてくるものがあつた。それは姦通男の心理に似た、ひみつの征服感のように思われた。そしてS子のほうは、わたしと逆——つまりM的な快を楽しんでいるふうに感じられた。「ネコが見てるわ」

ふいとS子が、歌うような調子で言った。わたしは、彼女の目のやるほうへ目をやった。子どものむこうがわに、いっぴきの白いネコがうずくまったまま、身じろぎもせずじっと眼をすえて、わたしとS子のさまをながめているのだ。

そのネコと目をみあわせたたん、わたしはおもわず、うんとうなっていました。

S子とはその後も数回ほど遊んだが、その交情の場には、いつもこのネコが登場した。彼女の売春生活、というよりも彼女のセックスそのものに、ネコは不可欠のものらしく思われた。

思うにこれは、動物フェチシズムと展覧症の混淆した嗜好ではなからうか。

公衆便所に住む三人

東京じゅうの公園——とくに小さな公園は、浮浪者や宿なしパンパンなどに、格好の露宿場所として棲み荒されていた。

神田の明大裏手に今でもある小公園も、そこ多分に洩れなかった。

園内は雑草の生いしげるにまかせ、コンクリート造りのあずまやのなかは、そこに敷いていたものらしい新聞紙や紙くず、なにか食

べちらした跡などで、見るもむざんなさまだった。

ある日の夕ぐれ、わたしは神保町の古本屋をひやかしての帰途、尿意を覚えたので、この小公園の片隅にある公衆便所で用をたして出てくると、便所のうしろ手の物置き場所の戸がほそめに開いて、なかから五十五、六歳ともみえる婆さんが、顔を覗かせた。

「もし、だんな……」

江戸時代の夜鷹が、こうして通行の男を呼んだであろうような、古めかしい調子で、婆さんがわたしを呼んだ。

縞目もわからぬような、しおたれたきものに、ピンクの色もあせた細帯——まさに、夜鷹よろしくのふうであった。

「なんだい？」

とわたしがたちどまると、婆さんは、「まことにあいすみませんが、そのすいかけでよごさんすから、あとで一服すすわしてくださいナ」

哀願するように言う。

わたしはうなずいて、ケースから別に一本ぬきだして、婆さんに手渡した。

「どうもどうも……」

と婆さんはいくたびも頭をさげた後、「まあなかへはいつて、お憩みなさい」



と大きく戸を開いた。

わたしはうすぐらい内を覗きこんだ。畳一帖ほどのせまい土間に、荒ムシロがしきつめられてあって、隅のほうにはどこかで拾ってきたような、古コンロとナベがおいてある。

「おばさんはここに住んでるの？」

問いかけながら、わたしは戸口のところへしゃがんだ。

「そうなんですよ、焼けだされて家がないもんだからねえ」

むかしは料理屋の女中でもしていたのではないかと思わせる、へんに色っぽいところがあって、汗とほこりにまみれているが、いきむきな整った顔だちのこの婆さんは、いい話し相手ができたといったようすで、そういうなずくと、わたしのあたえたタバコをすいすい、つぎのような一席の問わずがたりをはじめたのである。

婆さんがこの便所をネグラにしはじめたのは、三月ほどまえのことだが、それからまも

なく、足のわるい三十五、六歳の男が、いっしょに住ませてくれとって、はいりこんできた。

二、三日すると、婆さんとこの男とは関係ができてしまった。

Fという名のこの男は、バタヤなのだが、怠けものらしく、三日に一度ぐらいしか働きにでてゆかない。そのため、婆さんがFを養うようなかたちとなってしまった。婆さんは神田駅前の露店の手伝い——くいもの屋台の皿洗いをしているのだ。

こうして半月ほどが過ぎたころ、婆さんは街で知りあったRという浮浪児を、自分のネグラにつれてきた。浮浪児といっても十九歳になる、脳のよわいわかものである。

婆さんはこの若者とも関係を結ぶようになってしまった。

Rは心から婆さんをすきらしく、毎日どこからか喰いものをあつめてきては、婆さんにたべさせなどして、だいじにする。そんなことで、婆さんもRのほうに親しみをよせがちになった。

これをFが嫉妬して、ふたりの男のあいだに争いがたえなかったが、ついに数日前、FはRをここから追いだしてしまった、というのだ。

「……あの子が可哀そうでならないんですが、あたしがあの子といっしょに出ていったんじゃ、ここをFにとられちゃうのがくやしいですからねえ。……Fからは淋病までうつされて、ろくなことはありませんでしたが、あの子はほんとにあたしを可愛がってくれましたよ」

くったくのない調子で、婆さんはペラペラと喋べる。

婆さんの話から思うに、Fの場合はともか

く、脳のよわいR少年が婆さんによせていた愛情は、母親コンプレックスからでもきたジエロントフリー、それも肉親相姦を幻想してのジエロントフリーではなからうか。

この小公園は、その後立ち入り禁止となつて、米人専用の運動場のようになっていたが、半年あまり経ってから、わたしは明大脇を歩いているとき、むこうからきた、かつての便所住まいの婆さんをみかけた。

あのころとはみちがえるように、小さっぱ

りとしたものを着て、顔も手足もよごれていず、いっそうへんな色っぽさを増していた。この婆さんにもまた春が回ってきたのだ。世にジエロントフリーはすくなくないらしい——とわたしはつくづくと思ったことである。

因果物の小屋できいたこと

そのころの靖国神社の大祭には、むかしとおなじような小屋がけの見世物が、境内にズラリとならんで興行していた。

そうした見世物のなかでも、わたしはいわゆる因果物（いんがもの）がすきで、ひとつひとつ見て廻った。そのなかには腹のたつようなインチキ物もあったが、ほんものもすくなくはなかった。

「グマ娘」もそのひとつだった。「北海道でとれた、クマに育てられたクマ娘」とハッタリ文句のかかっているその女は、かんばんにいつわりはなく、全身が真っ黒な体毛でつまれていた。

「アリ姫」もそのひとつだった。このほうは「身長五尺三寸、体重二十二貫、青森県生まれのアリ姫さま」というキャッチフレーズどおり、大きな体ぜんたいがうすぐろく、胴



が鋭利な刃物で抉りとられたように細く緊っているにひきかえ、腰から尻にかけての周りが、ふつうの女の二倍、二倍半はあろうと思われた。

わたしはそうした因果物見世物の楽屋を訪ねるのも、ならわしだった。

そして一枚看板の本人に会ったり、小屋者たちの話をきいたりするのだが、その結果知り得たことのひとつは、こうしたいんがものをネタとしている見世物小屋の一座には、奇型フェチシストともいふべき者が多いということである。

クマ娘の小屋で道具方をつとめていたGの場合を、例にとってみよう。

「おれはだいたいオカマ買いがすきなんだが……」

こう前置きして、いささか露出症のきみもあると思われるGは、自分のことをあけっぱなしになんでも話してくれた。

男娼がすきなのだが、東京や大阪などの大都市ならともかく、ドサを打って廻っているときなど、小さな町ではおのが嗜好をみししてくれる相手はいない。

そんなときのある夜、Gはクマ娘のE子にくどいてみた。E子の体からは、「女」よりも「男」が感じられるからだ。

そのころE子は二十五歳、妙な悪臭を身体から発散するので、イカモノくいぞろいの一座の連中も、いずれも彼女には手をだしかねていた。E子はGの求愛に簡単に応じた。

その夜から、Gとクマ娘の交渉はつづけられた。

Gは最初のほどは、男の代償としてE子をだいていたのだが、いつとなくE子それ自体に魅力を感じるようになった。

そしていまでは、彼女の異臭すらも、自分には芳香と感じられる——とGは言うのだった。

アリ姫のH子とその愛の相手については、この座の座長が語ってくれた。

H子をはじめて入座してきたとき、一座の男たちのあいだには、はやくも彼女に食指を動かしているようすが、たがいに感じられた。

そこでサイの目で、H子のさいしよの着手をきめることになったが、その結果は、木戸番の爺さんと決定した。

六十に手がとどこうというこの爺さんは、一座きつてのヤチモロ（すきもの）だった。翌る夜には、もうH子に手を染めていた。

「まだオボコだったよ」

と爺さんはなかまたちの前に報告した。二

十八歳というのに処女だった、というのである。

爺さんとアリ姫との愛の生活は、楽屋の板敷きの下——うすぐらいがふたりきりの愛の場所、かわりなくつづけられた。

H子の偉容なしりのしたにしかれて、爺さんは満悦しているという、なかまたちのうわさだった。

ひと月ふた月三月とつづいたが、爺さんはH子を手ばなそうとしなかった。走りだそうとするH子の足に、しっかりとつかまっている、といった爺さんのようすであった。

そして四月ほどが経ったころ、爺さんはポツクリと急死してしまった。

以来H子の相手は転々と変っている、ということだった。

「どんなにもものすごい因果者の女でも、この座にきたら男に不自由しないよ。男のほうで不自由させないんだから」

座長は大まじめな顔で、そう言ったものである。

あなたはこれまでに嘘をついたり、正直に言わなければならないことを隠したりしたことはありませんか。え、何ですって。あるとおっしゃるんですか。いけませんね。誰にもわかるまい、誰も知りやすまい、と思っても、神さまはちゃんと天国から御覧になっていらっしゃるんですよ。

さあ、それでは、嘘をついたものがどんなことになるか、ひとつお話をしてお聞かせあげましょう。

むかしむかし、ある大きな森の傍に、一人の木こりが奥さんと暮していました。ケートヒエンという名の女の子が一人いて、これがまるで天使のように可愛らしいのでした。お父さんはこのケートヒエンを宝石のように思っていて可愛がっていましたが、奥さんの方は継母だったものですから、何かちよつとしたおちどがあつても、ひどくケートヒエンを叱るのです。その上、夫婦はたいへん貧乏で、その日その日のパンにもことかく程でしたので、ケートヒエンは食べるものも、ろくろくもらえないのでした。

ある日の昼頃のことでした。珍らしく継母が村に用足しに出かけて、ケートヒエンは一人で家にお留守番をしておりました。お父さ

■強情なケートヒエンの物語

三度目の正直

三 鬼 俊

秋 吉 巒・絵



んは朝早くから森に仕事に出かけて、夜暗くならなければ帰って来ないのです。ケートヒエンは、口うるさい継母が居ないものですか、好きな事をして楽しく遊んでおりましたが、昼近くなったので、おなかがとても空いて来ました。はじめは水を飲んだりしてまぎらしていましたが、朝御飯に小さなパンをひととき食べたきりですから、そんなことではとても我慢できなくなっていました。

戸棚には朝のパンの残りがあるのは知っているのですが、お母さんの居ない間に食べた、またどんなに叱られるか知れないので、出来るだけそちらを見ないようにして、それまでこらえていたのですけれど、もうだめです。何もかも忘れてパンに飛びつき、チーズにありついた猫のように夢中で口の中に押し込みました。そして気がついた時は、お母さんの分まで、すっかり平げてしまっていたのです。

間もなく村から帰って来た継母は、さてお昼にしようと思って戸棚を開けて見ますと、取って置きのパンがありません。真赤になって怒った継母は、いきなり、台所の隅で小さくなっているケートヒエンに飛びかかると、テーブルの上に俯向けにして縛りつけてしまいました。「ごめんなさい、ごめんなさい」

と泣いてケートヒエンがあやまつても聞くことではありません。スカートをめくって、ケートヒエンの可愛いお尻をまる出しにしますと、鞭を持って来て、雪のようなお尻をぶち始めました。

「この薄汚い泥棒猫め、ひとの留守の間に盗み食いしやがって」

こうののしりながら、ケートヒエンのお尻がまっかになるまで、何度も何度もぶちました。そしてそれでも腹がいえないと見えて、

「お前なんかは鼠に食われてしまえ」

と言って、泣きじゃくっているケートヒエンを追い立てて納屋に連れて行き、その柱に、しっかりとくくりつけて出て行っていました。

ひとりぼっちになったケートヒエンは、さつきぶたれたお尻の痛みや、くくりつけられている手の痛みより、足元をちよろちよろ這いまわり、すぎがあったら噛みつきこうとする鼠どもがこわくて悲しい悲鳴をあげ続けていました。

やがて夜になりました。お父さんが森から帰って来てこの有様を見て、やっとケートヒエンを解いてくれました。それにさえ継母は腹を立てて、ケートヒエンには晩御飯もくれないのです。

あくる朝、木こりは、又昨日のようなことがあるといけないと思ったので、ケートヒエンを連れて、森に仕事に出かけました。ケートヒエンをそこら辺に遊ばせて、木を伐っていると、急に目の前が明るくなって、背の高い美しい女が現れました。その女は頭にピカピカ光る星の冠をかぶっていて、その後にあたりが明るくなったのです。

「私はキリストの母マリヤです。お前は貧乏なのと継母が娘をいじめるので困っておいでだね。私がその娘を連れていって母親代りに面倒を見てあげよう」

木こりは、マリヤさまならこんな有難いことはない、自分の淋しいのは我慢しよう、と思って、ケートヒエンのことを聖母マリヤさまに、くれぐれもお願いしました。ケートヒエンも、お父さんと別れるのは悲しく思いましたが、継母にぶたれた時のつらさを思い出して、マリヤさまと一緒にいくことを承知しました。

マリヤさまはケートヒエンを連れて、天国へおのほりになりました。ケートヒエンはほんとうに仕合せでした。砂糖パンを食べたり、甘いミルクを飲んだり、黄金の着物を着たり、小天使と遊んだりして、日のたつのも忘れてしまうくらいなのでした。

ある日のこと、マリヤさまはケートヒエンを呼び寄せておっしゃいました。

「私は今から長い旅に出ますから、この天国の十三の扉の鍵を預っておくれ。このうち十二の扉は開けて、中の宝物を見てもかまわないけれど、十三番目の扉だけは開けてはいけませんよ。さもないとお前は不仕合せになりますからね」

ケートヒエンは、言いつけを守りますと約束いたしました。

さて、マリヤさまが旅に出かけられるとすぐケートヒエンは部屋の見物を始めました。毎日一つずつ開けて、十二まで見てしまいました。どの部屋にも、それはそれは結構な物ばかり山のように積まれていて、ケートヒエンはあらためて自分の仕合せをマリヤさまに感謝するのです。

ところが、今度は十三番目の扉の奥に何かあるのか知りたくてたまらなくなったのです。

「ちょっと隙間からのぞくだけならいいでしょう」と、ケートヒエンは小天使たちに頼みました。

「まあ、いけないわ」と天使たちは申しました。「マリヤさまがおとめになったのですもの。それに、あなたが不仕合せになるかもしれないのですよ」

れないのですよ」

ケートヒエンはだまっていました。

けれど、心の中ではどうしてもあきらめ切れませんでした。で、あるとき小天使たちが出かけてしまうと、「今なら一人きりだからのぞいて見たって、誰もわかりやしないだろう」と思いました。鍵をとり出して、錠にさしてから、しばらくは決心がつかずにためらっていましたが、とうとう今をにがしてはと考えて、鍵を廻してしまったのです。

扉がパツと開きました。ありがたい三位一体の神様が、火と後光に包まれていらっしやるのが目に入りました。ケートヒエンはびっくりして、しばらくの間それに見とれておりましたが、やがて、その後光をちょっと指でさわって見ました。するとどうでしょう、指がすっかり光色に染まってしまったのです。

ケートヒエンは急にこわくなりました。扉を固くしめて、いちもくさんに逃げ出しました。

十三番目の扉を開けたことは小天使たちには知られずにすみましたが、それからというもの、どうしても何だか恐くてたまらず、いつまでも胸がどきどきして静まらないのです。それに、指先の金色は、いくら洗ってもこすっても消えずに残っているのです。

やがて、マリヤさまが旅からお帰りになりました。ケートヒエンをお呼びになって、天国の鍵を返すようにおっしゃいました。ケートヒエンが鍵束をさし出すと、マリヤさまはケートヒエンの瞳をじっとごらんになっておっしゃいました。

「まさか、十三番目の扉は開けなかったらうね」

「はい」とケートヒエンは答えました。

本当のことを言えば、どんなひどい目にあったか、それが恐かったのです。継母に折檻されたときのつらさが、まだ忘れられないのです。ところが、マリヤさまはケートヒエンの胸がどきどき打っていることや、いくら隠そうとしても指先の金色が輝き出るのをごらんになって、ちゃんと本当のことを御存知だったのです。それでも、三度まで「きつとしなかったのだね」と念をおされました。そして、ケートヒエンは「はい」と三度まで嘘をついたのです。

とうとう、マリヤさまは、おおせになりました。

「お前は私の言いつけを守らなかった上に、嘘までついている。お前はもう天国にいる資格がありません」

その言葉が終らないうちに、ケートヒエン



はぐっすり寝入ってしまいました。

どれだけたったのか、眼が覚めると、ケートヒエンは下界におろされて、荒野の真中にねているのでした。驚いて声を出そうとしたが、一言も口がきけないのです。飛び起きて、かけ出しましたが、どちらに行っても一面にいばらが生い繁って行手をさえぎり、つき破ることもできないのでした。こうして

ケートヒエンは、このいばらに取り囲まれた荒野の中に、古い木の洞をすみかにして暮らさねばならなくなったのです。

つらい暮しでした。食べ物といえば木の実や草の根ばかり。それも足や手を血だらけにして、やっと集めるのです。

雪や氷の季節が来ると、みじめなけどものように、枯れ葉の中にもぐり込んで、凍え

るのを防ぐのです。天国の楽しかったことや、小天使たちと遊んだことを思い出して、今の生活のみじめさが一層身にしみるのでした。

やがて、着物はほろほろになって千切れ落ち、裸のまま暮らさねばならなくなりました。長く伸びた髪の毛がマントのように体を覆って、それが着物の代りをしていました。

来る年も来る年も、こんなふうにしてケートヒエンは世の中のつらさを心から思い知らされたのです。

ある時、樹々が若葉をつけた頃、この国の王様が森で狩をして、逃げる鹿を追って、この藪の中まで入って来ました。下生えを押しわけ、刀で道を切り開いて、やっとのことで藪を下ると、樹の下にすばらしく綺麗な娘がいるのを見つけました。娘は木の下に坐り、足の爪先まですっかり金髪で包まれておりました。ケートヒエンでした。

王様はびっくりして、はじめのうちは口もきけない程でしたが、やがてたずねました。「お前は誰だ。どうしてここに一人ぼっちでいるのだ」

ケートヒエンは、一言も返事をしませんでした。口がきけなかったからです。

「わたしと一緒に城にこないか」となおもお

つしゃると、ケートヒエンはちよつとばかりうなづきました。王様はケートヒエンの手を取って馬に乘せ、城へお帰になりました。

お城に帰ってから、ケートヒエンに美しい着物をきせてみると、ますます輝くばかりの美しさで、その上、口はきけないけれど、氣立てもやさしいことがわかりましたので、王様は、しんそこからケートヒエンがお好きなり、やがてケートヒエンをお妃になさいました。

一年ほどたつと、今は王様のお妃になったケートヒエンに男の子が生まれました。すると、ある夜のこと、お妃が赤ん坊と床に寝ていらつしゃいますと、枕元にマリヤさまがたちあらわれて、こうおつしゃいました。

「お前が本当のことを言つて、あの扉を開けたことを白状すれば、もとどおり口がきけるようにしてあげよう。けれど、お前が悪いことをしたと思わないで、強情に開けないと言いはるなら、この赤ん坊をつれて行ってしまいますよ」

この時だけは返事ができるように、お妃の口がきけるようになりましたが、やはり頑固に「いいえ、扉は開けませんでした」とお答えしてしまいました。

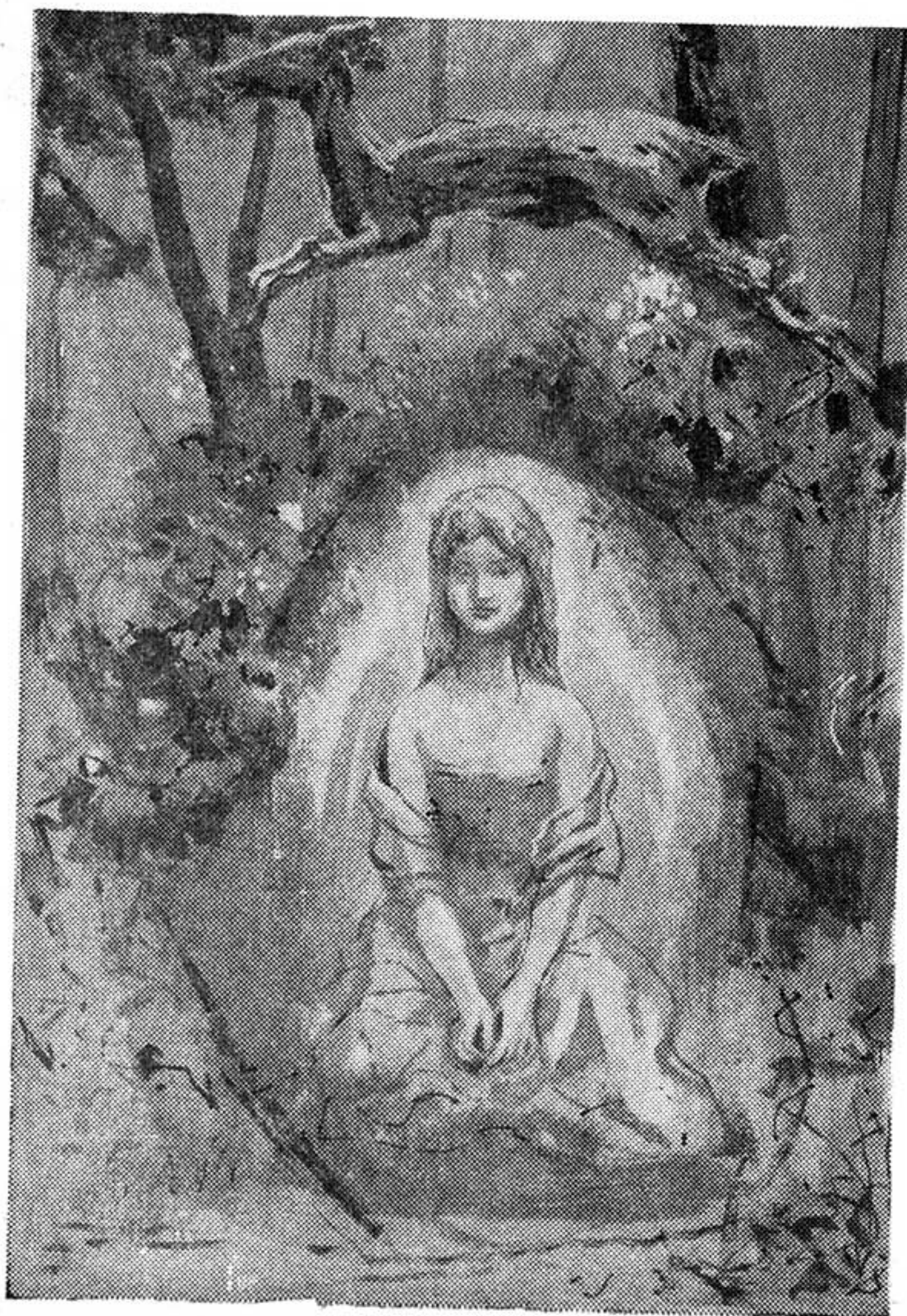
それでマリヤさまは、お妃の腕の中から赤

ん坊を取り上げて、消えてしまわれました。

あくる朝、赤ん坊が居なくなったのを見つけて、お城の中は大騒ぎ。かんじんのお妃に尋ねて見ても、ただ泣くばかりで口がきけません。その中に、お妃は人喰い鬼だ、自分の子を食べてしまったのだ、という噂がひろがりました。これが王様のお耳にも入って、お妃を問いただしになりましたが、お妃は美し

い眼に涙を浮かべて、ただ首を横に振るばかりです。王様はお妃を愛していらつしゃったので、それ以上のことはなさらずに、その事件はそれでお終いになりました。

ところが、また一年たって、お妃が男の子をお産みになったとき、先と同じような事が起つたのです。お妃のケートヒエンは今度も強情を張って、マリヤさまに嘘を通してしま



ったからでした。

今度は、王様も、少し怪しいなとお考えになったのでしよう。相談役たちに言われるままに、いやいやながらもお妃を拷問にかける事をお許しになりました。

お妃は下着だけの裸にされて、鎖につながれ、恐ろしい吊り責めや、伸ばし責めにかけられました。革の鞭が玉のような肌に鳴って血が流れます。お妃はそのつらさに泣き叫ばれましたが、どんなに責められても、とうとう首をたてに振りません。

そのうち、傍に見ておられた王様がお妃を可哀そうにおぼしめされて、拷問を中止させました。そして、「二度とこんなことがあったら、お前の命をとるからね」と、ただ泣くだけのお妃におおせられました。

又一年たちました。お妃は、今度はかわいらしい女の子をお産みになりました。すると三度目にまたマリヤさまがたちあらわれて、「お前の心は、まだとけないのですか。扉を開きましたと白状しさえすれば、前に取りあげた二人のかわいい坊やも、返してあげるのだよ」とおっしゃいました。

けれど、お妃は今度も「いいえ」と答えてしまったのです。マリヤさまは、そこで三人目の女の子も取り上げておしまいになりました。

た。

翌朝、このことが城内に知れ渡りますと、誰も彼も大声で言いたてました。

「奥方さまは人喰い鬼だ。お仕置きをしなればいけない」

王様も、もうそれを止めるわけにはいきませんでした。お仕置きは火あぶりにきまりました。

広庭に火がたかれました。その火でお妃が焼き殺されるのです。

王様は少しも変らずに、お妃をいとしく思っておられたので、上の窓際に立って、目を泣きはらしてこの様を御覧になっていました。

やがて、白い粗末な着物を着せられたお妃が鎖を引かれて連れ出され、まん中の柱に、しっかりと縛りつけられました。

薪が周囲に積まれ、かがり火の火がそこに移されました。火が赤い舌をべろべろさせ、お妃の着物をなめ始めました。

その時、さすがの思いあがりの厚氷もとけて、お妃は心の底から後悔しました。

「死ぬ前に一言だけ、扉を開けましたと打ちあけることができた……」

涙をたたえたきれいな眼で、天をふり仰いでそう心の中でマリヤさまに懺悔をいたしま

した。すると、急に空から雨がどつと降り出して来て、たちまち薪の焰を消してしまったのです。そして、お妃の頭上に光がさし、マリヤさまが二人の男の子を両脇にお連れになり、女の赤ん坊は腕にお抱きになって、天国からお降りになりました。

マリヤさまは、「自分の罪を悔い、打ち明けたものは許されるのですよ」と、やさしくおっしゃって、三人の子供を、お妃にお渡しになりました。

「ありがとうございます。今はじめて夢からさめたような気がいたします」

お妃のケートヒエンは、自分が口をきけるようになったのにも気がつかないくらい感謝を胸を一ぱいにして、有難い聖母マリヤさまを伏しおがみました。王様がおよろこびになったことは申すまでもありません。

こうして、王様とお妃は、末長く睦まじく、仕合せにお暮しになりました。

さあ、これでわかったでしょう。今までの嘘は許してあげますから、今度だけは、嘘をつかないで、正直に言ってごらんさい。さもないと、ほら、この長い鞭で、ケートヒエンのように、その可愛らしいお尻を、うんとぶってあげますからね。



無責任なブーム

東 森 重

五月号、店頭にて買い求め、うれしく拝読いたしました。グラフィ

ア・フォト、結構でした。

安東泉氏の評論「川端文学のなかにうづくもの」中で、手塚治虫の『鉄腕アトム』については、まったく同感です。

私も以前、鉄腕アトム論を書いたことがあります。私見としては稲垣足穂先生が言われる少年美、少年愛形而上学を『鉄腕アトム』にとります。

「美女」の最高の形態は、聖観音であり、少女よりも「少年」であると私は思っています。この世で少年ほど美しいものはなく、女性はその美をめざしているのではないかと思われま

す。森下高茂氏の連載「マゾヒズム文化時評」にも同感。

「ショック」などという映画は、しよせん、SM美とはほど遠く、グロ以外の何ものでもないでしょう。真のSM主義者は、そんなものはみないでしょう。みたとしても、なんの感慨もわかないはずで

す。

安部公房氏の「砂の女」では、小説でも映画でも、女のうしろ手さるぐつわが登場しますが、その潔癖な鋭い芸術性のために、SMをたのしむゆとりはありません。

SMよりもなによりも、我々日本人のひとりひとりにのしかかっている状況、政治と自由、男女と結婚、人間と性など、いろいろな本質について考えさせられ、SMシーンをたのしむ余裕はありませんでした。勅使河原宏氏の映画もりっぱな出来ばえでした。

「新潮」四月月号巻頭の山川方夫氏の小説「愛のごとく」は、そのまま裏窓に掲載してもいいようなSM小説ですが、これは批評家によって、無視されるでしょう。

とりあげたとしても、深い所はよけて、浅い部分だけを批評の対象とするでしょう。

近視相姦、獣姦などは、たとえば文学が扱っても、それほど問題にはならない。現実から一見遠いものは、幽霊とかお化けのように平

気です。しかし、文学がSMを扱う場合、ユダヤとか、コリヤアとかいうように、あまりにも我々の肌に密着しているもので、どうも批評家も、SMには口をいれたがらないようです。

さきごろの悪書追放騒動にしても、SMは悪い、あるいは良いというように、はっきり公言した人はいない。まったく、一人もいなかったといえましょう。

エロ、グロ、俗悪、と漠然にいう。しかし、エロが何か、俗悪とは何か、それをとことんまで突きつめて追究した人はいなかった。

吉行淳之介氏の長編小説「砂の上の植物群」(文芸春秋新社)にもSMシーンが出てきます。

この作家は、自称ノーマリスト(正常人)であります。妙に、正常を主張する。雑誌「文芸」における『文芸内閣』の発言でも(二月月号)インタビューの返答でもそのほかの座談会でも、いつも、「ヘンタイはわからない」と言っています。

そのとおり、これまでの彼の文学とSMとは関係ないと思うし、いまさらけなすわけではないが、そういう作家の書いたSM心理や行動描写が、我々SM主義者の心を感動させるはずはない。

「砂の上の植物群」は、SMシーンに関するかぎり、けっして成功作とはいえないでしょう。

SMの心理がわかり、その感覚に近い作家に、武田泰淳氏と福永武彦氏があります。

そういう作家の書いた作品は、けっしてあからさまに自分のSMをださない。しかし、いくらかくしても、文章の端々に、キラリとでてくる。それがまた、我々の心をとらえる。そういうものです。

SMを売りものにした小説ほど我々にとって、むなししいものはありません。

吉行氏の「砂の上の植物群」と武田泰淳氏の「新潮」連載中の小説「快樂」(けらく)を読みくらべてみれば、その相違ははっきりわかります。

さいきんの世相は、またまた腹の立つことばかりが多い。

とくに大新聞の卑しい態度には絶望をすら、おぼえます。

このあいだうち、毎日のようにでかでかとのせた記事、

「若妻が青少年の強盗に押し入れ、さるぐつわされ、うしろ手に縛られて脅迫された」

これが三段ぬき四段ぬきの大見出しで、克朋に発表しなければならぬようなニュースでありました。どうか。

読者の、もっとも下劣な興味に媚びた記事ではないでしょうか。

(警告のためにこういうニュースを大きくのせるのでしたら、もっとはかに表現の方法があるはずですよ)

新聞というやつは、全国どここの家庭にも配達され、駅で売られ、道路でも売られます。こういう悪質犯罪を誘発させ、連鎖反応をおこさせるような記事を、いちばん効果的に書くのは、あるいは新聞かも知れません。

大新聞数紙の合計発行部数と、いわゆる「悪書」の発行部数とを冷静に比較し、判断すれば、どんなに頭のわるい人たちでも、すぐにわかるはずですよ。

大新聞総配布数を大平洋に見たてれば、いわゆる「悪書」の存在数など、鯨の涙の一滴でしょう。

「強盗が若妻を縛ってさるぐつわをかませ、こんなことをした、あんなこともした」

と書いた記事が、何千万という家庭に大威張りで配達されるという現実を、えらい人たちは、どんな心でみているのでしょうか。

SMイズムが、ちがごろさかに純文学にとりいれられ、映画になり、演劇にもなり、世間はどうか、SMブームの様相を呈してきました。

しかし、四、五歳の幼年時からSMをあたためつつけてきた私などにとっては、こんなブームなんか、なんの関係もなければ、興味もありません。腹立たしいかぎりです。

SMは、個性的な本能の分野であり、いくらブームブームとあおったところで、その個性のない人間には、興味を感じさせることはできません。

いちばんくだらないと思うのは、妙な週刊誌なんかを書く、「こんなSM遊びがいま流行している——」

などという、れいの記事です。SMを理解する者は、あんな記事なんか、だれひとり、本気にしないでしょう。

ウソの実話(?)なら、ウソの実話でいいから、もっとおもしろく書けばいいのに、読んでいて、あまりのバカバカしさに吹きだしてしまいます。一度はだまされて買いますが、二度と無駄なお金は使いません。

おそろしいのは、SMと現実の犯罪とを結びつけたようなそんな「実話記事」を、世間の人が本気になって読み、たとえ読まなくともSMと犯罪とがびついていような錯覚を抱かせる作用です。

冲矢二小品傑作展









沖涉二★小品傑作集

曲切り念者

かびや・かずひこ

東 桂 史・絵

傘もって濡れる身

播州は明石の城主に仕える堀越左近という侍、使者として尼ヶ崎への道中に、生田の小野というところまで来たとき、急に武庫（むこ）の山風が烈しく、夕立雲がむくむくと重なりあつて現れた。

いかさま、新中納言知盛でも出てきそうなけしき……。

程なく、ざーッと音をたてて降りだした白雨。左近は数人の下人（げにん）ともども、近くの榎（えのき）の下に雨を避けた。

道行く人は、きもののすそをからげて、馳け走っている。

と、そのなかに、十二、三歳くらいともみえる一人の少年が、すそながにつけた袴をまくりあげもせず、悠揚せまらぬさまで歩いている。片手に、畳んだままの紅葉傘（もみじがさ）を持って……。

紺と白と青の三歳の染めわけとなつてゐる紅葉傘——それをさせば、少年の美しい面輪（おもわ）はいっそう耀きをますであらうに、なぜか少年はそれを開かない。少年は左近たちをみかけると、ちかづいて来た。

「この傘をご用立ていたしましたよう」

そう左近に言つて、下人のひとりに傘を渡した。

「お志はちかごろかたじけない」

と左近は礼をのべて、

「だが、なぜおてまえがささぬのですか」
気になっていることを訊ぬた。

「傘はささぬことにきめております」

少年ははっきりと答えた。

「それはまた、どういうわけで……いや、これは、名も名乗らずにたちいったことをおたずねして、失礼した。わしは……」

と左近はみずからの範名と氏名とを告げた。

「申しおくれまして……わたくしは長坂主膳のせがれ小倫と申します」

少年もつづいて名を名乗ると、言葉をつづけた。

「父が浪人して甲州を引き越し、豊前へ立ち退くときに、船中で病死しましたので、仕方なく、この武庫の里で、だびに付し、土地の人のなさけにて、わたくしと母は傘づくりの内職をしております。それを思うと、いかに自分の身が濡れても天のとがめもおそろしく傘をさせません」

語りながら、少年の眼はさかしらに光る
——扇売りは扇を使わずに手で日をさえ
ぎる、箕（みの）売りは箕を用いず笠で穀
物をふるいわけのたぐいであろうが、こ
の幼さでこの心入れとは——

と左近は感じ、少年をいじらしく思った。

聞き耳たてる寝ず番の役

小倫（こりん）と名乗る少年と別れた後、
左近は考えるところあって、彼とその母親
が住んでいるという里まで、人をつけて見
とどけた。

用向きをすまして明石へ帰ると、左近は
すぐに登城して、尼ヶ崎からの返状を範主
にさしだして後、範主の機嫌をみて、生田
で会った小倫のことを告げた。

「ほーお、けなげな子どもじゃ。さっそく
連れてくるがよい」

範主は目をかがやかせた。左近の予想し
ていたとおりである。

左近はとってかえして小倫の住居を訪
ね、その母ともども丁寧なあつかいで、明
石へ伴って来た。

小倫は端然として、範主の前に坐した。



そのようすには、あたりを払うものがあっ
た。

そうした小倫の姿を、範主は目を細めて
みまもりながら、眉は遠山に見る月のごと
く、髪は雨に濡れたからすのごとく、芙蓉
のまなじり、うぐいすの声音……と左近の
言ったことばが、けっして過褒ではなく、
むしろほめたりないとさえ思った。

小倫は小姓として伺候することになっ
た。範主の寵愛は日にまして濃く、まもな
くその衾にも招かれるようになった。

夏も盛りにはいりかけていた。

ある夜、範主の寝間の次の間で不寝（ね
ず）番の役人が帳面を前に、しきりに顔の
汗を拭いていた。寝間での不時の災禍を防
ぐためのみでなく、範主と伽の者とのこま
かい会話までも記録するのが、不寝番の役
目である。

ふと、範主の戯れの声があらけなくなっ
たので、役人は聞き耳をたてた。

「そちに命を捨てろ……」

と範主の声があった。

「そうおっしゃられても……」

と小倫のいつもの切り口上がはっきりと

次ぎの間に流れてきた。

「わたくしは嬉しいとは申しあげられませんが、殿さまのご威勢に従うことは、衆道のまこととは思いませんね」

「またしてもそのような堅いことを……まこともうそも衆道とはこのようなものなのじゃ。このままのすがたでよいのじゃないかな」

「いえ、そうではございませんね。衆道とはたがい心の愛情があつてこそ、そう言えると存じます。わたくしのような者でも、ほんとうに執心をかけてくれるお方がございましたら、身にかえてねんごろして、浮き世の思いでに、念者を持って可愛がってみとうございます」

「なるほど……そちの言うことも、座興としてはおもしろいもの」

「座興などではございません。わたくしのいま申しあげたことは、神かけていつわりでございますね」

小倫はあくまで言いはっている。

「わかった。わかった……」

ついに範主は降参の声をあげた。

小倫の言うことにすこしもさからわず、下手に下手にでるのが、範主のいつものく

せなのだ。下手にでることが、彼のよろこびのようでもあった。

古狸のわるさも稚児ごのみ

風待亭^{かぜまち}とよぶ四阿（あずまや）で、納涼の宴が催されていた。範主のこのみで、前髪ばかりをあまた召しよせての遊興である。

広大な庭内に、夕闇がひたひたとたちこめていた。

氣にいらりの小姓たちにとりまかれて、範主は上気嫌で盃を重ねている。

小倫もそうした小姓のなかにまじっていた。凜とした彼のようなすが、ひととき目立つ。

そこそこにおかれた燭に灯がはいったころ、にわかにかが曇って来た。

とともに人丸神社（柿本人麿を祀る「筆者注」）の松がざわざわと騒ぎだし、なにかむつと臭気をとまった風が吹いてきた。

と思うや、燭の灯がいつせいにすうッと消えた。

きみわるさに、はやくも悲鳴をあげる小姓もあった。

文目（あやめ）もわからぬ暗闇のなかで、

小倫はだれかにいきなり鼻をつままれた。「わるさをなさるナ！」

さッといての腕を払った、と思ったが空を振っていた。

また鼻をつままれた。こんどはものもいわずに拳を振った。手応えがあった。毛むくじらの感触であった。

——けものだナ。

と感じ、脇差しに手をかけるより速く、抜き打ちに斬りつけた。

が、あいての姿は、すでにそこから消えていた。

そこでも鼻をつままれている者があるらしく、きヤッ……きヤッという小姓たちの叫びが、つづけさまに起こった。

座はめちやめちやになってしまった。

小姓たちは範主を護りながら、急いで次ぎの間へはいっていくようである。

小倫はそのまま、縁から庭におりた。背後になにか動く気配が感じられた。小倫は知らぬふうで歩きだした。と背後のものも尾いてくる。

こうして築山^{つぎやま}の西に面した桜茶屋（お小休みの場所の名「筆者注」）の前まで来たとき、背後のものが、いきなり、がば！と

とびついて来た。

そのときを待っていた小倫は、さっと身を屈めた。背後のものは、小倫の身体を越して、前方におちたとみえたが、それより速く、小倫の刀が鞘ばしっていた。

またも抜き打ちである。したたかに手応えあった。

ぎゃッ！ という断末魔の声とともに、茶屋の板戸の破れる音。

小倫は、しとめたものの正体もあらためず、そのままその場をひきかえした。

翌る朝、警備の侍が、「桜茶屋の戸を破って、幾年かを経たおすだぬきの首が斬り放されている」旨を範主に言上した。

「さては昨夜の納涼の宴での悪戯も、その古狸のしわざであろう。だれがこれを仕留めたか？」

と家中詮議があった。

小倫は黙って申し出なかったが、返り血を浴びた着物をかくしていたのをなかまの小姓に見られたことから、小倫の働きであることが知れ渡った。

御普請方（ごふしんかた）の役人が、「たぬきの破った板戸を修理いたしましょう」と伺いをたてたのを、範主は言下に「修理



はいらぬ」と拒絶した。

寵愛する小倫の武勇をいつまでも遺そうとの、彼の不憫の心であることは言うまでもなかった。

つづらで忍ぶ寝間の次ぎの間

夏が過ぎて、涼風がそろそろそよると、わたりはじめたころのある日、小倫は、家中の母衣大将（侍大将Ⅱ筆者注）神尾刑部の二男で、惣八郎という者から、その下人を通じて文を受けとった。

「殿の愛寵かわらぬあなたに文をよせることが、人に知れたときは、この身はどのような目に遇うか、それは重々わきまえていゝる。しかも文をよせずにはいられないわたしである。

わたしはかねてから、あなたの心底をみすましていた。あなたは玩弄物にはなりたくないのだ。そして心の念者をもとめている。その念者にわたしはなりたい。その願いをこめて、この文を送る」

という意味のことがしるされていた。

惣八郎のことは小倫も見知っている。二十一歳の颯爽とした若侍だ。そのひとから

これほどに愛されている——小倫の心は幸福感でいっぱいになった。

彼はすぐに返事をかいた。

「あなたの願いはそのままわたしの願いである。ぜひ念者になってほしい、とわたしのほうからこそ頼みする」

文はしきりに交わされ、たがいに通をわけるようになった。

契りは、時節を待とうということにきめた。

その時期は三カ月ほど経た後に来た。十二月十三日の煤払いの日のことである。

この日は吉例の衣配りでもあって、範主の不要な衣類が、近臣の者にさげわたされる。小倫はもらいうけた範主の着おろしをつづらに入れ、小者に命じて、母のもとへ届けさせた。

小倫と惣八郎との念契を知っているその小者は、一計を案じて、このことを惣八郎に通じた。

「うん、よい機会だ。度胸をきめて小倫ど
のと逢うことにしよう」

惣八郎は即座にうなずいて、小者の言うままに、小倫の母からの返りつづらのなかにはいった。

つづらはそのまま、範主の寝間の次ぎの間に運ばれた。不寝番の間とは反対の、伽の者の出入りするほうのへやである。

このことを小者から耳打ちされた小倫は、宵のうちから腹が痛むということにして、出入りの戸が自由にあげたてでできるうにしておいた後、範主のかたわらに臥した。

範主はまもなく、いびきをたてて眠りこんだ。

小倫はそつと床からおきあがると、しずかに車戸を引いて、次ぎの間へはいった。

つづらの蓋をあけると、なかから、「くるしかった……」という見得で微笑しながら、惣八郎が現われた。

ふたりはだきあった。ほほずりをした。この一瞬の歓びのためにこそ、いままで生きてきたようふたりの思いであった。

小倫はかるた結びの帯も解きあえず、惣八郎となさけをかわした。範主にはゆるさなかつた口舌をも、惣八郎にゆるした。

ふたりはたがいにながいの名を、しきりに呼びあった。

その声に目を覚ましたのか、寝間から人の動く気配がきこえた。

ふたりは、はつと体をはなした。惣八郎は急ぎ足にへやをでていく。

寝間から、素檜を小わきにした範主が、走りでてきた。

「たしかに足音がする。逃がしはせぬぞ」と廊下に、かけだそうとした。

小倫は急いでそのたもとを控えた。

「お待ちなされませ。人の足音などいたしませぬ。聞きちがえてございましょう」

「だが、先刻は人声までしたようだぞ」

「あれはわたしが、腹痛にたえかねて、呻いたのでございます」

なんとか、ごまかそうとしているうちに、庭先きでみしみしと物音がする。小倫はハラハラした。

「そうか……」

うなずきながら、範主はへやの窓の雨戸を一枚あげた。

「小倫、あれはなんじゃ？」

「は？……」

小倫は範主の指差すほうに目をやった。と、そこに、惣八郎であろう、立木の枝から忍び返しを跳びこしている黒い影が見えた。

「あれは……」と、小倫は口ごもった。



様

「わかりませぬ」

「そなたがしとめた、いつぞやの狸と同類かもしれぬナ」

言うとき、もとどおりに窓の戸を閉めた。

「さあ、寝むとしよう」

寝間にはいりかけたとき、金井新平というかくし目付役の男が、急のご用といって参上して来た。

「申しあげます。只今、さばき髪にはちまきをした怪しい者が、ここより逃げるのを見届けました。捕えそこねましたが、あのようすは忍び男に相違ございません」

新平はそう言上すると、そのまま戻って行った。

「知らぬふりをしてやろうと存じたが、かくし横目の目にはいったのでは、あらためて吟味せねばならなくなった」

と範主は小倫をかえりみた。

「新平の言うとおるか？」

「……」

と小倫は無言で目を伏せた。

「忍んできた者の名を申せ」

「申しあげられませぬ……わたくしに命をくれたお方を、なんで申しあげられましょ

うか」

「言わねば言わぬでよいッ……さがれ！」
やや怒り声になっていた。

左手を斬り次いで右手を

それから三日を経た十五日の朝、小倫は剣術の稽古座敷に召しだされた。

諸家中の者のみせしめに、範主自身の手で成敗するというのである。

近臣、小姓などおおぜいの者の居並ぶなかに、小倫は端座した。

範主は長刀をさげて、そのかたわらに立つと、じつと小倫の面おもてを見た。

「小倫、最期じゃゾ」

しずかに言葉をかけると、小倫は婉然と微笑した。

「年来のおんよしみ、お手にかかって果てますことは、このうえなにも思いのこすことございませぬ」

と立ちなおるところを、さっと左腕が打ち落とされた。

「いまの思いは？」

と範主が言った。

それには答えず、小倫は右の手をさしの

べた。

「この手で念者をさすりましたから、おにくしみが深うございましょう」

苦痛に声を震わせながらも、言いたいことを言う。

範主はとびかかって、その右手を斬り落とした。

「この顔が……念者を……」

美しい顔が歪み、あとは声が消えた。

刀身が閃き、小倫の首が前におちた。

一座にはじめて、ほおつとためいきが洩れた。

小倫の死骸は妙福寺に送られた。

その名を知られた朝顔の池というのも、ここである。むかし光源氏が、須磨に流され、それにこりずに入道の娘を恋慕して、ここに通ったというところである。

まだ死ねぬは殺意

小倫が成敗されたことを、惣八郎はもちろん知っていた。

が、いま、「小倫に忍んだ者はわたしだ」と名乗りでれば、自分も範主の手で成敗されることは必定である。

——そんなことでは死ねない。まだ自分の出る時機ではない。

と思った。

死ねないという気もちには、金井新平のことがひっかかっていた。あの夜「忍び男をみつけた」と、範主に差しで口した新平のこと……。

それのみでない、新平については、他にも不快な思いでを、惣八郎はもっているのだ。

五、六年もむかしになる……。

そのころ、惣八郎も新平も、いまの範主に仕える小姓であった。

惣八郎は十三歳、小姓としては最年少であったが、沈着の性があつた。また新平は十六歳、小どりまわしのきく、要領のよい少年であつた。いずれも範主の寵を受け、その枕席に待っていた。

国主大名が小姓を愛することは、よほど以前から行なわれていて、戦国時代などは小姓を近習に仕立てて、戦陣にまで伴ったことは、多くの人の知るところ。

干戈（かんか）は鞘におさまって、天下は泰平の徳川期になると、この風はますます盛んとなり、いずれの大名も、競って美

童を小姓に抱えるようになった。

美しい小姓を、あまた所有していることは、大名の誇りのひとつでもあつた。客のあるときは、秘蔵の珍宝でもみせるように小姓たちをその給仕に出して、客にほめられるのが、大名の満足とするところだつたのである。

惣八郎や新平の主君であるこの範主も、そのご多分にもれなかったが、そうしたなかでもとりわけて、男色このみだつたと言えよう。

範主の寵は、新平よりも、年少の惣八郎のほうに厚かつた。小倫のように張りの強い性格ではなかった惣八郎は、範主のいうままにすこしもさからわず、人形がもてあそばれるように鐘愛された。それを不服とも不満とも思わなかった。

ところがしばらくすると、そうした惣八郎の態度が、範主の飽きるところとなつたのか、その寵愛の度が完全に逆転してしまつた。

新平が範主の寵を一身に占めるようになってとともに、惣八郎はまったくかえりみられなくなったのだ。

「どうだ、やはりおれには敵うまい」

というような勝ちほこった顔を、新平は惣八郎にしてみせた。

このときのくやしさを、惣八郎はいつまでも忘れることはできなかった。

……そうしたいやな思いのある新平のさしで口のために、小倫が成敗されてしまった。このことを知ったときから、惣八郎は新平を討とうと心を決めた。

そしてそのためには、範主の前に名乗りでることはできないのだ。

が、惣八郎のこのような心の経緯を知らぬ人びとは、小倫ほどの若衆が殺されて、念者が出てこないというのは、その念者はよもはや侍ではあるまい。野良犬の生まれかわりだろう」

などと噂しあっていた。

曲切りも死者の定紋

その年が明けて、正月十五日の早暁、人丸神社の前の広場では、年中行事の左義長（さぎちょう）が行なわれはじめていた。

松の内もこの日で終るので、城下の武家屋敷の小者たちが、それぞれの屋敷にいままで飾ってあった門松、注連縄（しめなわ）

などをとりはらって、この広場に運んでくる。

運んできたものは、広場の中央に、つきつきと積まれる。たちまち、丈余の高さに積みあげられた。

おおぜいの人々がそれを取りかこんだ。そのうちの一人の小者が、積みあげた飾り物の下方に火を点けた。

みりみりと音をたてて、燃えだした。焰がすさまじい勢いで、舞いあがる。

子どもたちは喜声をあげて、「どんどやどんど！　どんどやどんど！　とうちはやす。」

火柱はたちまち、天をつくばかりとなった。灰が八方に散って、見物の人びととうえにふりかかった。

惣八郎ははやくに来て、見物のなかにまじっていた。

もとめるものをさがす眼を、彼はしていた。そのものは、このような人の集まる場所へはかならず、忍びの者のようにそっと顔を覗かせる男である。

が、なかなかその男の姿はみあたらない——尋常のことではだめだ。

ときとった惣八郎は、ついに、見物の群



集の周囲をひそかに廻りはじめた。

眼を光らせながら、十数歩ほども廻ってきたとき、おッ！ というように、惣八郎は足をとめた。

目当ての男——金井新平をついにみつけたのだ。

新平は人垣のあいだから、伸びあがるようにして、なかを——というよりは見物の人びとのようなすを窺っているふうである。横顔が焰のひかりに照りはえ、赤く染まっていた。

惣八郎は新平にちかずいた。と、その氣配に、新平がふりむいた。

「おお、……中尾どのか」

「ご見物のところをすまぬが……」と、惣八郎は言った。「耳寄りのことを貴殿にだけおはなしいたしたい。いっしょに来てくだされ」

先きに立って歩きだした。新平があとについて来た。

ど、どの火も下火になりかけていた。

二人は鳥居をくぐって、境内にはいった。あたりはようやく白みかけていた。

「このへんでよかろう」

と惣八郎はたちどまった。

「話というのはナ……」

「ン……」

「過ぐる年の暮にご成敗となった小倫に忍んだ男、それがわしだと申したなら、貴公はなんとする？」

きッと新平を見据えた。

「そうか……捕えるまでだ」

言うより、惣八郎の左腕をむずと掴んだ、と見えたが、それより速く、抜きはなされた惣八郎の刀が、その新平の右手を肩の付け根から斬りおとした。

「うッ……」

とよろめく新平へ、惣八郎は浴びせるように叫んだ。

「小倫はナ、このようにして殺されたのだ」返す刃が、新平の左腕にむかって振りおろされた。

地響き打って倒れる新平。そのくびにじゆうぶんとどめを刺すと、惣八郎は刀を納め、すでに散りかけている左義長見物の人になじってその場を去った。

少時の後、惣八郎は、妙福寺の山門をはいつていた。

本堂から、朝の看経（かんきん）の声聞きこえてくる。

惣八郎は寺男に頼んで、白木の高札と筆硯を借りると、小倫を埋葬した塚の前に足を運んだ。

高札にむかって、惣八郎の筆が走りはじめる。みずからの心底の委細をそこに記した後、その高札を塚のよこに立てた。

本堂の看経もすでおわったようである。

——人でも出てきて、みとがめられてはならぬ。

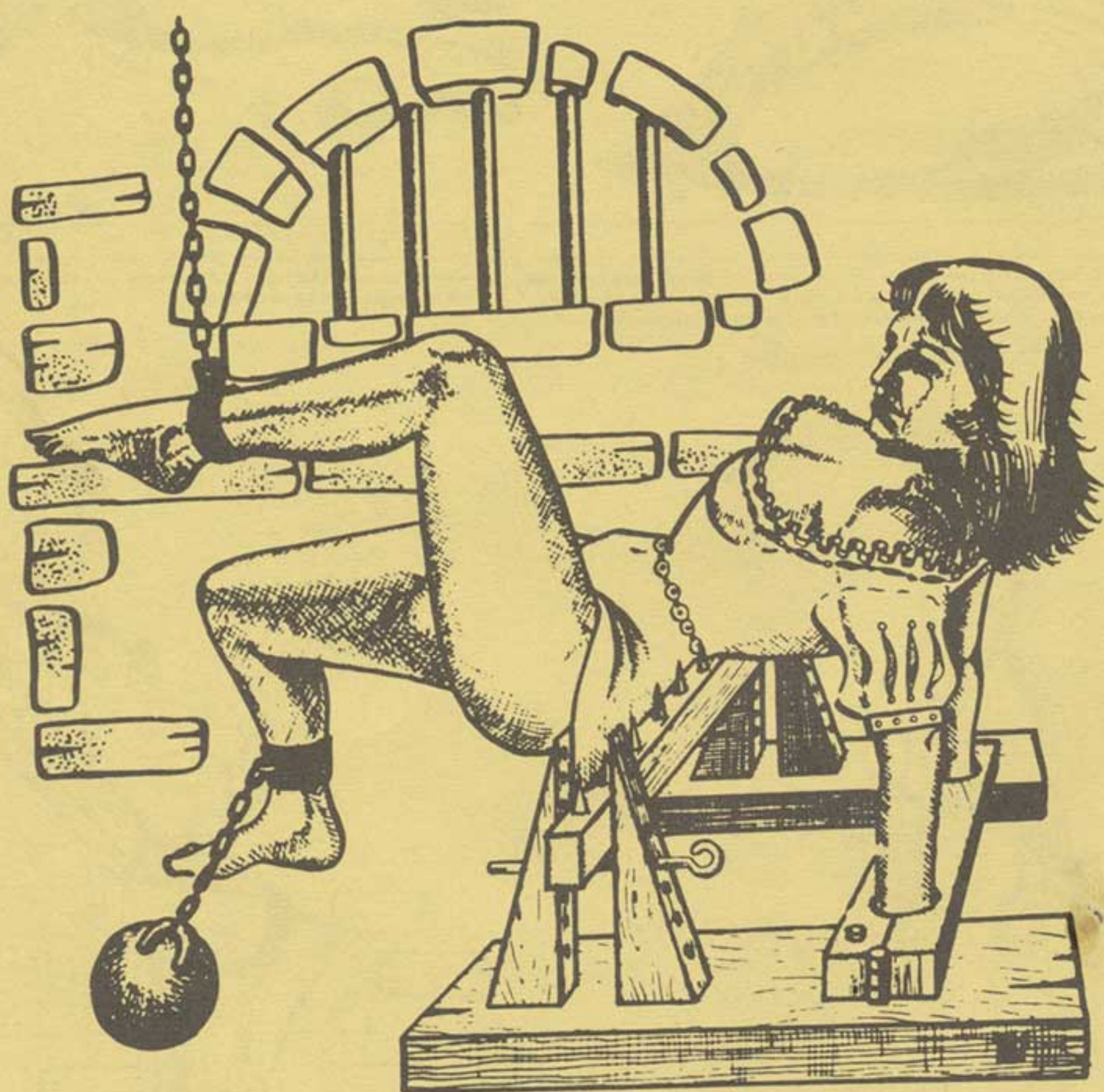
すぐにそこに胡座すると、きものの前をひらき、刀の切先を腹におしあてた。

ぐぐぐッ一重菱（ひとえびし）の形に、刃を進ませた後、つづいてそのなかに、三ツ引を切った。

小倫の定紋の形である。
そのまま、がっくりと前に伏した。

どうせ恋をするなら、このようにありたいとの願いであろうか、惣八郎の死後七日間というものは、ふたりの塚に手向けられたしきみで、朝顔の池も埋るくらいであったという。

ドイツ民族博物館資料より



An instrument similar to the block, in which the imprisoned girl was locked-in in a specially painful pose for hours.

INSTRUMENTS OF TORTURE 10

西ドイツ・フェニクス商会・特約



The neck ring, armed with points, was a favourite and horrible instrument of torture, which often was to wear by the victim for hours. This iron neck ring could be locked-up and it was not possible for the victims to lower their heads without incurring dreadful hurts. (National Museum, Nürnberg)

INSTRUMENTS OF TORTURE 5



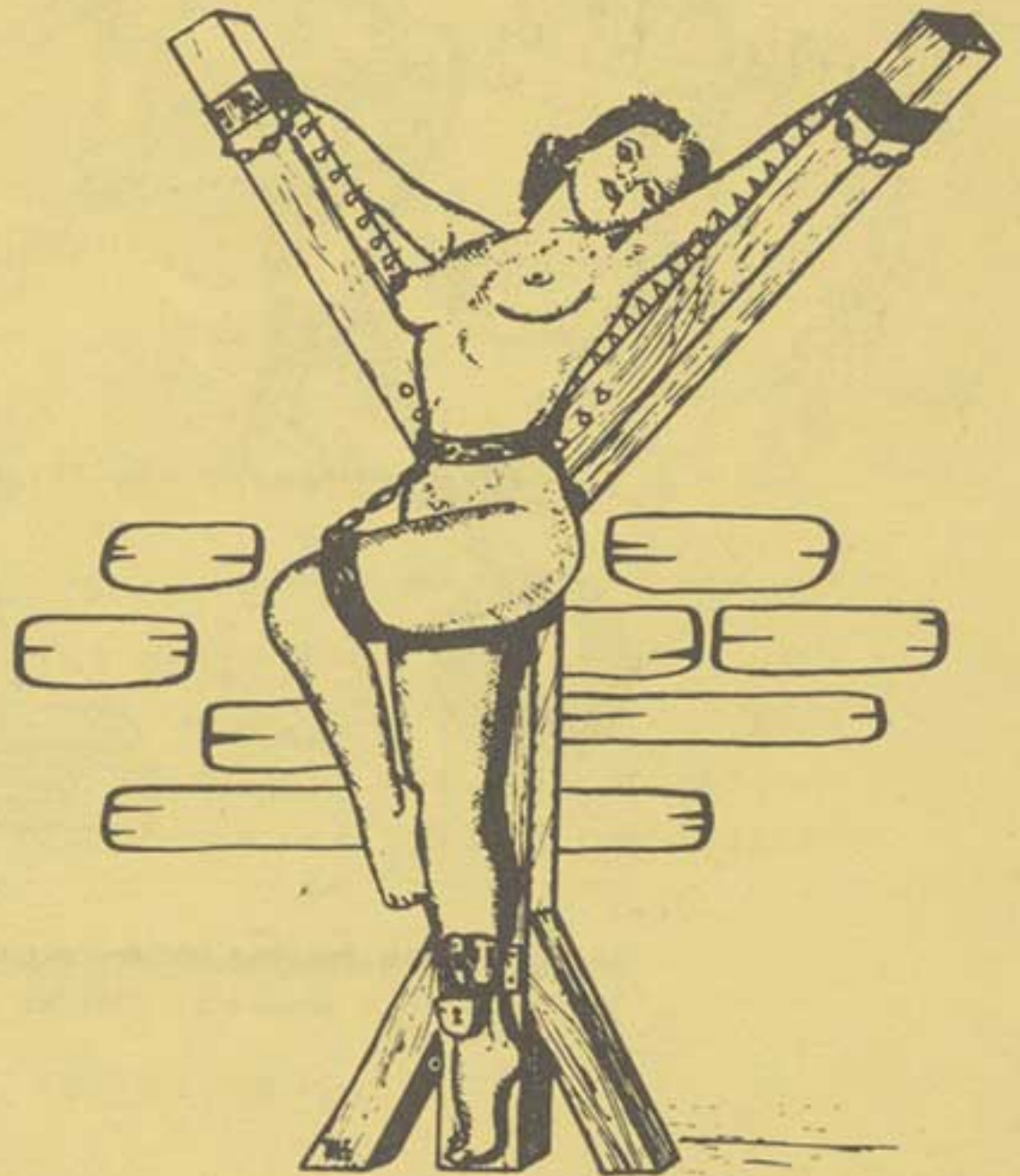
Whipping was one of the most frequent penalties and a favourite way of torture. Mainly whipping with thorn-rods and whips provided with points was especially severe and painful.

INSTRUMENTS OF TORTURE 9



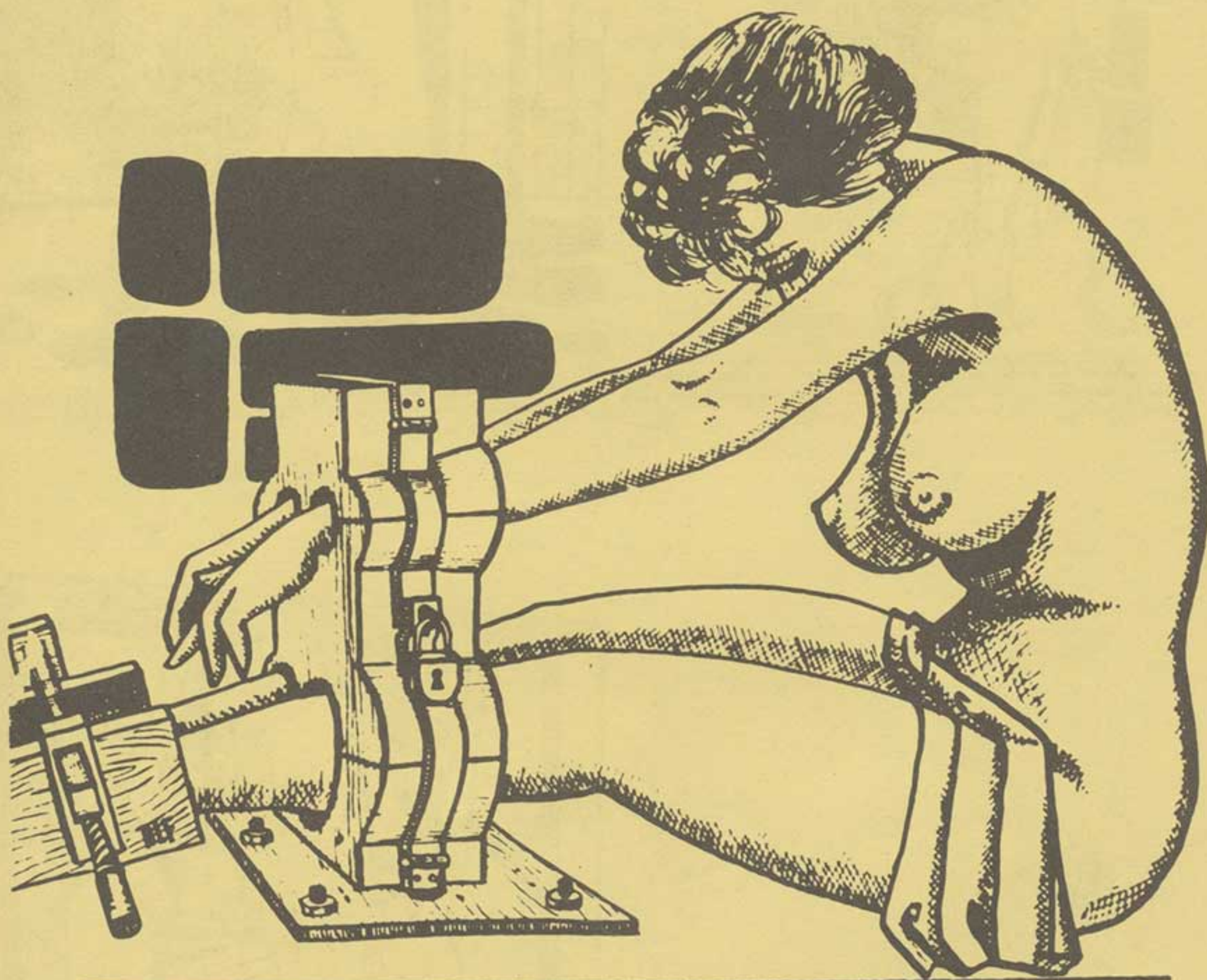
The sting board was preferably used for the torture of witches. The victim bound with neck-iron and hip-ring, was closely chained to a column, which was connected with the foot-board. Heavy iron weights hung to the hip-ring pressed the barefoot victim into the stings.

INSTRUMENTS OF TORTURE 6



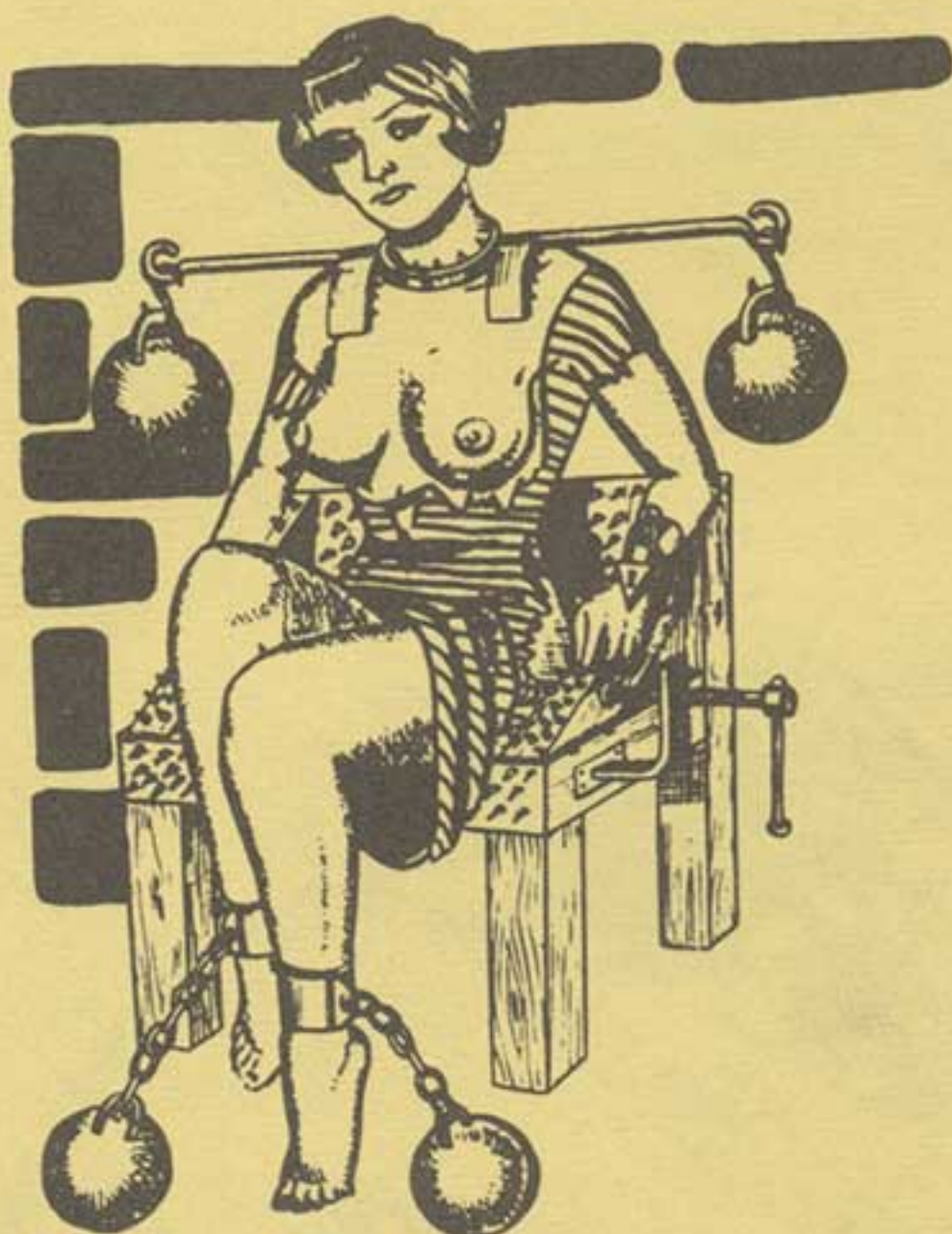
An instrument of torture, similar to the "Andreas Cross", into which the victim was chained to the beams, which were armed with iron points, with widely spread arms.

INSTRUMENTS OF TORTURE 8



The block, mostly made of heavy wood provided with iron bands, was public penalty. In the jail it was used as fetter and torture, whereby the imprisoned girl had to stay in the block for days, in order to make her pliable and thereby she sat in her own dirt and rubbish.

INSTRUMENTS OF TORTURE 7



the witch stool was a seat which was provided with iron points where the victim was strongly locked - in. In order to raise the pain often heavy weights were used, which pressed the body into stool.

INSTRUMENTS OF TORTURE 1



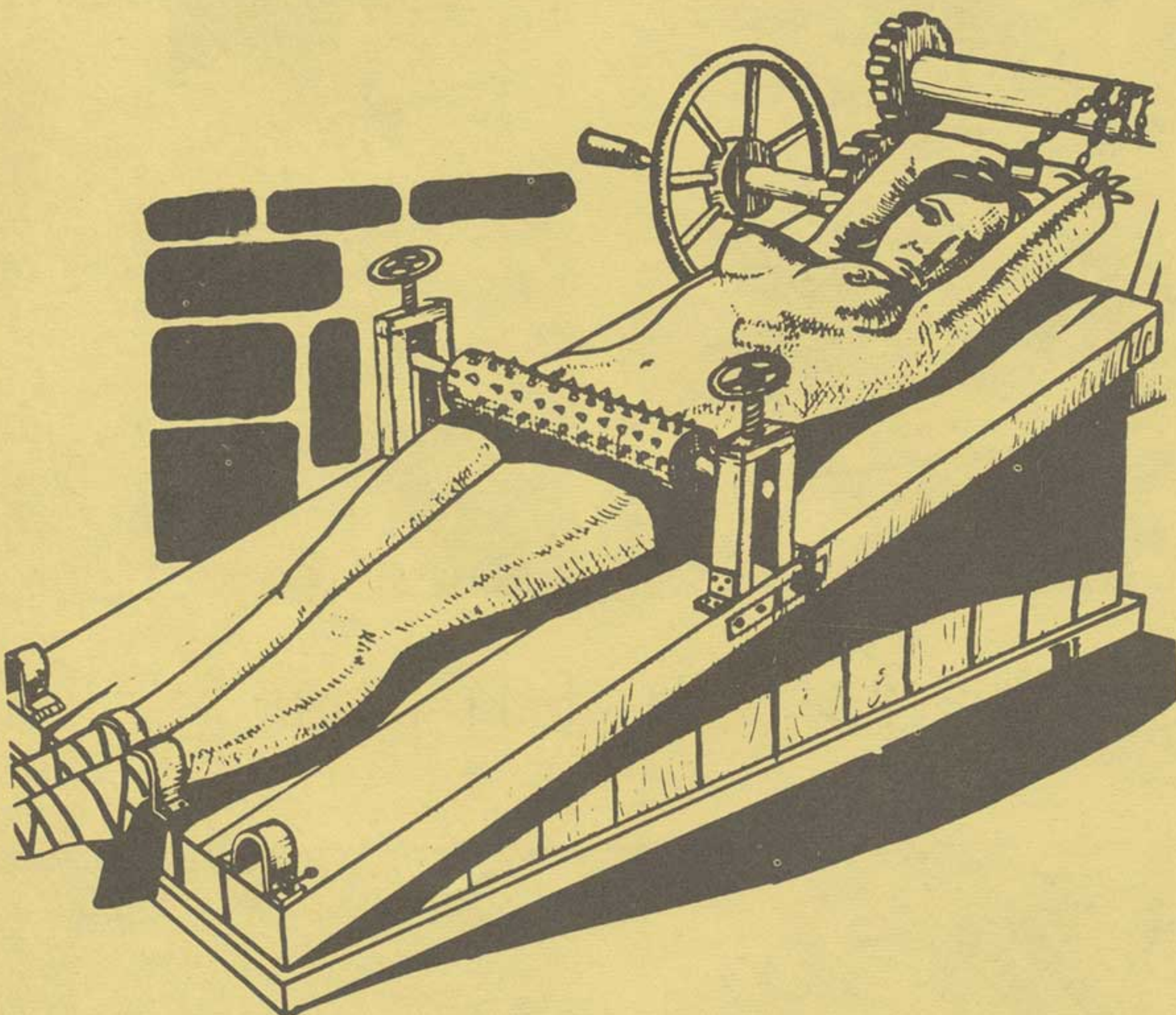
In the Middle Ages certain crimes were punished by burning marks. the burning mark mostly was burnt into the left shoulder, at the arm above the elbow or into the neck.

INSTRUMENTS OF TORTURE 4



In the Middle Ages the girls who were said to be witches mostly were condemned to death through fire. These executions mostly took place on a pile of wood - contrary to our picture.

INSTRUMENTS OF TORTURE 2



The stretch - bed for violent stretching the body of victim was one of the best known instruments of torture. A so - called "lard hare" a roll provided with iron points, was put round the middle of the body, which also was alone used on the body of the victim.



藤沢 修 フォト作品展





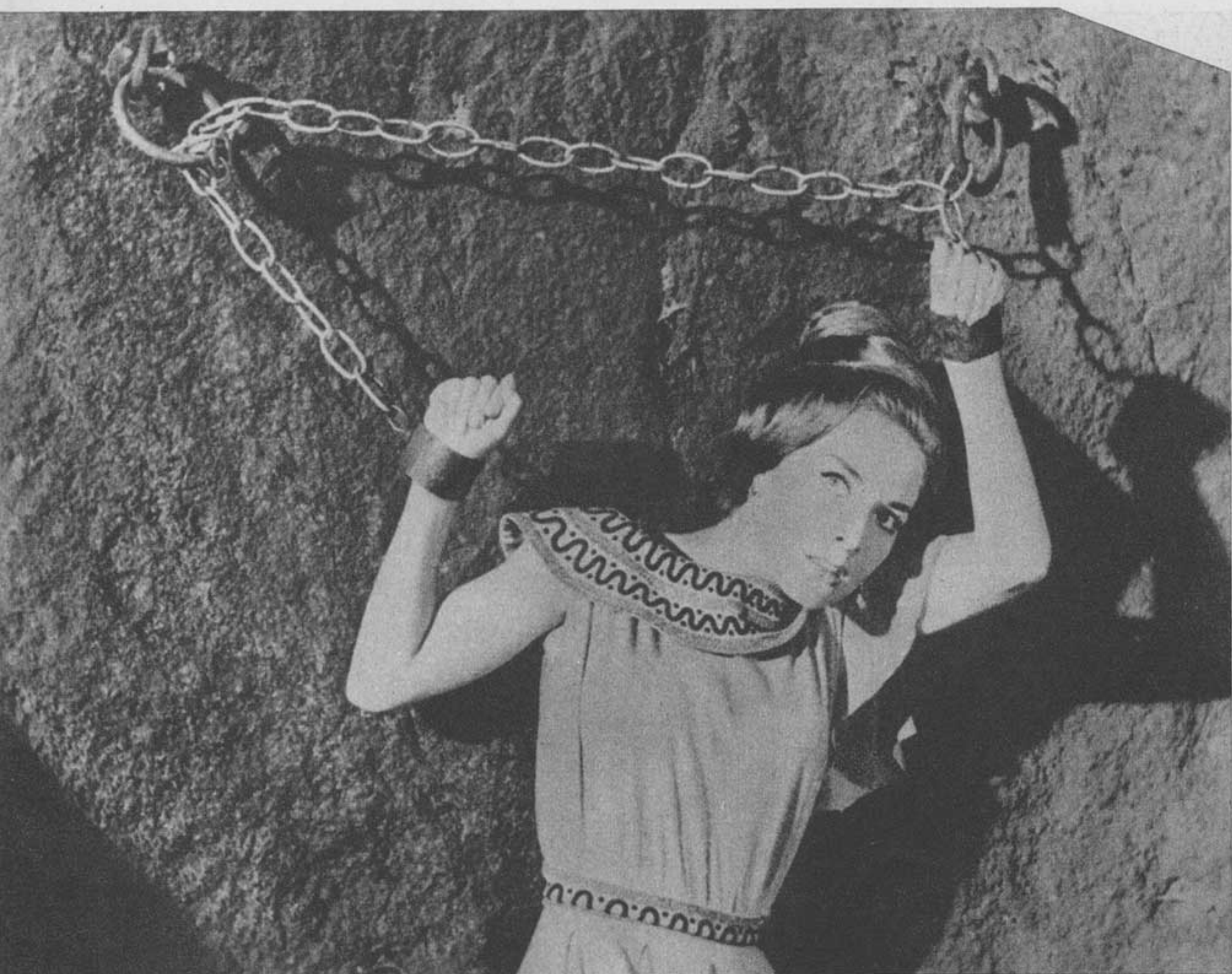


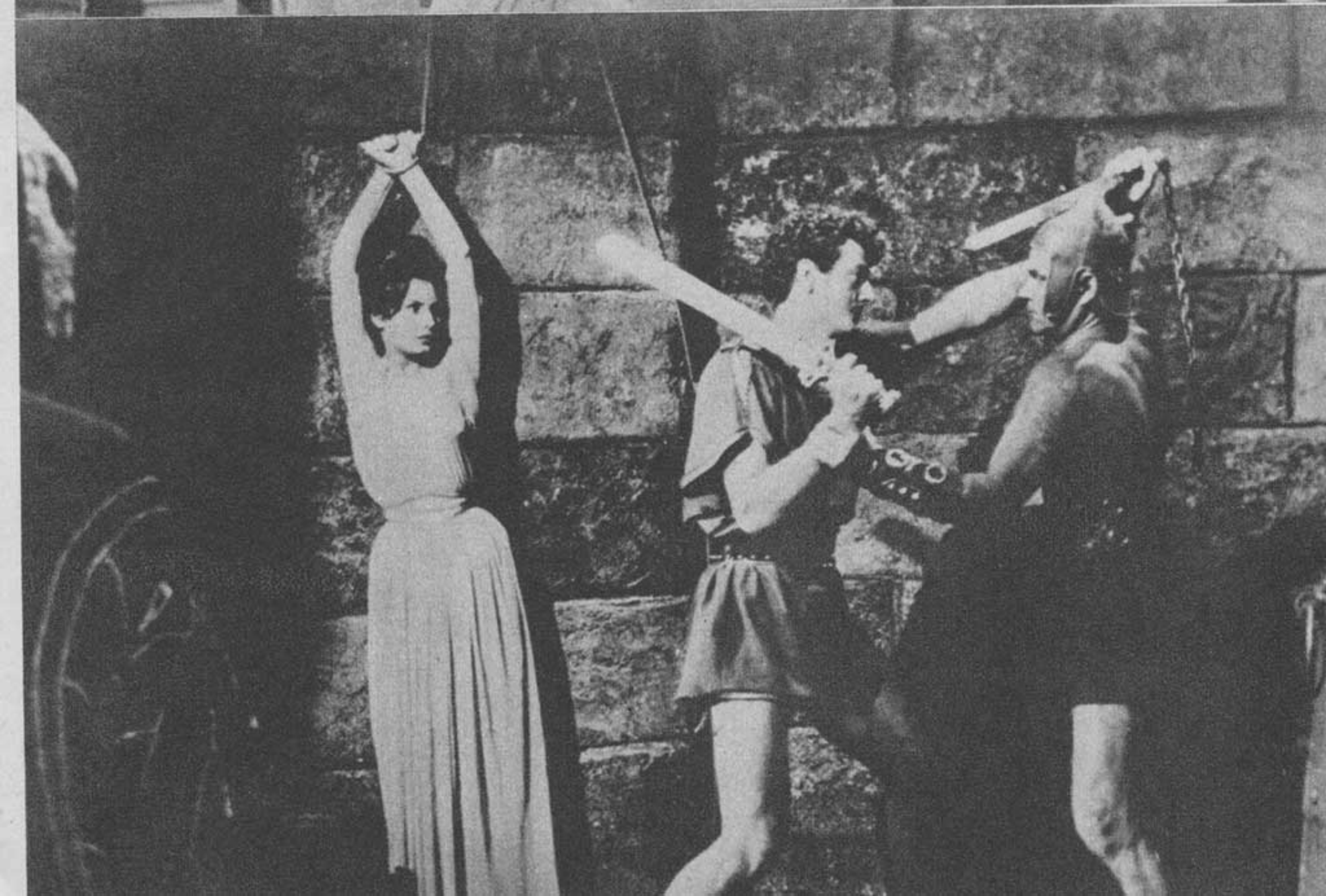
スクリーン・クライマックス集

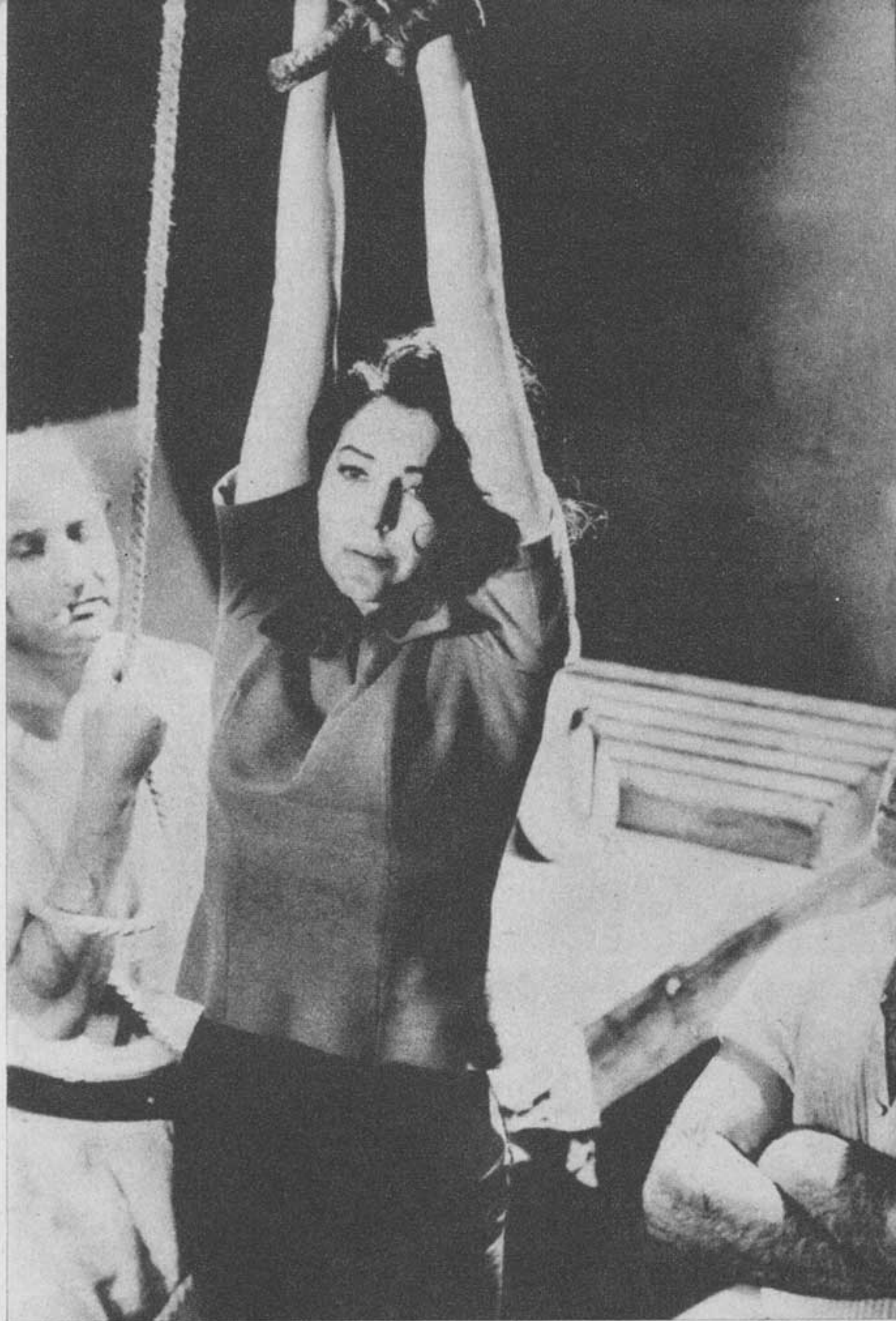
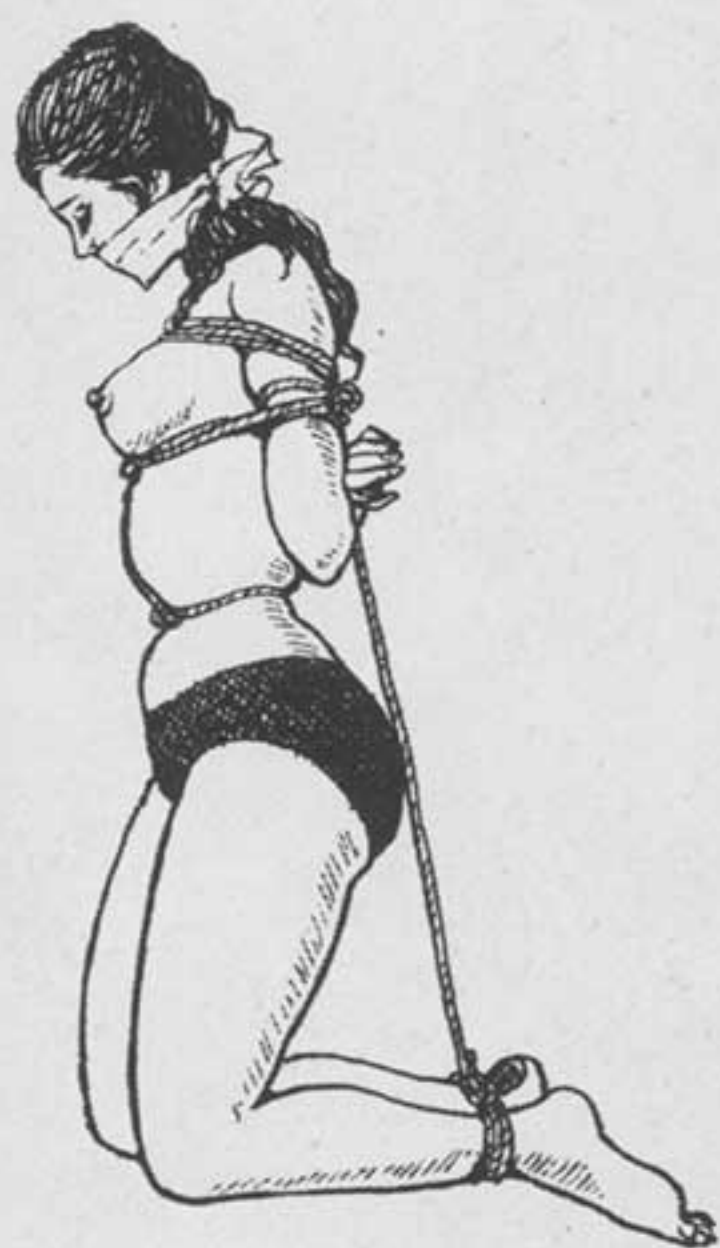




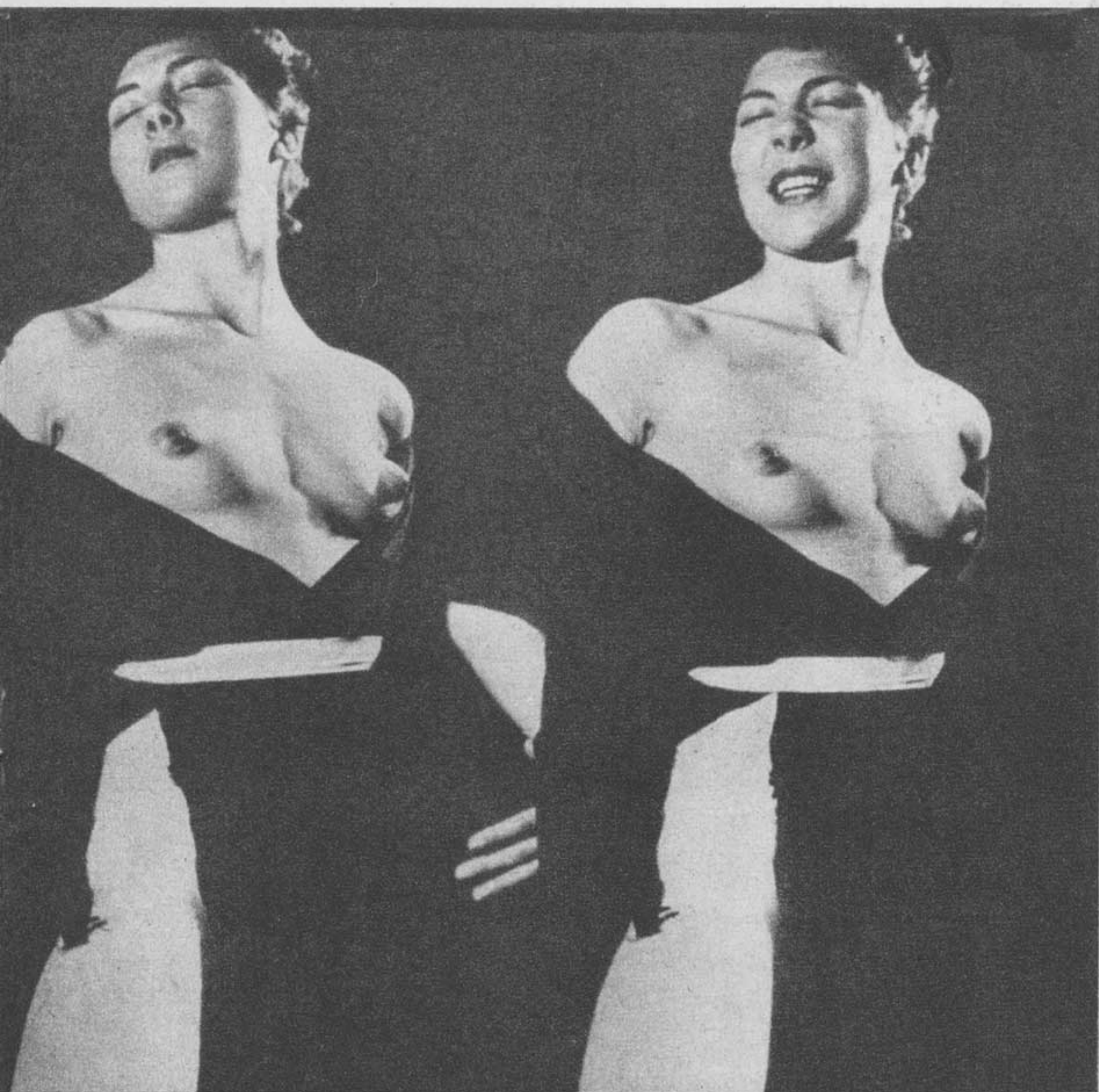


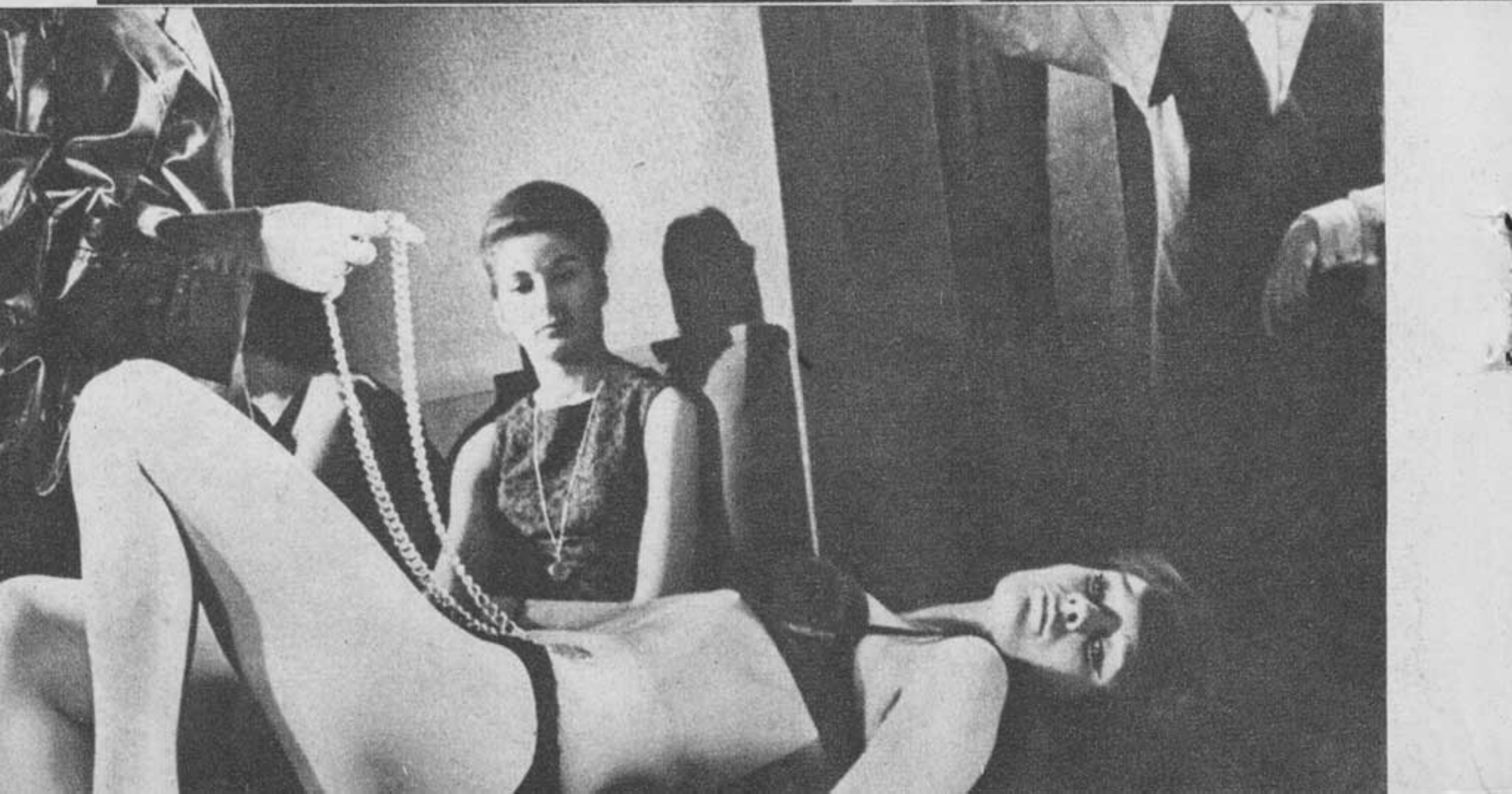




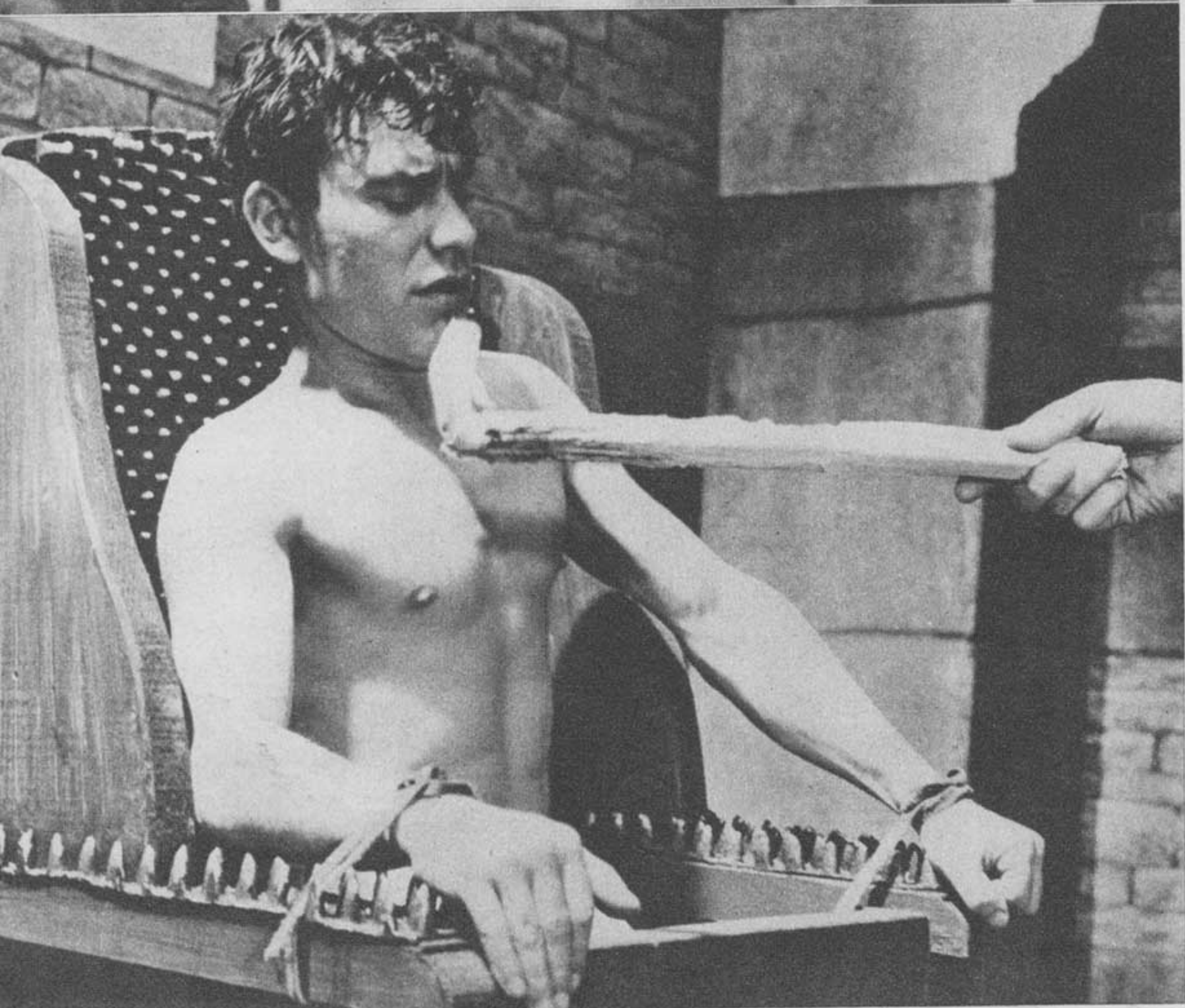




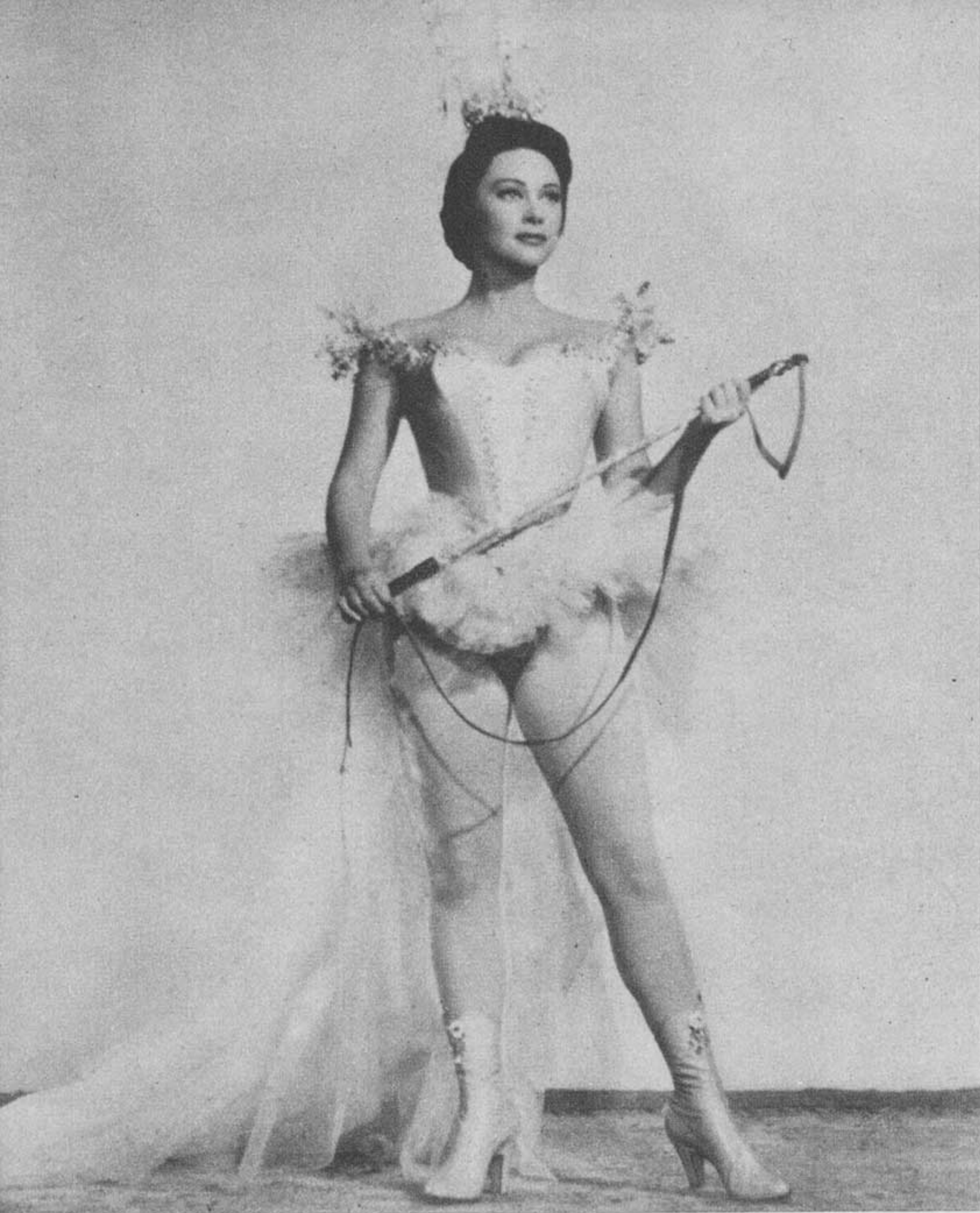








マゾヒスチック・スチル集









イタリア映画

「地球の皮を剥ぐ」より

レスビアンの接吻シーン



洋画のなかのアブ・シーン集

仏伊映画「ショック」より



同性愛シーン



「地球の皮を剥ぐ」より

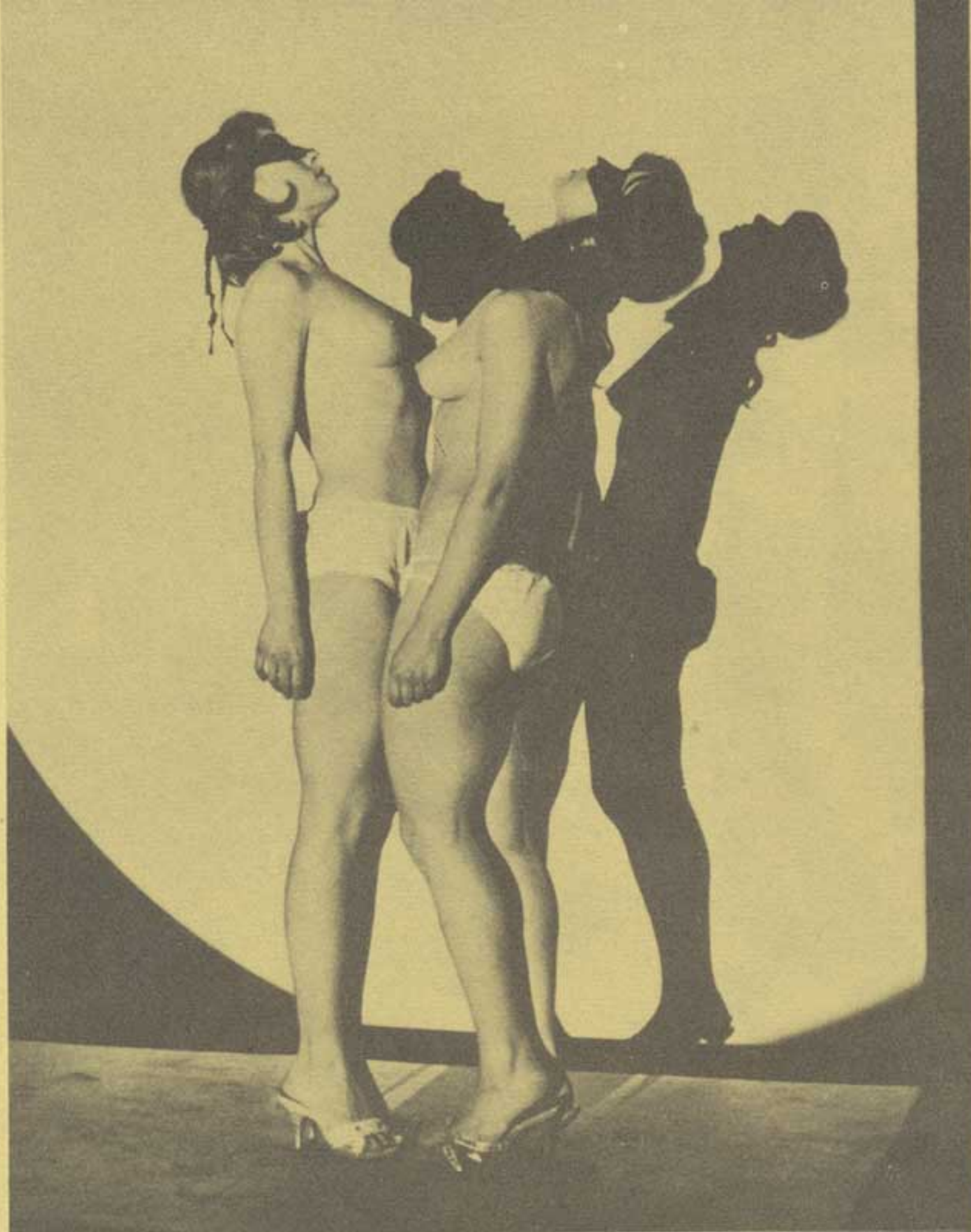




「地球の皮を剥ぐ」より



「ショック」女の同性愛



「ショック」男の同性愛





黒タイツの光沢

猪島昌也



い
す
の
女



北米・フェニクス商会・特約





魅惑のコルセット



郵便はがき

郵便料金
受取人払い
中野局承認
第 44 号

差出有効期間
昭和39年6月20日迄
(切手不要)

(受取人)

東京都(中野局区内)

松が丘2丁目21番

あまとりあ社

裏窓編集部行

切り取り線

愛読者サービスカード(6月号)

昭和39年6月20日までにおだし下さい
折り返し美しいS写真(大名刺型)を
1枚お送りいたします
(注)6月20日以後は無効になります

本号(6月号)で、おもしろかったもの
(小説・写真・絵その他せんぶのなかから)

1.

2.

3.

あなたがいちばん好きな作家の名

あなたがいちばん好きな画家の名

☆ご住所(わかりやすくお書きください)

☆お名前(わかりやすくお書きください)

切り取り線

「裏窓」を毎月確実に

お手に入れるために

☆☆☆☆☆☆☆☆
直接購読会員募集

▼三ヵ月会員： 九〇〇円

▼六ヵ月会員： 一、八〇〇円

▼一ヵ年会員： 三、六〇〇円

■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■○月号から三ヵ月分、とか、○月号から六ヵ月分、というふうには、はじめの号を、はつきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。

■直接購読会員には、写真の無料サービスをいたします。

三ヵ月～三枚 六ヵ月～六枚

一ヵ年～十二枚（手札型）

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓営業部」



愛読者のみなさまへ

▼このページにはさみこんであるハガキに、それぞれご記入の上、切手を貼らないで、ポストへおいれください。折り返し、美しいS写真（大名刺型）を一枚（密封の上）お送りいたします。

▼せっかくお送りした写真が、返送されてくる場合がありますから、住所氏名をわかりやすく、きちんとお書きください。

▼このサービスハガキの有効期限は、六月二十日までです。それ以後は無効になりますから御注意ください。

▼なおM写真のほうをご希望の方は、そのむね、ハガキにお書きそえください。

裏窓叢書

鋭意進行中

たいへんながらくお待たせいたしました。
ただいま――

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎・作
山田彬弘・絵

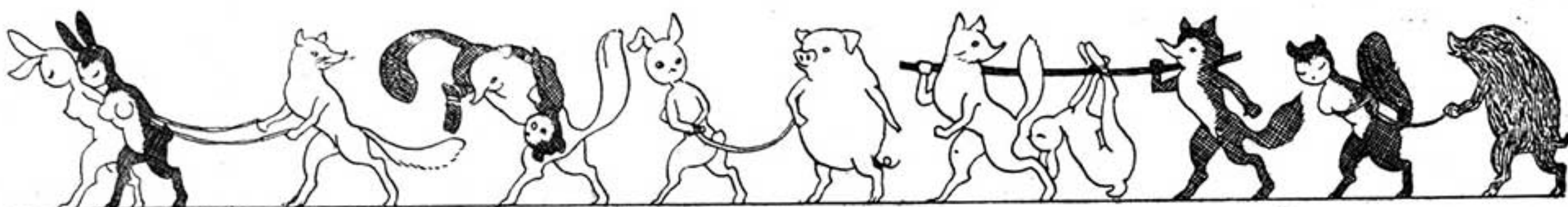
第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎・作
鬼頭 暁・絵

が、進行中です。自信をもってお贈りする
興味満点の長編サド小説です。

五月下旬に発行の予定。ご期待ください！





森志斐子の

小説「墓の城」

森志斐子氏の小説「陳述書」におけるレスビアニズムを、昨年秋ごろの本誌でとりあげたことがあったが、その森氏から、レスボスを扱った別の作品「墓の城」の惠送を受けた。

レスボスを扱ったといっても、それらしい描写は、冒頭七、八枚と、終り数枚ほどであって――

この小説の主人公久賀子は、司識という絵描きの愛人がある。久賀子の現在と幻想の世界を二分してひとりでうけもち、りっぱに男役を果たしている、といった女である。

司識は久賀子を含めて、幾人かの女を同時に泣かすこともやっつけのける。人妻とも関わりをもってその夫と堂々とわたりあい、刃傷沙汰にもなったことがあった。その結果は、敗北したのは夫の方で、その妻はある時期、司識に召使い同然に献身した。

そうした女たちをなだめる常套手段を、司識は知っている。男がするように、金や品物で女の涙を干すばかりではない。骨太で扁平な中性的な胸のなかに、女の頭をかかえこんで、女の渴きをたちまちうるおすのだ。そこには性別不明の魅力があった。

久賀子は、男につきまとわれた経験も、いくどかあったが、彼女にとって、男はどの男もおなじようにつまらなかった。

男は司識とちがって、女のからだのほかに、かならず女のたましいを要求する。ふしぎなほどに、ないものねだりをする。それゆえ久賀子は男を信じることができない。司識の魅力に、男は遠くおよばないのだ。

製作中の司識には、久賀子は飼いい猫とおなじくらいの重さしかない。

「奥のベッドで休んでおいで。じきに行つてあげるよ」

赤い虹の立つ視線で、そう一言いうきりだ。久賀子はすなおに奥

に消える。そしてベッドカバーの上にあおむいて、かならず三時間は時計の秒針と戦わねばならぬ。待ちに待ちつかれて、帰りじたくをしているところに、司識が現われる。霊験あらたかな救世主のように……。

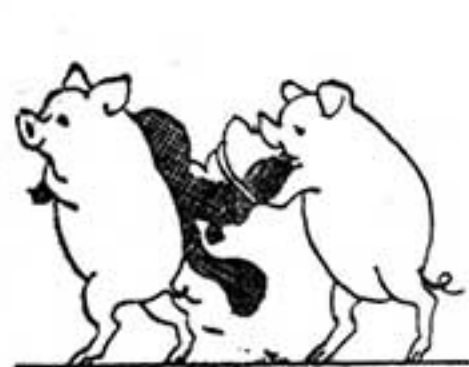
この屈辱に、久賀子はまたも蒼ざめる。が、次ぎの瞬間は、麻痺のなかに体を埋めている。司識のベッドは、久賀子にとっては、痛みを伴なう手術台であった。

――うんぬんと、あって、「陳述書」の場合とおなじく、レスボスにおけるサディズム（この場合は精神的な）があつかわれていることに、興味がある。

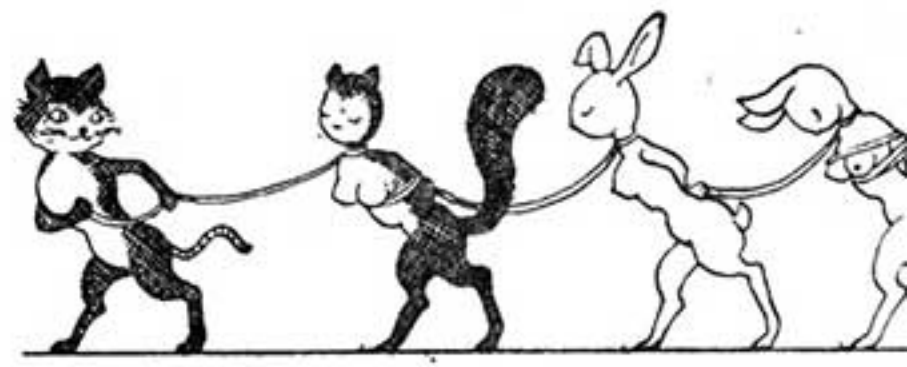
なお、この作品とともに送られてきた森氏からの手紙のうちに、次ぎのようなことが記されていた。

「私は女の学校の寮にすごした経験をもっていますが、私くらいのものは、夥しい数の女子学生のみな味わたたものです。

その私がレスビアンとしてある



裏窓タウン



いは通用というのもおかしな限りですが、ノイトラールは私の憧れですし、文明文化と共にホモが拡がって行く道理を強調したいと思っています。私生活にはそれこそ、五人のあり方があるという良識の下に、私はこれからもレスボスを書いてゆくつもりです。そこには、孤高があり孤絶があり、より人間の本質が知や情と結びつく必然を持っているように私は思います」

(かびや・かずひこ)

日本製

「ブルー・ボーイ」

「週刊大衆」三月二十六日号の巻末に、「青い女体——本格派国産ブルーボーイ、フローレンス・バーニー」というタイトルで、四ペーシにわたる同一人のグラビヤ写真が掲載されている。

ブルーボーイとはなんのことかと思つて、説明文を読んでもみると、それはいうところの人工女性、つまり男性から女性へと性転換の手術を受けた者をいう新語らしい。

ここに紹介されているフローレンス・ハニーなる「ブルー・ボーイ」は中国奉天の生まれで本名藤野ナオミ、こんど東京渋谷のテートルSSに初のお目見得した、十二歳のヌードダンサーとある。

少年時代から女装することが好きで、学芸会や演芸会で女形で踊るのを得意としていたが、十六歳のとき家出して、あこがれの踊り子となり、さらにまた三年後には、心身ともに「女性」となるべく、転性の手術を受けた。

その後は「金髪ヌード・ダンサー」のふれこみで、名古屋から関西一円を踊って廻り、真正の女性でおしとおして、だれもそれを疑わなかったが、こんどの東京出演を機会に、国籍や本性を明かにして、「日本産ブルー・ボーイ」と名乗りをあげることになった、ということだ。

身長一六二センチ、バスト九〇、ウェスト五六、ヒップ九六といひすべてまったく生まれつき——つまり、女性ホルモン注射などによ

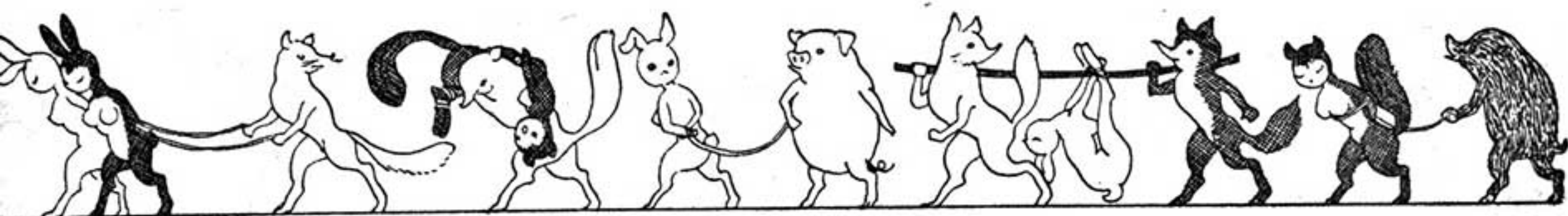
るものではないそうナ。なるほど写真で見ると、造作の大きなふっくりした顔と豊胸豊臀をもった美人(?)である。が、ただ腕と脚の線に、ややごつい感じが窺われる。

記者はこのような人工女性を、二人ほど知っている。その一人は日本における人工女性第一号として、ジャーナリズムに喧伝された永井明子(本名明雄)で、ゲイバー湯島で会った。

彼は昭和二十五年の八月に転性手術を受け、人工のシャイデも挿入したということだったが、記者と会ったときは、そのシャイデが手術後まもなく萎縮して、用をなさなくなったことを嘆じていた。

また、つねに女性ホルモンの注射をつづけていないと、鼻下やあごにひげが生えてきて困るとも言っていた。

他の一人は、この道の人の間では知られているSという人工女性で、太田典礼医博の診療所で見ることがある。



ふさふさと肩まで垂れたブルーネットの髪をもった、堂々たる体格の女性(?)である。この人は

男根とホーデンの除去の手術だけで終ったが、本心はやはり人工シヤイデがほしいらしいという、太田博士の言葉であった。

いや、人工女性の彼女らはいずれも、卵巣をも、子宮をも、みずからの身体にほしいのではなからうか。
(かびや・かずひこ)

型からはみでよう

とする欲望

毎日新聞夕刊の文化欄に「われら日本人」という読みものが連載されている。

三月二十一日は「身上相談の進化」というテーマ。(筆者は鶴見俊輔)

身上相談というのは、明治十三年二月五日に創刊された「交詢雑誌」に、はじめて現われたそうである。それから、大正、昭和、大東亜戦争、戦後、現在に至るまでの新聞雑誌の「身上相談欄」の変遷を、

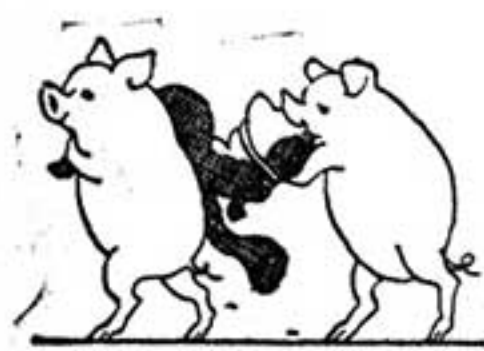
要領よく紹介、分析している。

なかで、つぎの箇所が、興味をひく。以下は抜すい。

——社会学者見田宗介は、昭和三十七年度一年間の身上相談三四件を分析して、それらのあわせ写真として、現代日本人の不幸の類型を推定した。この三〇四件の中で、類型の代表例としてえられていているのに、つぎのような投書がある。

「私」は、六人きょうだいの二女で、十年前に結婚して福島県に住んでいる。実家は東京にあって、両親と長兄夫婦とその子どもと末弟との六人ぐらし、父は五十七才、酒もタバコもたしなまず、定年まで一日も休まず会社につとめた努力家。自分は高等小学校出だが、こどもの教育には熱心で、二人の兄は大学をおえ、二人の弟も高校に在学中。みんな幸福にくらしているが、ただ一つの悩みは父のことである。女性関係は全然ないが、女性用の下着を身につけた

がり、年をとるにしたがってはつきりしてきた。兄と母は、その下着を十枚ほど焼き捨てた。すると父は二日も口をきかず、食事もうくにしなかった。父は退職後、恩給を全部家にいれ、兄から毎月千円のこづかいをもらっているが、この頃は赤い下着を集めるので心配している。これほど個性的な仕方、明白率直に問題を書きあらわした例は明治、大正期にはすくない。同時にこの例は、現代日本に典型的な不幸の形でもあるのだ。日本の社会に特有な大企業と中小企業、学歴組と学歴なし組との二重構造のつくりだした不幸の表現である。この父親は、若い大学出の社員の下積みとなって、おとなしく働いて定年をむかえた。せめてこどもには学歴をあたえたいと、酒もタバコもまず、女性関係もなくお金をためて、こどもには教育をあたえ家をもたせた。その彼が女性用の下着をつけていることを、同僚のだれが知ろう。妻



裏窓タウン



と子に下着を焼き捨てられた時、おとなしいこの人が二日も口をきかなかったことはこれにかけた彼の情念のすさまじさを思わせる。

わくのきまった社会で、きめられた型どおりの仕事をしているこの模範的社員の心の底には、型からはみでようとするこのような欲望が、つねにめざめているのだ。

赤い下着という記号の中に、現代の日本社会に対して彼のもつ不満のすべてが、同僚や妻子に語りぬものまでをふくめて、こめられている。

こうした訴えをきいた時、明治大正期の身上相談回答者ならば、お父さんによく話して、そういう不道德なくせは一日も早くやめてもらいなさいと答えたであろう。しかし、戦後の回答者小山いと子は、そうは答えず、父親のくせを一種の安全弁として理解するように、こどもにすすめている。

戦前の回答者、元警視總監、丸山鶴吉、元内務官僚前田多門、評論家松岡洋子、山田わかが、断固

として一すじの道をさししめて答えた。としたのとちがつて、戦後の回答者岡部伊都子、梁雅子、富士正晴、宮城音弥は、まず投書者の問題に、投書者とは別な見方もできることを教え、いくつかの取りうる道を示し、それらを実現するための技術をつたえる。

回答者の多くは苦労人であるが、苦労した自分のいうことだからまちがいはない、この道を断じて進めとはいわない。

電話による身上相談という新形式も大阪放送にあらわれて人気を得ている。テレビでは、都蝶々・南都雄二が漫才の形を借りた身上相談を演じて、戦前には考えられない新しい空気を身上相談の歴史にもたらした。かれらが離婚してから協力して「夫婦善哉」というこのプログラムを続けていることもおもしろい。かれらのもった挫(ざ)折が、身上相談の回答者としてのすぐれた資格をかれらにあたえた。

——以下略。

(中)

四人姉妹奮戦記

三月十七日午前一時すぎ、東京都八王子市の越田純子さん(三十歳・仮名)宅のフロ場の窓から、黒いセーターをきた男が押しこみ奥の八畳間に寝ていた四人姉妹のうち、二番目の良子さん(二十八歳)をやり起こした。

良子さんが悲鳴をあげたので、ほかの三人も目をさました。すると男はふるえ声で、

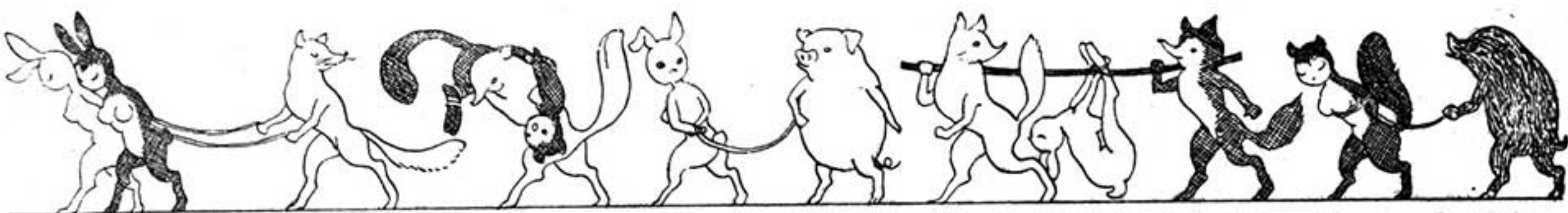
「しずかにしてくれ」

と頼みこんだ。純子さんが電灯をつけようとして立ちあがると、男は「あかりをつけないでくれ」と、あくまで弱腰。

三番目の友子さん(二十五歳)が、そのようすをみて、「覆面をしてこないと、人相がわかっちゃうじゃないの」

と、からかった。四番目の広子さん(二十二歳)が、

「みんなでつかまえましょう」と、姉さんたちに誘いをかけて男を取り巻いた。男はすっかりち



ちみあがり、ちいさな声で、

「……金……金……」

と、どもるばかり。

純子さんは、これ以上からかうとあぶないと思って、ハンドバッグから千円札をだして渡すと、男はそれをひったくり、あわてふためいて勝手口から逃げていった。

——というニュースで、さながらテレビドラマの「男嫌い」をみているよう。

(南)

イギリスでも

同性愛激増

先月号のこの欄で、アメリカで同性愛者が激増しているというニュースをご紹介したが、イギリスでもこのほど、ブルック内相が議会において、

「イギリスでも同性愛がものすごく増えている」

と発表して、問題になっているそう。

ある議員の質問で答弁に立った同内相は、

「一九六二年の同性愛者の数は、

一九三九年の三倍以上にふくれあがった」

と指摘し、その内容を、つぎのように説明した。

「一九三九年には、はっきりわかった同性愛者の数は、千百九十二人、そのうち五百九十六人が起訴された。ところが、六二年の同性愛者の数は、四千八百六十六人でうち千九百四十六人が逮捕され、起訴されている」

しかし、イギリスという国は、アメリカよりも同性愛の歴史は古く、さかんとされている。実際の数字はこんなものではあるまいし

起訴して処罰したところで、彼女らの同性愛がなおるものではない。普通一般の犯罪とは、その質も現象も本質的にちがう。

人間の性の深奥部からみついている性質のものだけに、善とか悪とか、不正とか正義とか、あるいは法律や常識で始末できるしろものではない。

政治屋さんや、教育屋さんや、または取り締まり屋さんたちにと

っては、たしかに、アタマの痛い問題にはちがいない。(聖)

東映映画

「ならず者」

ご存知アクション映画監督石井輝男の「ならず者」は、マカオまで海外ロケした国際ギャング映画で、主演は高倉健。

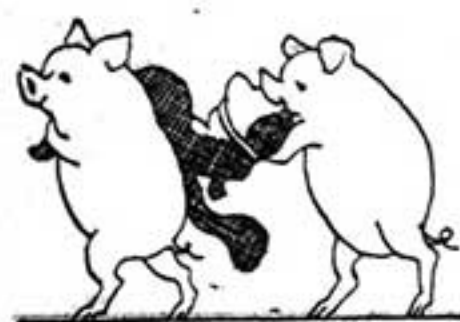
麻薬界のボスが安部徹。それを追う潜行刑事に杉浦直樹。

殺し屋の高倉健が、古アパートの一室にかくれているとき、胸を病む売春婦(南田洋子)とぶつかる。

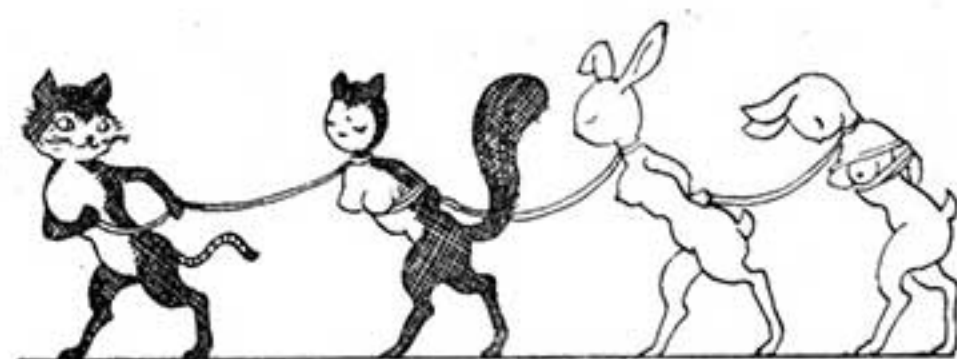
追ってきた杉浦刑事と拳銃を抜いてにらみあう瞬間、南田が突然かつ血して危篤状態におちいる。

刑事は、拳銃を高倉の前に投げだして女を介抱する。高倉は、そのすきに逃げだそうとするが、女のこと気がなつてうごけない。女は、たんをのどにからませいせいあえいでいる。

「彼女を救う手だては、のどにからまったたんを取ってやる以外に



裏窓タウン



ない」

という刑事のことばに、高倉は
はじかれたように女のそばにかけ
寄って、口で南田洋子の血たんを
吸いとるといふ、M的ショックキ
グシーンがある。

このシーンの撮影は、はじめ特
別製の「血たんジュース」を、高
倉が口にふくんで南田と接吻、そ
れを白いシーツの上に吐きだして
ごまかしたが、そんなことではど
うも実感がでない。

そこで監督の命令で、南田洋子
があらかじめジュースを口のなか
にふくみ、それを高倉健が吸いこ
んでシーツの上に吐きだすという
リアルな演技になったという。

南田洋子の口腔内であたためら
れ、さらに唾液をもまじったジュ
ースは、どんな味がしたことだろ
うか。

(南)

七十ミリ映画

「長い船団」

製作費六百万ドル(二十一億六
千万円)と宣伝する米英合作の七

十ミリ映画が、コロンビア日本支
社配給で公開される。

これは、ギリシア神話にでてく
る聖ジェームズの「黄金の鐘」を
めぐって、北欧のバイキングと、
回教徒ムーア人の戦いの物語で、
リチャード・ウイドマークがバイ
キングの首領のむすこにふんし、
その弟に、ラス・タムプリン。

ムーア族の族長には黒人俳優の
シドニー・ポイチア。その妻に、
このあいだ日本にきたロザンナ・
スキャフィーノがふんする。

監督はジャック・カーディフ。
クライマックスでは、乗ってい
た全長三十メートルの大船が沈没
し、ようやく砂浜にはいあがった
スキャフィーノが、たちまちムー
ア族に捕われ、どれい市場につれ
ていかれる。

健康的な肉体美をもつスキャフ
イーノが、全裸にされて、残酷な
競売にかけられるというS場面。

このほか、海神にささげられる
処女のいけにえシーンなどもあつ
て、大画面いっばいに通俗時代活

劇が展開する仕掛けである。

勅使河原プロ

映画「砂の女」

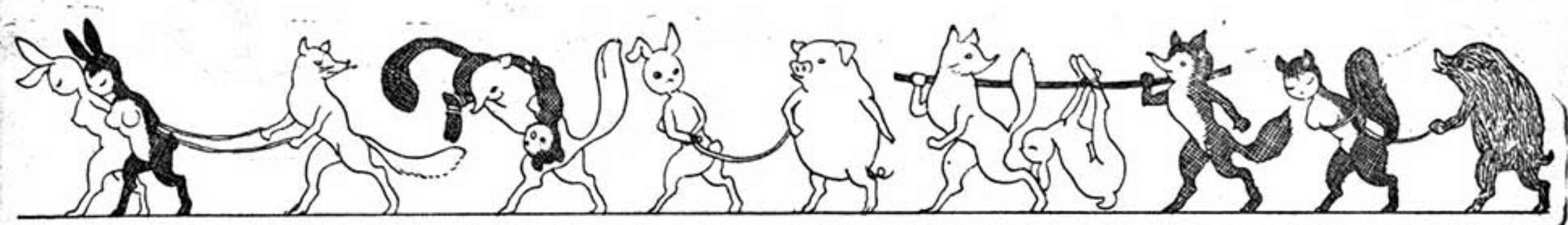
公開される前から、ずいぶん評
判になり、騒がれた映画である。

原作・脚本が安部公房。

監督・勅使河原宏。撮影・瀬川
浩。音楽・武満徹。

主演は、岡田英次、岸田今日子
と、三井弘次がおもしろい。

八月のある日、一人の教師が三
日間休暇を利用して砂地に棲む昆
虫を求めてある砂丘地帯にやって
来た。しかしその日は求める虫が
捕えられぬまま、やがて夕暮とな
り村人の世話で砂丘の部落のある
家で一夜を過ごすこととなる。そ
の八家Vというのは、蟻地獄のよ
うな穴の底にあり砂に蝕まれた破
屋であった。そこには意外にも艶
かしい三十前後の女が一人住んで
いた。ささやかなもてなしの後、
夜更けて女は労働にとりかかる。
その八労働Vとは休むことなくう
ち続く砂の浸蝕から家を守ること



であり、そして砂搔きがここでは生活の全てなのだ。

翌朝目覚めた男は素裸で砂にまみれて寝ている女を見、苦々しい思いで帰り仕度をし、家の外に出る。しかし、崖には昨夜使った縄

梯子は消え失せていた。驚ろいた男は女を起こし詰問するが、女は既に承知のようであり男は初めて自分が砂搔きの働き手として囚わ

れた事を知る。女はこの部落全体が砂という同一の敵により固く連帯している事を説明しようとする

が男には納得出来ない。囚われた男は、必死に逃げる努力を開始する。男は砂を掘り進み脱出を計る

が、しかしあまりに無謀な砂に対する攻撃は簡単に失敗する。男は女を縛り上げオトリにして逃げる事を思いつくがこの計画も渴きの為に挫折する。

——というのが、前半のストーリー。

岸田今日子は、まず、さるぐつわをかまされ、てぬぐいで（タオルか？）うしろ手に縛られる。手

首だけであるが、リアルに縛る。

そのまま、畳の上どころがされたまま、数時間をすごす。ぐったりと疲労する感じがよく全身にあらわれる。

さるぐつわをはずされたとき、口のなかに、もうひとつの布きれがつめこまれていて、それを吐きだしたあとの岸田今日子の顔面の演技がうまかった。

唾をすっかり布きれに吸いとられ、口のなかがカラカラに渴いたという状況である。（重）

吉行淳之介・著

「砂の上の植物群」

昭和三十八年一月から十二月まで「文学界」に連載された小説が一冊の本にまとまって、ねだんは三百八十円。文芸春秋新社発行。

批評家の奥野健男氏の推せん文を要約すると、こんなぐあい。

——ほくがこの作品に注目したのは、日本文学には珍しく『性』全体が豊かに、深く有機的に表現されていることである。性の内包

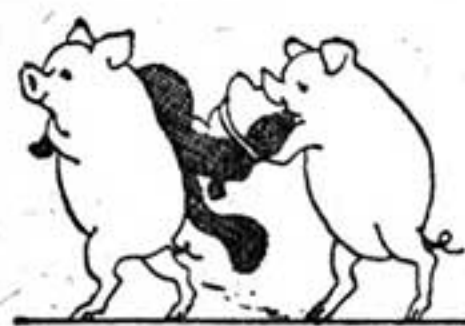
している多様性、意外性、宏大さ奥深さに触れている点にある。

作者はここにおいて自ら痴漢と化そうとしている。自ら意志して光栄ある性的頹廢者、不徳義漢の座につこうとしているように思える。そういう意志が、この作品には見られ、それがこの作品を緊張度の高いものになっている。作者は自ら痴漢を宣することにより、定型化され、規格化された現代日本の『性』と道德の支配のもとに貧困になり追いつめられた『性』をその本来持っている多様で奔放で無規則な姿として復権させようとしている。

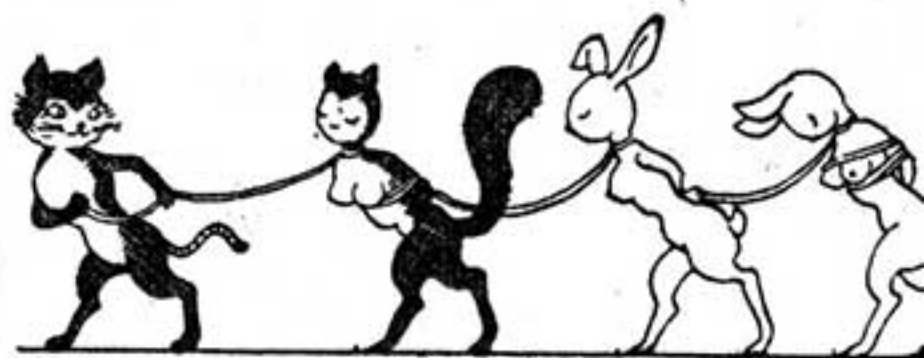
しかし、わが「裏窓」の読者には、それほど「緊張度の高い」作品とは思われまい。

とくに異常性愛場面の描写は、観念と空想と興味だけで書きつづった感が濃い。すくなくとも、実態からは遠い。むなしいほど、遠い。

主人公の名は、伊木一郎。化粧品セールスマンである。彼はあ



裏窓タウン



る日、ひとりの口紅をぬった少女に
あい、旅館へ行く。

少女は出血する。はじめてだったのだ。そのつぎに会ったとき、少女は「あたしの姉を誘惑してくれ」と彼にたのむ。彼はそれを承諾する。

それから、彼と、その少女の姉の津上京子との異常な愛欲がはじまる。

——露わになった腋窩に彼が唇をおし当てたとき、京子は嗔れた声で、叫ぶように言った。

「縛って。」

その声が、彼を反って冷静に戻した。

「やはり、その趣味があるのか。」

京子は烈しく首を左右に振りながら、言った。

「腕を、ちょっとだけ縛って。」

畳の上に、脱ぎ捨てた寝衣があり、その傍に寝衣の紐が二本、うねうねと横たわっている。

彼は、その二本の紐の端を結び合わせ、京子の左右の上膊に絡ませて、ふたたび引き絞った。京子

の両腕は一層強力な搾木となり、頭部を両側から挟み付けた。京子は、呻き声を発したが、それが苦痛のためか歓喜のためか、判別がつかない。

——
というような場面が、三、四回くりかえされるのである。(松)

山川方夫・作

「愛のごとく」

これは「新潮」四月号の巻頭に掲載されている短編小説。

前項でご紹介した「砂の上の植物件」における闇中の手さぐり描写とはちがひ、妙になまなましい描写で、そういう意味ではおもしろい。

——便所を出て、私はそっと鍵穴に目を近づけ、中を覗いた。心のどこかで私は真紅の血の海さえ予情していたのかもしれない。がせまくほやくた視野の中で、しだいに私の目にあきらかになってきたのは、こちらに尻を向けた、まるで芋俵のように縛られた細君の裸体だった。一本のやはり裸の男

の脚が、器用にその裸体をころがし、向きをかえる。(中略) 明る

い電燈の輝く八畳の整理簾笥の前に、細君は白い細紐でがんじがらめに縛られ、やや弓なりの姿勢で真裸でじかに畳にころがっている。充血したような赤い顔を仰むけ、うすく目を閉ざし腹を波うたせて喘ぐようにその唇が開いている。

——というような場面から、つぎのようなすさまじい描写もでてくる。

——(前略) 私は彼女をおさえつけ馬乗りになって、ありあわせのシャツやネクタイで女の手脚をかなり強く縛った。女は、それに異常なほどの興奮で反応した。肩を振りこまかく喘ぎながら目が据って、丸太棒のように蒲団をころげながら、女はシートにおどろくほどのしみをつくったのだ。……



1

目まぐるしいほどの、時の移り、流行のはやりすたり、そうして時間が経つ。新しい波々が次々にその次の波々を呼び、時代の風潮として押し寄せ、吹き過ぎ流れ去ってゆく。

波乗りの術に長じることが、処世の道に通じることなのである。

現実、現状とは、打ち返し揺れ動き、くだけ散る一波一波の呼吸音のように、あらゆる複雑な動きと反応の中に、寸時のすきもなく流動するものである。だから、処世の道に通じるためには、一進一退一上一下、波の目まぐるしい動きに遅れることなく、無心の捨小舟然として浮かんでいねばならない。

一日前の現実現状は、今日ただ今の現実現状とは既に違う。一月前になるとさらに違う。一年前、十年前、いや百年、千年、それは模糊として遠くに霞み去るほど拒たりがあるものである。

未来はどうか。既に明日のことは予測できない。天気図の見通しのように予断は許されない。明日の現実現状、一月後の現実現状、さらに一年後、十年後、いや、百年千年の遠きに渡る現実現状、そのときそのままの千々に揺れ動く波の呼吸音そのものをそのものとしてつかまえることはできない。『明日は明日の風まかせ』それがいわゆる波乗りの歌である。

といいながら、森羅万象流転変動のうちにありながら、しかもその遠くに渡る古今を通じ、動かないものがある。動かないものが、背骨のように、がっしりと波の動きの底に、横たわっているのを感じる。それを信じる。ともすると、今日ただ今の、目まぐるしい波の動きに眩惑され、とまどうあまり、ただ夢中に波乗りに狂奔す



■体当たりマゾヒズム論・24

ああ、平手打ちこそMの古典
ぼくは貴女の掌で打たれたい

水 尾 究

江 洵 晃 夫・絵

御料理

る。しかし、ふと、あるしじまがやってくる。その瞬間に思うのだ、信じるのだ。この動きの底に、厳然と強くたくましい動かざるものが存在することを。われわれが過去を恋い、未来を恋うるその心根が、動かざるものを思い、信じる心根から産まれ出ることを、われわれは感じる。それは過去であり、未来である。

×

過去と未来を通じる永遠なるものに、われわれを導き触れさせてくれる機縁をもたらししてくれるもの、それが古典であろう。古典は古きに立って、より新しい未来を歌ってくれる。かくしてここに、古典復帰への悲願ともいふべきロマンチズムが引き出される。

青春期に青年の心をゆさぶるものは、古典脱出のロマンチズムであった。それがその打ち返す波として、中年から老年に至り、今度は古典復帰へのロマンチズムを誘うのである。

古典とは、必ずしも芸術上の諸作品についての評価のみをいうのではない。古典としての観念もある。古典としての行動もある。古典的観念の思惟にささえられて、その行動もすこぶる古典的な古典的人間像というのものもある。

「かれは党と階級と人類解放の利益を防衛するために、敵と断固たる戦闘を遂行する。かれは『天下ノ憂ニ先ンジテ憂エ、天下ノ楽ニ後レテ楽シミ』苦しみには先頭に立ち、喜びは最後に受け——またかれは、患難の時には身を挺して進み、困難に際しては自己の最大な責任観を示し、富貴もこれをみだすこと能わず、貧賤もこれをまどわすこと能わず、威武もこれを屈す能わざるような——」

中国共産党の理論的指導者、劉小奇の『共産党員の修養を論ず』という一文の中の一節をとったものである。

ここにうたわれた人間像というものが、一見古色蒼然とした、い

かにも大時代な理想像であるとしても、そして今日ただ今の、いわゆる現代っ子、ということばで象徴される潮騒のさざめきにも似たかまびすしい風潮のただ中から見て、それがいかに時代遅れなナンセンスな人間像に見えようと、この人間は立ち騒ぐ波の底にあって動かない、一の古典として、つきくずそうとしてもくずせない、厳とした骨格を形成していることを否定はできない。

古武士的風格とは、こういう古典としての人物像をさしている。そしてわれわれは、古典脱出と古典復帰という二つのロマンチズムの振幅を往復する中で、この古典的人間に限りない浪漫的人間の夢と予見を、心のどこかで日々新たにその認識の度合いを深めざるを得なくなるのである。

2

マゾヒズムは既に古典である。マゾヒストは古典的人間である。これは今日ただ今の、現実的現象や現代風俗を形造る一要素ではない。そして現実的獵奇主義を追う、泡沫的人間の謂ではない。波の底に動かないもの、がっしりとした骨格を持ち、それが延々として過去から未来へ連らなることを知らねばならない。

今を盛りの泡沫出版物の、泡沫小説の、泡沫的人間がやたらにサジストだ、マゾヒストだのと銘打たれ、所を得顔に出没するのは、何とも言いようもないほど腹立たしい泡沫的現象であることか。

古典的人間とは、潮騒の騒がしさを外に、動かない人間である。それを言い換えれば、常規を逸した人間のことである。現実現状という潮騒の波に乗ることが、常規だとすれば、その常規からそれること、現実を越えるのである。人間においての、常規というもの

から踏みはずすことによって、人間を越え古典に生きるのである。コミニズムというロマンチズムが、コミニストという古典的人間像を待望し、要望するのも由なしとはしない。劉小奇が共産黨員の道しるべを、古典的人間像において説明しようとするのも、これまた古典的方策、古典的思考法と言わざるを得ない。古典はいつの時代にも、その時代を越えて、真に新しいのである。

つらいこと、苦しいことは真先に、愉快なこと、楽しいことは一番最後に、そうして富貴もこれをみだすことあたわず、貧賤もこれをまどわすことあたわず、威武もこれを屈すあたわず、しようようとして死に臨んでも微笑をもらす、最も古典的人間像は、現代におけるおとぎ話としてしか聞こえないかもわからない。

しかしこのおとぎ話は、実はいつの時代にも、民族、どの階級、どの個人の中にあっても、常に新しく生きているロマンチックな理想主義の花なのである。

これを冷酷な写実の目で見直し、人間の常規というものから判断するとき、この理想主義の花も、一片の空しい幻想上のあだ花として、雲中霧散するかに見える。苦しみは避け、楽しみは真先に、富貴は強力な誘惑であり、貧賤は人間をいやしめ圧殺し、威武は容易に人を屈服させる——これが人間の常規というものである。正常ということである。

ところが、われわれの心の中に生きるロマン的古典主義は、人間における常規に反逆させようとする。まるっきり裏返しにしてしまおうとする。国のため民族のため主義のため、莞爾として死に臨む自己犠牲は、それがたとえ何のためであるとしても、人間の常規から言えば異常ではないか。そしてそれが、そのように常規を逸した異常であるがゆえに、常規を越えて永遠に連らなるロマンチックな

古典を産むのではないか。

×

自己犠牲の喜びというのは、人間の常規からいえばうそである。真赤なうそといってもよい。そこでしたり顔の現代派のインテリたちが、

「赤穂浪士の討入り、というけれども君、あれは職にあぶれた浪士たちが、一か八かで仇討ちという大々的なPRをしたんだ。あわよくば好条件で再就職しようね」

なぞと言いながら、それなりの資料を得々と述べたてたりする。

しかし、そうしてそこに、赤穂浪士の真のありようが、まるで逆に裏返しにされて、学術的実証の裏付けによって証明されたとしても、牢固として抜きがたく育ったわれわれの心の中の、赤穂浪士に托したロマンを消し去ることはできない。

そのロマンは、しかし実はまるで常規を逸した行為と思考で満たされている。常規を逸することによって時代を越え、時代に抵抗し、古典として常に新しく再生されるのである。

再度繰り返していおう。

自己犠牲の喜びというのは、人間の常規からいえばうそである。異常である。本来はあり得ないことなのではないか。ところが、なおかつ古典的人間は存在し、われわれのイメージの中に、やはり厳格として生きる。

自己犠牲の苦痛が、ある微妙な境界を境に、喜びに満ちた充足感に移行する経緯は不思議である。その秘密のヴェールをすかして何が見えるか、このことを本当に説明しきることを、だれならばなし得よう。それを解くカギこそ、マゾヒズムではなからうか。

それはこじつけだ、と、あるいは言う人があるかもしれない。し

かし、それはあまりにもマゾヒズムを常規的に、狭義に解釈する人たちのはんばな意見だと思う。最も素朴な形の、原生的Mから、花開くがようにらん熟、その極に達したMまで、範囲と可能性は無限に広い。天下の大道で、とるに足らぬ馬方ふぜいに青タンを吐きかけられた神崎与五郎、公衆の前で、股ぐりのはずかしめを受けた鑑真の逸話から、飯盛山に果てた壮烈白虎隊の奮戦記に及ぶまで、その題材は幾変化にも富むのである。

明治天皇の後を追って自刃した乃木夫妻の、あの死に臨んでのしようとした自己満足は何であったのか。古典的人間像のイメージと、素朴な原生的マゾヒズムの出發がここに見られるのではなからうか。

3

話を本論に移そう。そしてそれを男女のことに限って進めよう。ぐっと近く、卑近な例で述べることにする。

一月三十一日の晩、テレビ界のホープ女優佐々木愛が、最近躍進著しい美女、山本富士子に、思いつきはおをなぐられたという、ゾツとするほどうれしい話である。場所はフジテレビのスタジオ、評判ドラマ△にこりえ▽の本番たけなわの一瞬である。

なんだ、それは芝居の演技じゃないか、ということはない。演技であろうとなからうと、山本富士子が思いきりなぐったことは事実なのである。それが演技の上でなされたことが、またうれしいのである。つまり、憎悪や怨恨を介することなしに、冷静な計算から恨みのない相手をなぐるということ——なぐったのが山本富士子であるということ——このことからくる興奮は、文句なしに簡潔で強

い。

家が貧しい下働きのため（佐々木）は、思いきって客をとろうとするが、山本富士子扮する酌婦お力につかまって「何て考えを起こ

すの。私みたいな女になっちゃいけない」と愛の平手打ちを食うシーンだ。

あまりの迫力に、某週刊誌がそれを取材して、佐々木愛に「なぐ



「られの弁」というのを聞き出して報道していた。佐々木は語る。

「あそこ、アップだからごまかしはきかないのよ。でも山本さんにぶたれたときは、あいたツと涙が出るほど痛かった。そしたらあとで、山本さんが私に抱きつくようにして「ごめんなさいね、痛かったでしょう。ほんとに許してね」って——。あんまりやさしくされて、こんどはうれし涙が出ちゃったの」

——今までも、役の上でだれかになぐられた？

「今までは男の子をなぐる役ばかり（と笑って）芸術祭参加ドラマの《嘘と嘘》（関西テレビ）では高橋元太郎さんを、《私はもう歌わない》（RKB毎日）のときは杉本孝治さんを、私がバチーンとやったのよ。それが今度はサカサマ、だけどおフジさんが相手ですもの。ぶたれて本望」

——あのととき出たのは、ほんとの涙？

「そうよ。だから感激しちゃったの。それにぶったのは、お芝居だから、何もおっしゃらないでいいのにね」

なぐられて本望、という佐々木愛の感想はもう既に倒錯者の本望ということの、入口へ一步踏みこんだ立場にあつての感想である。常規を逸す喜びが、常規を逸することによって彼女を捕えたのだ。

——おれもなぐられてみたい——じょう談めかして大方の読者はそう言い、思うだろう。それをじょう談と思いながら、そして半面で真剣である。

マゾヒズムは、こうして広く大きくその入口を大衆のためにひろげてくれるのである。

この大きく広い入口には、本当はだれでもつい気軽にはいつてくる、なじみやすいものなのだ。しかし、入口が広く大きく、つい気軽に立ち寄ったとしても、それは常規という本道ではない。少し本

道からそれることになる。被虐の快感は、やはり加虐の快感という本道に比べると、脇道にそれたことになる。なぐられるより、なぐちながらも、つい、おれもなぐられてみたい、と、まるっきりのじょう談でなしに思ってしまうのである。ここから実は神話が始まるのだ。古典が産まれるのだ。

大抵の人は、ほとんど入口をサッと見ただけですぐ本道に引き返してしまう。それだけだと思つて引き返してしまう。その奥を見ようとしない。だれも見えないその奥を、しかし見事に生きた人が居た。なぐられるどころか、殺されること、死ぬことが本望という、とんでもない逆説である。莞爾として死地におもむく武将の誠に古典的な英雄主義は、虎穴のさらにその奥に生きることによって、逆に本道を貫いて照射するものである。

殉教者がそうであつた。国のため民族のため階級のため主義のため、あるいは友情や信義や愛のため、喜んで死んだ人たちがそうであつた。

山本富士子になぐられる喜びが、入口の奥に幾曲折して、思いもかけないところで、思いもかけない時期に、吹き上げる噴湯として虹の花を咲かせる。それがあらゆる民族、あらゆる階級の伝説となり古典となる。古典的人物像は、男性主義のシムボルだ。男の中の男がこの夢の中に生きる。マゾヒズムは、最も男性的な、最も男らしい古典的伝説だ。

4

人間関係を、大ざっぱに言い切ると、隷属被隷属の形で大抵は説



明しきれる。隷属・被隷属を端的に証明する最も素朴な形が、なぐ
る、なぐられるの図式で捕えられる。一方が一方的に、勝者として
隷属者に隷属の意識を喚起させる、殴打によるものほど簡単明りよ
うなものはない。

殴打には素手でやるもの、器物を使ってやるもの、第三者にやら
せてそれを見るもの、この三通りに大体分かれよう。

素手の場合の代表的なケースが平手打ちであり、器物による場合
と、第三者にやらせる場合との代表がムチ打ちということである
う。そこで平手打ちとムチ打ちと、どちらがどうであるか、のテー
マがここで産まれる。

ムチは、いうまでもなく、マゾヒズムを説明するには決して欠か
せることのできない小道具ではある。しかし、ムチはそれほどまで
にマゾヒストにとって万能であろうか。

マゾヒズムということば自体は外来語である。マゾヒズムという
観念形式も舶来ものである。ひどくハイカラな思考法である。そこ
で、パンやバターが紹介されるがように、ムチが紹介された。ムチ
というのも、舶来物の観念形式と同時に、コミで輸入されたアチラ
ものである。その過程の中で、ムチは完全にマゾヒズムにおける主
役になった。ムチがなければ、マゾヒズムは説明できない、という
ほど強力な主役になった。

ムチに比べると、平手打ちはいかに非力で劇的な見ばえがしな
い。しかし、ここでマゾヒストの中に、観念派と現実派の好みの分
かれる微妙な境界線が意識されてくる。マゾヒズムが、マゾヒズム
という舶来的観念である間は、ムチは主役である。それが日常的生
活感覚と直結する現実派になると、逆にムチではまどろっこしくな
るのだ。ムチはムチのための舞台設定が必要なのだ。それが待てな



いのだ。設定されたとしても、何かバタくさい或る種のソラゾラしさが、どうしてもムチの場合はつきまとして離れない。

現実派にとっては、マゾヒズムは輸入物ではない。もうすっかり、日常性の中に、生活感覚として溶けこんでしまっているものでなければならぬ。この場合、ムチを待つ間がもてずに、いっそ簡単に、身につまされた形の平手打ちの現実性の中に、より強い身近な具体的なMの感動が誘い出される。

ムチを振るうおフジさんにより、佐々木愛を平手打ちするおフジさんに、いっそう強く誘発されるのである。

×

東映映画『続・人生劇場』で、佐久間良子が鶴田浩二をひっぱたく場面があった。あの平手打ちも思いきったものであった。細い白いなよやかな佐久間良子の指先がしなうようにして鶴田浩二の顔面に食いこんで、パシッと派手な音がした。何と感動的なシーンであることか。

演技は真剣であるべきである。このくらいの迫力は当然であろう。従来、ともすると、ただおさなりに、軽くなでる程度の平手打ちしか見られなかったものだが、もうそんな甘やいだ演技では観客はついていけない。女優は今こそ、平手打ちにハッスルすべきときであろう。

調子が出なければ、何度も何度も平手打ちの猛烈なりハッサルを繰り返すべきであろう。リハーサルの場合は、リハーサル用のなぐられ役のアルバイトを使い、女優さんはこのときとばかり、自分の腕力の限界いっぱい、調子をあげてみるとよい。アルバイトは、安い日当であっても、列をなして殺到するであろう。

平手打ちの白眉は、往復ビンタの連続打ち、旧軍隊ではよく行な

われた。これを人気女優にやらせたらどうであろうか。残酷なリンチのシーンで観客を呼ぶのもよいが、クローズアップでごまかしがきかない状態にして、佐久間良子や山本富士子が、渾身の力をこめての往復ビンタ連続打ち、相手男優の顔面はミミズばれになり、ハナ血が吹き出し、というのが本番で見られたら、これが評判となつて劇場は満員となるであろうに。

ムチ打ちもよいが、平手打ちは地でゆける。ごまかしなしでゆける。実感から異様な迫力がうまれるのではないか。

5

新宿・文化劇場の裏通り、Yというトルコ風呂にはいった。このときは、もうのっけから、「女の子になぐられたい、なぐってくれ、る子はいないだろうか」と、受付で申し込んだ。受付嬢は、出勤簿の名前を見渡しながら、サアテ、というふうには頭をかしげた。

ほくの申し出を、おかしいこととか、異様なこととかそんな詮索がましい態度では受け取らなかった。

もっとも、トルコ風呂によつては、こういう申し出は、変態じみてるといふことで、まともに相手にしてくれないところもある。そこはやっぱり臨機応変でゆかねばならないだろうが。

横から、背の高い黒服のボーイ氏が、窓口をのぞきこむようにして、この子がいいんじゃないか、と、受付嬢が広げた名簿の中の、ひとりを指さした。

三階の部屋に通されると、すぐにボーイと入れ違いに、トルコ嬢がはいってきた。たくましい女であった。何とも屈強な女である。彼女は、こういうことには慣れきっているもののようにであった。

「お客さん、道具は何にする？」

こう言つて目の前に突っ立った。肩から腕にかけて、筋肉が盛り上がっていた。ほくはデバナをくじかれた形であった。おずおずとその偉大な筋肉に見とれてみると、

「いいからだでしょ。元、プロレスやつてたの」

と女はこともなげに言った。そしていらいらしたように、

「早く決めてよ、時間がないわよ」

とせき立てながら、部屋内の洋服ダンスの戸をあけた。洋服ダンスはいいが、中に下がっていたのは洋服でなくムチであった。三、四本ばかり、ぶら下げてあったようであった。

振り返って女はニヤリと笑った。

「へえっ、ムチがちゃんとあるの」

備えが良すぎるのにあきれると同時に、女のたくましい体つきに、気押されるような圧迫を感じた。

「ぶたれたいというお客さんが、たくさんいるんだね」

というと、女は、

「どこがいいのかしらんけど、物好きがいるのね、あんたもそうでしょ」

事務的に言った。

二言三言、女が言うところでは、客の好みはさまざま、ムチがいもの、竹の棒がいいもの、中には金ドライでなぐってくれ、というお客さんもあるという。それから草履に下駄、——あんたはどれにする、早く決めてくれ、というわけだ。

ほくはすっかり氣勢がそがれた。半分おじけづいてもいた。「なぐることは好きか」と問うと、女はどうでもいいというような投げやりな調子で、「さあ、やってくれっていうから、ただやるだけ」

ぶつくさと答える。

味気ない気がした。ぼくは途中で自分の目的を放棄した。何にもせずに、五百円のチップを置いただけで、逃げるように退散した。

×

池袋のIというトルコ風呂では、はいる時フロントに「きれいで気の強い子を」と頼んだ。そうそうどこにでも、行く所行く所で、「女の子からなくられたい」と吹聴して歩くわけにはいかない。やはり部屋に収まってから、直接交渉といく場合のほうが多い。

部屋に入って女の顔を見ると、まずまず十人並みの下というところ、ぜいたくいっちゃいけない、ここらが妥協のしどころというわけで、なぐってもらうためのじか談判。

「本当だよ。なぐられるのが好きなんだよ」

という女はひざを乗り出した。

「友だち呼んできてもいい？」

「ひとりよりふたりのほうがなぐりいいか」

「そりゃいいわよ。安心だもん」

何が安心だか、ともかくこちらにしても女ひとりよりはふたりのほうが刺激がある。早速オーケーして、その友だちなるものと呼んでもらう。

戸口のところで、女同士、クスクス笑い合う声がきかれる。そして「連れて来たわよ」ということで、部屋の女がはいってきた。後から、オズオズと、半分警戒ぎみでもうひとりの女が顔をのぞかせる。

「平気よ、あんたこっち来なさい」

部屋の女が呼びこむ。

「ほんとにぶつていいのね」

思いなしか女の目は輝く。まずスリッパをもって振り上げた。もうひとりの女はニヤニヤ笑いで見ているだけだ。しかし、それが平手打ちに変わるとその女も立ってきた。

「いっぺんだけなぐってみようかしら」

それからふたりの女の乱打になった。スリッパの裏で、なぐられるより、平手打ちのほうが音も派手で感じも出る。なぐってるうちに、女たちも次第に、本気になって興奮したようだ。

小道具も何も使わない最も素朴な平手打ち。

平手打ちがマニヤにとっては、あまりに素朴すぎて刺激が少ないかもわからない。

しかし、すべからく古典に帰れである。掌の肉が、直接はおの肉にぶつかって、ピシッピシッと立てる、あの往復ビンタの小気味よさ！ なぐるほうもなぐられるほうも、リズムカルなタイミングの良さに十分酔えるのである。ことさらマゾヒズムという必要さえもない。舶来的観念の、未消化な部分を残すもどかしさもない。日常風俗の中に溶けこんでしまった気やすさがある。

「なぐられて本望」このさりげないことばの中に、最も簡潔で強いマゾの原型と、古典主義が隠されているのではなからうか。



読者原稿に描写された

クライマックス場面集



赤い月夜

赤木 恵 介

秋 吉 巒・絵

赤い月が、窓から見えていた。部屋のなかを、うす赤く照らしていた。二階である。

「信和さんのお部屋から見る月は、どうしていつも赤いのかしら？」

「都会の月は、みんな、ああいう色をしているのさ。さあ、ねえ、こっちへおいで」

コップ一杯の血をバケツの水のなかへあけて、そのうめた血をざあッと流したような色のベッドのうえに、信和は丸太のようにねそべった。窓は、あけっぱなしだった。

良子が、その横に寄りそったとき、猫が鳴いた。

「あら、チコね。あの猫、まだ生きているのね」

信和が良子とくちびるを合わせたとき、猫のチコは、良子の足首に爪をたてた。

良子は悲鳴をあげて起きなおり、その足でチコを蹴った。

チコは、まりのように宙を飛んだ。窓から外へ飛びだした。二、三秒後、ぎゃあッという、地面にたたきつけられた猫の音がきこえ

「晩春の夜って、なんとなく、いいな。解放的で、けだるくて、人間の世の既成の道德がとほうもなく、ばかばかしく思えて……」

信和が、投げやりな口調で言った。

「そうね。怠惰な季節ね。風がこんなにもなまぬるい」

良子は腕をあげ、額の汗をふいた。

「今夜は、ぼくのアパートでとまれよ。ホテル代がもったいない。公一君が出張旅行から帰ってくるのは、あさってだろう。だまっていれば、わかりやしないよ」

信和は、軽く言った。

「そうね。そうしようかな」

良子も、軽くこたえた。

噴水の水が、とまった。噴水を七色に染めていた照明も消えた。ふたりの目の前に、闇が、いきなり、おおいかぶさった。

「帰ろうか」

と、信和は言っ、良子の手をとった。やわらかく、すべすべした手だった。

六畳の和室に、ベッドがひとつ置いてあった。それだけの部屋だった。

「男くさいわ」

「ぼくひとりだけの部屋だからね」

た。

信和は、ベッドからはねおき、窓の手すりにつかまって、外を見おろした。

「うごかない。口から黒いものを吐いてる。死んだらしい。きみが殺したんだ」

信和はふりかえり、ベッドのうえの良子をにらみつけた。まるで俳優のように。

「すごいタイミングだったわ。あたしの足が猫を外へほうりだしたなんて、とても信じられない」

良子は、青ざめていた。

「ぼくのたいせつな猫を、きみは殺した」

信和は片頬をひきつらせた。

良子の肌につけているのは、白いスリッパだけだった。そのスリッパの裾から、ふとももがむっちりした白さで盛りあがっていた。

胸からは豊満な乳房が、ブラジャーを突きあげていた。スリッパの紐が片方はずれている。肩から二の腕にかけて、脂肪のよくのつた肉づきが、まるまるとおきだしていた。

信和は、押入れのなかから、一束の縄をつ

かみだした。今夜の芝居がはじまるのだ。

「この縄の味を、きみは知っているはずだ」

良子は、口をまるくあけてあえいだ。その両腕を、信和はうしろ手にしばりあげた。

良子の抵抗はよわよわしかった。縄はやわはだに、容易にくいこんでいった。肉は縄を噛んで、うめくように鳴った。

くくりつけた手首を、肩甲骨のうえまで吊りあげた。首縄をかけると、のどがしまる。

手首と首縄を直結したために、背の両腕は高く吊りあがったまま、ゆるめることができない。

良子は、畳のうえに、ひざをくずして坐った。あらい息をかくそうと努力していた。

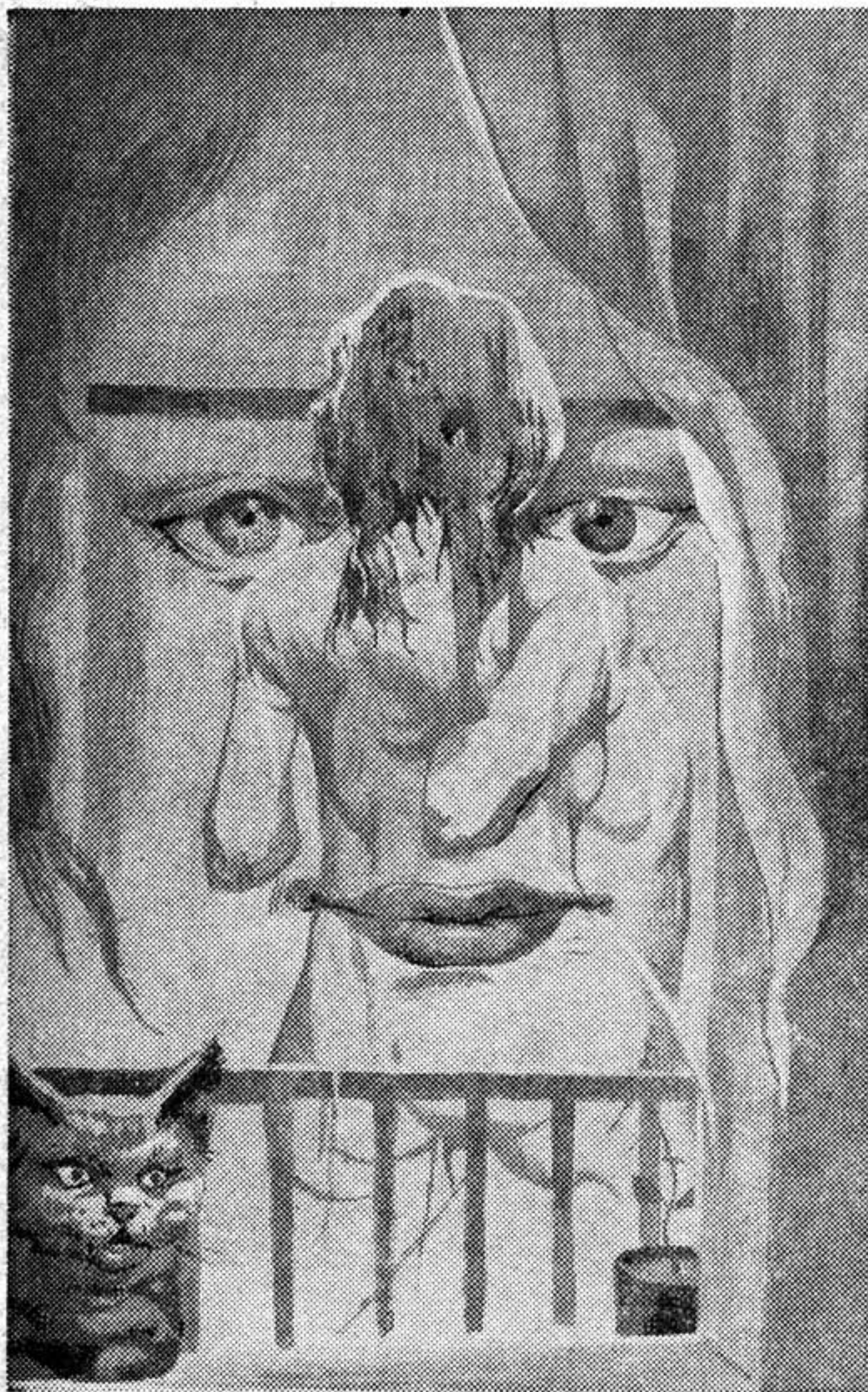
「公一君は、こんなこと、しないだろう？」

信和がいった。良子の正面に坐り、凝視していた。スリッパの胸から、乳房が半分ほども縄にくばれて顔をだしていた。くびれたために、異様なかたちの隆起になっていた。

「あのひと、夜は、とっても、淡白なの」

良子は、消えいるように、ひくくいった。

良人の名を信和にいわれた瞬間、良子の全身が羞恥に燃えた。腰を、もじもじとさせ、ほそい胴をくねらせた。全身で、なにごとかを、訴えているようだった。



「だから、あるとき、ぼくは言ったんだ。公一君と結婚したって、きっと後悔するぞ、とね」

信和は、口で良子をなぶっていた。裏切つてほかの男と結婚した女だ。幾夜つづけてなぶっても、おれの心はおさまらない。

「だって、公一には、お金があったもの。結婚して、大きなお家に住んで、ぜいたくできるなんて、二十二歳の女にとっては、魅力だったわ」

良子は、すがるような目つきをした。

あわれみとも、冷笑ともつかぬうす笑いを信和はうかべた。

押入れにあたまを突っこみ、もう一束の縄を取りだした。

「この縄で、こんどは足をしばってやる。あぐらをかかして、足首をぎりぎりしばりつける。そして、その縄じりをお前の首にかけ、ぐいぐいひきしほる。お前の背中は前に折れまがる。海老しぼりだぞ。おれを裏切って、公一君のところへ行った罰だ。いいか」

信和の口調は、芝居めいていた。

「いいわ。どうぞ」

わるびれず、良子はいった。わるびれるどころか、期待しているようでもあった。

良子は、うしろ手にしばりあげられている



不自由なからだを左右にゆするようにして、二本の足を前にだした。重い石でも背負っているような格好だった。それから、ひざをまげ、足首を前で交叉させてあぐらをかいた。

「よしよし、素直だ」

信和は、その二本の足首に縄をまわした。しばりあげておいて、上に引くと、足首が畳からはなれて宙に浮いた。

良子のしりが、べったりと畳についた。

上に引いた縄を、良子の首のうしろにまわして、それからまた足首におろした。良子の顔が、じりじりと前に折れまがり、足首に接近した。

自分の腕を、たかだかと背負って、まるでかたつむりのような格好になった。

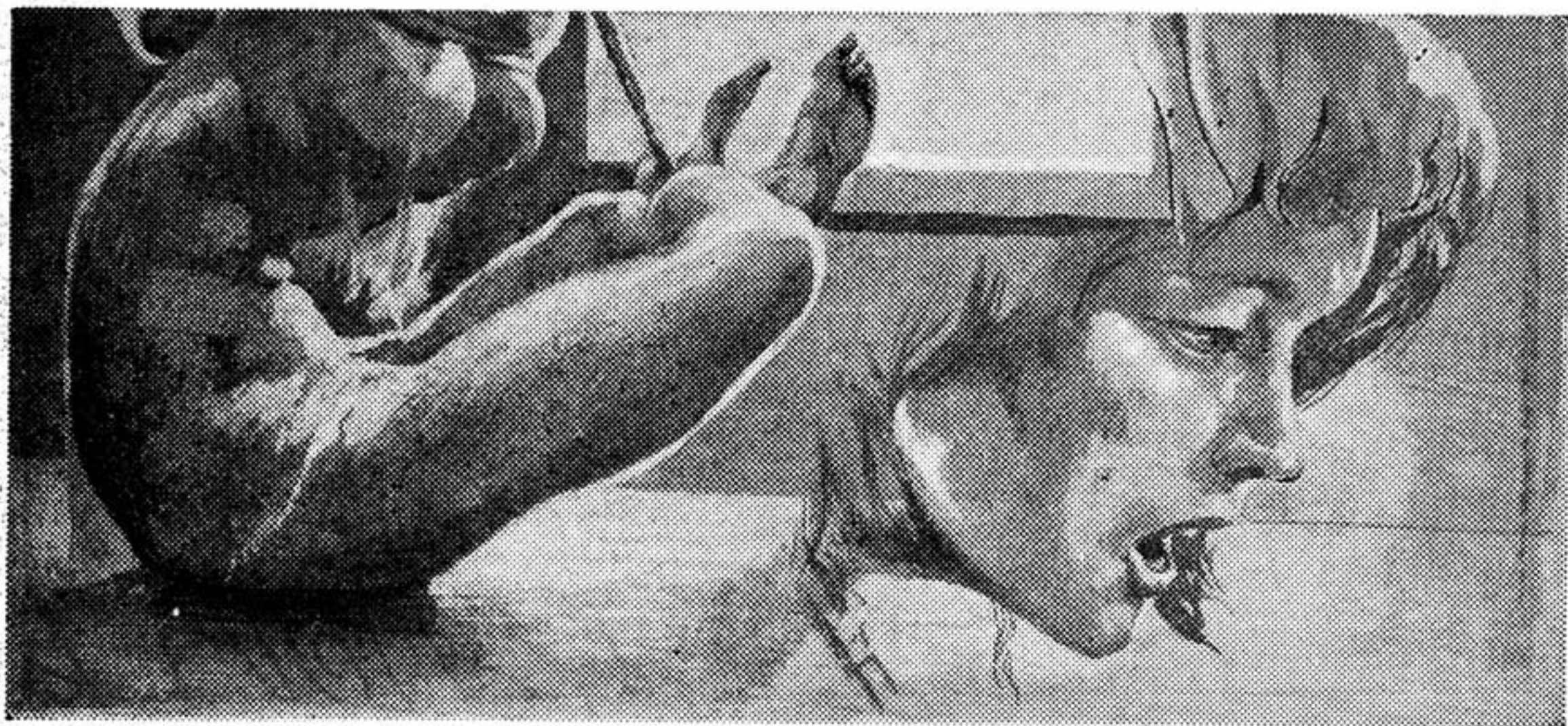
「くるしいか」

「くるしいわ。でも、すてきだわ。愛されているっていう、たしかな感じがあるわ」

良子は、白い歯をみせた。前に突きだした顔面はむくんだようにふくれ、しだいに赤みを増していく。

よく成熟した胸の肉球が、豊満な重量をもてあますかのように、ゆったりとあえぎだしていた。

こんな良子のからだを、心を、良人の公一は塵ほどにも想像できまい。あの単純な秀才



には、こういう男女のありかたを現実に目の前に見たとしても、信ずることはできないのだ。あんな男は、人間じゃないノ

なまぐさい勝利感が、信和の心を襲った。信和は立ちあがった。

すると良子は、彼の足もとにうずくまる女囚か、女奴隷の姿勢であった。

信和は片足をあげ、良子の白い顎のしたに足のさきを突き入れた。

「顔をあげろ」

両眼をうつすらとひらいた良子の顔面に、赤い月光がさしこんだ。

良子の表情には、恍惚があった。信和の足は、そのまま女ののどを蹴りつけた。

だるまのようにまるまるとくられている良子は、もろくも、あおむけさまにひっくりかえった。髪が、ばさり、と畳を打った。

女の自由を、すべてさらけだしたポーズが赤い月光のなかにゆれていた。

あぐらしぱりにした上に、海老責めのかたちでひっくりかえしたのであった。二本の白い足のうらは、植物の茎のように天井をむいていた。

両眼は、ひたととじられていた。表情に恐怖はなく、すこしの苦痛を、なにかべつのものを味わっているかのように、歯を噛みしめて耐えている風情であった。

「公一君の前で、こんな格好したことがある

か」

突っ立ったまま、良子を見おろし、信和はきいた。

「ないわ」

目をとじたまま、ほそい声でこたえる。

「公一君と結婚したことを、後悔したことはないか」

ある。といえば、信和はよろこぶのだろうか。うめくように、良子はこたえた。

「でも、公一と結婚しろ、と命令したのは、あなたよ。あたしは、あなたの命令どおり、公一と結婚したのよ。そして、計画どおりにあたしたちは、こうして会っているじゃないの」
うわごとのように、きれぎれの息でいいながら、全身の血が、どくどくと、こころよい音をたてていた。

こんな会話が、芝居であることを、良子とはつくに承知している。こんなセリフのやりとりが妖しい舞台と背景をつくり、この赤い月の夜を、いっそう快美なものにしていくのだ。からだの下にしばらくは左右の腕が重みにつぶされて感覚を失っている。

両肩も、苦痛を通りこして、ぬけるようなけだるさだった。しかも、二の腕や胸にくいこんでいる縄には、痛烈な快感があった。

天井をむいている巨大な臀部には、半透明のうすい布地がびっちり密着していたが、それがかすかな音とともにひきはがされた。



女すりお蝶

五所 章

古正 英生・絵

こうなったら、仕方ありません。あたしやどんな目にあわされてもかまやしない。死んでも銀平さんの名前を口にすまい、と誓いました。

あたしがこんどの一件で、責めをこらえて口を割らず、無事に娑婆へかえれたら、五月雨一家のなかでも姐御株となり、ちよいと威張れた顔になれるという、そんな勘定も、あったことはありましたけど……。

そのかわり、悲愴な覚悟でした。いくら氣が強くても、からだは女、もしかしたら拷問で死ぬかもしれぬ、そうになったら、それも因念ごと、よくないことをさんざんやらかしてきた身の年貢の納めどき、と生きる死ぬるの両立で覚悟をきめました。

その翌日、呼びだしがあり、縄をかけられて、西のお白洲へひきだされました。

渋田源八郎という吟味与力が座にいて、加

茂川喜内という同心が、その下にいます。

渋田さんのお調べは、

「お前が、熊谷藩ご家老笹塚氏の懷中から、財布をすりとったのであろう」

というのです。

「いいえ、あたしや偶然にその場へ通りあわせ、なんだかわからないうちに、いきなり、五軒町の親分に縄をかけられ、いまだにもってわかりません」

とこたえると、

「だまれッ、ご家老の財布をすったのは、お蝶、お前であろう。さもなくば銀平のどちらかだ。ありていに白状しろッ」

と、渋田さんが声を大きくします。

「知らないといったら、知りませんよッ」
と、突っぱねると、

「お蝶、痛い目をみぬうちに申しあげたほうが、お前のためだぞ」



と、同心の加茂川さんがいます。

痛め問いはもともと勘定のうちにはいって
いますから、

「どうしても勝手にしておくんなさいまし」

と、ふてくされました。

同心が、それッというと、そこにいた小者
が二、三人、あたしのうしろへまわって縄を
ときました。着物を背からひきはいで、むし
ろの上に腹ばいにさせ、手足を四人でおさえ
ます。

かよわい女の手足を、大の男が四人もかか
っておさえつけるなんて、お役人も大仰なこ
とをするじゃありませんか、ねえ。

ひとりの男が、笞を持ってきて、裸にむい

たあたしの背中を、七つ八つたたきました。

「どうだ、白状するか」

と、同心がいうから、

「知らないことを知ってると言ったら、お上
をいつわることになりますから、やっぱり、
あたしや、知りません」

というと、

「憎いことをいう女だ。それッ」

と怒って、また背中を笞でたたきます。

たたきが重なるにつれて、痛さが加わりま
す。素肌のうえをやられるんですからたまり
ません。齒をくいしばってこらえました。

この痛め問いのあとで、なにか油薬でも背

中にぬってくれるのかと思うと、そんなもの
はぬってくれません。水をかけて洗うだけだ
す。

牢内へもどると、相牢のおかねという火つ
け女が、

「きょうはお前、痛め問いにかけられたが、
ネをあげなかったね。さすがに五月雨一家の
娘分だねえ」

と、責められた当人よりも、お白洲のよう
すを知っています。責めるほうの小者に、ち
やんと、わたりがついているのですから、吟
味中のようすは、一から十まで牢内にとどけ
られるのです。

その翌日も呼びだし。

うしろ手に縛られてひきだされていくと、
「ご家老の財布をどこへかくした。お前がす
ったのだらう、白状せい！」

と、前の日と同じ。

「知りませんよッ」

というと、縄目を解かれ、背中をまるだし
にされて、笞でたたきます。前の日の笞あと
をめがけてたたくので、痛いなんのって、
思わず口のなかで、ヒィッときけびました。
三日目になると、吟味与力の渋谷さんが、
ちよっとしんみりした顔で、

「これ、お蝶。お前はまだ十七か八の若い身空で、縄目の恥辱をうけ、まいにち素肌を笞で打たれるとは、哀れな女だ。心にあることをぜんぶ吐いてしまえば、そんな苦しみも受けずにすむものを」

などといいます。

あたしは、へへへ、と笑って、

「そんな気味のわるい猫なで声をだしたって駄目ですよ。あたしや、なんにも知っちゃいません」

と、舌をだしてやりました。

すると渋谷さんは、ほんとうに怒ってしまいました、

「いたしかたない。この上は吊りだ。吊れ、

吊れッ」

と、下知しました。

吊りというのは、柱に打った鉄の環から、青細縄という細引きを、梁に打った受け金具に通し、そのさきを囚人の背中のところ、両肩と左右の二の腕、手首へかけた縄目に結び、地面から四寸たらずの上に吊りあげる拷問です。

これは苦しかった。

手首には、藁が巻きつけられて、そのうえを縄で縛られます。二の腕は紙を巻かれ、そのうえに、縄がかけられます。

つまり、脈どころだけ、そんな防ぎをつけてあるんです。だけど、からだを宙に吊るさされているんですから、縄がぎしぎし肌へくいこんでいきます。

女のことゆえ、胸の急所はよけて縛ってあるんですが、時刻がたつて縄がずれてくるとやわらかいところへ遠慮なくくいこんでいきます。

いくら覚悟をしていたとはいえ、たかが、お侍の財布をすったくらいで、こんな吊り責めにまでかけられるとは思っていませんでしたので、ほんとうにおどろきました。

あの、おいぼれの懐中に入った財布の中身の重大さに、ようやく思いあたりました。

しかし、こうなったら仕方がない。いのちあって、うまく娑婆に出られるか、この拷問倉で責め殺されるか、のるかそるかだと、根性ではそうきめました、からだは女、だんだん心細くなりました。

いざとなったら、舌でも噛んで死んでやるか、と思ったとき、いきなり裾をまくりあげられました。

うしろ手に縛りあげられたうえに、吊りあげられているのですから、そんな役人の手を蹴とばすことはできません。防ぎようもなくおしりをむきだしにされて、あたしは悲鳴を



あげました。

きゆうに涼しくなったあたしのおしりに、そそぎという名の割れ竹がおそいかりました。はずかしいし、痛い。いや、はずかしいのは、はじめのうちだけで、九つ十もたたかれると、痛いだけがあたしの総身をくるしめました。

痛いからもがく。それでなくとも吊られていたので、からだがゆらゆらする。はじめは寒く涼しかった腰から下が、そそぎでたたかれるうちに熱くなってきました。あたしは齒をくいしばることを忘れて、だらしない悲鳴をずいぶんあげたようです。

「どうじゃ、お蝶、言うか。お前と銀平が、ぐるで盗んだあの財布のなかにはな、さる藩の浮沈にかかわる重要な書状が秘められているのだ。お前らにとっては、一文にもならぬ紙片だ。これ以上の手数をかけずに、もう白状せい！」

加茂川同心の声は、あたしの耳に、地獄の鬼の声のようにひびきました。答であたしの腰をねじるようにして突くのです。

あたしも、死にものぐるいの意地になっていました。

「ちくしょう、お上の役人てえのは、かわい女を責めるのに、こんな鬼みたいなことを

しやがるのかい。あたしや、たしかに、あの白髪侍の財布をすったよ。すって、いいところへかくしたよ。だけど、もう殺されたっていうものかい！」

おのれッと同心は吠え、地獄の赤鬼そっくりとなりました。

答をふりかぶって、あたしのおしりをめった打ちにするのです。そのうちに、ぼきッと音がして、左右の腕がぬけ、あたしは気を失ってしまいました。

それから、どのくらいの刻が過ぎたでしょう。気がついたとき、あたしはまだ、拷問倉のなかにいたのです。

ひどいじゃありませんか。吊り縄はゆるめられたものの、うしろ手のいましめはまだ解かれず、あたしのからだは、つめたいゆかの上にころがされていました。

鬼同心が、じいッとあたしの顔をみおろしています。あたしの胸のうえに足をのせて、ぐりぐりゆすりながら、こんなことを言うのです。

「おい、お蝶、お前はさっき、女を責めるには責めかたがあると云ったな。いいことを言ってくれた。ここに用意したのは、からし汁と山芋汁だ。これでお前の口を割らせてやるのだ。おい、この女をさかさに吊れッ……」



暗黒街の掟

東島 かおる

豊田みのる・絵



砂塚は、重そうな手つきで拳銃をひきぬくと、あたしの胸に銃口をむけた。

「野呂木、この女を縛れ」

「やめて！」美保子がさげんだ。「ひろみには、なんの罪もないのよ。なんの関係もないのよ！」

「お前はだまってるよ！」

野呂木、と呼ばれた男が、齒をむきだしながら、あたしの前に接近してきた。

あたしは、右膝で野呂木の股間を力いっぱい蹴りあげた。

すでにあたしは精力を使い果たして、

あんまり力もなかったけど、こんなに愉快な思いをしたことはなかった。

男の下腹部に、あたしの右膝がぶちあたったとき、それまであたしの内部に鬱積していた、砂塚に対する恐怖が消えた。

野呂木は、いくじのない悲鳴をあげ、前こごみにのめった。

「なめるな！」

あたしの背後で、砂塚の怒声があがった。固いロープが、あたしの右手首にからみつき、こんどはいきなり足払いをかけてきた。

ふいをうたれたあたしは、おなかをねじりながら倒れた。つきには脇腹を蹴られた。

「よし、縛れ」砂塚がいった。

野呂木は、腰をふらつかせながら立ちあがると、いきなりあたしの頬をなぐった。それから、あたしをうしろ手に縛りあげた。

「おれは、こっちの女を縛りあげる」

そういうと、砂塚は美保子の前へあゆみ寄っていった。

「いやッ、よして！」

美保子の顔が、哀れっぽくゆがんだ。

「しめあげてやる。どうしても、品物のかくし場所を吐かせてやる。おれの目をごまかしてめえら女だけでヤクを盗んで組織からずらかろうなんて、そんなふてえまねは、おれが

断じてゆるさねえ！」

砂塚はわめいた。

「盗んだのはあたしよ。ひろみには罪はないわ！」

けなげにも美保子はさげんだ。

ありがとうよ、美保子。あんたはやっぱいい人間だった。あたしの鼻柱が、ズキンとして水っぽくなった。

「美保子にさるぐつわをかませろ。騒々しくていけねえ」

砂塚が命令した。

「へい」

野呂木は、ゴリラそっくりの笑いかたをして、美保子の腕をつかんだ。いきなり、力をこめて美保子の口もとをなぐりつけ、あっというまに口のなかにハンカチーフを押しこんだ。その上に、べつのハンカチーフをあてて縛りつけた。美保子の頬の肉がひきつれた。

美保子の両手首をうしろで縛り合わせ、野呂木はいやしい笑いをうかべながら、部屋のすみにひきたてていった。

ロープのはじをベッドの枠にひっかけて通すと、野呂木は力をこめてロープをひいた。美保子は、からだのバランスをうしなって膝をついたが、野呂木がさらにロープをひっぱると、苦痛と恐怖が美保子の目に走り、声に

ならないひびきをもらした。

美保子はそのままずるとひき寄せられていった。野呂木がロープを枠に結びつけると、美保子はベッドに倒れこみながら、胴を海老のようにそりかえらせた。ストラップがはずれて、白い肩があらわれた。

野呂木は、必死に抵抗する美保子の両足首をつかんで、手早く反対側の枠をまわしたロープに縛りつけた。美保子は、ベッドに手足を縛りつけられたのだ。みるみるうちに、美保子の顔は恐怖に青ざめてきた。「用意はオーケー。はじめますか」

野呂木がきいた。低い鼻をうごめかした。「よし。おだやかに楽しんでもらおうじゃないか」

砂塚がいった。冷酷無残の標本みたいなつらがまえだった。

野呂木は、フロアから幅のひろい皮のベルトをつかみあげた。顔は赤みをおび、あぶらぎって、興奮をあらわにしていた。

二、三度ためすようにベルトをふると、すぐどく部屋の空気が裂けた。その残忍なひびきは、あたしの心臓まで裂くようだった。

「さあ、美保子が痛めつけられるぞ。美保子とお前とは、どういうつながりだか知らねえが、仲間が目の前で悲鳴をあげるのを見てい



るのも、あんまりいい気持ちのものではある
めえ。品物のかくし場所を白状するのは、い
まが潮どきだと思うが、どうだい？」

あたしの顔をのぞきこみながら、砂塚がい
った。

あたしは、ベッドの上の美保子の顔へ目を
やった。美保子は首を上げしく横にふった。
さるぐつわの上のふたつの目が、必死の光
りで「言っちゃいけない！」
とさけんでいるのだ。

悪の世界から脱出するための、たったひと
つの方法だったのだ。品物を売って金にかえ
て、砂塚一味からできるだけ遠くへ逃げる、
それが美保子の悲願だった。

あたしは単なる分け前めあての。しがたない
女ギャングにすぎなかったのだけれど……。

しかしあたしは、いつのまにか美保子に、
友情みたいな感情を抱いていたのだ。

「こんなものを着せといたんじゃ、たいして
骨身にこたえませんよ」

野呂木がほざいた。

「よし、ぬがせろ」

その瞬間に、それまで重苦しい緊張が支配
していた部屋が、重苦しい肉感にみちて、女
のあたしには、ほとんど耐えがたいほどの、
醜悪な男くささにおそわれた。



——野呂木は鞭をひろいあげて、無造作に
空気を切った。細長い、うす赤いすじが、美
保子のなめらかな背中にあらわれた。

さるぐつわが、美保子の悲鳴を不明瞭なう
めきに変えた。苦痛に身をよじらせても、手
足を縛りつけられていては、その余裕すらな
かった。身うごきもならずうめく美保子の素
肌、つづけて鞭が襲った。皮膚が裂けるほ
どではなく、皮膚にむきだした毛細血管から
赤いものがにじみだすていどだった。

「どうだい、まだ、たりねえかい」

美保子の視線が哀願するように砂塚へむけ
られたが、それがかえって反抗するように見
えた。

つぎの鞭は、凄まじい強さだった。

美保子は羞恥を忘れて、はげしく身をもだ
え、獣じみたうなり声をあげた。口紅で描い
たようなすじが、まぶしすぎるほど白に背面
にうかびあがった。

野呂木はあらい息を吐き、顔に汗をかきは
じめていた。砂塚は無表情になっていた。

「やめなよ！」あたしはさげんだ。「卑怯じ
やないか。大の男がふたりもたかって、ひと
りの女をなぐるなんて！」

たまりかねて、あたしは立ちあがろうとし
た。が、立てなかった。あたしのからだは、
椅子に縛りつけられているのだった。

あたしは、はげしい焦燥を感じた。それは



まだあたしが希望をうしなっていないことを意味するとしても、あたしの頭はこの焦燥感のために、なんにも考えられなくなった。

美保子の素肌の鞭あとは、たちまち数を増していった。鞭が空気を裂いて肉体にくいこむたびに髪の毛をのけぞらせ、白いなめらかな腹を波立たせた。皮膚がうすく剥がれて、歯をくいしばりながら、美保子は肩と腰をひねっていた。

正視するに耐えなかった。そのまま、からだをくねらせつつけたら、美保子の顔といわず、乳房といわず、全身に鞭のあとがうかびあがるだろう。

「強情だな」

砂塚がつぶやき、ちいさく舌を鳴らした。

「まったく、しぶといや」

野呂木が、腕をあげて額の汗をはらった。

美保子は、うらみと苦痛に両眼を黄色に光らせながら、ふたりの男へ凄絶な嘲笑を浴びせ、それから言った。

「あれを売れば、三千万にはなるんだからねえ。なみたいいていのことじゃ、口は割らないよ。ひろみと山分けにしたって千五百万だ。あたしは、片腕一本取られた、片足一本ひっこねかれたって、このままだまりとおすよ。お前たち、いっそのこと、あたしを殺したら

どうだい。もっとも、あたしを殺しちゃったら、あの品物は、もう絶対にあんたらの手にはもどらないけどね」

ふたりの男は、この不敵なことばに、さすがに息をのんだような顔をした。

「くそッ」

と、また皮ベルトをふりあげる野呂木を、「待て」と、砂塚がとめた。

「美保子はしばらく休ませてやろう。それじゃ、こんどは、こっちの、ひろみさんとかいうお姐さんのからだにきくとしよう」

おいでなすった、とあたしは思った。覚悟はしている。だが、せせら笑いといっしょに言った砂塚のことばに、さすがのあたしも戦慄した。

「おい、野呂木。もうそんな、やほったい皮のベルトなんかすてろ。こんどは思いきり、べつの方法をためそうじゃねえか。まず、こちらのお姐さんのお召しものを、せんぶぬがすんだ。それから、足首をべつべつに縛って左右いっぱいひらいて吊る。そうしておいて、じわじわとはじめるんだ。ハサミとピンセットを用意しろ。それから、カミソリだ。石鹸なんかいらねえ。水だけでいい。おい、ひろみ。わかったか。こいつが、暗黒街の掟というやつだ。おぼえておけ！」



腐れ土蔵

義川源

小日向一夢・絵

鬼あざみのおりんは、握っていた細引きでお小夜の両腕を、きりきりとうしろ手に縛りあげた。

南蛮渡りのしびれ薬のはいったお茶をのませられたお小夜は、抵抗しようにもかんじんの手足がいうことをきかないのだった。

「ふふふ、私をうらむんじゃないよ、お嬢さん。知ってのとおり、私は弱気でなさげぶかい人間さ。そのせいで、いままでずいぶん馬鹿をみてきたけれど、こんどはそういうわけにはいかないよ。なにしろ私のうしろには、三万五千石鶴賀藩の家老榊原さまがついてるんだからね。秀之進から預かった鶴丸日記を、お前さんの手から、だれに渡したんだか、それさえ言うてくれれば、この縄はすぐにはどいてやる。え？ だれなんだい？ 宇田川さんかい、浪路さんかい、それとも伊豆屋かい？」

そういうおりんの妖艶な顔には、容赦を知らぬ冷酷さが、いなびかりのように走るのを、お小夜は、しびれ薬をのまされた視線でみつめている。

湿っぽい腐れ土蔵のなかであった。ふたりの女のほかは、だれもない。

おりんは縄じりをとると、うしろからお小夜の腰を蹴った。

「お立ち。むこうの柱まであるくんだよ」
うしろ手の縄じりに吊られるようにしてお小夜は立ちあがり、よろよろとあるいた。しびれ薬は、腰部の中心にまで効いているようである。背中を小突かれ、よろめきながら、お小夜は数歩をあるいた。

「さあ、この柱に背中を押しつけるんだ」
この腐れ土蔵のまんなかに据えられている太柱に、お小夜は立ったまま、縛りつけられた。

おりんは、そのへんに落ちてゐる荒縄をひろい集めて、お小夜の胸と柱とをぐるぐる巻きに縛りつけたのだ。

土蔵のあちこちには、さまざまな道具が、埃をかぶったままころがっている。おりんはそのなかから瀬戸物の古火鉢をみつけた。「古い手だけれど、松葉いぶしといこうじゃないか」

と、つぶやき、おりんはまめまめしくそのしたくをするのだ。松葉は土蔵の外へ一步でれば、馬にくわせるほど落ちてゐる。

「すこし色が黒くなるかも知れないけど、からだを痛めつけるよりは、慈悲があるつもりだよ」

お小夜の足もとに古火鉢を据え、炭火をおこして松葉を投げ入れた。

「鶴丸日記が、うまくご家老さまの手にはいれば、鶴賀藩三万五千石もすべてご家老さまのお心のままになるっていう寸法さ。あたしもたくさんのご褒美がもらえて、そのうえ、恋しい根来十三郎さんと夫婦になれるんだ。お前さんが、鶴丸日記を渡した相手の名を白状してくれば、あたしは早くしあわせになるってわけなんだけどね」

勝手なことをいいながら、松葉をくべるおりんである。白煙が土蔵のなかにたちこもり





はじめる。

「うッ、ううッ……」

お小夜は、女郎ぐもの巢にかかった美しい蛾のように、肩や腰をくねらせる。次第にたちのぼる松葉のけむりは、お小夜の顔をなめはじめる。

おりんは、べつに用意してある縄を、お小夜の片足首に縛りつけた。

「いいかい。この縄のさきには、鈴がつけてあるんだ。あたしは土蔵の外で待っているから、白状する気になったら、足をうごかして縄をひっぱり、この鈴を鳴らすんだ。わかったね。早くしないと、お前は息がつまって、狸みたいに死んでしまうんだよ。死んでしまえば、お前の恋しい宇田川主馬にも、もう会えなくなるんだよ」

おりんは、お小夜の左足首に縛った縄の、縄じりをしっかりとぎって、土蔵の外へ出ようとした。

このときである。

土蔵の扉口から、ふいに、黒い人影が、ぬうッとはいってきた。

「おい、おりん」

と、その人影がいった。

「あッ」

おりんは、声だけで、その人物がわかる。

いのちまでもと惚れた男、根来十三郎である。この侍のために、おりんはいのちがけで悪家老一派に味方しているのだ。

「十三さん、もうすこしで、お小夜の口を割らせるからね」

おりんは白い歯をみせて、十三郎の胸にしがみつこうとした。

そのおりんのからだを、根来十三郎はつめたく突きはなした。

「おりん。もう、お小夜には用がなくなったのだ。鶴丸日記が、たったいま、われらの手の中にはいったのだ」

「えッ？」

「お小夜にはもう、口を割らする必要はなくなった。そして、おりん。お前にも、もう用はない。お前は、おれたちの秘密を、あまりにも知りすぎた。……なんだ、この白いけむりは。うむ、松葉いぶしか。おもしろい。よし、お小夜といっしょに、お前も、この腐れ土蔵のなかで死んでもらおう」

十三郎は、おりんの握っている、鈴のついた縄を、すばやく奪いとった。

そして、その縄で、おりんをうしろ手に縛りあげた。

「あッ、あッ、ちくしょう、だましがったなッ」

目のくらむような絶望が、おりんを襲い、つぎにそれが、恐怖と変わった。この男の、敵方に対する冷酷な所業を、おりんはよく知っている。

「だまされるお前が、馬鹿なのだ」

おりんの腕に、胸に、きりきりと縄がくいこんだ。十三郎の縄さばきは非情だった。

「ちくしょう！」

おりんは、血を吐くような声をあげたが、このとき、お小夜もまた、痛烈な悲鳴をあげていたのである。

なぜなら、おりんを縛っている縄は、お小夜の片足首につながれているのだ。当然、お小夜の片足は引かれ、おりんが縛りあげられていくにつれて、それが極端なかたちになっていくのだった。

「むッ？」

根来十三郎はふりむき、お小夜のすがたに目を光らせた。

松葉いぶしの白煙のむこうに、片足だけをみじめに引かれ、裾をみだして、腿までをあらわにうめいているお小夜がいた。

「なるほど、こんな仕掛けか」

十三郎は、お小夜の前に近寄った。そして柱に縛りつけられたお小夜の足もとにうずくまると、足首を縛ってある縄をといた。



さらけでた足の白さ、まるで、けがれを知らない肌のきよらかさに、十三郎の視線が吸いよせられた。

「まず、おりんを完全に縛りあげてからだ」ひとりで、うなずく。

おりんは五重六重に縛りあげられ、余った縄じりで両足首までもぐるぐる巻きにされて腐れ土蔵の湿ったゆかにころがされた。

「ち、ち、ちくしょう。よ、よくもだましがったな！」

「うるさい。まあ、そこでゆっくり見物している。おれがいま、おもしろいものをみせてやる」

そういうと、十三郎は火鉢のなかに足を突

っこみ、草履の裏で、いぶっている松葉を踏みつぶした。火は消え、けむりもすぐにうすくなった。

十三郎は、お小夜を柱からひき剥がし、両手を縛った縄もといた。しかし、それはお小夜を解放するためではなかった。

するどい悲鳴と、にぶい音の抵抗が、土蔵のなかにくりかえしひびいた。

光るように白い、つやつやとした物体が、うす暗いゆかにうごめいていた。縄で、改めて厳重に縛りあげられたお小夜の裸身であった。おりんが齒をきしらせてうめいた。

「鬼ノ 外道ノ お前という男は、あ、あ、あ、あたしの目の前で、そ、そんなことを！」

ある拒否の記録から



森本愛造

一

夢については余りに多くを書いた。だから、今度は実行に終止した或る男の半生を書くように思う。

彼の名は、いちおう兼子良三氏としておこう。時は一九六三年五月、私は彼に最初に小さな酒場で出会った。初夏とはいえ、夜風は涼しい。適度の酒が私達の口をなめらかにした。彼は、職業のこと、いろいろな話のことから、

「僕はNという人を知っていますよ」と言った。

Nとはむろんナポレオンのことではない。

SMの世界に隔々話題が及んだとき、もし人が、Nという名を口にしたならば、それはまさしく、N・A氏であることは、読者もまた賢明に察知すると思う。

然り、Nとは『畜人ヤブウ』という小説とも、風土記ともつかない、M読物を手がけながら、途中でやめてしまった、あのN氏である。

『ヤブウ』は氏の極度の対人恐怖症（Mに関する）のためにか、ひからびた肉感を欠く、年代記のような作品となってしまうが、この実在の世界において、適えられぬものを、創造の世界に求めた、という点では、典型的な戦闘的マゾヒズムの産物であった。

彼は、その新世界に、新しい生物ヤブウを作り、万能の女性世界を作った。そして、エチソンが白熱電灯の発明に伴って、二千数十に上るといふ、付属品——スイッチとか、ソケットとか、硝子とか——をも自力で発明せねばならなかったように、彼もまた言語を作り、風俗、習慣、錬金術のような万能の科学の成果を列べ、そして、法典までも作らねばならなかった。そして、それは、朝鮮征伐のように、むなしい中断の運命を辿った。おそらく、神はミノにかくれる者に、力を与えなかったのかも知れない。

しかし、その巨大な抱負によって、半ば成就したかに見える新世界は、つづく者にとっ

て強き拍車ともなり、荒海に明滅するただ一つの灯台ともなった。彼の中断後、いくつかのより能力において劣る作者たちが、争って同様の世界を描こうとした。それらは、あまりにも大衆小説じみていたために、注目されることはなかったが、しかし、サイエンス・フィクション的世界にMSを導入したという点で、N氏の後を追うたものであることは、紛うところのない事実である。

だから、私は、兼子君の口から、N氏の名をきいたとき、彼が、かなりいくつかMSの作品を読んでいると想像したのであった。七杯目のコニャックが、彼の口に運ばれるころ、すでに、私達にとっては、圍繞する酔客達の阿呆気な嬌声は耳に入らなくなってしまうていた。

そして、私は、彼が読書に於けるよりもはるかに多くを、実行によって知ったことを、彼の心よりも彼の肉体が、より密接に、より俊敏に反応を示すことを、さらに肉体に感応された官能は、ただちに精神を打ち負かし、彼自身を、そのおもむくままに押しながしてしまふということを知ったのである。いわゆる、フィジカルマゾヒストと呼ばれる、肉体派のめずらしい典型が、そこにあった。

由来、サド・マゾヒズムには、精神的要素

が極めて強い。それは魔女伝説のごとくに、時として無に等しいものから、巨大な存在を把握することさえある。キリストが伝説化され、三位一体の教義が、カトリシズムの最初の発足点であるように、そこには奇蹟の実現がある。従って、従来多くの分析学者によってたてられて来た無謀であつて、そして内容のともなわぬ仮説「異常性愛とは、身体的精神的に苦痛を与え、若しくは与えられることによって、若しくは、よつてのみ、性慾の昂進を示す倒錯的性慾の総称である」は決して私達の容認し難いところである。

ところが、ここに私の前で延々と語りつづけている人物、兼子君は、その仮説に示す通りの「異常な異常性愛者」であつた。このことは特筆に価する。そして、彼のその時までの状態が、はたして完成された形であるのか、またはスタートしたばかりで、いまや正常性愛の中に、一点の異常性がしたたったばかりであるのか。学者達の仮説が、ついに正鵠を得ていたのか、私たちにあって、これは由々しい問題である。

まさに、私は反対の説の信奉者である。だから、彼の「すでに固着している」と称する状態が、不安定で固着するためには、彼の官能から来る力以上の「精神的な力」の授けを

かりて、性愛とは別個の領域に達しなくてはならないということを立証すべく、彼の生活に深入りして行つたわけである。

兼子君の部屋というのは、渋谷からほど近いところにあつた。そこは、公団住宅の一室であつて、広からず狭まからず、ただ難を言うなら、天井が高くないということだけであつた。

彼は、再びコニャックの一本を取り出して飲みながら、語りついでが、その話の全部が彼の行なつた行為の説明であつた。相手の女性、必らずしもサジスチンである必要もなく、またマゾヒスチンである必要もなかった。彼は常にリードし、説明し、そして実行したのであつた。

彼の言葉をかりて、そのうちの何人かのケースを、ここに書きとめてみよう。これは私の控えたメモからであるから、一言一句すべてが彼の告白であると考えられないように。

二

《銀座のバー「K」のホステスを口説いたときの話》

その女は、二十五だといった。しかし実際には、二十八九であつたろう。反りかえった鼻筋、くまどつた両眼、近視なのか、その目

はいつも水々しく濡れているようだった。彼女は、そのとき支払った飲代一万三千円の他に一万円でOKした。

「前以って言うておくけど、オレはちょっとちがった趣味があるんだよ」

と彼は前もって断ることを忘れなかった。

だが、彼女は、

「あたし、前に、操る趣味の人に会ったことがあるわ。おじいちゃんだったけど。案外おもしろいのよ」

と答えた。まだ彼には彼女が「ちがった趣味」をどう解しているのかわからない。彼はまず彼女と食事をする。軽く踊る。そして、自分でかねて予約してある部屋に連れてゆく。その間、彼は決して具体的にどういふことが、自分の「ちがった趣味」なのかを説明する事がない。彼によれば、それは、彼女に予備知識を与える、というプラスの効果よりも、むしろ警戒心をおこさせることのおそれの方が強いのだそうである。

彼はむしろ、ちょっとした会話の端々に、普通の遊びには飽きた、とか、このごろでは「金持ち」はこういう具合に変わったことをするのが流行なんだ、ということ交える。それによって彼女は、

「すると、変ったことをするっていうことは

そんなに悪いことではないし、また、お金持と付き合うのには、どうもそういう体験や、知識が必要なんだわ。ゴルフみたいなもんね」

という風な、ごく軽い気持ちを持ち始める。

彼にとつては、下手な知識よりも、好奇心とそれによって左右される従順さの方が自分の満足度を高めるためには必要なものである。

部屋に入ると、そこにはかならず風呂がついている。簡単に、手をかけずにお湯を使える仕組みになっているから、彼と彼女が到着してから、ものの十分も経たないうちにお風呂は使えるようになる。

彼は、まず自分が風呂に入る。この点が肝要だと彼は言う。常々、自分のマナーの方を優先させなくては、彼の目ざす成功は得られないのである。彼は、自分が風呂を使っている間を十分に計画し、計算しておく。彼女が一番目をつけやすいところにSM系雑誌、それも増刊、つまりグラフィックページの多いのを一冊と、読みものの主になった普通号を一冊、多くても全部で三冊くらい、半開きになった引出しの中に見えるように置いておくというずるい方法をやってみる。この時の彼女もまた好奇心については例外ではなく、彼が風呂から上ったとき、彼女の目付きは以前

とは違っていた。ほのかなアルコールと軽い運動の助けをかりて、彼女の羞恥心や、常識は、いまや崩れ去りつつあったのである。

その瞳の異様な輝きは、決してサジストのそれでもなく、マゾヒストのそれでもない、と彼は言う。

「例によって、女の好奇心って奴ですよ」

SでもMでも、どつちでもいいのである。彼にとつては、そうしたSM的行為に抵抗を感じないで、どう彼女が没入してゆくかが最初の問題である。

この場合、出て来た彼を見て、心もち赤くなった彼女は、こう言ったそうである。

「あたしも、お湯つかわせていただくわ」
この言葉は、単なるテレかくしだ、と彼は言う、全く好奇心によって動かされるところのない女性は、ずばり「疲れたわ、とか、明日の朝は何時にお出かけになる」とか言うそうである。いわば、早く事をすませて寝てしまふという意志の反映であり、SM的行為をすこしでも遠ざけておこうという伏線なのである。

この場合は、彼によると、「好奇心の反応十分」というわけで、彼はつづいて次ぎの行動に移る。

風呂に入っている彼女が出てくる間に、彼

は、部屋の中にあるいくつかの道具の中でも、素人に使いやすそうなもの、つまりナワ、鞭、皮紐、クサリ、白布、などを何気なく戸棚に並べ戸を半分ほど開いておく。スタンドを調整して、それが寝台からすぐ目立つようにしておく。

彼女が上ってくる。タオルをまいて、すぐ寝台で代償を得るために、普通の行為をする心の用意は出来ている。いやむしろ、それしか知識のない彼女にとっては出来ないと言った方が正しいのだ、と彼は言う。上って来た彼女に対して、彼は無言で突進する。感情を露呈して、彼は彼女の足下に寝転び、臍を吸う。

この行為は、彼女をおどろかせるのには十分だ。彼女はとまどう。いままでの傲岸な彼の行動からはまったく予想出来ない変り方なのだ。

彼女は、されるままにしている。彼の舌は活動的に彼女の足をくすぐり、そして、吸いつづける。

この場合の彼女は、彼にS的に振舞った方がよい、という判断をさせた。余りにも反応がおそく、かつ、かすかであったからである。彼は立ち上り、言った。

「判ったろ。いま僕がやったように、君がや

るんだよ。云われる通りにやればいいんだから、だれでも出来るよ」

彼は、そのまま立っている彼女をつき倒して、おそらくは、その上にのしかかっている。と予想している彼女のねがい、まだお風呂の熱であたたかい腹の上にぐいと片足をのせた。彼は、その足にぐいと力を入れた。上からみると、彼女は、お腹に加えられた圧力で、ぽかんと口をあけていた。変り方のはげしさと、彼の勢いに圧倒されていたという事もあったろう。

彼は、足をそろそろと、力をいれながら彼女の口に近づける。床にしいてある敷物のわずかなほこりが、はやくも足の裏についているので、ざらざらとした感触が、彼に伝わってくる。ゆっくりと近づいていった足は、不意に、す早く唇の上においかぶさってしまった。むう、と息を吐く彼女に、彼は言った。「吸って、なめるんだ！」

無気力な舌の感触を彼は足の裏の鈍感な神経を通じて満喫する。

彼はまもなく、さっと立ってゆくと、戸棚の中の品物を、一つかみにすると、どさりと床の上にほうり投げる。

ナワをまず取り上げると、彼は、彼女の両手をうしろに廻して縛り上げた。

この縛りの苦痛でさえ、この彼女にとってはじめてのものであったらしく、苦しげに身をよじった。

彼は両足首にそれぞれくさりをまきつけると、部屋の両方に向って、それをひいた。

「いや！」

とかすかに彼女が言ったが、それは彼の行為に拍車をかけるのだった。

彼の感情は、先ほどから昂進していた。彼女には、それが何か別のおそろしいもののように見えただろう、と彼は言う。

彼は、そんな彼女を冷やかに眺めながら、片足で、彼女の身体を半分横にねじると、床に投げ出されている鞭を取り上げ、すばやくふくよかなそのお尻に、びしりと一鞭あてた。

「あ！」

とふたたび彼女の口から、かすかな叫びがもれた。

三

こうして、彼はこの時の経験の開始の状況を私に説明したわけである。

彼においては、すべては計算されており、そのすべては、相手の正常な心理に対応して考えられている。だから巧妙な砂カラクリ

が、ただわずかな流砂で、巨大なピラミッドの、すべての通路を一瞬にして変えてしまい、掠奪者を永久に外界から断絶してしまうように、ちょっとしたことが、巧妙かつ確実に作動して、彼の囚人となった女性を、意のむくままに誘導してゆくのである。ここにあげた女性との場合、彼は、かならずしも十分な満足を得たわけではないというが、それでも、いちおう行為としては、すべてをつくしたのである。

彼によれば、

「サジストの遊びにおいては、性愛は、両性の結合ではなく、サジストの女性に対する

凌辱

なのである。同様に、彼はマゾヒストにおける女性優位の性愛もまた愛情の表現ではなく、命ぜられてする。奴隷の奉仕なのだ。この行為と、倒錯に対する、ものの考え方は、彼にとっては、非常に強固なものであるかに見えた。彼は、自信をもって言った。性交は最上の凌辱である。とくに性快感を対者の意志によって、制御されることほど大きな意味を持った凌辱と支配はない、と。

もし私が、この一つの話だけで二度と彼の体験をきくことがなかったとしたら、おそらく、私にとっては不満足ではあっても、彼の

如く感じている人間が存在し、それは非常に合理的でかつ強い理解の下にあるのだと信ぜざるを得なかっただろうと思う。

しかし、偶然、何週間かの後に、彼からの申出で再会したときに、彼が自説の証明として活かしてくれた体験は、彼の意志に反して私の考え方の方がより正しいことを証明してしまったのである。

彼は、ぼつりと、ここから話しはじめた。

「先日お話しした彼女に、また偶然会いましたよ。あれ以来、ぼくは『K』にはいかなかったのに、彼女の方が、別の店に来ていましたね。知らずに行ったら、ほんと肩を叩かれて……」

以下彼の話を要約しよう。

正直のところ「しまった！」と思ったそうであるが、しかしすぐ逃げ出すわけにもいかなかった。しぶしぶコンヤックをなめていると、改めて近づいて来て「あらア」といった。

初めから、彼、兼子君は前とはちがったものを感じていた。その何かちがったものは普通、女性が一人の男とチギリを交わしたただけで出来上がる、あの何とも気恥ずかしい、そのくせ親しみを持った、あれとは全然違うものだった。兼子君のような「ドン・ファン」

にとって、一夜のチギリなどというものは、金銭によって代替された摩擦代金にすぎなかった。だから、そんな一夜を境にして、女の示す変容は、彼にとっては、いつもあの気だるい事後感を思い出させるだけだった。

その思いは、彼女が、最初に発した言葉、「あらア！」によって十分であった。この種の言葉を女は何と無意味に使うことだろう。彼は、やれやれこども、もう二度とくるところじゃないや、と思ったことだった。

他の客についている彼女が、自分のところにやってこないうちに、彼が何となく帰るきっかけを待っているときだった。彼女がやって来てしまった。

それから彼女がどう説明し、どうやって彼をもう一度彼女とすこす気にさせたかはよくわからない。「女の巧な弁舌というものはそういうものなんですよ」と彼は言う。彼は、結局は義務感だけで、お付合いのつもりで、もう一度、一万や五千の金は払ってやるつもりで、彼女と一緒にその店を出たのだった。が、しかし今度は踊りに行こうとも、一緒に飯を食おうともいうわけではなかった。彼にとっては、何か二度払いさせられるような気だった、というのが正直なところである。

表に出た彼女は今晚はあたしのところへ行

こうと言い出した。それもよからう、彼は、ちよつとした好奇心もあつて、言われるままに、青山という彼女のアパートへ向かったのだ。

女が、少しもたれ気味に体重を押しつけてくる。そうした作法は、まさに、金になる客に対しての商売女の風情であつたし、彼にとつては食傷気味のわざとらしさとしか感じられなかった。

アパートに入った。四階にある彼女の部屋は、豪華とまではいかないにしても、酒場に勤める女の住居としては上々であつた。酒もあつた。それはヘネシイの五星ではなかったが、ビスキイの三星であつた。「これしかなかったのよ」と彼女はちよつと申しわけなさそうに言つたが、実際はこの少し凝つた酒が自慢のようであつた。

「実際、ぼくはもう嫌気がさしていたんです」と彼は、彼がどんなに彼女に興味がなくなつたかを強張する。

「今晚は、ちよつとおもしろいひとをご紹介するわ」と横目でじろりと、彼女はいたずらっぽく彼をにらむと、電話器をとり上げた。東京の番号を廻して、相手の名を呼んだ。

「十分ぐらいでいいのよ。このあいだお話し方ね、あの方がちよつとお寄りになつた

の」

たしかに相手は女の声だつた。彼は、受話器から洩れてくる声をかすかにきいた。彼ほどの遊び人にとっては、変な美人局の類はおそろしくも何ともなかったから、相手は女であるということに対する興味だけがあつた。

すぐくる、近くだから、変つたひとよ。とてもきれいなのにね。などという。彼女の説明ともつかぬ説明をききながら、兼子君はコニャックの味を口にふくんでいた。「酒、この豊かな生命の水」という唐代の詩の一句が——もつとも彼は、それを直接読んでわけではなく、彼の悪友の一人から酒の座できいたのであつたが——頭の中を去来した。彼の肉体は、それでも、女に対する興味を示さなかつた。すべては気だるく、そして、逃避的であつたと、彼は回顧するのである。

呼ばれた女がやつて来た。背は高くないが髪を長くのばした、美しい女であつた。商売女か？　と思つてみたが、独特の媚態はない。むしろ「K」の女の方が、まめましく立ち居振舞うので、まるでパトロンのように見えるのであつた。彼が、ではない、いま入つて来たばかりの未知の女である。

おそろしくひくい、少しばかりかすれた声

で、彼女が言った。

「今晚わ。よろしくって？」

それから、三人の話が、酒を飲みながら始まり、「K」の女は言った。

「こないだ、あなたに教わってから、こちらにまた教わっちゃつたのよ」

「何を？」と彼は、まったく見当外れの問を發した。

「何を？」

その正体不明の女は、ちよつと不満そうにきき返した。

「縛られることよ」

と申しわけなさそうに、「K」の女が説明した。

「あたし、お酒が入ると、いつも思い出しちやうのよ、あれから」

「K」の女が言うのと、もう一人の女は、黙つて、「K」の女の手をつかみ、ぐいと自分の方にひきよせた。まるで男のやるようにその細くくびれた胴を抱くと、「K」の女のジパーを一気にひきさげた。

これは、兼子君の予想しなかつたことだつた。果然としてみている彼に目もくれず、その女は兼子君の前で「K」の女に裸になることを命じた。大きなハンドバッグの中から、細い、くるくると巻いた大鞭が取り出さ

れ、それがまるで当り前のように「K」の女の尻を打った。

その音が彼を、呼びました。「はずかしいわ」を言いつづけながら、それでいて自発的に「K」の女はすべてを脱いでしまった。鞭を持った女は、やはり黙ったまま彼女を四つんばいにさせた。ハンドバッグからは、いろいろな道具がつまみ出された。小さな首輪や犬の細いくさり、ひもなどが。首輪をつけて、「K」の女は、彼女のそばに、犬のようによりそうのだった。

彼の身体に、早くもある種の本能がうずき出した。正体不明の女の息もはずんでいた。物も言わないのは、こうふんのためであったのであろうか。兼子君は、何かを言おうとした。遊びに加わるために、何かを言わねばならなかった。

「けれど、声が出ないんです。この最高の瞬間に、いくら自分をはげましても、声にならないんです」

そんな彼を尻目に、二人の女はたわむれ、そして、歓びをわけ合うのであった。すべての行為は、彼を無視して行なわれた。シロシロなどという淫猥なショウではなく、そこには、全能の女とその飼犬が存在するように思えた。終りまで、彼は無視されつづけた。だ

が彼は、自分が制御しがたい興奮の中にいるのを発見した。彼は脱ぎ、おそいかるように「K」の女に挑んだ。

「お前さん」

と正体不明の女は、おそろしく高圧的な物の言い方をした。

「邪魔だなあ、やりたければ、そっちのすみで、ひとりでおやりよ」

それは、自分の飼っている牝犬にいどみかかる野良犬を足蹴に追い払う女主人の態度以外の何物でもなかった。そして、そんなふう

に彼を挑発した事を責めるように、「K」の女は首輪をひかれてもだえた。

まるい白い尻に、つづけさまに鞭が当てられて、「K」の女はうめいた。

だが彼は、どうにも加わることができなかった。

最後に、よほどうるさくなつたと見えて、彼女は、彼を隅に追いやる時、ぴしりと鞭を使った。それは、彼の肩に当たり、鋭い痛みを与えた。それが彼を頂点に達せさせた。それを見ると、その女は苦々しげに舌打ちして、「K」の女に言った。

「お前のものじゃないんだから、なめることはないよ。あとで拭いておおき！」

結局、彼女たちは、彼を追い出してしまっ

た。二人の間の邪魔物を追い出したわけであつた。

「やつらはレスボスですよ。男のいらぬ女というわけですよ」

と彼は言ったが、それでも、その体験は彼に、ある種の満足を与えたという。その興奮は、彼においてはSMの実行行為によって挑発され、そして完了するのだという。

四

しかし、私はここで注釈を加えなくてはなるまい。彼こそは犠牲であつたのだと。

彼女らは、神聖にはばかるところなく、事を行なつた。そこには隷属を象徴する裸身はあつたが、正体不明の女は、一糸だに脱ぎはしなかった。そこには、レスビアニズムのいかなる痕跡も見られない。一方、そこには彼女らの対象たるべき異性の裸身が、おあつらえむきにあつたではないか。では、彼女たちは、何故にそれを拒否したのか。拒否したからには、異性すなわち兼子君の存在は、無用であつたのか。当然こうした疑問が生れるわけである。

だが、そのいずれの疑問もエロティックに関連しては、説明しがたい。何故、彼女らは彼を連れて来ることが必要であつたか。追い

払うためである。どのような段階ではあつても、挑発された異性を追っ払い、そして侮辱することが彼女らにとって必要な演劇的要素であつた。

それは、性交に対する欲求を拒否することである。それを否定することによって別のものが高揚されるからである。連れて来たこと、見せておいたこと、追い出したこと、この三つの役目を果たすために彼女は彼をつれて来たのである。展覽性がある、というのも十分な解明である。むしろ「K」女の露出行為に対する羞恥が、もう一人のサジスチックな欲情を刺激したという方が正しい。

冗言を要すまい。私が彼の説に反対のものを見つけたというのは、実に二人の女たちの側にであつた。彼は、パトロン面をして出ていって、結局こうふん剤の役目をやらされたにすぎなかつたのである。

私がそういうと、兼子君は、おどろいたような顔を上げた。それは、まさにドン・キホーテが死の迫るのを感じて、サンチョを身近に呼び寄せて、「約束した城はやれなかつた。約束した事は何一つしてやれなかつた、だが、わしはお前の忠節を感謝している。」と言ふときの、サンチョの表情に似ていた。

彼は、最高の頂点に居合わせながら、叡智

に欠けるがゆえに、それを見逃がしたのである。裸のまるい尻、傲岸にして無言の女主人、そこに性別もなく、しわぶき一つなく、ただ頂点を目指す群像の一つが、歴然と存在し、廟前の唐犬の役を与えられてしかいなかった彼に対してさえ、もう一つの世界の窓を開けてくれたというのに。

きわめて厳しい精神の集中が、一定の期間要求される、というのは、実にこの小窓から内部にひろがる深淵を覗きみるためである。彼は、堂々と行為のすべてを見た。しかも、深淵を見ずして終わった。なぜか。それこそは、人を区別するあの異様な、巨大で宿命的な能力でないとだれが言えよう。

現実にフィジカル・マゾヒズムは存在しなかつた。それは、別の刺激を求めるエロトマニアにすぎなかつた。マゾヒズムは基本的に精神に由来し、精神の緻密な作動によって構成され、発動し、消費し、そして獲得するのである。

何をか？ 何を獲得するのか？ 一言にして言うならば、それはキリストの救い神ではなく、拝火教に由来するペルシアの力の神である。この異教的な魅惑が、彼の全世界を併呑するのである。

● 急 告

左記の本誌「裏窓」が売り切れになりました。ご注文にならぬようお願いいたします。

昭和三五年 十月号
" 三六年 二月号
" 三六年 六月号
" 三六年 七月号

なお小社宛ご注文のさいはバックナンバーをごらんの上、お申しこみください。





濡れ花

松山省一

落合竜二・絵

知行高にかかわらず大名と名のつく者には正妻にしろ側妾にしろ、三十になるとお褥御断りの不文律があった。町人の間では三十でも、年増として女の真情が買われたのにくらべると、形にとられ実をかえりみない話でもある。お褥御断りによって殿との同衾、男との交りを生涯たってしまう女は、年齢から

おしはかると察して余りがある。いちど殿の手がついた体では、すぐに暇を願う町人の女房におさまるわけにもゆかない。白髪頭になるまで派手な女色につつまれた大名屋敷に仕えていれば、という老女となるか、おおよそ見当がついてくる。

奈山と名のる老女もそれである。十六の年

から京極佐渡守の屋敷に上がり、すでに屍にひとしい女の身でありながら、屋敷内では若い腰元たちの陰で目を光らせている。

その日、屋敷へ上がった鈴は、いく人かの者たちの目に見すえられた末、最後に会ったのが年寄役の奈山であった。

「お屋敷のご奉公というものは、世間で噂されるほど辛いものではありません。幸いにしてお目見得がかのうたなら、何ごとも殿さまの御意のままに素直になさればよいのじゃ。

決して、むずかしいことも悲しいこともありはせぬ。そなたの後ろには、いつもわらわがついているほどに、安心なさるがよい」

「はい。……」

鈴はひざに目を落としたまま、やっと答えるほど身を固くしている。老女の言葉つきはやさしくても、それをもし拒みでもすれば、という仕打ちに合わねばならないか、屋敷へ上がったばかりでは想像もつかない。

外は、つゆの前ぶれを思わせる曇り日であった。部屋の中がむし暑く、鈴の肌着は身の緊張を伴い汗ばんでいる。

老女は無遠慮な目をほそめ、手にした扇子で軽く襟元へ風を入れていく。目の前の生娘がどのような羞恥なふるまいを示すか、かつて手心を加えてきた多くの腰元たちのことも

思い合せて先を楽しんでいるようだ。女の屍にひとしい奈山に残されたただ一つの生甲斐がそれであろう。長年の間、大名屋敷で身につけた気品、己れを殺したしわの中に計り知れない女の業の歪みがかくされている。

「そう固くならずとも、もっと楽にしやれ。取締りから聞いたであろうが、当お屋敷は殿さまのお目見得の前に、わらわが下調べをせねばならぬ掟じゃ。承知であろうのう」

「あの……」

「聞いてはおらぬか」

「はい。……」

「ほほほ。それは、そなたの心を察して伝えずにおったであろう。恐れることはない、わらわとお湯殿へくればよいのじゃ」

「……」

身を固くして頭をたれている鈴に向かい、

老女はせまった。

「いやか？」

「……」

「もし、いやじゃと言うなら、そなたばかりではなく、そなたの両親も当お屋敷をあざむいた罪により、奉行所へ引き渡さねばならぬのじゃ。それでもそなた、いやじゃと言われるか」

「ご老女さま。……」

鈴は両手を前に揃え、ひたいを畳にすりつけるほどにして許しを乞うようにしている。

「ほほほ……。安心しやれ。そなたの心がけ一つで、どのようなにも面倒は見ようものぞ。さあ、ついてきやれ」

老女は、すでに立ち上がっていた。ここまですで鈴の意のすべては失われたも同じであろう。あえて覚悟はして上がったものの、静かに立ち上がる心は重かった。

湯殿は長い廊下をいくつも折れ、別棟の一隅にあった。すべて檜造りの豪華な風呂場で湯舟の隅まで磨きがゆき届いている。先に湯殿へ入った老女は、鈴に背を向け脱衣をはじめた。しかし鈴は入口の端でうつむいたままいつそう身を固くし、ひざがふるえているようである。

「なにをしていやるか、はよう」

脱衣の途中で顔だけを向け、鈴をうながした。拒むことのできない止どめを刺す言葉である。無言の鈴の手が、ようやく帯にかかったとき、すでに老女は、脂肪がなくなり皮だけがたるんでいる下腹をあらわにしていた。肉付きが意外にうすく骨ばっている。

「聞きわけのないお人じゃ！」

裸の老女はきびしく言うと、鈴の背後から青い実の皮をはぐように、容赦なく着衣に手

をかけた。鈴から最後の物まで、あつという間にはぎ取った。

「くくくく……」

流し場にくずおれ、不意に見まわれた刺激を肌能耐えきれず鳴咽はじめた。その初々しい肢体をまのあたりに見た老女は、思わず息をのんだようだ。かつて数多くの娘たちの体を見た老女も、はじめて見るむちむちした白い肌である。

侍女たちのうちに浮世絵師による秘戯図のかずかずを手箱の中に秘めている者がいる。それらの春画は、眠られぬ夜に行灯の下でひそかに見入るためだ。その絵に見る女の姿態以上に、くずおれ鳴咽している鈴の白い肌は老女の目をひきつけた。

だが一瞬のうちに、目前の生娘にうばわれていた心を取りもどそうとした。老女の役目は娘の体に瑕疵の有無をたしかめることだ。殿の夜伽として満足すべき肢体かどうかを見分けねばならない。

「これしきことに涙を流すではない。さあ、立って隅なくわらわに見せるのじゃ」

「……」

「わらわの言葉が通じぬか」

「はい。……」

鳴咽をやめ、顔を上げる鈴の頬におくれ毛

が湯気にぬれて張りついていた。起き上がった娘の胸、二つの豊かな隆起にまだ固さがある。乳首は見る者の目に、いとおしさをかきたてるように色づいている。

「背を見せてたもれ」

命ぜられるままに背を向ける。なで肩、くびれた胴、肉付きが盛り上がった臀部、老女の目に映る鈴の全身は、どこにも非の打ちどころが見当たらない。しかし老女は鈴の肢体がこれまで見た娘たちより、すばらしく恵まれた肢体であればあるほど、心のうちに不満を持ちだした。これは以前になかった。

言うなれば恵まれた肢体の持ち主であるために殿から深い寵愛を受けるのが、奈山には不満である。このような生娘が寵愛ではなく逆に手ひどく仕置され、いましめを受けるとすれば、と考えてみた。そういう思いが老女の頭でくりひろげられているとき、一糸まとわぬ全身を隅なくさらしながら、鈴は衣を着けてない人形のように立っていた。

鈴の家は神田花房町で小間物屋を営んでいたが、父親が不治の病にたおれ商いもふるわず、借金までできた。そこへ近所に住む口入屋の女房が金銭の義理と巧みな口ぐるまに乗せ、お屋敷奉公をすすめてきたのである。いったん奉公に上があれば町方のように楽しみも自

由もあるわけではない。それを承知で口入屋の女房に応じる気になったのは鈴みずからの意思である。生家の暮らしを助けるために身を犠牲にしても、という親思いの十七になるひとり娘だ。

その鈴に互に愛しあう男があった。町内に住む佐吉という店者である。お取潰しにあつた旗本の末子という噂もある。この佐吉がお屋敷奉公に反対したのはいうまでもない。愛する相手が参府大名の手慰みを受けるのは思うだけでもやりきれない苦痛と怒りだ。

「佐吉さん堪忍して。……」

鈴は老女の前に全裸をさらしながら、なんども心の中でつぶやいている。

「おめえは、もうおれの元へは戻ってこねえのだな。……」

最後に会った夜、佐吉の胸に顔を埋めていた鈴が耳元で聞いたことばだ。

「佐吉さん。……」

がむしゃらに男にしがみついていた、まだ新たな記憶が、鈴の胸に浮かぶ。これが鈴に残された最後の支えでもある。

佐渡守は白練の着衣で、脇息に片肘をつき老女の言葉をかみしめながら、じっと目をす

えていた。下座には高島田に紫矢絁の着物、それに黒縹子の帯をしめた鈴が、小さく控えている。

「見事なからだでござりますれば、ぜひとも直々に吟味されますよう」

というのである。これまで数多くの側妾たちの下見をしてきた老女が、こう上申したことはなかった。直々にとは事の前に鈴の肌をたしかめることを指している。

ただ欲情をみたすだけでなく、生娘の肢体を隅々まで鑑賞するよう示唆した老女が、他の腰元たちを払い、つぎの間でひとり控えているはずである。それを思うと佐渡守は少々ためらい、ギヤマンの水槽に美女を泳がせて楽しむほどの好色大名ではなかっただけに、思案にくれた。

かつて生娘を抱きよせたことはかずかずある。すべて大名の身分にあつてのことだ。それらの娘は腕の中でふるえ服従する。言うなれば権力の下に形だけの服従である。そう考える佐渡守の心は、爾来むなしさが残った。

奉平の世に、ありきたりの女色ではみたされない参府大名にとり、生娘の肢体そのものを吟味するという一計は、いささか興をそそる。暗に老女が下見の結果について上申したさい、ある図絵を示した。全裸の美女が積雪

の庭先に、赤いしごきで後手に括られ投げ出された図絵である。しばしの間、それと老女の言葉をかみしめていた佐渡守は意を決したごとくである。

目前に、雪洞型の行灯に照らされた鈴が全身に痛いほど視線をあびながら控えている。「これ、苦しゅうない。もっと近こう参れ」「はい。……」

頭を低く答える。閉めきった部屋でひとり見すえられ対面するのは、口をきくだけでも容易ではない。いっそ強引に夜伽のために引きすえられるほうが救われるのではないか。しかし夜伽の身仕度をさせてないところに老女の計がある。佐渡守は年甲斐もなく胸がときめくのを押さえ、静かにつづけた。「何もおびえることはない。そちの肌は美しいそうじゃのう。そちは己れの肢体に自信を持っておるか」

「いえ、殿さま。……」

「遠慮はいらぬぞ。予に見せてくれぬか」

「殿さま。……それは」

「いやだと申すか」

「……」

「予の命令でも、そちには通じぬか」

「決して、そのような。……」

「ならば、この場において帯をといて見せて

くれい。もし、そちの肌が天下の美女にふさわしいものならば、どのようなほう美でも取らせてつかわずぞ。のう、気がねはいらぬ。帯をとくのじゃ」

「殿さま。……おゆるくださいませ」

「何を申す。ゆるす、ゆるさぬではない。予の申すことがわからぬのか。予にさからうとすれば、この場において手打ちにすることもできようぞ。それでもそちは——」

「……」

佐渡守の目の前で、畳にひたいをすりつけた高島田が、くくく……と小さきみにふるえているようである。そのようすを見下ろしている佐渡守は、内心おのれの弱さをあらためて気づいた。一刀のもとに手打ちにすることはできても、その娘の意を、心のままにできないのだ。もし一刀のもとに下すと言え、娘はそのほうをえらぶかもしれない。

脇息に片肘をついて鈴の肢体をたしかめようと考えていた佐渡守は、つい苛立つような思いにかられてきた。

そのときである。つぎの間に控えていた老女が、恐れながらと、ことばをかけてきた。その声に助力を求める気になったのが、いつわらぬ佐渡守の気持である。

老女は深く頭を下げた後、ふるえている鈴

を目の端にとらえていた。その目の光りは不満の色がみなぎっている。

「聞きわけのないお人じゃ。さあ、湯殿でのようになさるのじゃ、鈴どの」

老女は、あえて佐渡守の許しをえているように、きびしく詰めよった。

「そなたは、殿さまの言いつけにさからうおつもりか」

「いいえ、ご老女さま。決して……」

「では、帯をといてみやれ。さあ！」

鈴は、なおも両手をついたまま、深く頭をさげていた。すると老女は立ち上がり、鈴の背後から両手で引き起こすと、黒縹子の帯に手をかけた。それから、鈴の腰のもの一つにするまでは、わずかの間であった。

鈴は両手で顔をおおい、佐渡守の面前にくずおれていた。びんのほつれが妖しげな、いとおしきを見る者の目に訴えてきた。

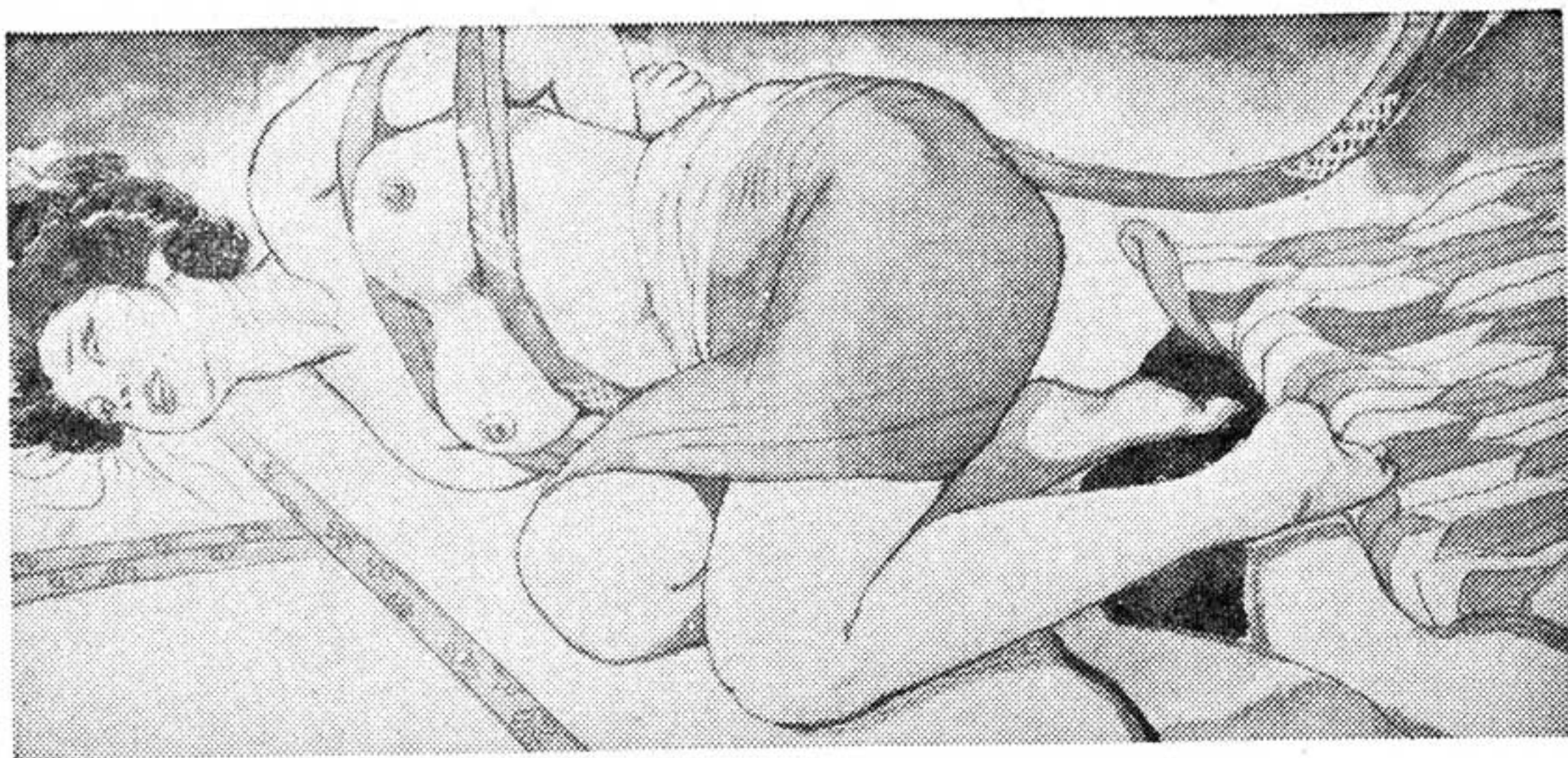
「鈴どの、立って殿さまに隅なく見ていただくのじゃ」

「……」

「わらわのことばが聞こえぬのか。聞きわけのない！」

老女はそう言うと、鈴の二の腕をつかみねじ上げるように引いた。

「あ！」



鈴はのどの奥でつまった叫びをもらした。

それから老女は、脱ぎ捨ててある鈴の着物のなかから、赤いしごきを拾い上げると、手ばやく後手に回して括り上げた。ちょうど、しておれてゆく花のように鈴は無抵抗であった。後手にして括ったしごきの結び目の端を老女はにぎっている。そして佐渡守に向かい、「心ゆくまで、ごらんあそばされますよう」と言った。

佐渡守は、脇息から肘をはなし、目の前にいましめられている新参の腰元に見入っている。彼の目には、かつて味わったことのない女体の妖しさが映じた。もし、その肢体に力を加えるなら、どのような変化を示すだろうという好奇心もわいてきた。

そのように佐渡守が鈴の肢体に目をうばわれ、さまざまな心を引きおこす幻想にとらわれているとき、老女の手が、なんの前ぶれもなく鈴の腰のものにかかった。

「あ！」

鈴の羞恥につまった悲鳴が、口を突いたときには、すでに老女の手はそれをはぎ取っていた。佐渡守も予期しない出来ごとである。後手にいましめられたまま、鈴の体は老女の足もとに、まるくなって横たわった。結い上げていた黒髪の髷がぐずれ、鳴咽のために、

くくく……と、なで肩から首すじを小さきみにふるわせている生娘の姿態が、佐渡守と老女のあごの根をくすぐった。

ことに女色にかけてはごく平凡な大名のうちにあった佐渡守の血は、意外にさわいだ。女色の虚をつかれたというのがふさわしい。しかし佐渡守はそれを面にあらわさず、

「その者は、そちにあずけておくぞ」

と老女に命じた。奈山は深く頭をさげ、ひとり寝所へ立ち去る殿を見送った。

老女は鈴を納戸部屋へ連れ込んで、激しく折檻をはじめた。

「そなたが殿さまの御意にさからったのは、下心あったのか！」

「いいえ、ご老女さま。決して……」

「申すでない。殿さまとの初対面において、よくもわらわに恥じをかかしてくれやった。今、そのつぐないをば思いしらしてくれようぞ」

「ご老女さま、おゆるしく下さい。どうかおゆるしく下さい」

「ふふふ。鈴どの、そなたはわらわがこわいのか。どうじゃ」

「は、はい。ご老女さま……」

「ならば、なぜ殿さまの御意にさからわれた

のじゃ。お屋敷奉公を甘く見ていたのである。う。そうだな？」

「……」

「返答ができぬのか、鈴どの！」

「は、はい。……」

「ふふふ。では甘く見ていたのを認めるというのだな。そうだな？」

「い、いいえ、ご老女さま。決してそのようなことではござりませぬ。どうかおゆるしを……」

「いや、ゆるしませぬ。たった今、殿さまの御意にさからいおきながら、ご奉公の掟を甘く見てはいないなどと不届きなこと。申しひらきはゆるせぬのじゃ。この年寄役のわらわがお目見得の前に申し伝えたことを、よもや忘れてはいますまい」

「はい。……」

老女は厭味たっぷりの口調で、執拗にくり返しながら鈴を詰めた。それは深いしわの奥に隠された女の業の歪み。ねちねちと虐めることで楽しんでいるように見える。いちどは鈴の身につけた着物も、この納戸部屋に連れ込んでから、ふたたび半裸同然にむいている。その上、殿の面前よりも、はるかにきつく両手首を後ろで括っている。

肩から胸の隆起があらわになり、色づいた

ばかりの桑の実を思わせる乳首が、老女の陰惨な両眼にとまる。うつむいている鈴の顔にしわづらを近づけた老女は、再度あごの根をくすぐられる思いに耐え、つばを飲む。そして、ぐいと骨ばった指で乳首をつまんだ。

「あ！」

鈴は神経を針で刺されたような、くすぐったさと羞恥とに打たれ、肩を左右にふり老女の手を払おうとした。そのはずみで、中腰になっっている老女の体を意外に強く突いてしまった。老女はよろめいた。

「何をなさるのじゃ！」

老女の胸が燃え上がってきた。

「わらわに向かって、さからいおるか！」

体のよろめきを戻すと、ぱしっと鈴の頬を張りたおした。あお向きに倒れた鈴は息をはずませて、全身であえぎながら必死である。

「ご老女さま、おゆるしくださいませ。決してさからおうとは心にもござりませぬ。どうかおゆるしを……」

「申すでない。もやは大目に見ようとしたわらわの心もこれまでじゃ。覚悟しやれ！」

「うっ！ くくく……」

仰向けに倒れたまま鈴は、小さな口もとをゆがめむせび泣きをはじめ。涙があふれるその目は、なおも老女に哀願を乞うていた。

しかし老女の魔につかれた手のうごきは止まない。むきだしの二つの隆起、色づいた桑の実を、きゅっきゅっと、つねるように虐めようとする。

「いつ、やめて！ ご老女さま……」

「ふふふ。……」

老女の口からは妖しげな笑いもれるだけである。鈴の全身がくねり狂いはじめた。

「う！ いっ！ ぎっ！」と呻きをのどの奥から突き上げ、いつ果てるとも知れない身を刺す恥辱に、黒髪の鬘も鼻すじの通った顔もぐしゃぐしゃにして歯を喰いしぼり、のた打ちまわった。

奈山の深い両眼は新たに燃え、美女を啜えた怪猫のように闇に光った。

本格的な雨期に入り、裸の鈴がしごきで念入りにいましめられた上、雷雨の中に深夜投げだされたのは、さらに後日のことである。

それは雨に叩き落とされた一輪の白い落花を思わせた。雷光の中で妖態を開く花である。

このとき佐渡守の屋敷へ単身、ふところ七首をしのばせ塀を乗り越えてきた男があった。その男が危く鈴を救いだせたか、それとも屋敷内で捕手にかかったかは、ここに付加するのはさし控えねばならない。

倉橋由美子★わたしの心はパパ のもの★を読んだあとで★これ はエダ・キリコの★ひとりごと



エダ・キリコ

あなたの作品から、私はなにを感じとった
らよいのでしょうか？

なんて、まず私は由美子さんに聞きかえさ
なくては いけません。なぜって、私は文中の
へわたしVに共鳴するとかしないとかのまえ
に、こんな陳腐なストーリーにはあきあきし
ていましたし、それでも最後の一行まで読ん
でいったのは、ただ、結末のドンデンがえし
を期待したからでした。

ところが、と、私はここで声をはりあげ
なければなりません。
へパパVの自殺——。

いったい、第Iのノートのどの部分が、そ
の直接のモメントになったのかしら。
読み方が浅いですって？ だって、そうだ
としたら、私にも言いぶんがありますよ。由

美子さん、ひとがひとり死んでしまう動機を
そんなにかんたんにとしらえていいものかし
ら。パパさんもおっしゃっているわね。

（死ぬなんてことはきみが考へているほど簡
単、ぢやない）って。

「とき」と「ばあい」によるって？ ちえっ
そんなことじゃすまなくってよ、すくなくと
も私はね。

あなた、いっとうおしまい、へガスの匂
いVを書きたいために、五万二千字ものマス
目を埋める苦勞をなさったの？

どこかで聞いたような文体とストーリーと
ベスト・セラーの本たばをひもとけば、すぐ
にでもお目にかかれるような片カナ文字、旧
かなづかひ。

でも、いまさら私は、あなたのサクブン力

「わたしの心はパパのもの」梗概

ノート（I）

いま、血を流しているところなのよ、
パパ。パパを愛しているためにです。痛
くてすてきな気持。パパのように情事を
かさねて、どっしりしている男を愛して
からだを裂いて迎えたのに……つらかつ
たわ。パパの肩を咬んだのも背中にも爪跡
を立てたのも辛さと痛みをまぎらわすた
めでした。わたしは若すぎます。なにし
ろまだ十八才。パパの柱を甘い快楽の密
でとかして上げる花に早くなりたい——
というノート（I）の記録を書いてゆく娘
は文学少女ではなく、数学科の女子大生
である。そのわたしという主人公にMと
いう仏文科の友人がいる。Mはわたしに
お休みという代りに地下道の柱のかけで
キスしてくる。パパの硬い唇とザラザラ
したひげと、乱暴な舌を味わっているわ
たしは、やわらかいMの口にソッとする。
わたしはお酒も飲むし、気に入った男
の子なら、だれとでも寝る。そういうわ
たしにしたのは、みごとに情事の手本を
しめしてくれたパパのおかげだし、パパ
のように稀有な肉体的才能の持主であれ
ば快楽を味わうことができる、生まれな
がらの聖女で娼婦である。そして目下M
のボーイフレンドKと、肉体関係（アン
ティミテ）にある。

あたしが少女のころMと二人で同級生
の少年の家にいき、古い春画、極度に性
器を大きく画いた男女交合図を見せても
らったことが再三ある。それは少年の母
親が嫁入衣裳の中に持参した画だ。その

やヴォキブラリイなのに、ケチはつけますまい。それと△パパ△の心理状態についてもね。

正直いって、私は、△パパ△の方にずっと興味があるんだけど、あなただったら、すっかり省略していらっしやるんだもの、どうして？
そうでしょう、きっとワカラナイ、ちがう？
でも、あなたがそこまでつつこんでくれたら、私、少女小説だなんて悪態はつかないでしように。

で、私は△わたし△だけに、私の全神経の焦点をあわせようって、おもうワケ。

神経の集中……まさに、そうなの。だっていまの私には、△わたし——あなたとお呼びするわね△あなたみたい、オジサマ族のふか△いところに飛びこめるほど、勇気リンリンじゃないし、肌で感じる愛情の角度も、興味も私自身の方じゃなくて、オジサマ族の心理状態の方にむいてるんだもの。

それにしても、たとえロッサノ・ブラッツイみたいにステキなおじさまであろうと、私のばあい勝手にしゃあがれたなあ。

そう、あなたのばあいは、相手が近親なのね。私には考えることのできない、ずっと遠くの世界——でも、私はあなたの位置に立ったばあいを想像しなくちゃ。

第一にあなたとちがうことは、私はノートなんて書かない。そして、私はあなたみたいにおしゃべりじゃないってこと。

フランスづいてないってことさ。

どだい、あんなノートは存在する価値なしよ。あなたのチャーミングな胸にそっとしまっておいた方が、ずっときれいで、自然で、そうしているあなたを、私は愛しちゃう。

つまりこうなの、こんなくだらぬ小説なんか書かないほうがずっと利巧だって！

とか何とか、勝手気ままにしゃべっている私。それというのも、△パパの死△に私がひっかかりを感じているからなの。

ママの策略——これがパパをふるえさせたことはたしかね……いいえ！ ちいさいね。こんなことちいさいわよ。

ちえっ！ 最初っからこんな調子じゃ、いつになってもあなたに近づけない。

パパの心理状態をすっぱかしたのと同様にママのそれについてもあまりふれてはいないってこと——、無責任ですよ。

あなたは、ママをブッコワシタ、あなたの目に映るママはまぎれもなくひとりの女。そんなふうに、こわしておきながら後始末は？

画によってわたしの夢は形をととのえてくる。スフィンクスの見下す砂漠、風と砂とのなかでひとりの神、あたしのパパに出会う。そのパパを愛し愛され春画で見たような甘い快楽をわかち合う。この夢は少しも不自然ではなく、画のごとく残酷でやさしい愛の行為はパパとしかできないと決心し確信したのだ。

わたしのママは、夫への復讐のために子を操り、殺すことさえ辞さないメーデイアである。わたしが十二才になるまで「お父さんはこの世の方ではありません」と、くり返し言った。このママの言葉には呪いがこもっている。そして、わたしを生んだのは「裏切られた愛」の証拠物件としてであった。十二才のとき今の青山へ引越す日、屑屋に払い物を整理しているとき、一通の手紙をわたしは発見する。ママは用足しに出ているときだ。手紙の日付はあたしが五才の三月、ボンからの発信である。それがなぜパパのものかわかったか、神さまを信じている子供には内容の啓示から直感でできた。用心深いママがパパの手紙を取っておいたのはパパへの愛ではなく、ある醜悪な感情、あたしがそれを見つけたす偶然を計算したのだ。そのママの意図は恐しい。

パパに初めて会ったのはわたしが十五才。ママと新橋へ出たとき、わたしが歯痛を覚え、虎ノ門のFビルに評判のよい歯科医がいるのを、ママが思いだしてくれたのだ。「きみは植物的だね——きみくらい十才から二十才の間の女の子が好きなんだよ」と、パパは足や口や胸を

近親相姦——私、このもんだいを考えると、これが文学界で、はやればやるほど、「だから、どうだってんだ」って叫びたくなる。愛の頹廢化、愛の不毛、愛の不在、愛の歪曲された断面、人間の赤裸々な姿にメス——ヘンノ、素材不足にあえぐ文学者たちの苦しい解釈。

もつとも、あのひとたち、むしろそういうことがたのしくって、そして気取ってるらしいけれど。

サルトルの戯曲「アルトナの幽閉された人々」にある、兄と妹の相姦。私はそこに、はつきりとリアリティをつかみとった。

感覚的にしろ、私は肌を感じたもの。

ね、あなた、私はあなたのノートに、私流のことばでいえば、感じなかったのよ。

あなたは、「あたしの手紙は、みんなでたらめだ。想像力のわるい病気のせいだとおもひますか」って、いっしょうけんめい逃げみちをつくってる。

こんな私の不満、冷静に考えれば、いう必要ないのかもしれない。

でも、いまの私には、すべてが、いやな感じになってしまふ。

私、近親相姦を汚らわしい、最悪だ、とはいいません。

「アルトナの幽閉された人々」のような状況では、私はそれを理解できるような気持さえするもの。

あなたのばあい、いろいろぼかしたり、ごまかしたりしてるから、私としての判断はくだせないけど、アンティミテ（肉体関係）になっちゃってから、パパをほんもののパパとわかったのだとしたら、私、あなたの心を半ぶんくらい理解してあげられそう。

けど、あなた少々トロイ。カルテの名前に気づかないなんて！

そうね、簡単なことだったのね、なんてあなたはいつてるけど、そうかしら。

重大よ、これは。

パパがあなたを誰れであるか確実にしつていたこと。この点だけでも、私はパパの心のうつりかわりに、大いなるインタレスト（興味）を抱いちゃう。

あなた、由美子さんにパパのノートを公表させるようお願いすべきだったのよ、同時にママのよね。

てなことになると、こんどは、あなたのノートも、などと私は言いだすかもしれない。

これは由美子さんの筆力しだい。

脱線ばかりでゴメンナサイネ。

近親相姦——近親。これは、どのへんでラ

ほめ、手でふれた。超人的な速力で昼間は仕事。夜は女の子を車に乗せて精力的なパパ。あたしもパパと最後の場所まで行きたいと車にしがみついた。それは三年前、初めてパパと会ったときのこと。今は十八才でパパを楽しませて上げることができるわたしである。本当の悪党のパパはわたしの秘密を知っていて毒をなめ合う関係を楽しんでいるのだろうか。

ノート（Ⅱ）

きのう、わたしは退院した。Mが迎えにきてくれた——Mについての記憶も忘れている。あの事故（自動車事故）によって、ある種の記憶喪失にかかったわたしである。ノート（Ⅰ）の記録は奇妙で理解できない。これは、だれだろうか。わたし以外に書いた者はない。それを発掘するためにノート（Ⅱ）を記録する。

お茶の水ジョーでMと会う。Mについて書いてみる。高校時代から友人だったという。ある点でわたしはMに対しサジスチックであつたらしい。今でもMの長い髪と白い顔、ふくらんだ掌を見ていると挑発され、いどみかかりたい衝動を覚える。その帰途、青山まで送ってくれるMは、わたしたちの車の前で大型トラックの車の下から引出されたものを見せま

いとした。たぶん死体であろう。わたしは事故（母の死）のことを学校の図書館から新聞を借出して読む。《女子大生の車暴走》の見出しで、Y（一九）の運転する乗用車が石を積んだトラックに衝突、母親（四三）即死。Yは頭に全治一カ月の重傷という記事。いまだ事故

インづけたらいいのかな。

系図をたぐっていけば、ひつきよう、人間みなシンセキ。

私、よく想像するんだけど、私に兄弟がいて、ちいさいときに別れちゃって、何年かたってそのふたりに恋がめばえる。あなたのいう、男と女が、行く最後の場所へBVもすんじやって、それからふたりの関係がわかったとしたら——私は、そんなとき、恋びとにすがりついて、永遠の愛をちかうでしょう。

ね、私はこんなファンタジックなイメージをもってこない限り、あなたとは同符号にならないのね。

近親のアンティミテが生む愛、お互いにしないばあい、ふつうの恋びと同志とかわりないでしょうね。とちゅうからわかったとしても、むしろその方がふたりの愛のきずなをきつくしめちゃうんじゃないかな。

アンティミテになっていなくて、そのおしらせがとどいたときでも、ふたりは、それまで抱きあったこともないのに、ヒシとむすばれちゃう。

私はそこに、汚らわしさのかわりに、真実っぽい人間性——男女の生を感じちゃう。

常識的に、このテーマは現実否定の看板しか立っていない。

肯定のプラカードが大きいのしあがってくるのは、ずっと先のこと。

そういうとき、私はどちらに拍手するかしら。いくら自分にあてはめてみたところで、さっきのファンタジ以外、私には遠すぎるもんだいだもの。

私があえて、このテーマをふかくつつこんでいかなのは、由美子さんにも、私自身にも責任があるとおもう。

私の責任を私はファンタジでごまかしたくはない。だから、私は、近親相姦に、一種の愛をみとめ得る可能なものとしての価値を与えようとしている、そう告白しておく。

アンティミテをモラルとして排する風潮、けつきよく、このもんだいにつながっていくわけ。

人間の本能のなかにある相反したふたつのおもい。肉と心。

もういちど、あらためてこのもんだいを想いおこさせてくれただけでも、私は、由美子さんに感謝したらいいんだな、せめて。

(おわり)

の詳細を知らされてないが警察の調査にわたしは捺印している。ノート(I)によるとMの婚約者Kとわたしは以前に寝ている。そのKから退院後、二晩つづけて飲み明かし、ノート(I)にただ一つの書いてある「近親相姦」について議論した。Kの話によると以前からわたしはサジズム、マゾヒズム、近親相姦、乱交などに異常な関心を示していたのをMに話したことがあると言う。Kはつづけて言う。きみは聖女だったろう。偶然によって父を愛し関係する運命に出会ったのではなく、計画的に意図を持って父を愛したのだ。ノート(I)を注意深く読めばわかるだろう。ノート(I)の時期、近親相姦と知りながら父を愛したのではないか? それ以前、歯の治療を受けたとき父であることを知っていたのか? 虎ノ門の歯科医を教えたのは母である。母は夫への復讐のために子を利用し殺害するメーディアだとノート(I)に書いている。母は父ときみとの関係を知っていた。いや、みずから近親相姦の火口へ導いた。そして自動車事故の形で無理心中未遂、結果的には母を殺害。このKの解釈をわたしは受け入れる。

今日、三カ月ぶりにパパの女としてわたしは会う。真相を暴露するために書いた記録を灰にするつもりだ言ったところ、ぜひ見せてくれというので、パパとの久しぶりの肉体の悦びを交した後、ノートを渡した。

翌日かれに電話したが出ない。直接訪ねるとかれの部屋からガスがもれ、ノートは、だんろで灰になっていた。――

女忍おきゃん 美男仮面の巻

左次朗



ウームおきゃんめ
秘巻をまちがえてから
えらくハッスル
これや男修業に出さず
ばなるまいで
「よいかな男とはいか
なるものか
見とどけるまで術は使
うでないぞ」



③ オオ身なりは粗末で
も中身はすばらしき
一級品



いってまいります



旅の娘ご
ちよいと待ちなされや

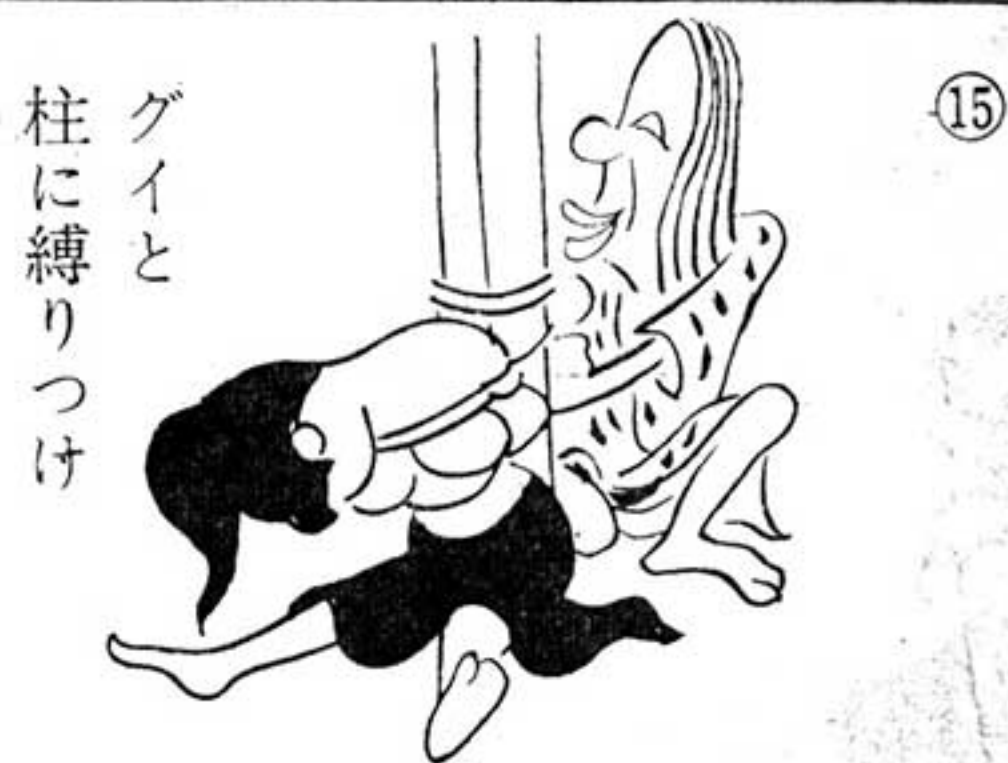


でもあの絵のような
美しい男に会えるか
しら



② 秘巻にあったよう
なことを体験して
こいって……





②1
さてこれから
というときに
助けが来るから
つまらなくなる



②2
マア
術は使わなくても
ちゃんと助けが来るわ
先生のいうとおり



②4
まず左足に
縄をかけて
と
?



つぎに
右足を
グイと
引いて
これで
満開
!!



②6
じゃまな仮面は
はずしてと



②8
さあ
その赤い
布を
とらせて
もらうぜ
イヒヒ……

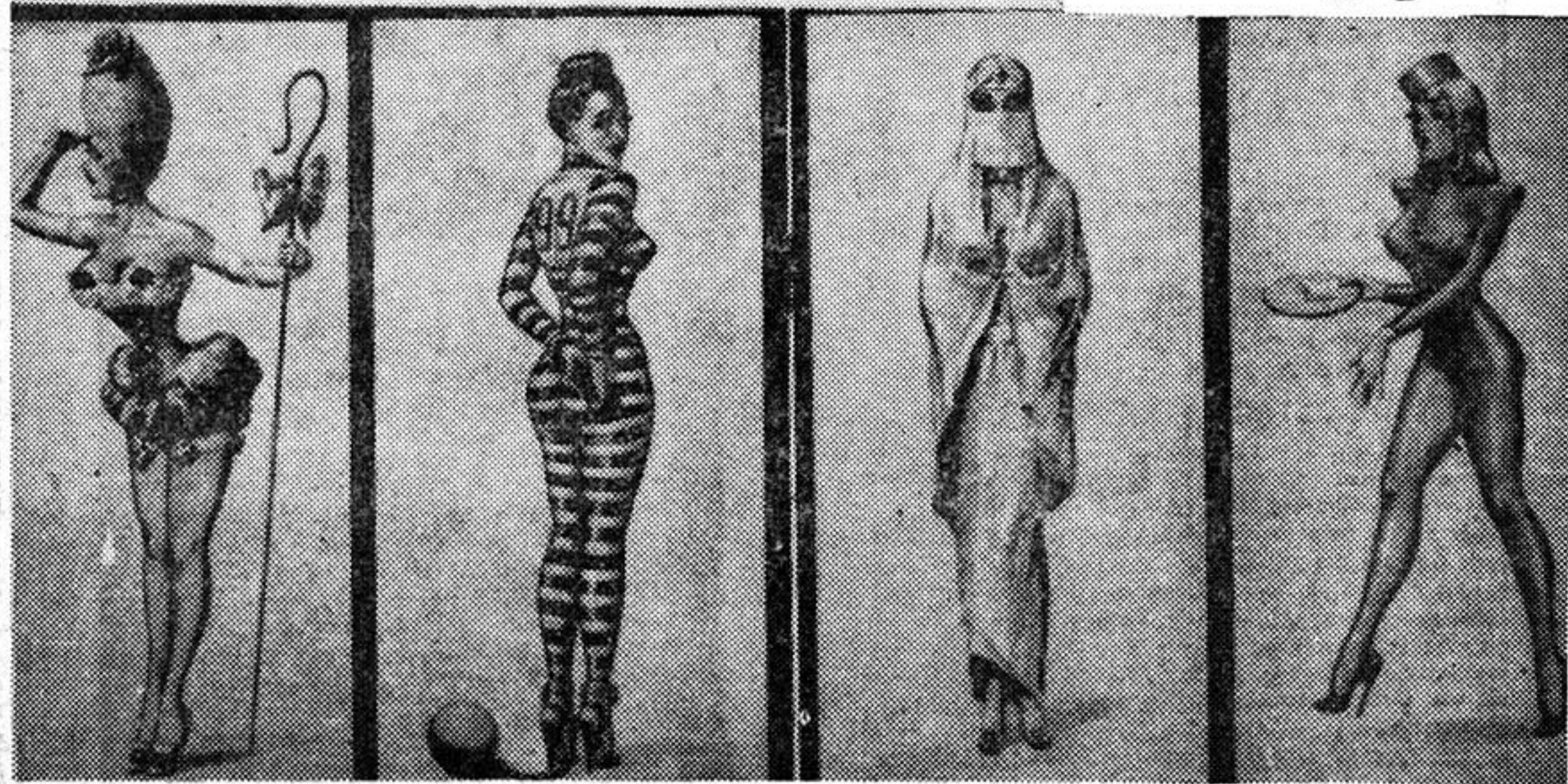
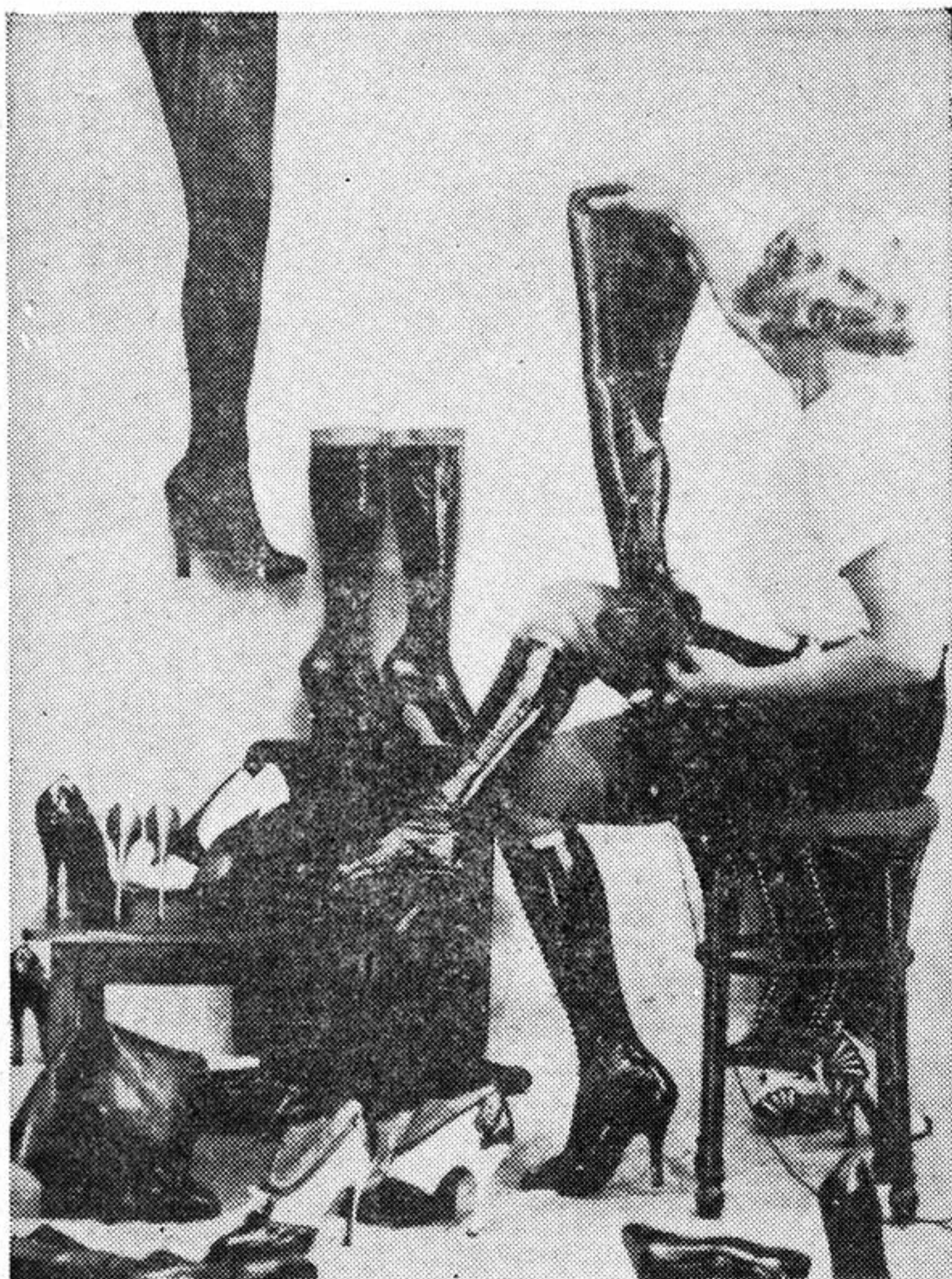


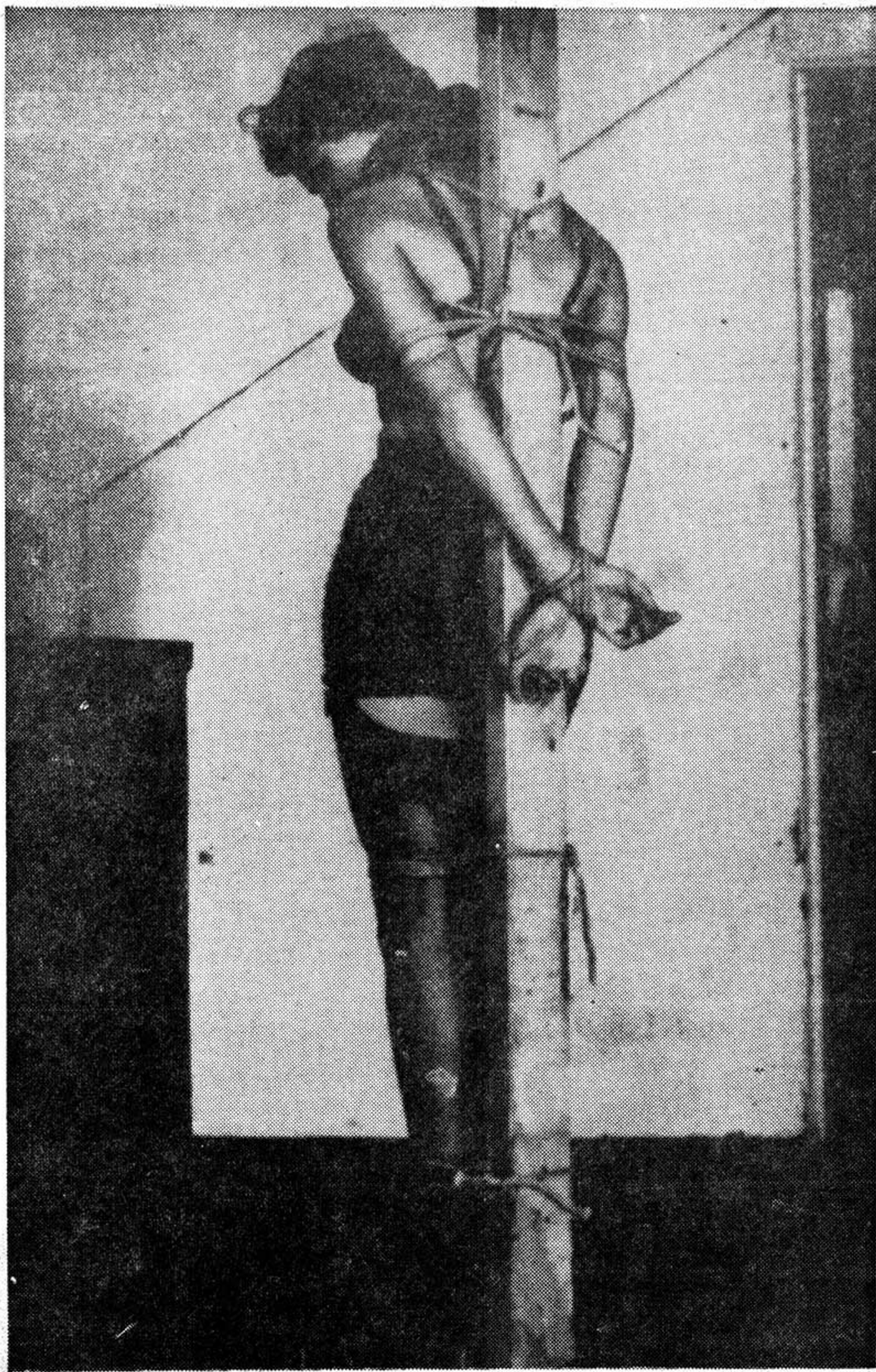


☆☆☆なつかしのビザール展☆☆☆

いまはもう休刊（あるいは廃刊）されてしまったアメリカの「ビザール」誌のなかから、これまで日本に紹介されな

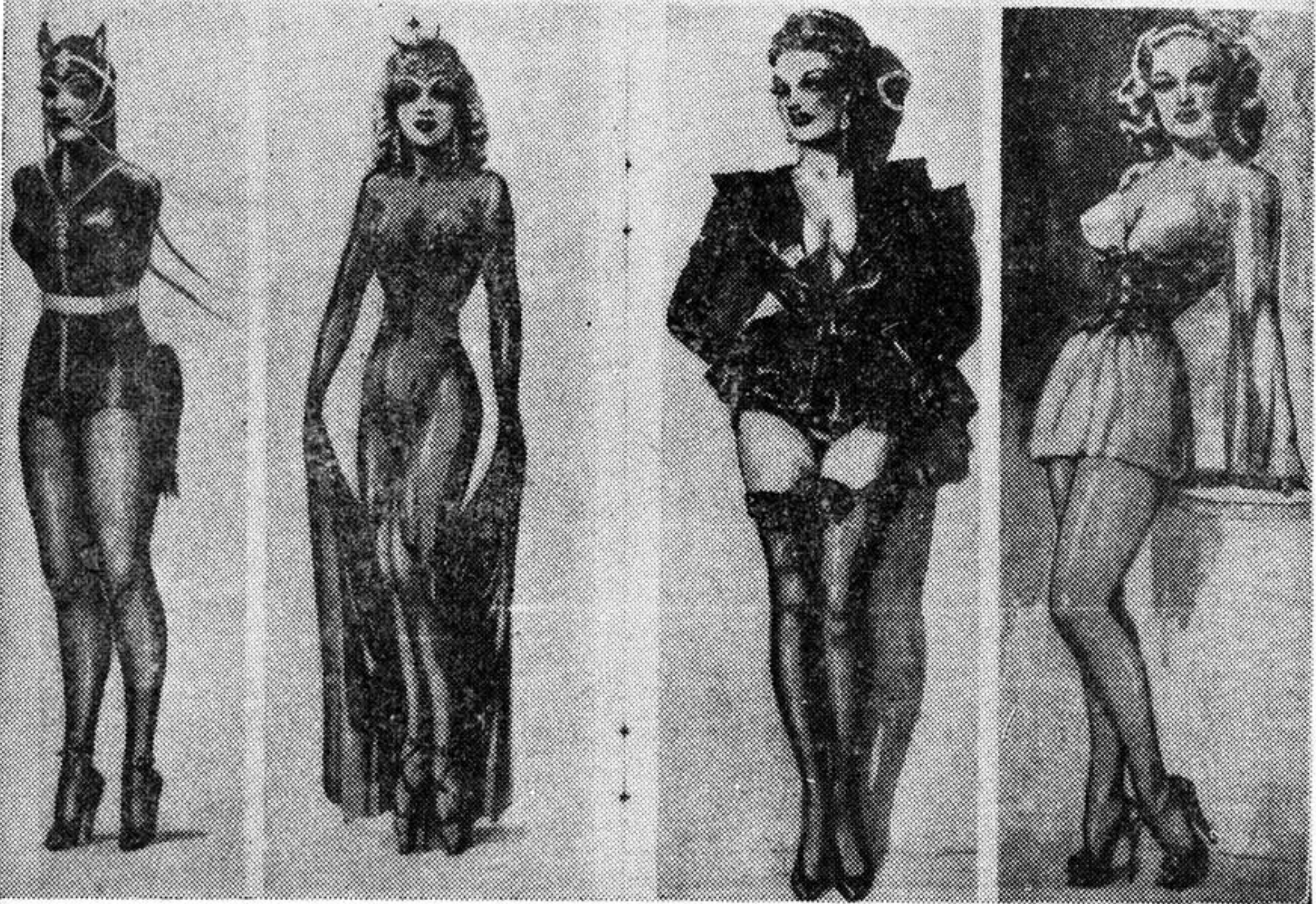
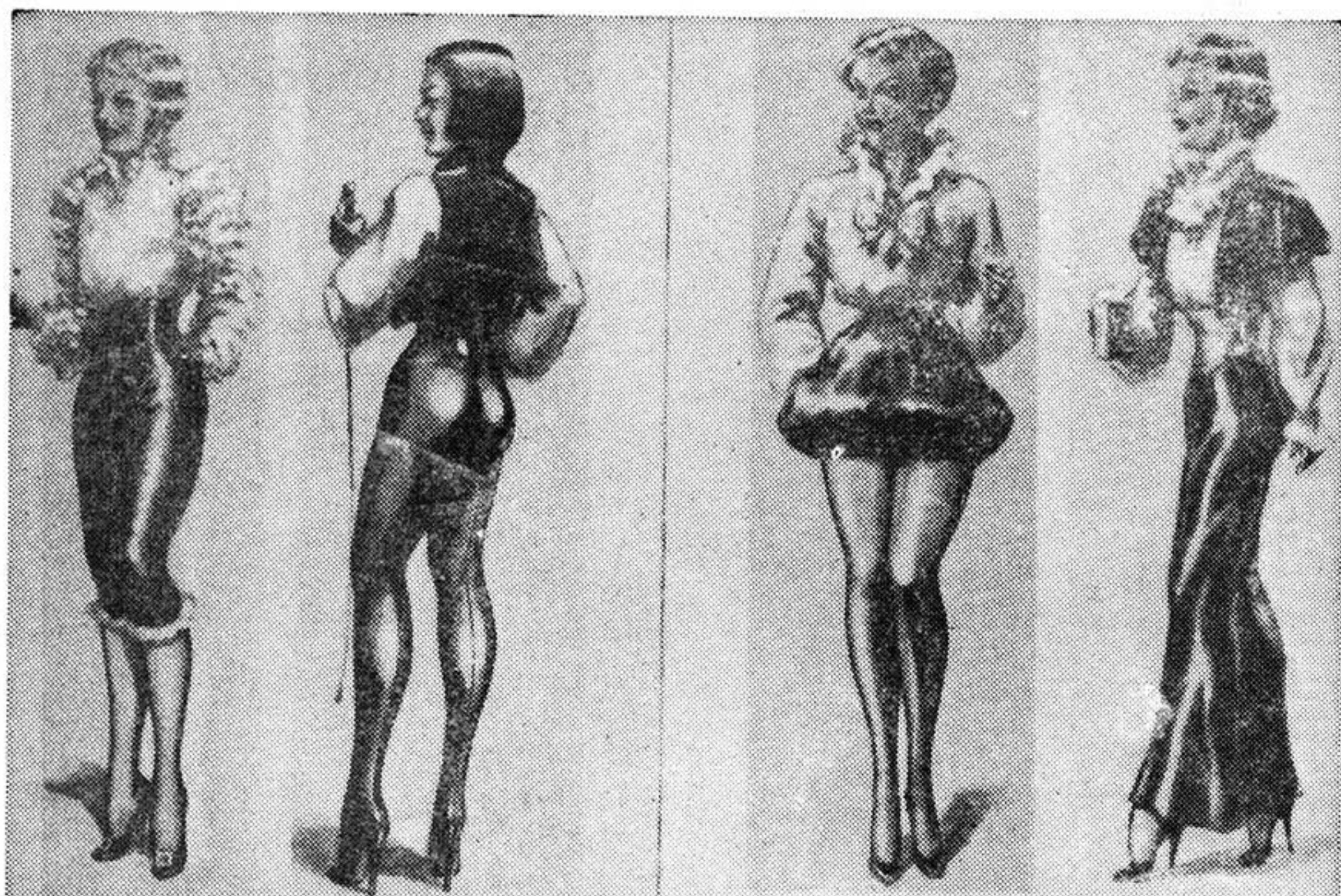
った絵や写真を、九ページにわたってご紹介します。いわばこれは、なつかしのビザール誌落ち穂集というわけです。









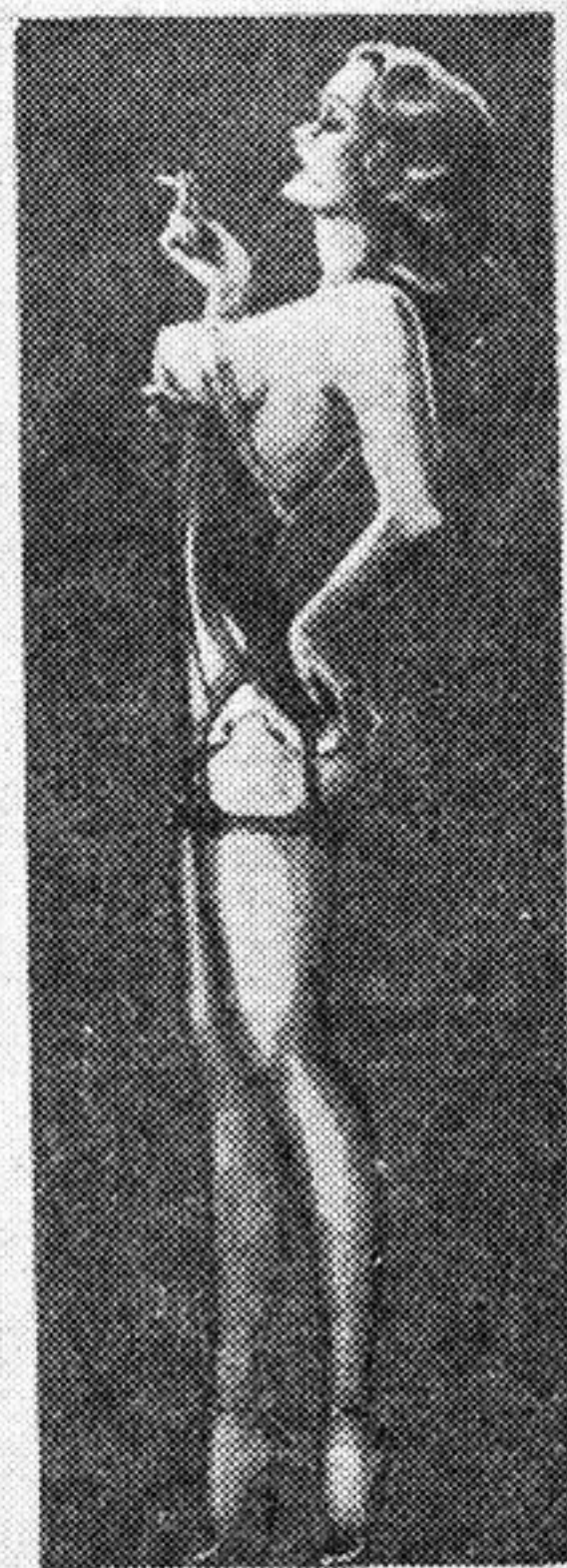




to send her to a "young ladies' home."

I was thirteen years old when I first went to the "home for young ladies," and I soon found that I had fallen up to everything but a bed of roses. For the first year I was strictly dosed, and after I had been there for seven months, I was measured for my first pair of stays. These were strongly boned and padded, and did not "give" or stretch in the least. I was first laced in to about 25 in., which made the stays fit quite firmly. I did not mind this much, but when, some months later, my corset was tightened to a little every day, I began to complain, but my mistress told me that it was done to all young ladies, and I would soon get used to it. I had not, indeed, much cause to grumble then, as I could still run about, and was allowed to take my stays off at night.

Six months later I received a new pair of corsets with a waist of 19 in., and at the same time I was forbidden to take them off at all, being compelled to wear them night and day. They were, however, let out about 1½ in. at night, but this was only for a time, and I soon had to wear them at 19 in. continually, the stays being taken off only once a week.



most quietly, but wrote severe letters to my guardian about it. However, I might just as well have put them at the back of my head, for all the notice they received, and I soon found out that this was the case with almost all other girls.

My waist was steadily reducing month by month, and my behavior was punished by being laced an inch tighter than now and the stays not being taken for, perhaps, three weeks or months, and I was more than once laced in until I fainted.

After being at school for five years my waist was a shade under 15 in., and it was continually going tighter and tighter. If I went to a party or any other entertainment, I was still more severely treated, being laced into a pair of stays with a waist of only 13½ in., which made it at first very difficult to breathe. I must say that I sometimes enjoyed these stays, although, as I have said, they are so tight that I can scarcely get my breath when they are first laced on.

At the end of five years' training my waist was slightly over 14 in., even after I had been obliged to lay aside my corset for three months through illness. There were several girls with smaller waists than my own, and

ON WITH THE MOTLEY!



Harem Slave

mental wrecks brought by wear



Jockey

Most of these costumes reveal



Flower

downstream with flowers in her

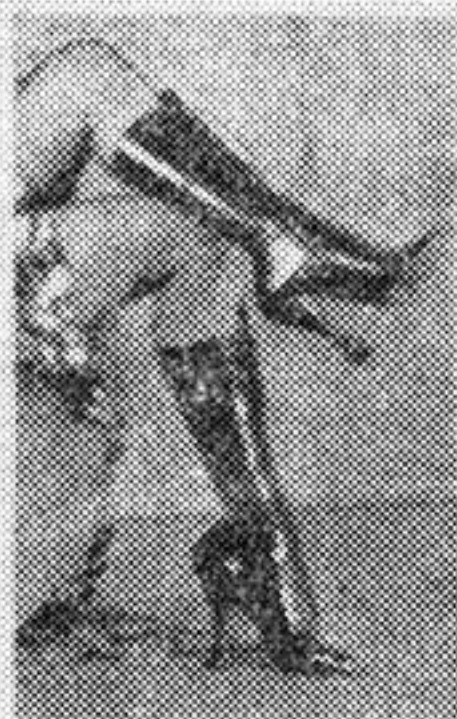


Ophelia

The "flower's" arms are con-



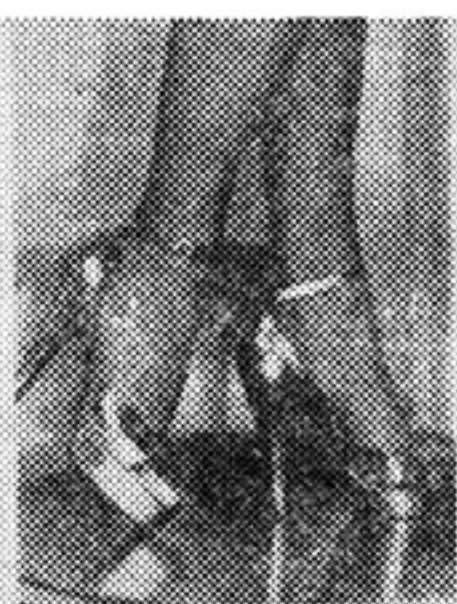
3



5

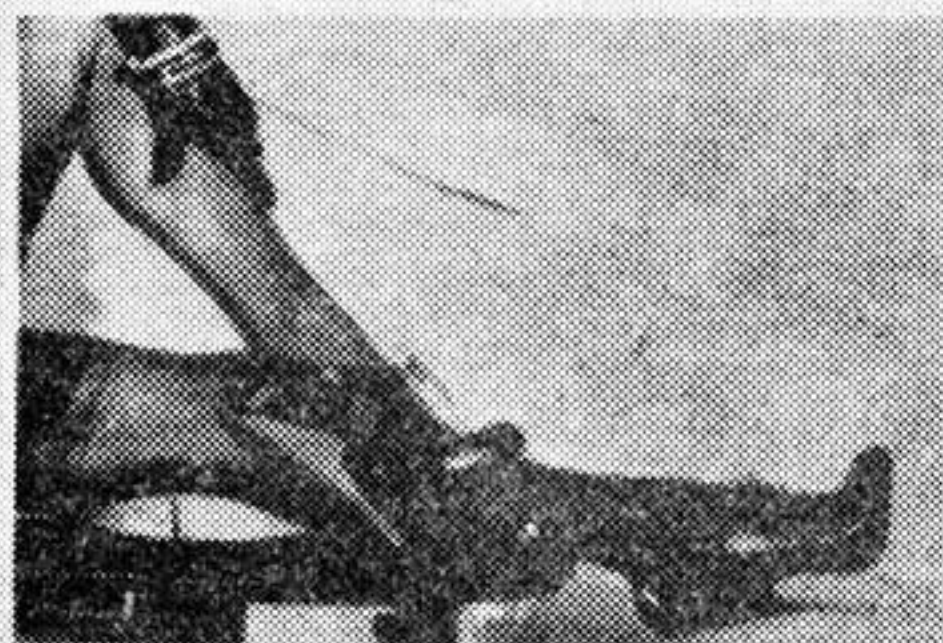


8



9

11



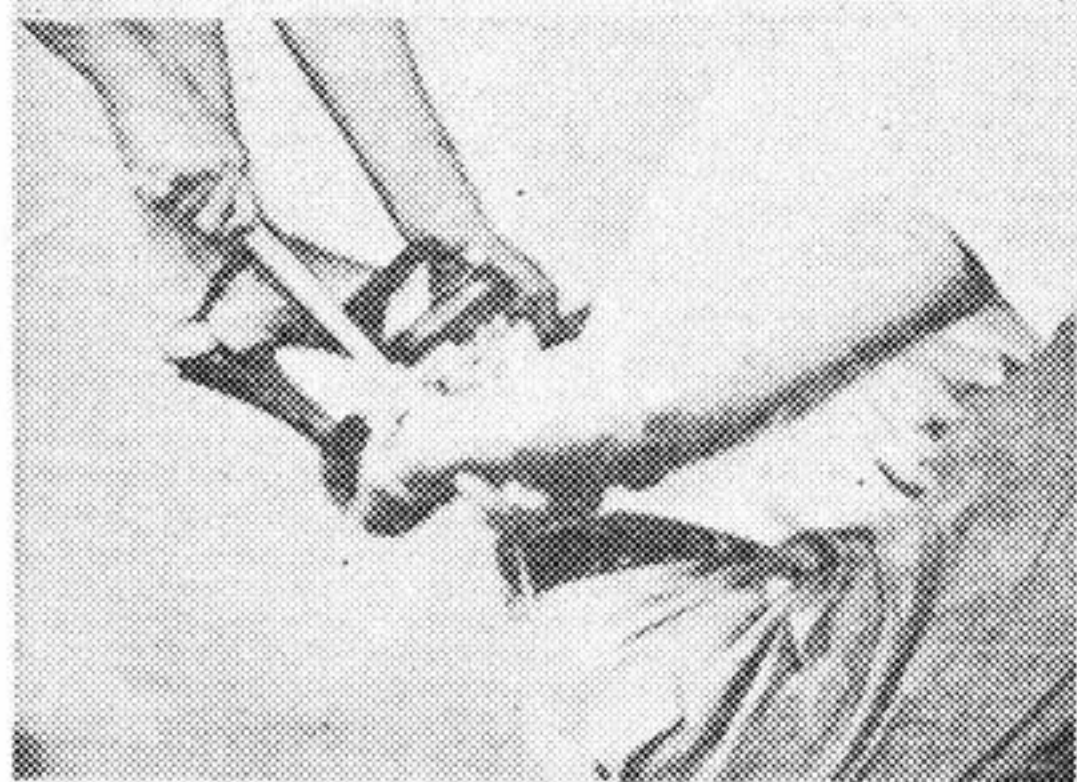
7



20



primo amore,
 Servia Borzov





"Burlington"



"Perfecto"



"Nautilus"



"Elien"



"Rochampton"



"Bessie"



Peace Perfect Peace
"a la Nautilus"



fine feather forecast



Business Executive
smokes at the supper table.



Gentleman of Leisure
a century or so ago—particularly



Week End
and vacation "Eyes at River"



Informal Evening
has a reason

前号まで

▼わたし（阿麻哲郎）は航海上上島氏を通じ、美しい女予言者サレアを、その日本公演中に知る。上島氏はゴールドンの古文書をわたしにあずけ出航したが、航海途上に煙のように消え、またゴールドンの古文書の本当の持ち主相馬博士に会う寸前、博士は行方不明となり餓死体が発見される。

▼以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに博士の怪死事件とのつながりをかぎつけ、流しの男に探りを頼んだが、男はかえってホステスのとりことなり九州の山中で変死体となり発見される。こうしてゴールドンの古文書をあずかったために、わたしは事件にまき込まれ、しかも古文書を何者かに持ち去られる。

▼その犯人とおぼしき女性と偶然に出会い尾行したところ

ろ女はアフリカ学術調査隊、西司郎の留守宅に入る。そこで有尾人とナゾの女を目撃し、前二つの殺人は女性による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い、翌朝ふみ込んだが無人家となつてゐる。そのころエテルナの常連小林春吾がまたまたホステスたちに拉致される。

▼事件のカギと見られるクロレラ、相馬博士の胃袋から発見されたKB物質について研究者中村教授は、恐しい反世界へ入るカギではないかと推察を下す。また上島氏夫人、美美子の存在もナゾめいた雰囲気がある。ベットの用としてサレアからおくられた豆ゴリラ男との異常な関係——そうしたさなか、九州熊本県の山奥で小林春吾が炭焼男に助け出される。何と、下半身がゴリラ男に変ほ



ゴールドンの記憶

(15)

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

本筋は違ふ

小林春吾が、思いもかけぬ奇怪な姿で助け出されたことは、大変なセンセーションを世の中に巻き起こした。もうこうなつては、事実はおおうべくもなかった。連日報道関係者は警視庁に詰めつきり、廊下という廊下にはまで人が群れていた。それから、中庭にはもちろん、付近の道路にまで、そうした関係者のための、とまりこみ用のテント村ができ上がるほどであった。

一番やつきとなつたのは、カメラマンである。とにかく、半分下半身がゴリラ男と化した世にも不思議な小林春吾の全身像を、何とかキャッチしようと必死であつた。

小林春吾は、助けられてからこちら、十日ほど手厚く熊本大学病院で極秘裡に療養を続けたのち、熊本県警捜査一課古谷主任の護衛で、これも極秘裡に東京へ護送された。事件が事件な上に、小林春吾の状態が状態なためとんでもない人権問題を起こすおそれがあつた。この破天荒な猟奇事件に、好奇心の強いジャーナリズムは、それこそ気の毒な被害者である小林春吾を、まるで、ヒマラヤの雪男がつかまつたかのような扱いをしかねなかつた。

た。

もつとも、下半身はともかく、上半身が元のままであつたことは不幸中の幸であつた。でなかったら、小林春吾は、もう人間並みの扱いは絶対にしてもらえなかつたであろうから。よしんば口がきけたとしても、だれがこれを小林春吾の変わり果てた姿であると信じ得よう。

すべては細大の注意と、極秘の行動で取り運ばれたにもかかわらず、事が重大に過ぎたため、いちばやくジャーナリズムのキャッチするところとなり、大変な騒ぎとなつたのであつた。事情がもれたのは、小林春吾を運んだ飛行機のスチュワデスが、不用意にもらした一言が、その端緒になつたと言われる。

小林春吾は、人目につかぬように、乗務員のトイレの中にかくまわれていた。スチュワデスはそれをいうのである。

「わたくしも、あの方をお気の毒だと思つたので、しゃべるつもりはなかつたんです。でも何にもしないから大丈夫、と、あれほど警察の方が保証して下さつたにもかかわらず、あの方は、わたしがトイレに行くと、何かこゝろいざり寄るようにして、ほんの一しずくでいからと、こうでしょう。全くあんまり驚いたものですから」

というふうに分解している。

捜査本部には坂崎警部以下、山浦、岸本、八木、長沢といった刑事たちの顔が皆そろつていた。それに熊本県警の古谷主任の顔もあった。

「いやもう、今度という今度は驚きました」古谷主任が、ひたいの汗をぬぐつた。ストープのほてりで、汗ばむほど室内は暖かであったが、それ以上に息苦しいほどの熱さが感じられた。

「わたしが思いますのは――」

古谷主任は続けた。

「これはもう、われわれの手では、負えないということです。常識以上の事件です。この前の杖立川殺人事件、それと奥多摩における相馬博士事件、みんなつながりがあるんじゃないかもしれません。でも、まだ今度のような、あの小林春吾君の悲劇が起こらぬ前ならば、われわれとして打つべき手はあつた。

しかしですな。何ということですか。小林春吾君は半分ゴリラ男になりかかつていますんですよ。どんな方法がとられたにしろ、これは想像を絶する事実です。こんな奇怪なことがあつていいでしょうか。われわれはここらで、捜査能力の限界を知るべきです。もう、

警察の面子とか、威信とかにこだわっちゃいけないと思いますね」

「そんなこと。あたりまえじゃありませんか」
少しいらしたように八木刑事は口先をとがらした。

「捜査当局では、何も警察の面子とか、威信とかにこだわっちゃいけませんよ。今度の事件だって、実際のところ、何が何だかわからなくなっちゃいましたからね」

空気が殺気立ってきた。古谷主任は上体をゆするようについて言った。

「捜査陣に、生物学界から有力な学者の参加を求めたらどうです」

「学界のご協力はとくにいただいております。しかし本筋はそんなことではないです」

坂崎警部が重々しく口を開いた。

事は急を要する

坂崎警部は、しかし最終的には揺るがなかった。彼は徹底した合理主義者であった。理に合わぬことは信じなかった。そこでこれらの捜査方針も、結局のところ基本において変わりはなかった。何か、とんでもないカラクリが——帰するところ、坂崎警部の頭にあるものはそれだけだった。カラクリには仕掛

がなくてはならない。仕掛の種は何か——それは今のところわからない。

小林春吾は、助けられて気がゆるんだせいか、東京に送られてからは眠り続けた。眠り続けのまま地下の特別室に保護された。

事件のカギをにぎる、大事な証人、というより、警察では、物見高い世間の目から、何とかあさましくも変わり果てたその姿を、隠しおせてやらなくては、という、純粋な人権擁護の立場からの配慮が、先立っていた。

「どうやら、はっきり意識をとりもどしてきたようです」

ひとりの係員が部屋に入ってきて、坂崎警部の耳もとでささやくように言った。

「よし、すぐ行く」

警部は低く答えた。係員はそのまま部屋を出て行った。出て行った廊下が騒がしくなった。記者たちにとっつかまって、盛んにいじめられているらしい様子だった。

「今、小林春吾が意識をとりもどしかけたらしい。あんまり大勢行ってもなんだから、八木君と長沢君、それから古谷さん、ほくといっしょに来て下さい」

そう言って立ち上がった。

「それから岸本君、きみ、中村教授に電話してすぐ来ていただくように——」

言われてすぐに岸本刑事はダイヤルを回した。K女子大である。しかし、中村先生ならここのところ、ずっと休講で、と言われて、

今度は自宅のほうのナンバーを回した。

ジリリリリ、送信音は鳴っている。ところがだれも出ない。業をにやしていっぺん切り、またかけた。やっぱり出ない。

「居ないようです」

岸本刑事が言うのと、坂崎警部は眉根に思案気なしわを寄せながら、

「それじゃ、急いで行ってきてもらおうか。留守ならお帰りまで待つんだ。お帰り次第、すぐにいらしてもらおうよう、お頼みするんだ」

会田琴三

群らがる報道陣を振り払うようにして、警部の一行が廊下を歩いていると、後からひとりのカメラマンが食い下がってきた。

「小林に会わせて下さい。彼はほくの同僚だったんです。どうか特別に頼みます」

行手をさえぎるように、立ちふさがってきた。黒い皮のジャンパーを着た若い男である。

「君は？」

うさんくさげに、警部はわずか歩度をゆるめただけで、言葉を投げた。

「東亜日報の会田琴三です」

もどかしげにジャンパーのポケットから名刺をつかみ出し、突き出した。

「東亜日報のカメラマンか」

警部は若い男の突きつけるように差し出した名刺を受けとると、廊下に立ち止まった。そして名刺とその男の顔を交互に見比べるようにながめていたが、やがて仕方なさそうにかぶりを振った。

「お気の毒だけど、今はだめです。もう少し待って下さい」

そう言い捨ててなり歩き出した。

「いつまで待てとおっしゃるんですか」

なおも食いつくようにまといつく会田琴三を、八木、長沢の両刑事が押しとどめた。

「事情が事情でしょう。もうしばらく待ってやるのが、かえって友情というもんですよ」

そう言って会田琴三のジャンパーの肩をたたいた。

「だから、いつまでというんですか」

「まあまあ」

だきすくめるように、古谷主任が後から会田琴三を引きとめた。そうしてそのまま、人波を分けながら、坂崎警部の一行を追っていた。

ちょうどその時、わたしもその場に居合

せた。会田琴三と同じく、急を聞いて、小林春吾に会いに来たところであった。もし彼が出てこなかったら、わたしが警部に声をかけるところであった。しかし、会田琴三の出現で気が変わった。どうせ、今のような様子では、わたしも小林には会わせてもらえそうもなかった。それより、会田琴三が、小林春吾と同じく、東亜日報の同僚だと聞いて、急に彼から話が聞きたくなった。そこで、古谷主任から引きとめられ、なおそれでも後を追おうとする様子の会田琴三の背後から、肩をポンとたたいた。彼が振り返るとすぐにわたしは目顔で笑ってみせ、

「ぼくも小林春吾とは友人です。よかったら表へ出ませんか」

ちよつとばかり、会田琴三にはためらいの色があった。色の黒い顔がとまどっていた。残念そうに、警部一行の立ち去った廊下の方に視線を走らせたが、それでもあきらめたとみえ、わたしのほうに苦笑じみた笑顔を返しつついてきた。

スチュワデス

地下の保護室には、特別に新しい畳が持ちこまれ、また、大きな石油ストーブまであ

て、至れり尽くせりの保護振りだった。

小林春吾は、ふとんの中で目を開いていた。土色にむくんだ顔に、生気のない瞳の色だった。それでも、ふとんを着て寝ているところを見れば、まだこの悲劇の悲さんはわからない。見るかげもなく変わり果てた下半身の変化は、ふとんの中に隠されているのであった。

「どんなもようですか」

付き添いの医者はかぶりを振った。まだはつきりしない、という意味であるらしい。医者は慈恵医大の著明な学者であった。特に放射線については世界的な権威として名を知られていた。

「今のところ、わたしにも皆目、まるで見当も尽きません。こんな事例は見たことも聞いたこともありません」

「そうですか」

物問いたげに、しかし警部はだまった。もしかすると、何か強烈な、放射能障害による突然変異でも起こったのではないかと、坂崎警部は、素人なりの考えをしていたのであった。

「あの——」

小林春吾が口を開いた。

「どうしました」



とつさに、一同申し合わせたように、いっせいにそのまくら元にかがみこみ、聞き耳をたてた。

「あの——」

またつぶやきともつかずにそうもらすと、ひび割れたくちびるの間から、小さな舌先をわずかに出して、物ほしげにそのあたりをなめ回すのである。

「水か」

長沢刑事が、気軽をきかしてまくら元の水差しをとってやったが、小林春吾はいったんはその口先にくちびるを当てたが、しかし、水が口先から流れ出ると、にわかに強くかぶりを振って横を向いてしまった。流れ出た水滴が、びっしょりとその枕元を濡らした。

小林春吾の衰弱ははなはだしかった。何にも食物を受けつけないのだから無理はなかった。流動食も果汁もだめだった。無理にとらせようとしても、すぐに口から吐き出した。注射も効果はなかった。注射針で薬剤の注入はできても、それがどこへどう消えてしまうのか、何のききめもないことが、すぐにわかった。

医者もサジを投げるといふより、その面妖さにほとほと困却のテイだった。栄養失調か



ら、彼が死ねばまだ状態は自然である。ところが、彼は衰弱の極に達しながら、なお生き続けていた。何が彼を生かし続けさせているのか、その秘密が不思議だった。

胃の検査がされたときであった。珍しいものが発見された。緑の染色体を持つ植物性プランクトン——クロレラであった。量はごくわずかであった。顕微鏡によってやっと確かめられた。

「状態は相馬博士事件や、流しの男事件のときとびったり同じだね。違うことは、小林春吾が生きていることだ。それに、半分ゴリラ男にされたことだ」

坂崎警部の発言に一同はうなずいた。警部は目まぐるしく頭の中に動くものを感じて言った。

「そうだ、君——小林を護送してきた飛行機の、あのスチュワデスは何という人だったかね——そら、小林に、一しずくでもいいからとねばられて、困ったというスチュワデスさ」

「そうですね」
パラパラと手帖を繰りながら岸本刑事が、
「佐々木正子さんですね」
と言った。

「そう、佐々木正子さん——君、迷惑ついでに彼女に連絡をとって、ご足労を願ってみて

くれんか」

「何か——」

「いや、ちょっとご協力をお願いしたいことがあるんでね」

坂崎警部は後を言わず、口をつぐんだ。彼としては、天啓のようにひらめくものがあつたのである。ともかく、あらゆる手段を尽くし、小林春吾の意識回復を図らねばならなかつたのである。

医者には手段がなかつた。手段がなければと、苦しまぎれに坂崎警部が思いついたことであつた。

「それから岸本君」

「はっ」

「中村教授はまだお帰りではないのかね」

「そのことでしたら、今朝も寄り道をしまして、教授のお家をのぞいてみたんですが」

「じゃ仕方がないな」

それで終わりになった。最初坂崎警部のいつけで、岸本刑事が自宅に中村教授を訪問した際、電話をかけてもだれも出なかったも道理、教授は本当に留守であつた。隣家の人が「先生なら一週間ほど旅行に出られるとかで、いらっしゃいませんよ」と顔を出して言つた。K女子大を訪ねると、ここでも、確かに旅行のためということ、一週間ばかり

の休暇願ひが出されていることがわかつた。

「悪い時に旅行なされたものだ」

その時、報告を受けて坂崎警部は、実にむずかしい、しぶい顔をしたものであつた。

教授は留守ではない！

わたしは会田琴三と別れたその足で、中村教授宅を訪ねた。

「さっきも警察の方が見えてらしたようですけど、先生は、旅行に出られて留守なんですよ」

隣の人が顔を出して言った。

「本当ですか」

わたしはがっかりして、しばらくはそばの石垣のわきに腰をおろしてやすんだ。とにかくたばこを一本、とり出して火をつけ、ゆっくりと吸つた。そうしているとゾクゾクと寒いので、深くオーバーの襟を立てた。

会田琴三と会えたことは、一つの収穫であつた。といつて、ことさらに耳新しい事実をききこんだというのではない。

「そうです。あいつと羽田にいっしょに行つたのはほくです」

「で、羽田で、何か変わったことはなかつたでしょうか」

「何も変わったことなんか、なかつたな」

喫茶店のテーブルを距てて、わたしたちは向き合つていた。

「確かそのときは——」

「西司郎教授をお送りしたんですよ」

「そんなようでしたね——それじゃおうかがいしますか——」

「何ですか」

会田琴三も改まつた口調になつた。

「その時彼は、飛行場でだれか美しい女の人を見かけなかつたですか」

「女の人？」

反問するように言つて、急に相好をくずした。

「そうだった、見かけたようでしたね」

会田琴三はほくそえむように笑つた。

「ほくら帰りかけるところだったんです。すると彼がボヤツとするように立ち止まつたんで、どうしたんだ、ぼんやりして、と、ぼくは彼の背中をどやしつけてやつたんです。彼は、美人にみとれていたんですね。いや、あの女、実に美人だね、とかなんとかいって」

「その時の女を、あなたも見ましたか」

「チラッとね」

「で、今おぼえいらっしゃいますか」

「さあ、いくら美人でも、チラッと見ただけ

「なんだからね」
「この女性と違いますか」
わたしが出したのは英美子の写真である。

「おぼえてなんかいませんよ」
会田琴三は、写真をろくに見ようとしな
かった。

面談はそれだけのもので終わったが、わた
しはそれなりの収穫があったことを感じてい
た。とにかく、まだわたしは英美子を信じて



いた。芙美子があの日、羽田に出かけたはずはなかった。芙美子自身が否定するのだからまちがいはあるはずがない。それを小林春吾はかなり強く、芙美子だと主張した。そんなばかな、と、頭からわたしは否定した。だけど、写真の人とそっくりだったがな、と、小林春吾は半信半疑のようであった。それ以上わたしも彼も深くは考えなかった。が、どこかにそれがひっかかって残っていた。

小林春吾がエテルナで誘かいされたのは、そのことがあってからである。何かこのことと関係はないのか、第一、ゴリラ男といえは芙美子のところでも、つい最近それを見たばかりだ。一メートルにも満たない、愛がん用のゴリラ男だということであったが――

そして、小林春吾も、半分ゴリラ男になされたという。ゴリラ男にされるところを、半分で助かったわけだ――。こここのころの、暗合めいたところが、ひっかかりとして残るのであった。

たばこ一本吸い終わり、わたしは一応むだでも、K女子大のほうへ回ってみようかと思いい、腰を上げてハッとした。

――教授は居る。確かに家に居る。旅行なんかに行くはずはない。――わたしは思っただけをまた元に返した。「実験台にわしがな

る。それは学生たちの了解もついていることなんじゃ」そう言っていた、中村教授の決意めいた口振りを思い出したからであった。教授は今、自宅のどこかで、実験台になっているんだ。旅行だというのは、その実験の途中を、だれにもじゃまされたくないから言っただけだ、わたしには、はっきりとそれがわかった。

実験開始

教授の家は古い家で戦災にも焼け残った。戦争中掘った防空壕が、ちょうど格好の実験室となった。多少手を加え、コンクリートで壁も補強し、がん丈な造りになっていた。

中村教授は、ここに毎日、例の五人の女子学生を集めた。彼女らは、それぞれ適当なことを言っただけを出ていた。申し合わせたように口が固かった。十分信頼するに足りた。級友たちから、中村機関だとのあだ名を呈されたりしたのも、こういう秘密めかした研究班の雰囲気のためであった。

第一日目に中村教授は、研究室に五人を集めて言った。

「この前から、何度も繰り返す言うちよるように、せひとも今度の研究には、みんなの協

力を得んけりやならん。大事なことなんじゃ。一刻も早く、KB物質をつくり出さなけりやとんでもないことになる。そのためには、もちろん、危険はある。命が危ない。もしかすると、命に別状ない場合でも、まかりまちがってとんでもないことに――」

教授は机の上の新聞に目を落とした。第一面に、小林春吾の事件が大きく報道されていた。下半身がゴリラ男、この奇怪事のナゾは何か――書き振りはセンセーショナルだった。また、それに価するだけの事件の内容ではあった。

教授は目をあげた。

「今その危険を考えることはなか。一か八か実験台にはわしになる」

「でも」

箕輪祥子が口をはさんだ。

「危険とわかっていながら、そんなことを先生にさせるなんて――」

「先生のおからだは大事なんです」

小沢麗子も箕輪祥子に同調するように言った。

「いったんやろうと思ったんですが、先生にそんな危ない実験台にはなっていただきたくありません」

柴山みさ子も必死だった。あとのふたりも

それに和した。じょう談めかした雰囲気はもうなかった。彼女らは、それぞれ、心から恩師の身を気づかっているのであった。

中村教授は、しばらくそうした学生たちの氣勢に押され、ちよつととまどったようにだまったが、やがて声が収まると、ニヤリと意地の悪い微笑を浮かべた。

「気持ちはいがたいがな、じゃほかにだれが実験台になる」

例のごとく、口元がひどくすぼまった。

「お前さん方、だれか実験台を志願でもしてくるかな」

あたりはシンとなった。

「危険は別としても、第一、おしっこが飲めるかな。どうじゃ。箕輪君、君、だれか他人のおしっこ、飲む自信があるかね。それも毎日じゃ。絶食して、おしっこだけを飲むんじや。苦痛と屈辱に耐えられるかね」

箕輪祥子は、下を向いたきり顔をあげなかった。

「柴山君、どうじゃ」

柴山みさ子も、返答に詰まって赤い顔でうつむいた。

「いいんだ、いいんだ、それでいいんだ」

中村教授はざっと見回してひとりでうなずいた。

「わしのおしっこを、君らがたに飲ませることなんか、わしとても及びもつかない。それよか、わしが君らの若い、新鮮なおしっこをいただく、そのほうが自然じゃよ。どうだ、みんな。おしっこを飲むのと飲ませるのと、二者択一の場合、しいてどちらかというところをとる——」

返答はなかった。沈黙だけがあった。

「小沢君、どっちだ」

叱りつけるような調子だった。教授自身、少しいらいらもしていた。

「はい、それは——」

小沢麗子は、指命されて、赤くなったまま口ごもった。

「仕方ありません。その場合は、後者を選びます」

助け舟のように、小沢麗子の危急を、箕輪祥子が救った。彼女が一番肉付きのよいからだをしていた。それだけ、一番はつきりした考えを持っていた。

「後者だというと、飲むより飲ませるほうじゃな」

教授が念を押すと、

「そうです」というようにうなずいた。ほかの者も、軽く同意の意味でうなずいた。

柴山みさ子が、急に顔をおおってつつ伏し

た。それは教授の決心の悲壮さや、その危険を気づかっただけの悲しみからではなく、ただただ、自分の排せつ物を、恩師に与えて実験するということの恥ずかしさのためであった。

「じゃ、みんなこれで本当に納得してくれたんだね」

みんないっせいにうなずいた。

「いよいよのとき、しりごみしてくれちゃ困るよ」

中村教授はいとも満足気に、椅子の背によりかかって、軽くノビをした。

いよいよ絶食である。そして同時に、クロレラ胃中培養の種付として、特別に精製されたクロレラの苗を飲んだ。毎日〇・一グラムの分量、それは粉末にしてあって飲みやすかった。

三日目に中村教授はまたみんなを集めた。

「尿は生鮮なものほどよろしい。ちようどわしの胃袋も、ほとんどからっぽの状態だからころあいもよからう。ここらで一つ、一番新しいおしっこでも、飲ませていただくとするか」

いかにも楽しそうな言い方だった。

(つづく)

読

者

コ

ー

ナ

ー



★このらの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月掲載しました方には、7月号および、S写真をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

★四月号は久しぶりにバラエティに富んだ編集で楽しませていただきました。というのも競作小説の諸先生の作品に、甲乙のつけ難いおもしろ味のあった事と、読者投稿のサワリ部分の発表等、これらが常になく誌面の盛り上がり大きくしていたためでしょう。そしてまた、私は今、編集部を通じて諸先生にお詫びをしなければなりません。いつか私は編集部宛に、森下、森本、かびや、藤見の諸先生のものは文献色が濃く専門的に走り過ぎた、と申し上げましたが号を重ねているうち、私の考えが先走りであり当を得たものでないことに気づき始めました。私のように長年貴誌に親しんで

いるものは、風俗批評的なもの或は時評、短評等に何となく一貫した筋を感じ易いものなのですが、諸先生のものは号を追って新鮮味が増して来ている。これは私にとって一つのおどろきでもありました。かつて文献的だと非難したものに、今は新しい期待さえかけています。これはまた私の考え方では、読者の目が肥えてきている、といえるのではないのでしょうか。吸収欲が旺盛なのかも知れません。そして、絶えず新しいものを求める気持が強いのかもわかりません。マンネリを恐れる気持もあるのでしょうか。その一例として、水尾先生の「M論」にしても、その体当たりの実践探求に

感じ入りながらも、少しづつ物足りなさを感じるようになって来ています。四月号では先生は常になく対象的行為を表現されています。先生自身から推察して、一種風変わりな傾向なのにと、それでもなお、何か古くさい感じがする。これはやはり、余りにも長期の続行という事が原因なのではないでしょうか。同じ状態でも、年代別とか時期別とか、一定の間較を置いて発表されていたら、読者に与える実感は、もっと強烈で生々しく、常に新鮮であったように思えるのですが……。北園氏の「アラビアの城」はそのもっともよい例で、ひと頃は読みながら次々と期待する心で一杯でしたが、今

年になってからは急激に内容に衰えを感じました。先生としてもあれ以上は盛り上げようがなかったものと思います。従って四月号は尻すぼみのまま、やつと終わったという感じでした。終回の時機は当を得ています。先生の新たな構想のものを期待する心は私一人ではないと確信しています。吉田、金井先生のものは次第に充実して来て今後を期待出来るそうです。それに、余り表面化していませんが、目次カットの中川先生の麗筆はますます冴えて、私は先生の絵を見るときにまず目次を開くのに楽しみを感じています。表紙の抜きん出て華麗優秀な事は申し上げるまでもありません。今月は少しホメ過ぎました。というのも、悪書追放とやという悪条件のもとで、これだけの雑誌を発行する事が容易でない、と判るからです。（京都・光谷東穂）

★謹啓、四月号からの所しい愛読者です。貴誌の繁栄を喜び、「読者コーナー」にさっそくながら五月号について述べさせていただきます。始めに言いたいのは「裏窓」は他誌にくらべてたいへんおもしろく、趣のあることだと思えます。今月号よか



ったのは「読者投稿特集」はもちろん、「悲しい奴の鞭打ちシーン」は迫力ある場面が写真とあって大きく記載してあって、これらは特に良い。グラビア・オフセットページの矢部・岩田先生の「和装美礼讃」を高く評価したい。「沈思のひと」と鬼頭・中島両先生の時代画選、それに「姫君受難・三景」もよかった。ただ残念なのは魅力的に感じた「山参道」だが、もっと女性美を露出してもらいたい。「既刊号・特選よみもの紹介」「アメリカ公刊誌・紹介」「沖渉二・小品傑作展」と「背骨の曲った娘たち」なども良い。今月号から登場した「パノラマ島秘譚」は「アラビアの城」のような推察で、北園透一朗先生の今後の文・内容と、中川彩子先生の迫力ある場面を描きだしてもらい、両先生のご健闘をお祈り申し上げます。「体当たりM論」「ゴルドンの記憶」などは再検討を望みます。結論的に言いますと、今後の「裏窓」にはオフセットページを多く、また写真ももう少し多く掲載してもらいたい。でも、五月号は四月号にくらべて全体的によかったと私は思います。まことに勝手

なことばかり、詳細に言っ
しわけございせん。では、編集部の方々と、愛読者の方々、今後ますますご健闘下さるよう、お祈り申し上げます。

(群馬 J・H)

★芸能界においても、非常に表面的に派手なファンをもつ芸能人と、意外に根強い潜在的なファンに支持される芸能人があるように、雑誌界にも同じようなことが言えると思う。「裏窓」は言ってみれば後者に属するのではないだろうか。私が古くからの愛読者であることは、行きつけの書店の店員達が私のことを「裏窓の人」と言っていることからお判りでしょう。同一題の四作家の競作は、他誌にはとうていみられない芸であると思う。特に各作家の特異の発想には興味をひかれる。四月号掲載安東泉氏の「わが正義と自由精神への主張」は、意義深い読物であると思った。私は「裏窓」をいつまでも愛読したいと思っている。次号がまったく楽しみである。

(静岡・持統院)

★先日ファイルを注文したところ、ファイルのサービス写真に久しくお目にかからなかったエダ・キリコ嬢がおられたので、

大いに気をよくしています。さて五月号ですが、毎号のことながら豪華なさし絵陣で、私の目を楽しませてくれますが、私の審美眼ではなんと目次の中川彩子先生のものが一番でしよう。これらは一度でなくしてしまふのはあまりにも惜しいことで、是非もう一度グラビアで掲載するか、出来れば読者に好評な絵ばかり収録して、画集として発行していただければ幸いです。他に久しぶりに沖渉二先生のご麗筆、なにか恋人にでも再会したような気がします。「読者投稿・特集」絵物語に代わるものとして大いに結構な企画で、今後が楽しみです。近ごろの純文学にくらべれば、こちらの方がずっと正統派のエロティシズムでしょう。画集のことをくれぐれもよろしく。

(名古屋・色彩狂)

★拝啓、直接購読第一号・四月号と、美しい写真をうけとりました。写真の中に女学生のセーラー姿がありましたこと、小生前々からの念願かなった思いがします。できればグラビアにおいて、かわいい女学生、又はバスマール、看護婦もそれぞれの服装で掲載して下さい。さて四

月号、毎号のことながら、表紙の美しさには感謝感激です。まことに春が一足早く来た思いで見つめております。さて、内容はいささかマンネリ化の感がありますが、八巻先生の「葬送行進曲」読み終ってむなしさが残りません。何か心に暖いものが残る思いです。やはりこれは主人公に「心」があるためだと思います。八巻先生の作品のない月は何か全体が気が抜けたようです。先生の長編小説を待っております。注文ばかりでおそれいりますが、毎号一ページだけカラーグラビアを入れて下さい。美しい本誌をカラーで見られたら、と思う願いは、本誌を愛読するものにとって当然ではないでしょうか。毎号一ページづつ、美しいカラーページがたまってくことは、また一つ楽しみが増すことになります。もう一つグラビアに注文、今までのグラビアは、同じものを角度をかえ、背景も変化なくべたべたと載せている感じで「天守閣」もその感大いにあります。もっと変化をつけて下さい。注文ばかり書きましたが、これも貴誌を心から愛するため、悪しからず。

(広島県・愛徳者)

猪島昌也傑作フォト集



モデル・荻千景

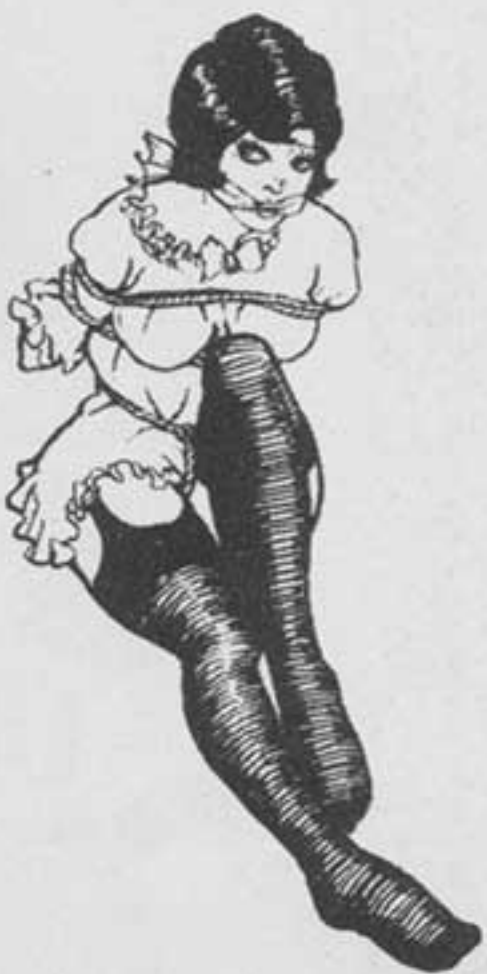


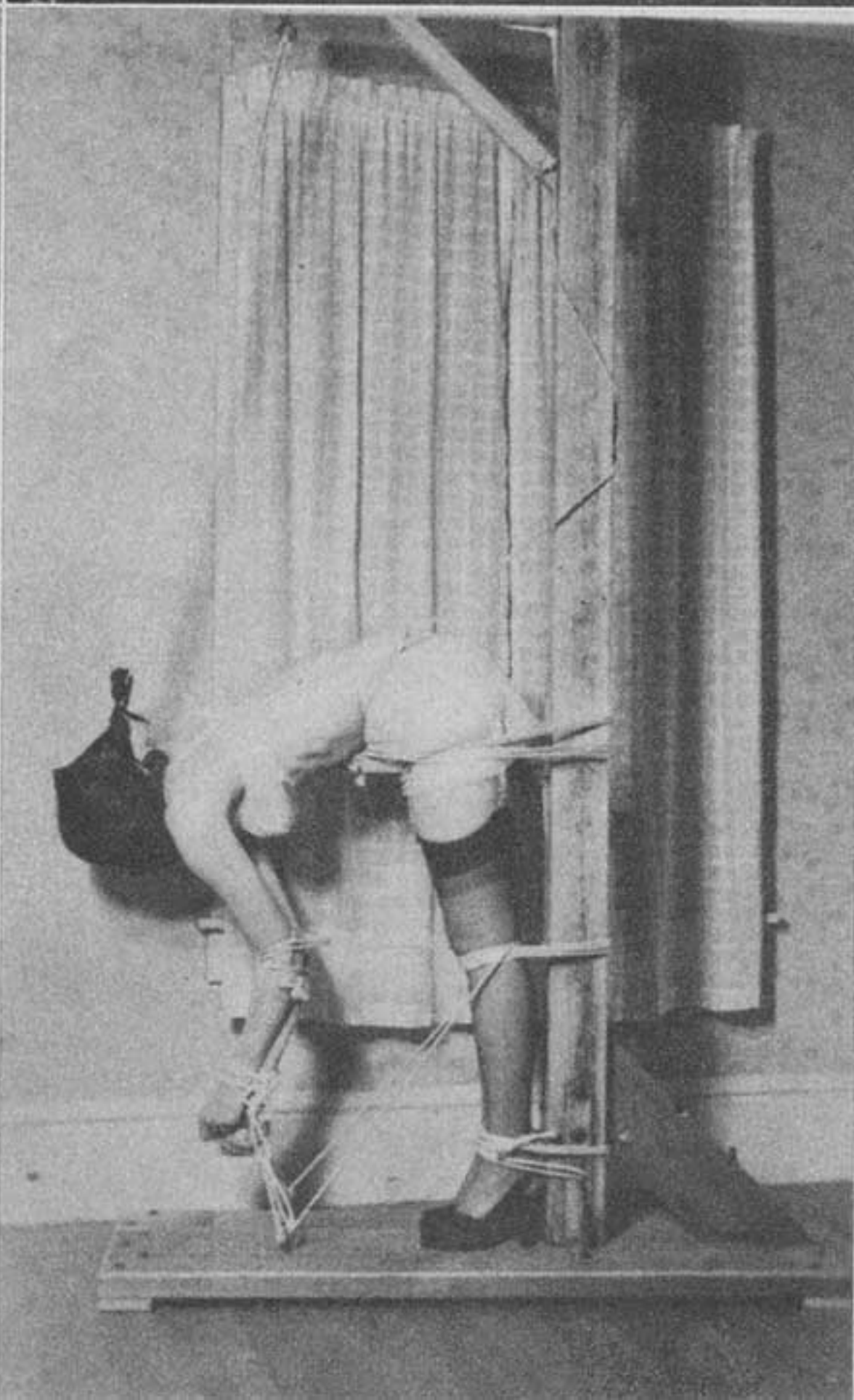
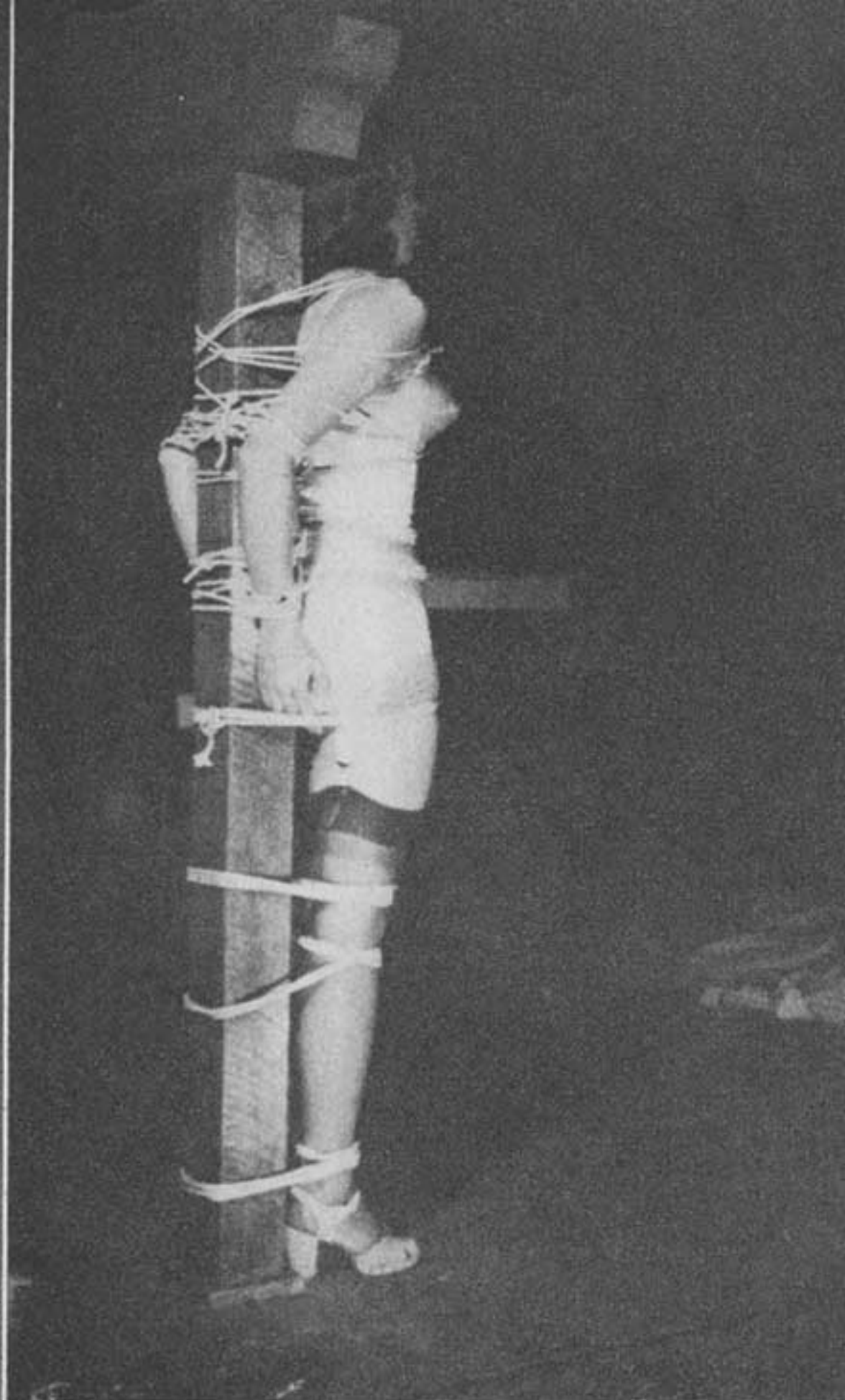
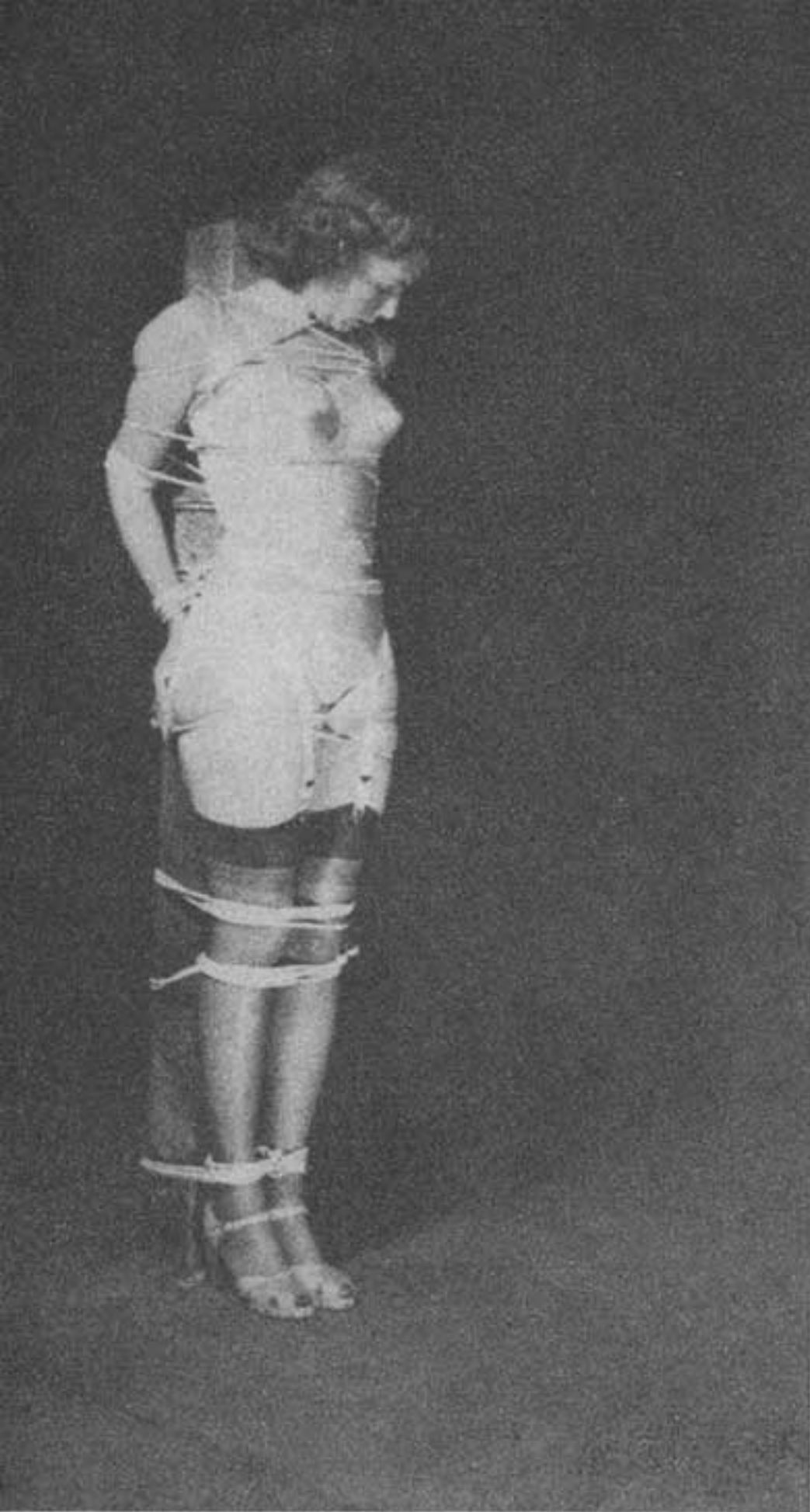
モデル・荻千景

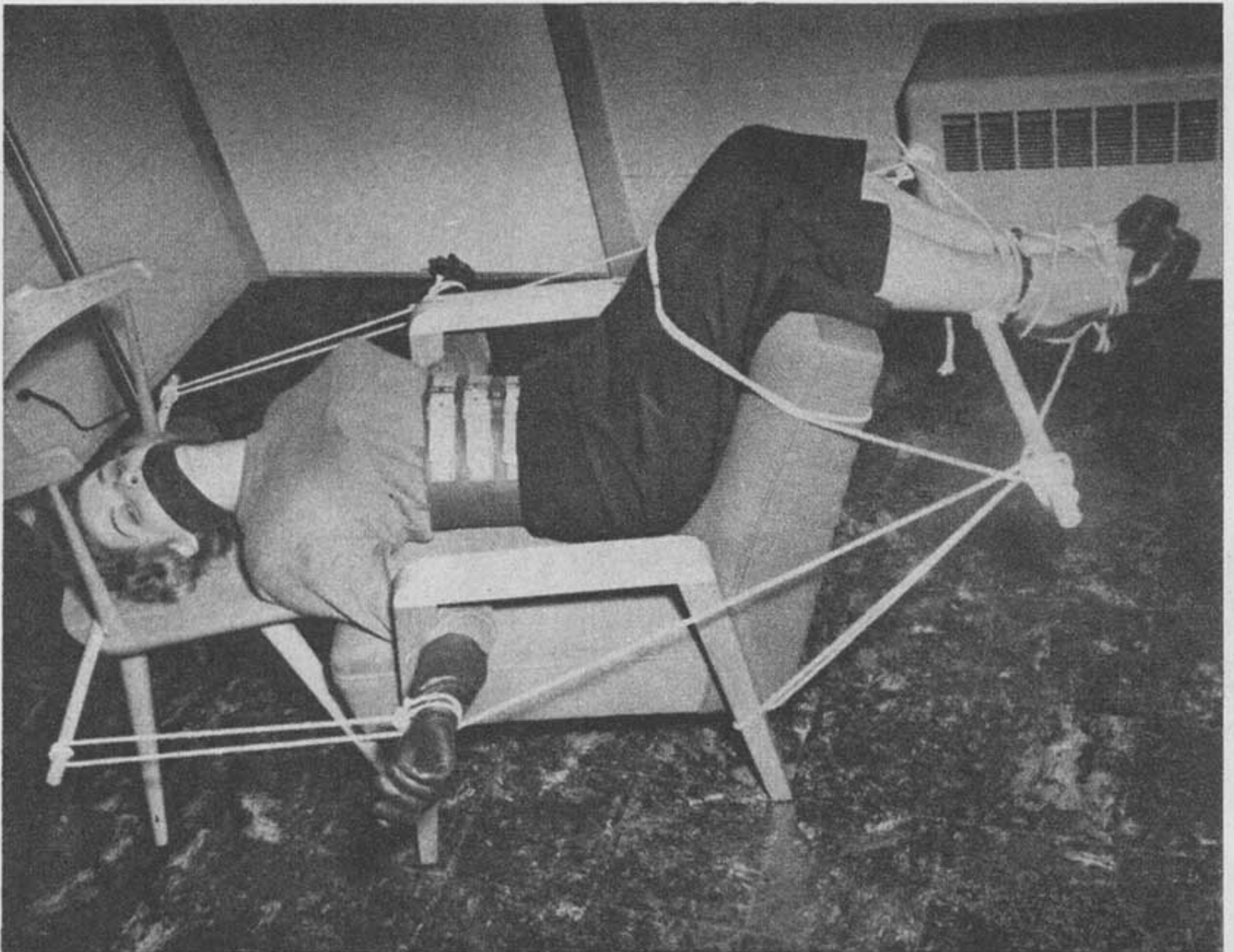
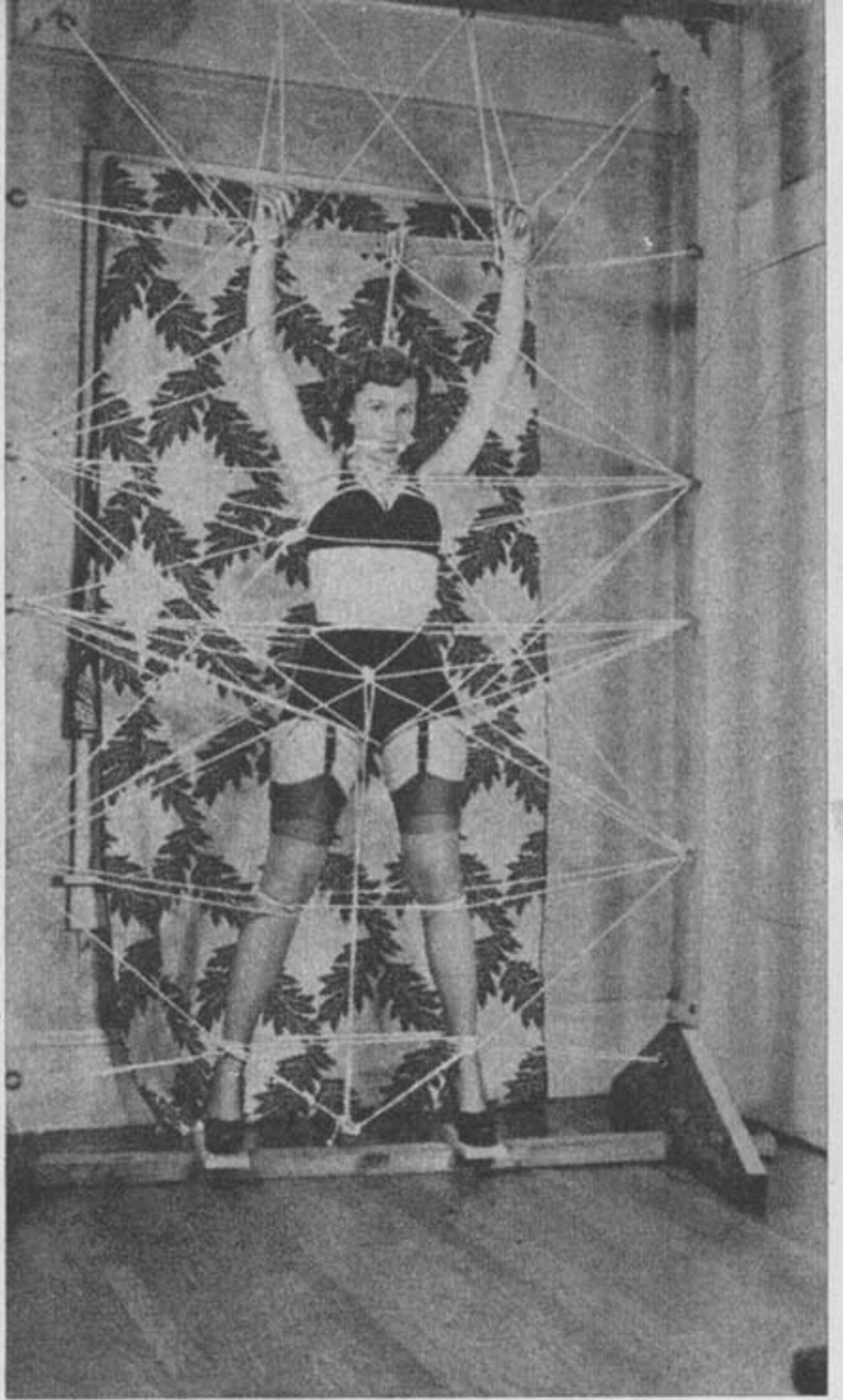


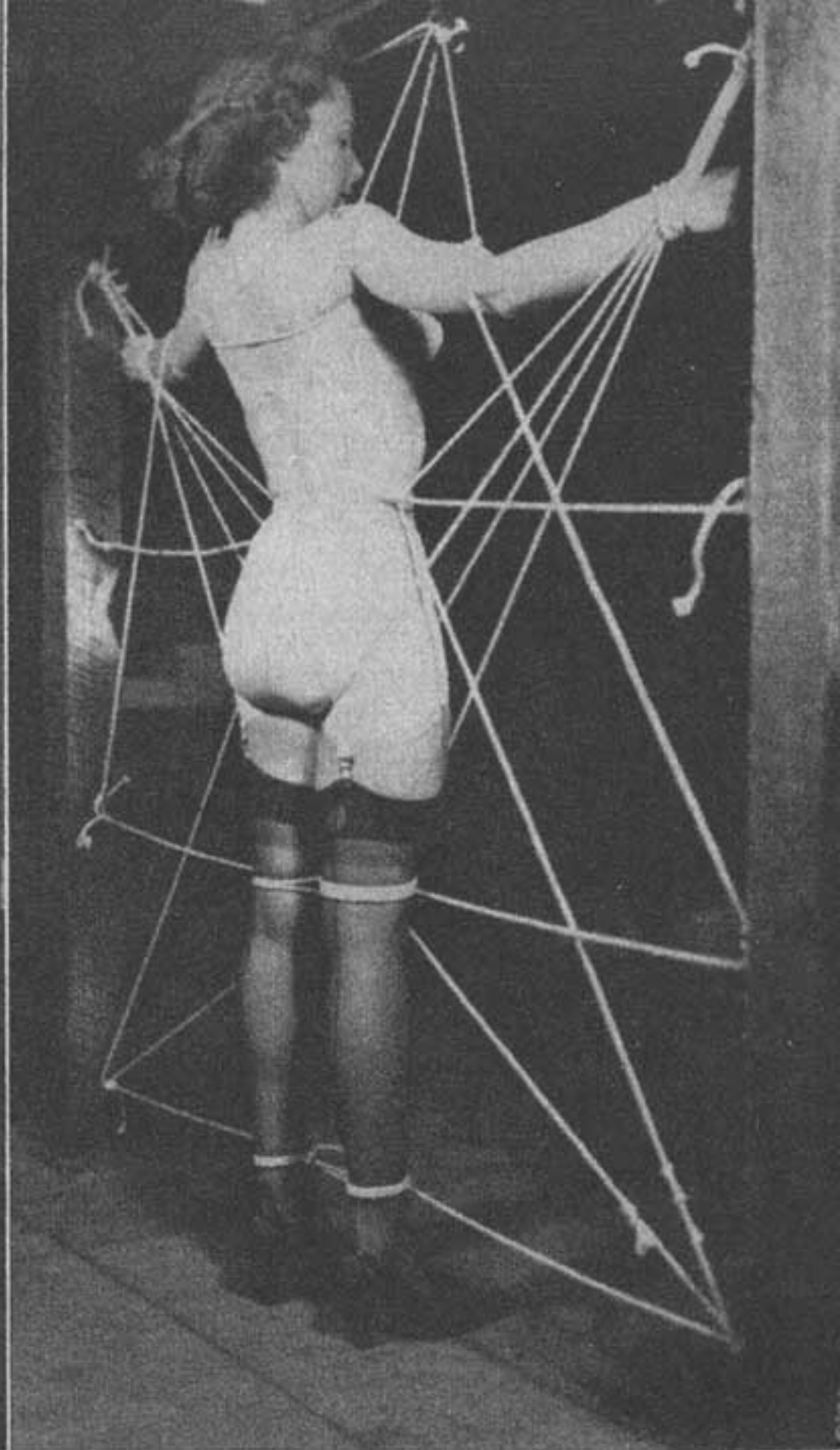
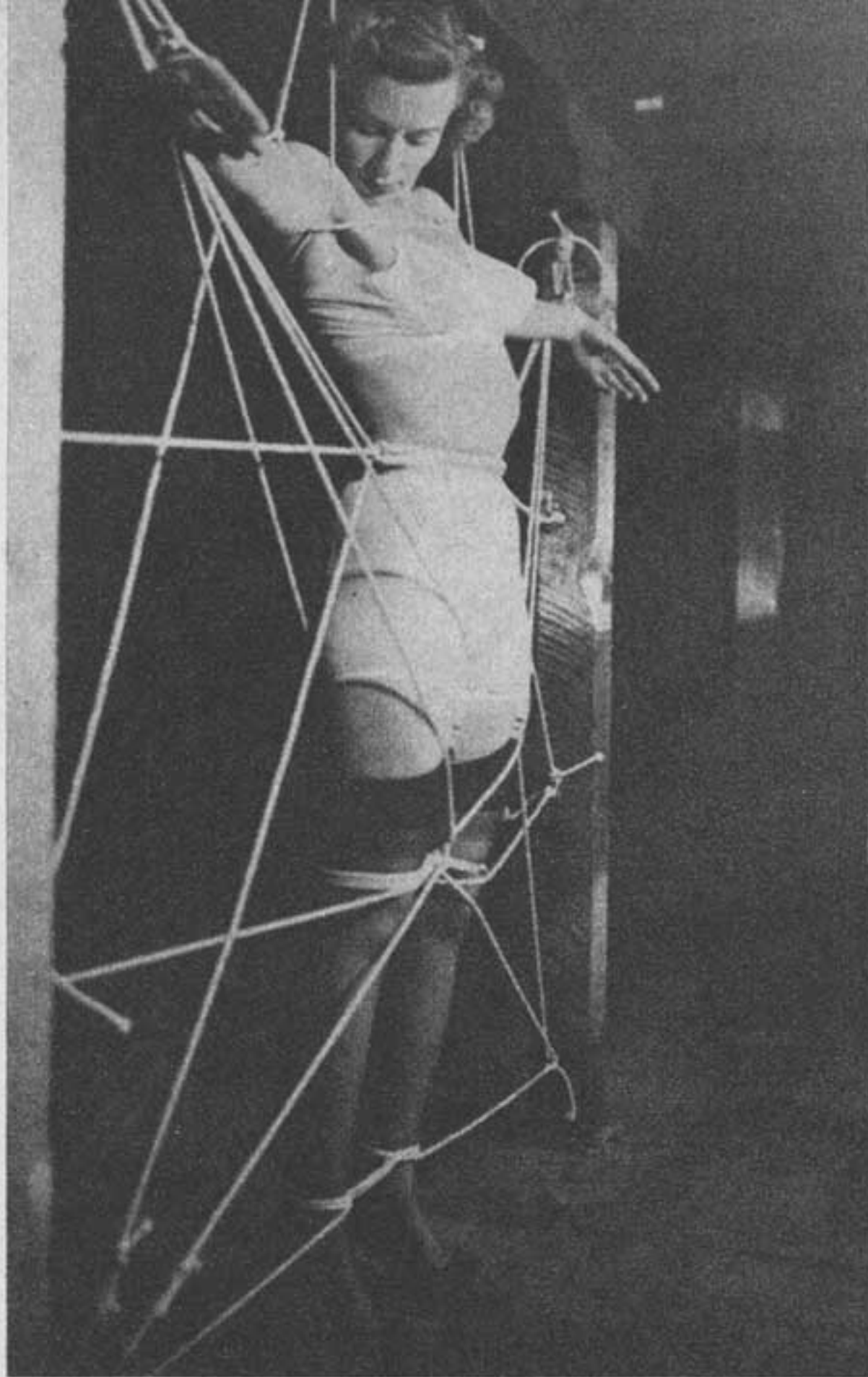
アメリカ新着フォト集

北米・フェニクス商会・特約











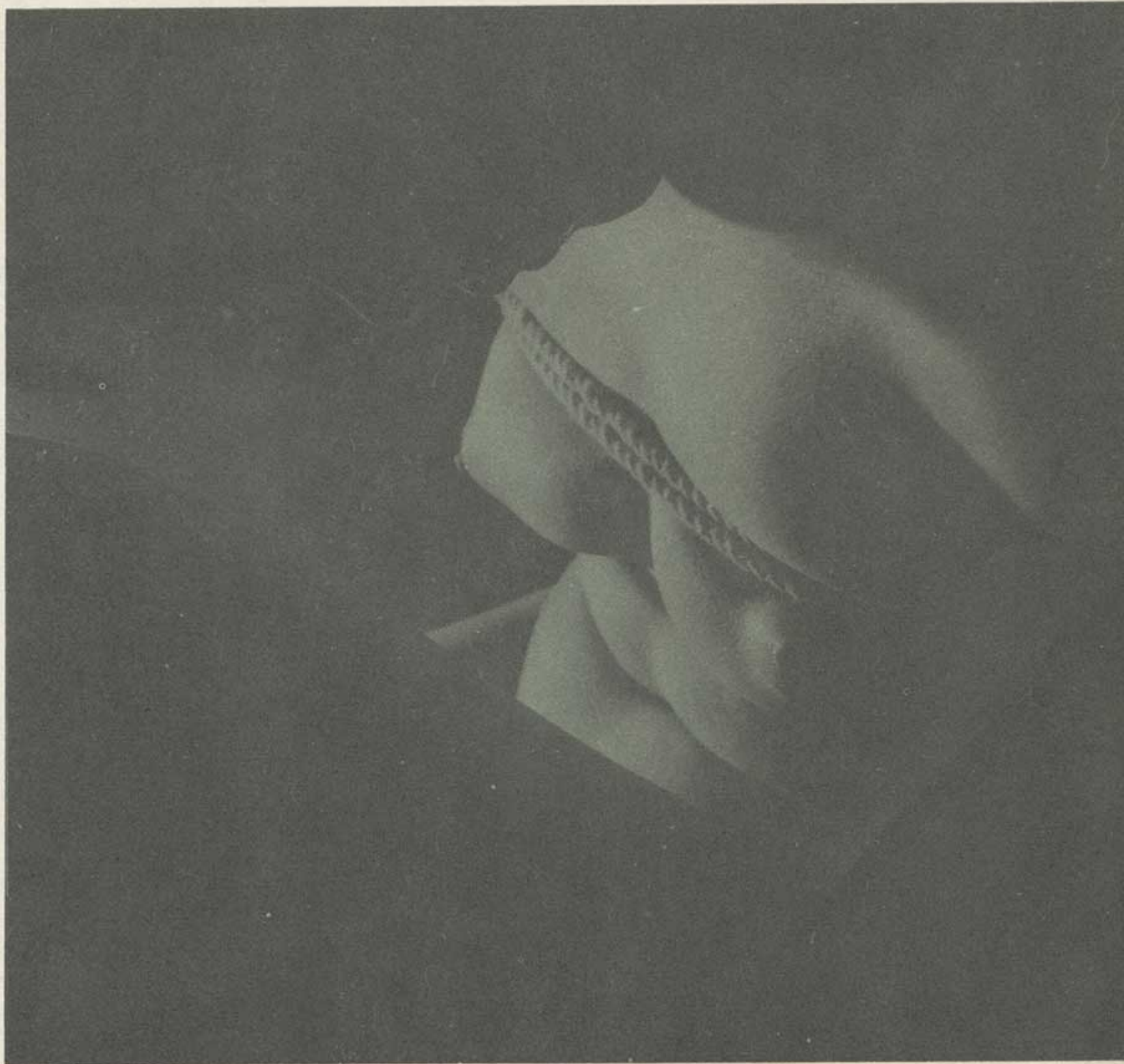
ある夜のバーで

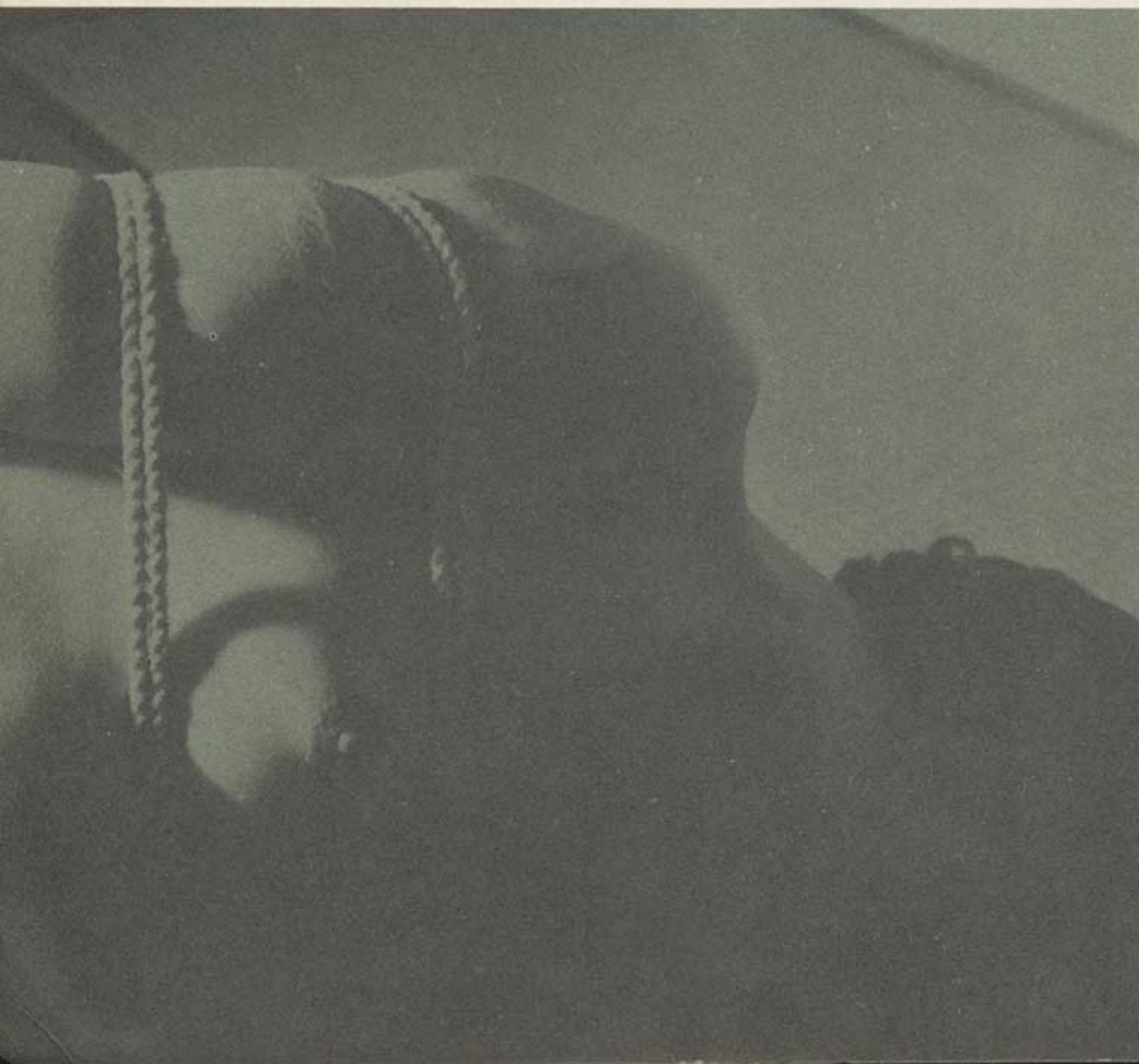
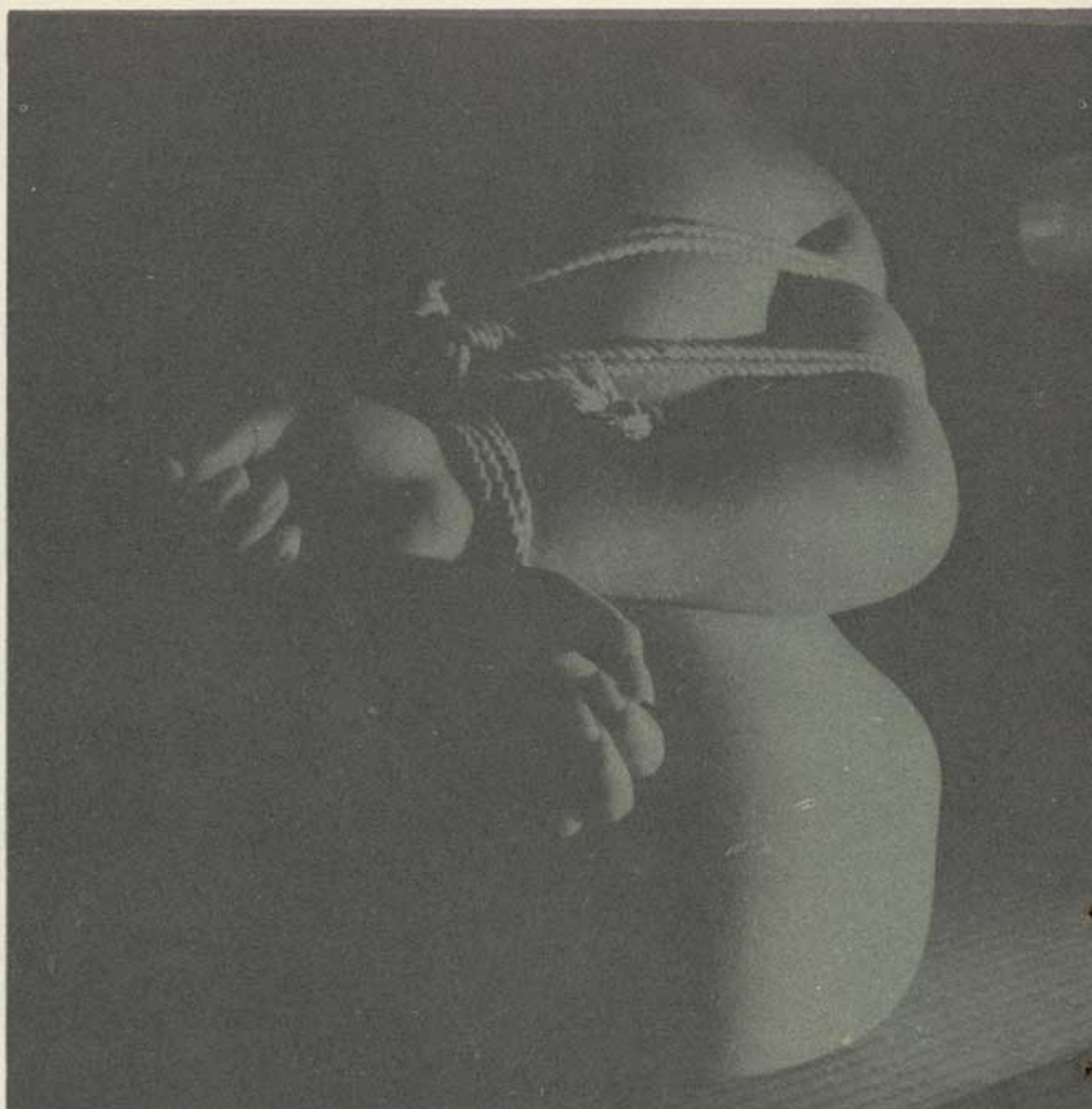
絵・沖 渉二

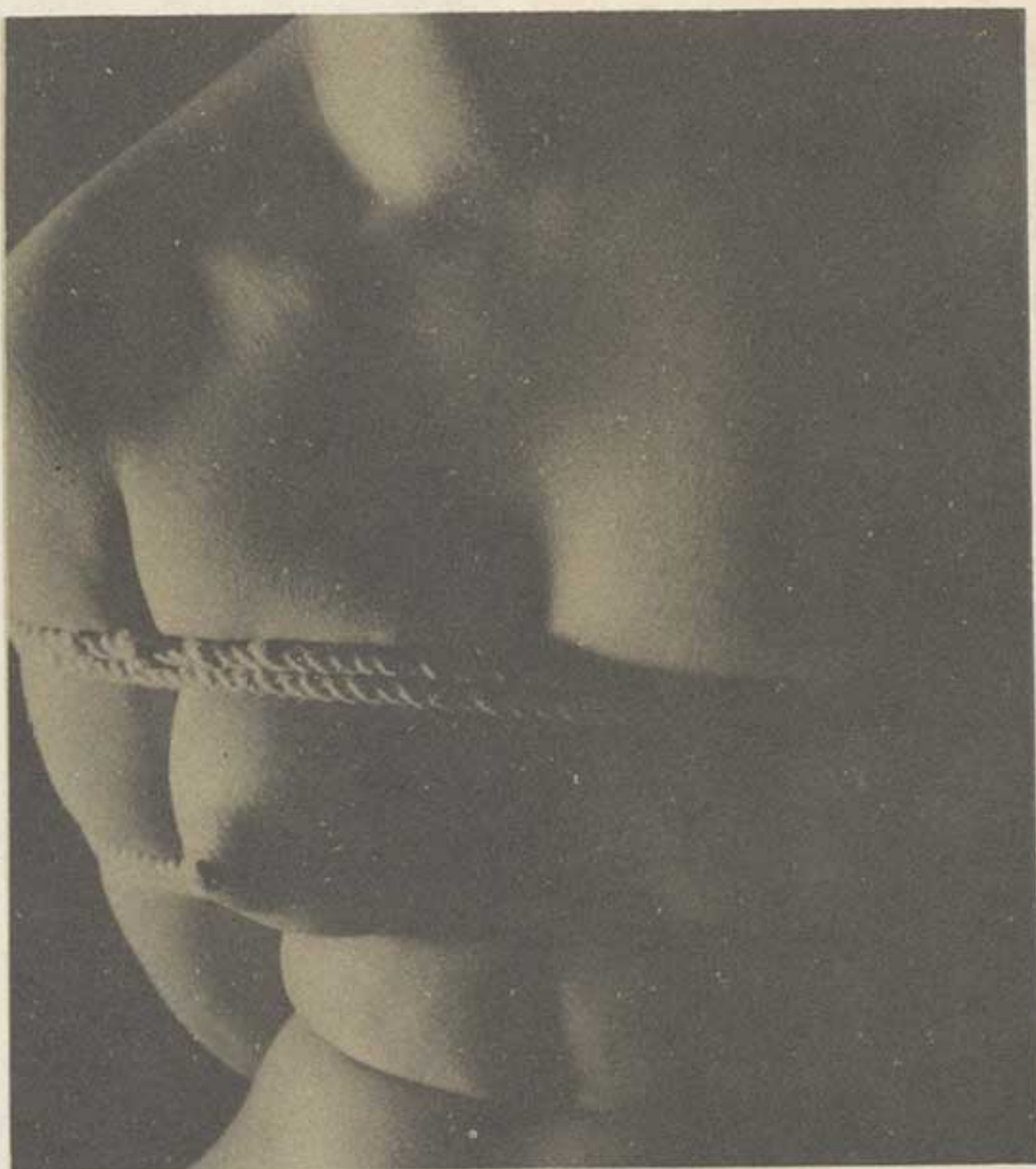


密室の砂丘

カメラ・吉田 久
モデル・小笠原純子







裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番振替東京55408あまとりあ社宛

39年(五月号) 三〇〇円

○オフセット
和装美札讀……………〔文・矢部 定三
〔絵・岩田 吉夫

○沈思のひと(フォト)……………吉田 久

○時代妖艶画選……………鬼頭 暁

○姫君受難・三景……………古正 英生

○アメリカの公刊誌・ご紹介
○ジャングルの襲撃○悪魔教の女

○馬上の麗姿○密林の女奴隷

★グラビア・山参道……………吉田 久

★乳房を飾る男(絵物語)……………文・パール・島

★時代妖艶画選……………中島 喜美

★パノラマ島秘譚・1……………北園透一朗

裏窓文芸評論……………安東 泉

○読者投稿・特集
狼火の部屋(沖涉二・絵)……………多賀 満

お雪地獄(古正英生・絵)……………丸亀 恵史

本郷大五郎の不満(山田彬弘)三津井弓雄

海賊船の女たち(豊田みのる絵)北村仙也

白い鬼(秋吉密・絵)……………三枝喜久治

竜四郎妖妬(東桂史・絵)……………潮 一樹

蛞(なめくじ)……………村山 省一

黄金草の宿(落合竜二・絵)……………豊中 夢夫

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎

○小品傑作展……………沖涉二・落合竜二

39年(四月号) 二五〇円

○時代絵物語……………〔文・庄内 裕司
〔絵・小日向一夢

さみだれの死……………山田 彬弘

○妖美画個展……………鬼頭 暁

○時代妖艶画選……………都築 峰子

○和装の女性美・四態……………金井 行雄

○フォト(玩具・訓練・協演)……………吉田 久

★グラビア・天守閣……………久

★スクリーン・クライマックスシーン集①②

★フォト集(モデル・榛名リエ)藤沢 修

続・スクリーンに躍る……………藤見 郁

アラビアの城・10(鬼頭暁・絵)北園透一郎

翻られた稚児(東桂史絵)かびや・かずひこ

四作家競作同一題名小説
美女と毒薬……………志村清太郎

井村 錠

松山 省一

葬送行進曲(都築峰子・絵)……………八巻 令

背骨の曲った娘たち・2……………岐阜須三夫

地下室の檻(山田彬弘・絵)……………杉野平太郎

白蛙教のいけにえ(古正英生絵)野呂 久

三人のモデル(秋吉密・絵)……………赤木 恵介

お島とお紋(豊田みのる・絵)……………九谷竜太郎

ある異色映画と異色スライド……………藤見 郁

39年(三月号) 二五〇円

幻想絵物語・奇怪な動物園……………〔文・志村 基治
〔絵・秋吉 恋

絵物語……………文・祖父江 新

ある晴れた日の公園で……………落合 竜二

○妖艶女態四景(画集)……………鬼頭 暁

○光と影の哀歌(フォト)……………吉田 久

○和装絢爛(フォト)……………北 好夫

グラビア★榛名リエ・パレード……………藤沢 修

★奢れる女神のポーズ六態……………編集部・編

★アメリカの公刊誌ご紹介……………編集部・編

★吊り鉤(フォト)……………吉田 久

スクリーンに躍るロマンと幻想……………藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵)……………潮 一樹

背骨のまがった娘たち(中川彩子・絵)……………岐阜須三夫

多ア坊のこと(山田彬弘・絵)……………北野 竜一

体当たりM論(江淵晃夫・絵)……………水尾 究

アラビアの城⑨(鬼頭暁・絵)……………北園透一郎

マゾヒズム画廊……………フェニクス商会

手だれの死者(東桂史・絵)かびや・かずひこ

きつねづら(小日向一夢・絵)……………井村 錠

奢れる女神への祈り②……………森本 愛造

サド裁判・茶番劇の俳優たち……………安東 泉

ゴルドンの記憶⑫(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎

39年(二月号) 二五〇円

○オフセットページ
フォト・ストーリー……………〔文・藤見 郁

竹の家……………〔写真・フェニクス

画集・女の館……………落合 竜二

ふたりのお遊戯……………西ドイツ・フェニクス

きもの繚乱……………カメラ・北 好夫

★グラビアページ★

五百羅漢……………カメラ・吉田 久

戦慄のまなざし……………北米・フェニクス

脚立と貴婦人……………北米・フェニクス

奇怪な散歩……………西ドイツ・フェニクス

縄と鎖のコメディ……………北米・フェニクス

四作家競作同一題小説
花と悪銭……………松山 省一

井村 錠

京 剣児

ご隠居のたのしみ(落合竜二・絵)八巻 令

犬の楽園(秋吉密・絵)……………下須 畜男

瀬沼めぐみの受難(山田彬弘絵)春川 光彦

アラビアの城・8……………北園透一郎

奢れる神への祈り・1……………森本 愛造

わが愛のうめきとさけび……………新村満美子

私本・男色大鑑・2……………かびや・かずひこ

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)阿麻 哲郎

39年(一月号)二五〇円

フォト・ストーリー	文・藤見 郁
魔女狩りパターソン	フェニクス商会
絵物語・女戦士のレポート	文・祖父江 新
	絵・落合 竜二
ミノーの貞操帯	文・井村 錠
	絵・中川 彩子
装身具とふたりの美女(フォト)	
西ドイツ・フェニクス	
アメリカSM絵物語	北米・フェニクス
★グラビア・かわいい妖精①②	吉田 久
★グラビア・海外SMフォトご紹介	
北米・フェニクス	
鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)	潮 一樹
アラビアの城⑦(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
男色大鑑・若道のほこりたかく(東桂史・絵)	
かびや・かずひこ	
おつかれさま(山田彬弘・絵)	春川 光彦
女宇宙士訓練室	絵・鬼頭 暁
空想と狂想のあいだ	森下 高茂
地図にない村(都築峰子・絵)	九十九郎
体当たりマゾヒズム論・19	水尾 究
「馬狂いの女たち」における	
マゾヒズム描写	森本 愛造
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(十二月号)二五〇円

フォト・ストーリー	文・吉永百合夫
深夜のひとりごと	カメラ・吉田 久
絵物語・破魔姫受難	文・島本 春雄
	絵・山田 彬弘
フォト・白い炎	吉田 久
アメリカSM絵物語	フェニクス商会
グラビア・まるい鉄口具	フェニクス商会
カーテンのある風景	吉田 久
海外SMフォト・フェニクス商会	
★特集・マゾヒズム画廊	フェニクス商会
崖の上の墓標(豊田みゆる・絵)	佐藤達四郎
ピンアップだけはやめて	ADグラナムール
DとMの行き戻り(落合竜二・絵)	光谷東穂
奇妙な実験(都築峰子・絵)	八巻 令
アラビアの城・6(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
私のSM論	重森 東
体当たりマゾヒズム論・15	水尾 究
恋人たちのオリ(山田彬弘・絵)	九十九郎
ほも紳士録⑫	かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論	エダ・キリコ
灰色の夜(カット・エダキリコ)	水尾 究
現代マゾヒズム文化時評	森下 高茂
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(十一月号)二五〇円

大吠岬の太陽	文・エダ・キリコ
暗い画廊	カメラ・吉田 久
フォト作品集	吉田 久
アメリカSM絵物語	金井 行雄
ヴィナスの誕生	森下 高茂
ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵)	北海 道雄
悪党半九郎(小日向一夢・絵)	潮 一樹
★グラビア・時代妖美術集	中島 喜美
★グラビア・海外の公刊誌より	
フェニクス商会	
★グラビア・大吠岬	吉田 久
ビルマの首枷族	春川 光彦
ある女装者の夜々	かびや・かずひこ
画集・黒い皮の響宴	鬼頭 暁
大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵)	九十九郎
青雲崩れるとき(古正英生・絵)	井村 錠
現代マゾヒズム文化時評・19	森下 高茂
体当たりマゾヒズム論・14	水尾 究
ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎
絵物語・鉾山町の女たち	文・宗方 八郎
	絵・都築 峰子
絵物語・武士道無残	文・島本 春雄
	絵・東 桂史

38年(十月号)二五〇円

絵物語 龍宮城の反乱	文・祖父江 新
時代 妖説朽木女忍伝	文・島本 春雄
サド 異端の城	文・三鬼 俊
絵物語 異端の城	絵・中川 彩子
戦国 本能寺炎上	文・井村 錠
絵物語 本能寺炎上	絵・小日向一夢 久
★グラビア・ミッドナイト	吉田 久
★グラビア・海外の公刊誌より	
フェニクス商会	
○雁形城落城図	小日向一夢
○時代妖美術集	中島 喜美
伊賀の闇の葉(古正英生・絵)	佐藤達四郎
裏切り(秋吉密・絵)	九十九郎
ミッドナイト撮影記	エダ・キリコ
蛇姫女切支丹(東桂史・絵)	義川 源
アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子	
(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
お転婆学園奇襲作戦	郷 保夫
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎
現代マゾヒズム文化時評⑫	森下 高茂
体当たりマゾヒズム論・13	水尾 究
寄稿作品ご紹介と短評	編集部・編
裏窓叢書名場面集	編集部・編

38年(九月号)二五〇円

裏窓草紙「絵本いろはうた」	うた・宮古志満夫
絵・小日向一夢	
絵物語 海賊虹姫伝奇	文・島本 春雄
	絵・春日 章
絵物語 変幻白だぬき	文・井村 錠
	古正 英生
アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館	
★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集	
★グラビア・海辺のうた	吉田 久
夜のなげき	
★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介	
小笹姫受難(小日向一夢・絵)	潮 一樹
特製マゾキン(山田彬弘・絵)	嶋岡 康
魔女アクリカ(中川彩子・絵)	春川光彦
鬼頭暁画集「美しきものの檻」	
絵物語 必殺のデリンジャー	落合竜二
体当たりマゾヒズム論・14	水尾 究
現代マゾヒズム文化時評・18	森下高茂
穴(あな)	石山省一
お化粧される弓子(鬼頭暁・絵)	北園透一郎
★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集	
ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)	阿麻哲郎

38年(八月号)二五〇円

○絵物語 東京——神戸十六時間

文・祖父江 新

絵・山田 彬弘

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

38年(七月号)二五〇円

○絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・春川 光彦

絵・中川 彩子

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

文・北園透一郎

絵・鬼頭 暁

38年(六月号)二〇〇円

○鬼頭暁時代妖美画集……

鬼頭 暁

中島喜美

吉田 久

落合 竜二

芦田 奈貴

左 次郎

安東 泉

黒田 史朗

河村 童八

丸亀 恵子

立原 道夫

五所 章

水尾 究

庄内 裕治

黒部 恭治

島本 春雄

潮 一樹

佐藤 達四郎

阿麻 哲郎

郷 保夫

北園透一郎

安東 泉

黒部 恭治

島本 春雄

潮 一樹

佐藤 達四郎

38年(五月号)二〇〇円

○絵物語・白蠟闇若衆……

文・島本 春雄

絵・東 桂史

文・豊田 一狼

絵・山田 彬弘

江潮 晃夫

藤沢 修

小日向一夢

黒猫といす

黒いタイツ

鏡と女

パウリーネ夫人のピクニック

海外SM画傑作選

ゴルドンの記録 ①

処刑の囚

無分別な夜

大阪非情地帯

内外ミュージックホール・スナップ集

虹川画伯のアトリエ

文芸評論「醜いコメディ」について

安東 泉

北園透一郎

祖父江 新

華田 奈貴

夢夫

郷 保夫

北園透一郎

38年(四月号)二〇〇円

○絵物語・冥府海賊伝奇……

文・島本 春雄

絵・秋吉 樹

文・松平 莊司

絵・中川 彩子

文・東 桂史

絵・小日向一夢

毛 卓三

猪島 昌也

藤沢 修

フェニクス

商会・提供

井村 錠

潮 一樹

飯田 豊吉

阿麻 哲郎

郷 保夫

北園透一郎

水尾 究

森下 高茂

北園透一郎

祖父江 新

華田 奈貴

夢夫

郷 保夫

北園透一郎

水尾 究

38年(三月号) 二〇〇六

38年(二月号) 二〇〇六

38年(一月号) 二〇〇六

37年(十二月号) 二〇〇六

37年(十一月号) 二〇〇六

絵物語・スリーベット号

不時着す

・銭姫党伝奇

・白峰の女忍者

グラビア・けんらんたる商品

・黒猫を捕えた①②

海外SMフォト・画傑作選

醜いコメディ

大利根無頼

和装恋慕

はも紳士録 (3)

体当たりマゾヒズム論 (8)

猥……村山 省

犬とギブスと搾衣……春川 光彦

不死身の女……海老沢七郎

「蠍たち」にみる……安東 泉

あるサデイスチンのタイプ……鬼頭 暁

鬼頭暁時代妖美画展……左 次郎

うら八捕物帳……飯田豊吉

虹川画伯のアトリエ……編集部

「裏窓」湯河原へ行く……

絵物語・姫法師呪文

・変化黒髪小僧

秋吉樹妖美画個展

グラビア・黒い皮のスタジオ

・美の凝結

・美の模像

海外SM画傑作展

島原の子守唄

金色の胸毛

郡氏の応接室

代用品じゃつまらない

フォルリ城の花嫁

おれの名はダニエル

愛の戦慄と充実

体当たりマゾヒズム論 (7)

はも紳士録 (2)

新・森菜莉論

新・安岡章太郎論

女因お蓮の死

浪人夢想日記

カブー家の第三夫人

絵物語・ハレウィンの歌う首

・赤鯨奇伝

・隠密麝香猫

山田彬弘妖美画個展

グラビア・美の回帰

・美の彷徨

・美の孤立

クリスマススイヴに悪魔がくる

赤い血のうずまき

仮面のたわむれ

黒い幻想

小さな赤い腰巻の記憶

体当たりマゾヒズム論 (6)

夜の感触

忍者遁走記

決闘立花屋

女性的情念の三十年

「叩び声」を解剖する

小説「連」のレスピアニズム

婦人機密将校ボーリン

売られていく玩具たち

絵物語・洞穴の姫と

・耳の戦慄

・妖説黒縄盗賊

グラビア・犬と女

・美の発端

・美の展開

・美の落差

かわいい調教師

殉国

投げ節お駒

締めつける愛情

東京午前零時

日本刑罰史(終回)

はも・とその周辺(終回)

体当たりマゾヒズム論 (5)

新・三島由紀夫論

お春さらわれ草紙

千代の青春

赤い城

ある身の上相談から

イライラする夜に

風雲地獄街道(終回)

絵物語・かわいいアヌの

・異聞・牛裂きの刑

・宝石の血

グラビア・美の鋭角

・美の冗舌

・美の傾斜

・美の断面

海外SMフォト特選集

あわれ雪路

おかっぱとおさげの間

霧笛の町

妖美画傑作選

火刑幻想

夜の画帳

足……村山 省

体当たりマゾヒズム論 (4)

さまアみろ

ある恋の物語

不安と絶望から幸福への道へ

畜獣デリムソン(終回)

はも・とその周辺 (9)

風雲地獄街道 (6)

残部